

木古内町

釜谷8遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成25年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

木古内町

釜谷8遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成25年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



釜谷 8 遺跡調査区北西部調査風景(南から)



釜谷 8 遺跡出土接合資料



釜谷 8 遺跡出土トランシェ様石器



↑ 石材 1



↑ 石材 2



↑ 石材 3



↑ 石材 4

例 言

1. 本書は高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成23年度、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成24・25年度に実施した木古内町釜谷8遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、平成23年度を第2調査部第1調査課が、平成24年度を第1調査部第3調査課が、平成25年度を第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の報告に関する遺物整理は立田 理が担当した。
4. 本書の執筆は、遺構に関する事実記載については各担当者が行った。第Ⅶ章第2節dについては、第1調査部第2調査課鈴木宏行によるものである。その他の執筆、編集は立田が行なった。なお、本文中の敬称は省略する。
5. 遺構図の作図は、袖岡淳子、立田がそれぞれ担当し、立田が統括した。
6. 調査写真は上記各調査員が撮影し、遺物写真は第2調査部第1調査課中山昭大の協力を得て立田が行った。
7. 遺跡出土の炭化種実同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社、放射性炭素年代分析は株式会社加速器分析研究所に、黒曜石産地同定は有限会社遺物材料研究所に依頼し、報文をⅦ章に掲載した。
8. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導、御協力をいただいた。

文化庁、北海道教育委員会、北斗市教育委員会、木古内町教育委員会、
国土交通省北海道開発局函館開発建設部、

(以下順不同、敬称略)

青森県：鈴木克彦、青森県埋蔵文化財調査センター：齋藤 岳、厚沢部町教育委員会：石井淳平、
今金町教育委員会：宮本雅通、今金町役場：寺崎康史、上ノ国町教育委員会：齋藤邦典・塚田直哉、
木古内町教育委員会：木元 豊、木古内町：甲斐正明、知内町教育委員会：高橋豊彦・竹田 聡、
シン技術コンサルタント：時田太郎、東北大学：鹿又喜隆、
特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団：坪井睦美、七飯町教育委員会：山田 央、
新潟県教育庁：沢田 敦、函館市立中央図書館：長谷部一弘、
市立函館博物館：田原良信・佐藤智雄・野村祐一、函館市教育委員会：阿部千春・福田裕二・吉田 力、
函館の歴史的風土を守る会：落合治彦、美幌博物館：八重柏 誠、北斗市教育委員会：森 靖裕、
北海道考古学研究所：横山英介、松前城資料館：久保 泰、
松前町教育委員会：前田正憲・佐藤雄生、森町教育委員会：高橋 毅、
八雲町郷土資料館：柴田信一・大谷茂之、八雲町役場：平山禾都

記号等の説明

- 本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
H：堅穴住居址 P：土坑（墓とみられるものも含む）F：焼土 S：集石 SP：柱穴状小土坑 FC：フレイク・チップ集中域。
- 遺構図の縮尺は原則として40分の1である。その他の縮尺を用いるものはスケールを付した。
- 遺構平面図の小数字は標高（単位m）を表している。
- 基本土層図、遺構の土層断面図に表記した数字は、標高（単位m）を示している。
- 基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
- 遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長、床面（坑底面）の長軸長×短軸長／確認面からの最大深」を単位mで示してある。なお、一部破壊されているものは数値に（ ）を付した。
- 火山灰について以下の略号を用いている部分がある。これらは層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行っていない。
Ko-d：駒ヶ岳d降下火山灰（1640年降下）、B-Tm：白頭山・苫小牧火山灰（10世紀降下）
- 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。これ以外の縮尺を用いる場合にはスケールを付した。
遺構 1：40 遺物出土状況 1：20 復元土器 1：3 土器拓本 1：3
剥片石器 1：2 礫石器 1：3
- 石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。なお、破損しているものについては、現存の最大幅を（ ）で示した。
- 遺構図で用いた方位は真北である。
- 遺物実測図中でたたき痕はV-V、すり痕は|—|で範囲を表した。また、自然面はドット、節理面は斜めの実線と破線の繰り返しで表現した。
- 土層注記について、基本層序の混入状況を説明するため、下記のようにあらわしたものがある。
A+B：AとBが等量混じる A>B：AにBが少量混じる A>>B：AにBが微量混じる
その他の使用したトーンに関しては、そのつど凡例を付してある。
- 遺構の図面のうち、遺物出土状況を表したものの一部に、以下のシンボルマークを使用した。
覆土出土 土器：○ 剥片石器、土・石製品：☆ 礫石器：△
フレイク、チップ：□ 礫：◎
床面出土 土器：● 剥片石器、土・石製品：★ 礫石器：▲
フレイク、チップ：■ 礫：×
- 文献の引用中、館北海道埋蔵文化財センター発行調査報告書については、シリーズ名を略し、（北埋調報○○○）と記した。
- 石器の石材について、一覧表について以下の略号を用いた。
SS：砂岩、Sh：頁岩、S.Sh：珪質頁岩、S.W：白色珪化岩、Ob：黒曜石、Ch：チャート、Qua：珪岩、Ag：メノウ、MS：泥岩、Tu：凝灰岩、CM：礫岩、ST：シルト岩、Rh：流紋岩、Da：デイサイト、An：安山岩、Hb-An：角閃石安山岩、Px-An：輝石安山岩、Bs：玄武岩、Gra：花崗閃緑岩、Di：閃緑岩、Dol：粗粒玄武岩、Sl：粘板岩、G-Tu：緑色凝灰岩、Gls：藍閃石片岩、Grs：緑色片岩、Sc：片岩、

目 次

口絵カラー	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表・グラフ目次	
図版目次	

I 章 緒 言

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 調査の概要	2
5 調査結果の概要	3
6 本書の内容	4

II 章 調査の方法

1 濁水対策について	5
2 調査方法	5
(1) 発掘区の設定	5
(2) 調査方法	6
(3) 遺物整理の方法	7
(4) 収納・保管	8
(5) 遺物の分類	8
(6) 基本順序	9

III 章 遺跡周辺の概要

1 地形・地質	11
2 地名の由来	11
3 周辺の遺跡	13

IV 章 遺構とその出土遺物

1 概要	19
2 住居跡	21
3 土坑(P)・陥し穴(TP)	32
4 柱穴状小土坑(SP)	50

5	焼土(F).....	53
V章 包含層出土の遺物		
1	土器.....	83
2	石器等.....	90
VI章 フレイク・チップ集中域と接合資料		
1	概要	123
2	遺物出土位置を記録したフレイク・チップ集中域	124
3	フレイク・チップ集中域出土遺物	136
4	接合資料	147
VII章 自然科学的分析		
1	分析・同定の目的と結果	197
2	炭化種実同定 バリノ・サーヴェイ株式会社	197
3	放射性炭素年代測定 (AMS測定) 加速器分析研究所株式会社	201
4	黒曜石製遺物原産地同定分析 有限会社 遺物材料研究所	206
VIII章 総括		
1	円形の陥し穴とみられる土坑について	217
2	遺物について	219
	(1) I群a類土器について	219
	(2) トランシェ様石器について	222
	(3) 石器石材について	233
引用・参考文献		233
写真図版		

挿図目次

図Ⅰ-1	年度別調査区設定図	2	図Ⅳ-33	焼土(9)	73
図Ⅱ-1	濁水処理施設設計図	5	図Ⅳ-34	焼土(10)	75
図Ⅱ-2	発掘区設定図	6	図Ⅳ-35	焼土出土の遺物(1)	76
図Ⅱ-3	年度別調査状況図	7	図Ⅳ-36	焼土出土の遺物(2)	77
図Ⅱ-4	調査区内の土層	10	図Ⅴ-1	包含層出土の土器(1)	84
図Ⅲ-1	木古内町周辺の遺跡	12	図Ⅴ-2	包含層出土の土器(2)	86
図Ⅲ-2	遺跡周辺の地形	14	図Ⅴ-3	包含層出土の土器(3)	88
図Ⅳ-1	遺構位置図	20	図Ⅴ-4	包含層出土の土器(4)	89
図Ⅳ-2	H-1(1)	22	図Ⅴ-5	包含層出土の土器(5)	90
図Ⅳ-3	H-1(2)・土器出土状況	23	図Ⅴ-6	包含層出土の石器(1)	91
図Ⅳ-4	H-1(3)	24	図Ⅴ-7	包含層出土の石器(2)	93
図Ⅳ-5	H-1(4)	25	図Ⅴ-8	包含層出土の石器(3)	94
図Ⅳ-6	H-2(1)	27	図Ⅴ-9	包含層出土の石器(4)	95
図Ⅳ-7	H-2(2)・土器出土状況	28	図Ⅴ-10	包含層出土の石器(5)	97
図Ⅳ-8	H-2(3)・石器出土状況	29	図Ⅴ-11	包含層出土の石器(6)	98
図Ⅳ-9	H-2(4)	30	図Ⅴ-12	包含層出土の石器(7)	99
図Ⅳ-10	H-2(5)	31	図Ⅴ-13	包含層出土の石器(8)	101
図Ⅳ-11	土坑(1)	33	図Ⅴ-14	包含層出土の石器(9)	102
図Ⅳ-12	土坑(2)	35	図Ⅴ-15	包含層出土の石器(10)	103
図Ⅳ-13	土坑(3)	37	図Ⅴ-16	包含層出土の石器(11)	104
図Ⅳ-14	土坑(4)	39	図Ⅴ-17	包含層出土の石器(12)	105
図Ⅳ-15	土坑(5)	41	図Ⅴ-18	包含層出土の石器(13)	107
図Ⅳ-16	土坑(6)	43	図Ⅴ-19	包含層出土の石器(14)	108
図Ⅳ-17	土坑(7)	44	図Ⅴ-20	包含層出土の石器(15)	109
図Ⅳ-18	Tビット	45	図Ⅴ-21	包含層出土の石器(16)	111
図Ⅳ-19	土坑出土の遺物(1)	47	図Ⅴ-22	包含層出土の石器(17)	112
図Ⅳ-20	土坑出土の遺物(2)	48	図Ⅴ-23	包含層出土の石器(18)・石製品	113
図Ⅳ-21	土坑出土の遺物(3)	49	図Ⅴ-24	グリッド別出土点数(1)	115
図Ⅳ-22	柱穴状小土坑(SP)(1)	51	図Ⅴ-25	グリッド別出土点数(2)	116
図Ⅳ-23	柱穴状小土坑(SP)(2)	52	図Ⅴ-26	グリッド別出土点数(3)	117
図Ⅳ-24	柱穴状小土坑の遺物	53	図Ⅵ-1	フレイク・チップ集中域(1)	125
図Ⅳ-25	焼土(1)	55	図Ⅵ-2	フレイク・チップ集中域(2)	127
図Ⅳ-26	焼土(2)	57	図Ⅵ-3	フレイク・チップ集中域(3)	128
図Ⅳ-27	焼土(3)	59	図Ⅵ-4	フレイク・チップ集中域(4)	129
図Ⅳ-28	焼土(4)	62	図Ⅵ-5	フレイク・チップ集中域(5)	130
図Ⅳ-29	焼土(5)	63	図Ⅵ-6	フレイク・チップ集中域(6)	131
図Ⅳ-30	焼土(6)	66	図Ⅵ-7	フレイク・チップ集中域(7)	132
図Ⅳ-31	焼土(7)	68	図Ⅵ-8	フレイク・チップ集中域(8)	133
図Ⅳ-32	焼土(8)	71	図Ⅵ-9	フレイク・チップ集中域(9)	134

図VI-10	フレイク・チップ集中域(10) ……135	図VI-28	接合資料(10) ……159
図VI-11	FC出土の土器 ……137	図VI-29	接合資料(11) ……160
図VI-12	FC出土の石器(1) ……139	図VI-30	接合資料(12) ……162
図VI-13	FC出土の石器(2) ……140	図VI-31	接合資料(13) ……164
図VI-14	FC出土の石器(3) ……141	図VI-32	接合資料(14) ……165
図VI-15	FC出土の石器(4) ……142	図VI-33	接合資料(15) ……166
図VI-16	FC出土の石器(5) ……143	図VI-34	接合資料(16) ……167
図VI-17	FC出土の石器(6) ……144	図VI-35	接合資料(17) ……168
図VI-18	FC出土の石器(7) ……145	図VI-36	接合資料(18) ……170
図VI-19	接合資料(1) ……148	図VI-37	接合資料(19) ……171
図VI-20	接合資料(2) ……149	図VI-38	接合資料(20) ……172
図VI-21	接合資料(3) ……150	図VI-39	接合資料(21) ……173
図VI-22	接合資料(4) ……151	図VI-40	接合資料(22) ……174
図VI-23	接合資料(5) ……153	図VI-41	接合資料(23) ……175
図VI-24	接合資料(6) ……154	図VI-42	接合資料(24) ……176
図VI-25	接合資料(7) ……155	図VI-43	接合資料(25) ……177
図VI-26	接合資料(8) ……156	図VI-44	接合資料(26) ……178
図VI-27	接合資料(9) ……157	図VI-45	接合資料(27) ……179
図VII-1	釜谷8遺跡の種実遺体 ……200		
図VII-1	日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における表1使用の石器原材伝播図 ……211		
図VII-2	黒曜石原産地 ……211		
図VIII-1	トランシェ様石器一覧(表VI-6)の凡例 ……223		
図VIII-2	トランシェ様石器の使用痕(1) ……226		
図VIII-3	トランシェ様石器の使用痕(2) ……227		
図VIII-4	トランシェ様石器の使用痕(3) ……228		
図VIII-5	頁岩産地とトランシェ様石器出土地 ……230		
写真VIII-1	貝殻腹縁文の再現 ……221		
写真VIII-2	大釜谷周辺の「珪質団塊」とみられるもの ……233		

表・グラフ目次

表 I - 1	出土遺物点数一覧……………	4		
表 II - 1	基本層序土層注記……………	10		
表 IV - 1	柱穴状小土坑一覧……………	50		
表 IV - 2	住居跡・土坑一覧……………	79		
表 IV - 3	焼土一覧……………	79		
表 IV - 4	遺構出土復元土器……………	80		
表 IV - 5	遺構出土拓本土器一覧……………	80		
表 IV - 6	遺構出土掲載石器一覧……………	82		
表 V - 1	包含層出土復元土器……………	118		
表 V - 2	包含層出土拓本土器一覧……………	118		
表 V - 3	包含層出土掲載石器一覧……………	120		
表 VI - 1	フレイク・チップ集中域一覧……………	123		
表 VI - 2	フレイク・チップ集中域出土拓本土器 一覧……………	182		
表 VI - 3	フレイク・チップ集中域出土掲載石器 一覧……………	183		
表 VI - 4	掲載接合資料一覧……………	184		
表 VI - 5	接合資料掲載石器等一覧……………	193		
表 VI - 6	トランシェ様石器一覧……………	194		
表 VII - 1	釜谷 8 遺跡の種実同定結果……………	199		
表 VII - 2	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正 値)……………	203		
表 VII - 3	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正 値、歴年校正用 ^{13}C 年代、校正年代) ……	203		
表 VII - 4	各黒曜石の原産地における原石群の元 素比の平均値と標準偏差値……………	214		
表 VII - 5	湧別川河口域の河床から採取した247 個の黒曜石円礫の分類結果……………	215		
表 VII - 6	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取し た661個の黒曜石円礫の分類結果……………	215		
表 VII - 7	サナブチ川から採取した80個の黒曜石 円礫の分類結果……………	215		
表 VII - 8	金華地区から採取した20個の黒曜石円 礫の分類結果……………	215		
表 VII - 9	生田原川支流支線川から採取した19個 の黒曜石円礫の分類結果……………	215		
表 VII - 10	生田原川支流大黒沢川から採取した5 個の黒曜石円礫の分類結果……………	216		
表 VII - 11	木古内町釜谷 8 遺跡出土黒曜石製造物 の元素比分析結果……………	216		
表 VII - 12	釜谷 8 遺跡出土黒曜石製造物の産地分 析結果……………	216		
表 VIII - 1	円形の陥し穴一覧……………	218		
表 VIII - 2	分析試料一覧……………	225		
グラフ VII - 1	トランシェ様石器の長幅比……………	223		
グラフ VII - 2	トランシェ様石器の刃角……………	223		

図版目次

- 図版 1 調査風景 (A・B区) (西から)
調査風景 (D区) (南東から)
- 図版 2 周辺遺物出土状況 (A区) (北東から)
調査終了状況 (D区) (東から)
- 図版 3 H-1 完掘 (西から)
H-1 東西土層断面 (南から)
- 図版 4 HP-1 土層断面 (北から)
HP-2 土層断面 (西から)
HP-3 土層断面 (西から)
HP-4 土層断面 (南西から)
HF-1 土層断面 (西から)
- 図版 5 H-2 遺物出土状況 (西から)
H-2、HF-1 土層断面 (北東から)
- 図版 6 P-1 全景 (東から)
P-2 土層断面 (南から)
P-4 土層断面 (南から)
P-6 土層断面 (南西から)
P-7 全景 (南西から)
P-5 土層断面 (南西から)
- 図版 7 P-8 完掘 (南西から)
P-9 土層断面 (北西から)
P-10 土層断面 (西から)
P-13 全景 (南西から)
P-14 土層断面 (南西から)
P-15 全景 (南西から)
- 図版 8 P-16 土層断面 (南西から)
P-17 土層断面 (西から)
P-18 土層断面 (東から)
P-19 全景 (東から)
P-20 土層断面 (南西から)
P-21 全景 (南から)
- 図版 9 P-22 遺物出土状況 (東から)
P-23 全景 (南西から)
P-25 全景 (南から)
TP-1 全景 (北西から)
TP-2 完掘 (西から)
TP-3 完掘 (南から)
- 図版 10 SP-1 完掘 (南東から)
SP-2 土層断面 (北から)
SP-3 土層断面 (西から)
SP-4 土層断面 (東から)
SP-5 土層断面 (東から)
SP-6 土層断面 (南から)
図版 11 SP-7 土層断面 (南から)
SP-8 土層断面 (南から)
SP-9 土層断面 (北から)
SP-10 土層断面 (西から)
SP-11、12 土層断面 (西から)
図版 12 SP-13 完掘 (西から)
SP-14 土層断面 (西から)
F-1、SP-1 土層断面 (東から)
F-2 土層断面 (東から)
F-3 土層断面 (北から)
F-4 土層断面 (南東から)
図版 13 F-5 土層断面 (北西から)
F-6 土層断面 (北西から)
F-7 土層断面 (南から)
F-8 検出兼土層断面 (北から)
F-9 土層断面 (南から)
F-10 土層断面 (南西から)
図版 14 F-11 土層断面 (南から)
F-12 土層断面 (北から)
F-13、14 土層断面 (南東から)
F-15 土層断面 (西から)
F-16 土層断面 (北から)
F-17 土層断面 (北西から)
図版 15 F-18 土層断面 (北から)
F-19 土層断面 (南から)
F-20 土層断面 (南から)
F-21 土層断面 (南から)
F-22 土層断面 (北西から)
F-23 土層断面 (南西から)
図版 16 F-24 土層断面 (北東から)
F-25 土層断面 (南西から)
F-26 土層断面 (南東から)
F-27 土層断面 (南から)
F-28 検出 (西から)
F-29 土層断面 (東から)

- 図版17 F-30, 31土層断面(南から)
F-32土層断面(南から)
F-33土層断面(南から)
F-34土層断面(北東から)
F-35土層断面(西から)
F-36土層断面(南西から)
- 図版18 F-37土層断面(南西から)
F-38土層断面(西から)
F-39土層断面(南から)
F-40土層断面(南西から)
F-41土層断面(南から)
F-42土層断面(南から)
- 図版19 F-43土層断面(南から)
F-44土層断面(南から)
F-45土層断面(南から)
F-46土層断面(南西から)
F-48土層断面(南西から)
F-49土層断面(南西から)
- 図版20 F-50土層断面(南東から)
F-51土層断面(南東から)
F-52土層断面(南東から)
F-53土層断面(南西から)
F-54土層断面(南西から)
F-55土層断面(南から)
- 図版21 F-56土層断面(南西から)
F-57土層断面(南から)
F-58土層断面(南西から)
F-59土層断面(南から)
F-60土層断面(南から)
F-61土層断面(南から)
- 図版22 F-62土層断面(南東から)
F-63土層断面(南西から)
F-64検出(東から)
FC-1検出(南から)
FC-2検出(北西から)
FC-3検出(東から)
- 図版23 FC-4検出(北西から)
FC-5検出(北東から)
FC-6検出(南から)
FC-7検出(東から)
FC-8検出(東から)
FC-9検出(北から)
- 図版24 FC-11検出(北から)
FC-11検出(北から)
FC-12検出(東から)
- 図版25 FC-13検出(西から)
FC-14検出(北から)
FC-15検出(南から)
FC-16検出(南西から)
FC-17検出(北から)
FC-18検出(西から)
- 図版26 FC-19検出(西から)
FC-20検出(西から)
FC-21検出(南東から)
FC-22検出(西から)
FC-23検出拡大(人入り)(西から)
FC-24検出(南東から)
- 図版27 FC-25検出(人入り)(南東から)
FC-26検出(人入り)(北から)
FC-27検出(西から)
FC-28検出(西から)
FC-29, F-55検出(北東から)
FC-30検出(東から)
- 図版28 FC-31検出(東から)
FC-32, F-60検出(南から)
FC-33, F-64検出(南東から)
FC-34検出(北東から)
FC-35検出(北から)
FC-36検出(北から)
- 図版29 H-1出土の土器・剥片石器
H-1出土の石斧・礫石器
- 図版30 H-2出土の土器・剥片石器
H-2出土の礫石器
- 図版31 土坑出土の土器・剥片石器
土坑出土の礫石器(1)
- 図版32 土坑出土の礫石器(2)
柱穴状小土坑の礫石器
- 図版33 焼土出土の土器・剥片石器
- 図版34 包含層出土の土器(1)
- 図版35 包含層出土の土器(2)
- 図版36 包含層出土の土器(3)
- 図版37 包含層出土の土器(4)
- 図版38 包含層出土の剥片石器(1)
- 図版39 包含層出土の剥片石器(2)

- | | | | |
|------|-----------------------|------|----------|
| 図版40 | 包含層出土の剥片石器(3) | 図版53 | 接合資料(3) |
| 図版41 | 包含層出土の剥片石器(4) | 図版54 | 接合資料(4) |
| 図版42 | 包含層出土の剥片石器(5) | 図版55 | 接合資料(5) |
| 図版43 | 包含層出土の剥片石器(6) | 図版56 | 接合資料(6) |
| 図版44 | 包含層出土の剥片石器(7) | 図版57 | 接合資料(7) |
| 図版45 | 包含層出土の剥片石器(8) | 図版58 | 接合資料(8) |
| 図版46 | 包含層出土の剥片石器(9) | 図版59 | 接合資料(9) |
| | 包含層出土の礫石器(1) | 図版60 | 接合資料(10) |
| 図版47 | 包含層出土の礫石器(2) | 図版61 | 接合資料(11) |
| | 包含層出土の礫石器(3)・石製品 | 図版62 | 接合資料(12) |
| 図版48 | フレイク・チップ集中域出土の土器 | 図版63 | 接合資料(13) |
| | フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(1) | 図版64 | 接合資料(14) |
| 図版49 | フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(2) | 図版65 | 接合資料(15) |
| 図版50 | フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(3) | 図版66 | 接合資料(16) |
| 図版51 | 焼土・フレイク・チップ集中域出土の礫石器 | 図版67 | 接合資料(17) |
| | 接合資料(1) | 図版68 | 接合資料(18) |
| 図版52 | 接合資料(2) | 図版69 | 接合資料(19) |
| | | 図版70 | 接合資料(20) |

I章 緒言

1 調査要項

事業名	高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	国土交通省北海道開発局函館開発建設部
事業受託者	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
現地調査期間	平成23年9月5日～平成23年11月11日 平成24年5月7日～平成24年10月31日
整理期間	平成24年11月1日～平成25年3月29日 平成25年4月1日～平成26年3月31日
遺跡名	釜谷(かまや)8遺跡(道教委登録番号 B-05-51)
所在地	北海道上磯郡木古内町釜谷260-4～260-34
調査面積	平成23年度 786㎡ 平成24年度 7,628㎡

2 調査体制

(平成23年度)	理事長	坂本 均
	専務理事	松本 昭一(～平成24年6月7日)
	常務理事	畑 宏明(～平成24年6月7日)
	第2調査部長	三浦 正人
	第1調査課 課長	遠藤 香澄
		主査 立田 理(発掘担当者)
	主任 福井 淳一(発掘担当者)	
(平成24年度)	理事長	坂本 均
	副理事長	畑 宏明(平成24年6月8日～)
	事務局長	中田 仁(平成24年6月8日～)(専務理事兼任)
	常務理事	千葉 英一(平成24年6月8日～)(第1調査部長兼任)
	第3調査課 課長	土肥 研晶(発掘担当者)
		主査 皆川 洋一
		主査 袖岡 淳子(発掘担当者)
	主査 阿部 明義	
	主査 立田 理(発掘担当者)	
(平成25年度)	理事長	坂本 均
	副理事長	畑 宏明
	事務局長	中田 仁(専務理事兼任)
	常務理事	千葉 英一(第1調査部長兼任)
	第4調査課 課長	皆川 洋一
		主査 立田 理
	主査 大泰司 統	

3 調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差（えさし）自動車道」は、函館インターチェンジ（以下ICとする）から北斗（はくと）市・木古内（きこない）町・上ノ国（かみのくに）町を經由し、江差町に至る延長約70kmの自動車専用道路である。北海道縦貫自動車道、函館新道と接続し道央圏と道南圏を結ぶ高規格幹線道路となる。平成24年3月24日より北斗富川IC～北斗茂辺地ICが供用され、平成25年4月現在、北斗茂辺地IC～木古内IC（仮称）までの茂辺地木古内道路の建設事業が行われている。

平成11年、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開発建設部」）は、函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会（以下「道教委」）に提出した。これを受けて道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲において15地点に関して所在確認調査が必要と通知した。釜谷8遺跡における範囲確認調査は平成21年12月に行われた。結果約8,500㎡について発掘調査が必要と判断された。

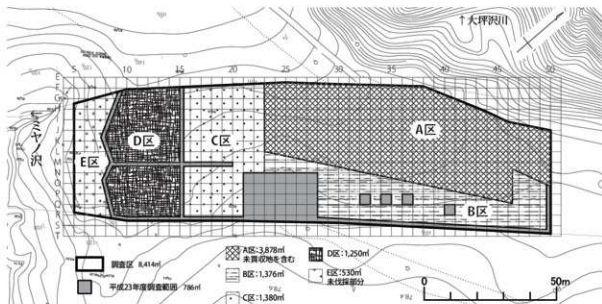
4 調査の概要

平成23、24、25年度別に調査の経過を以下に記す。

平成23年度の茂辺地木古内道路に関わる発掘調査は、北斗市茂辺地4遺跡、当別川左岸遺跡、木古内町釜谷8遺跡、札苺5遺跡、札苺6遺跡の計5遺跡であった。このうち茂辺地4遺跡の調査をNPO法人函館埋蔵文化財調査事業団が、そのほかの遺跡を当センターが行った。

当センターの調査遺跡のうち、札苺5、6遺跡を第1調査部第3調査課が、当別川左岸遺跡は第2調査部第2調査課が、釜谷8遺跡は第2調査部第1調査課が当たることとなった。期間は当別川左岸遺跡が8月1日から、釜谷8遺跡が9月5日から、そのほかの遺跡はそれぞれ5月9日から10月31日までである。

当初、釜谷8遺跡には包含層は存在しておらず、耕作土から遺物が出土するとされていた。このため、調査は基盤層であるローム層上面で遺構の有無を確認する調査を計画していた。しかし調査を進めるうち、無遺物層とされていた暗褐色土～漸移層にかけての層位で、縄文時代早期貝殻土器やフレイクなどの遺物が出土することがわかった。このことから、平成23年度は期間を11月11日まで延長し、濁水処理施設部分の調査と、トレンチによる試掘調査を兼ねた調査を合計786㎡について行い、残存部分は未買収地、未伐採地の調査と合わせ翌年に調査することとなった（図I-1）。



図I-1 年度別調査区設定図

平成24年度の函館茂辺地自動車道に関する発掘調査は、北から北斗市茂辺地4遺跡、当別川左岸遺跡、木古内町釜谷8遺跡、大平4遺跡の4遺跡であった。茂辺地4遺跡をNPO法人函館埋蔵文化財調査事業団が、そのほかを当センターが行った。

本遺跡は、昨年度の調査成果から遺構出現率、遺物点数を推定し、さらに表土除去作業の有無を加味して、A～Eまでの積算の異なる5地区に分けた。結果面積は発掘調査6,248㎡（A・B・D・E区）、遺構確認調査が1,380㎡（C区）となった（図I-1）。

5月1日より表土除去、同10日より人力による発掘調査を開始した。排土を現地に置く都合から南西側のC、D地区を先行して調査した。E地区とした南西端は伐採が未了であったため、伐採の終了した8月2日より行った。A B地区はC、D地区の終了の後北西端から調査し、10月31日に現地での調査を終了した。

整理作業は11月1日から3月29日にわたり、土器接合作業および石器実測作業を行った。平成25年度は4月1日から第1調査部第4調査課により整理作業を行った。作業内容は土器接合作業、報告書の作成、および収納作業である。

5 調査結果の概要

2か年の調査の結果、住居跡2軒、土坑21基、焼土64か所、Tピット3基、柱穴状小ピット15基、フレイク・チップ集中域36か所を検出している。

住居跡2軒とフラスコ状土坑は、調査区南側のミヤノ沢源頭部に沿って検出されており、出土遺物から多くが縄文時代後期前葉のものとみられる。これに対し調査区北側の大坪沢川沿いには、フレイク・チップ集中域が多く見つかっている。遺物分布からほとんどが縄文時代早期中葉のものと推測される。

遺物は総計で61,116点出土した。内訳は土器が8,659点、石器等が52,456点である（表I-1）。

土器には縄文時代早期の貝殻文土器が1,848点ある。口縁に爪形文を配し、尖底の器形を呈する七飯町国立療養所裏遺跡のI群土器・ノグップI式に相当するものである。道内での出土例が少なく、青森県北部地域における白浜、寺の沢、根井沼式に最も近い文様構成を持っている。

土器のうち多数を占めるのは縄文時代後期前葉の天祐寺式のもので、計6,592点である。ほかには縄文時代中期前葉の円筒土器上層式、縄文時代晩期、さらに中期後半、後期中葉のものもわずかではあるが出土している。

剥片石器には石鏃、石槍、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、両面調整石器が計177点ある。このほか石器等にはRフレイク、Uフレイク、石核などがある。フレイク・チップが最も多く51,144点出土している。

定形的な剥片石器の中では、籠状に加工されたスクレイパーが230点と突出している。その大多数は、素材剥片の縁辺をそのまま刃部とするいわゆる「トランシェ様石器」である。

接合作業の結果427件の接合資料が得られており、中にはトランシェ様石器の剥離行程を示すものや、加工失敗とみられるものも含まれている。これらは縄文時代早期のフレイク・チップ集中域を中心にしてその周囲から出土するものがすべてであり、トランシェ様石器は本遺跡内で加工、製作されたものとみられる。

礫石器は、多い順にすり石、たたき石、石皿などとなっている。すり石のほとんどは流紋岩～安山岩質の火成岩で、細長かつ断面形が三角形の礫が用いられ、稜線を使用面とするものである。

なお、層位や出土遺物の詳細について、調査年報24、25の内容と若干異なっている。その後の整理

作業の進行による検討結果によるものであり、本報告をもって訂正したい。

表 I-1 出土遺物点数一覧

土器

分類	I 群		II 群		III 群		IV 群		V 群		焼成粘土塊	計
	a 類	b 類	a 類	b 類	a 類	b 類	a 類	b 類	a 類	b 類		
包含層	1,401	0	1	77	9	5,437	1	5	77	1	9	7,018
遺構	447	0	0	1	0	1,155	0	0	4	2	32	1,641
計	1,848	0	1	78	9	6,592	1	5	81	3	41	8,659

石器等

分類	石鏃(片)	石槍(片)	石鏃(片)	つまみ付きナイフ(片)	スクレイパー	両面調整石器	トランシェ・焼石器(片)	R フレイク	U フレイク	石核	フレイク	原石	石斧(片)	たつき石	すり石(片)	扁平打製石器	砥石	石皿・台石	石鏃	加工痕のある鏃	石製品	礫・礫片	計
包含層	30	8	13	5	84	10	177	192	67	62	16,798	84	14	37	45	1	1	7	3	3	2	136	17,779
遺構	5	2	3	0	11	6	53	42	11	12	34,346	3	3	9	4	1	0	10	0	4	0	149	34,677
計	35	10	16	5	95	16	230	234	78	74	51,144	87	17	46	49	2	1	17	3	7	2	285	52,456

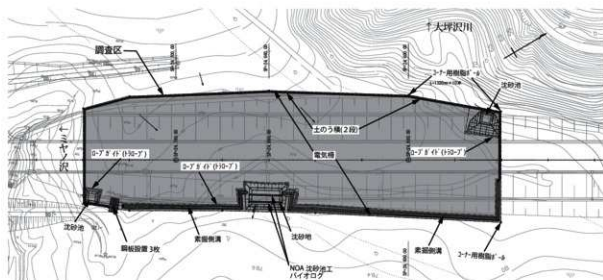
6 本書の内容

本書では、平成23、24年度に行われた木古内町釜谷8遺跡の調査結果の内容を報告するものである。各章の内容は、I章に調査に至る経緯と概要について、II章に調査の方法について、III章に遺跡周辺の地形と地質について、IV章に遺構とその出土遺物について、V章に包含層出土の遺物について、VI章にフレイク・チップ集中域と接合資料について、VII章に自然科学的分析の結果をまとめ、VIII章では調査結果からの総括を行う。

II章 調査の方法

1 濁水対策について

調査区の地形は概ね高位段丘の平坦面～緩斜面であるが、南北端は開析による急な斜面へと連続している。北側斜面の延長には大坪沢川が流れ、南側はミヤノ沢の沢頭となっている。前者は常時水流が、後者は雨天時、また春先の雪解け水により水が流れることがあり、いずれも津軽海峡に注いでいる。調査による裸地化の結果、濁水が調査区外へと流れ込む事態をさけるため、濁水処理施設を設営した(図II-1)。調査区を流れる水は、斜面下側を巡る側溝を流れ、集水樹に集まる。集水樹にはバイオログという天然素材のフィルターが設置され、これにより濁水が濾過される設計となっている。なおこの処置は函館開発建設部の指示によるものである。



図II-1 濁水処理施設設計図

2 調査の方法

(1) 発掘区の設定

発掘区は4×4mとし、アルファベットの大文字と数字の組み合わせで表示した(図II-2)。設定にあたっては、函館開建の設定した道路中心点P-24,600とP-24,700を結んだ直線を利用し、それに直交する線を加えて方眼とした。調査区全面に数字と文字を付与できるように配慮し、中心点P-24,600をM-40とした。中心線に平行な線にはアルファベットを、それに直交する線には数字を与え、西を基点として設定した。設定に利用した中心点P-24,600とP-24,700の世界測地系による座標は、平面直角座標第XI系に基づき以下の数値となっている。

P-24,600 (M-40)	X=-252,496.787	Y=23,461.269
P-24,700 (M-15)	X=-252,573.935	Y=23,397.643

発掘区の呼称は区画の西の交点で表した。例えばJラインと10ラインの交点の東側がJ10区ということになる。また、遺構調査等では4m方眼の発掘区を2m方眼に4分割し、グリッド基準杭のある北東端から小文字のアルファベットで反時計回りにa、b、c、dを付し、J10a、J10b、J10c、

J10d、と呼称した部分がある。

なお遺構、土層、遺物出土状況などの標高の測定にあたって使用した基準点は、函館開建が平成12年10月23日に設置した2級基準点H12-2058（標高86.083m）である。

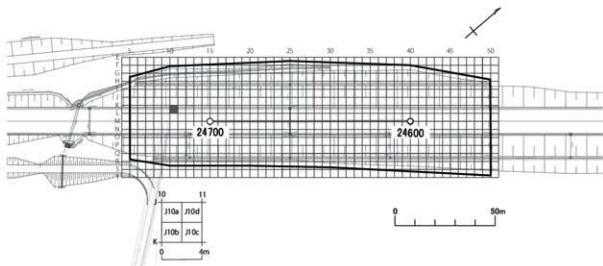


図 II-2 発掘区設定図

(2) 調査方法

a) 包含層調査

調査にあたっては、まず耕作土をバックフォーで除去し、次に包含層である黒褐色土、暗褐色土（以下Ⅱ層とする（図Ⅱ-4）参照）を人力で掘り下げた。Ⅱ層は遺物の出土の程度に応じて、多いところでは移植ごて、少ない場合はスコップ、ジョレンを用いている。なお遺構確認区（C区）では、Ⅲ層とした黄褐色土の上面でスコップ、ジョレンを用いて遺構確認のための精査を行った。

Ⅱ層の層界は極めて不明瞭であった。調査区の北東側、縄文時代早期の遺物が主として出土するA B地区においては、下位のⅢ層からも遺物が散発的に出土していた。このため23ラインより北東側の調査に当たっては、出土状態を確認するため全体の約10%に当たるグリッドでⅢ層を30～50cm掘り下げた。その結果、遺物はⅢ層を概ね20cm掘り下げると出土しなくなる傾向がみられた。このことから、調査完了の目安をⅢ層20cm掘削におくこととし、遺物の出土がなくなった時点で調査の終了とした（図Ⅱ-3）。

なお遺物の出土量が少ない調査区北東端の部分は、10%調査の後、バックフォーで土を掘り上げ、遺物回収を行った部分がある。さらに北側の大坪沢川に面する急斜面が一部調査区に含まれており、この部分についてはトレンチ調査により遺物の有無を確認した。結果出土遺物が2点のフレイクにとどまったため、それ以上の調査を行っていない。

b) 遺構調査

遺構は、Ⅱ層下部またはⅢ層上面で精査し検出作業を行った。検出すると移植ごてを用いて坑底を確認し、土層断面図の記録を作成したのち全体を掘り下げて完掘している。遺構出土遺物は、堅穴住居のものについてはすべて位置を記録して取り上げたが、そのほかの土坑、焼土などは、重要とみられるもの以外は層位のみ記録し取り上げている。

なおフレイク・チップ集中域については、遺物を残して包含層を掘り進み、比較的まとまって出土する状態を認識したのち範囲を囲み番号を付した。概ね大辺で3cmを超えるものは出土位置を記録し

て取り上げた。集中域には微細な剥片が多く含まれているものもあり、手作業で取り上げが困難なものについては土ごと採取し、フローテーションマシンにより微細遺物を回収した。

各遺構の調査では、出土遺物の整理時の混乱を避けるため、便宜的に遺跡名を表すKを付けた。住居跡 (KH)、土坑 (KP)、焼土 (KF) などである。フレイク・チップ集中域 (FC)、柱穴状土小坑 (SP) については、もともと二文字で包含層との混乱の可能性がないためそのままにした。なおこの処置は注記作業までとし、本報告にあたってはKを外している。

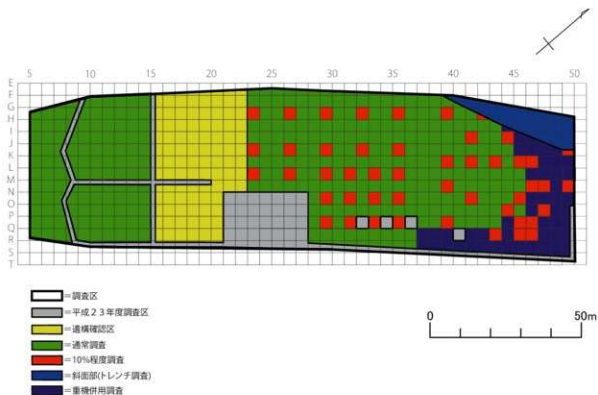


図 II-3 年度別調査状況図

(3) 遺物整理の方法

a) 図面

調査においては、遺構、有意な遺物の出土状況、また最終面測量毎に図面を作成した。遺構は原則縮尺20分の1で平面図、断面図、遺物出土位置図を作成し、必要に応じて10分の1で出土状況図を作成した。これらは調整して素図を作成し、この素図に墨入れをしたものを報告書の版下としている。

b) 写真

発掘現場での撮影はブローニサイズのカメラを主とし、デジタルカメラを整理用データ撮影に用いた。主に撮影対象としたものは、遺構、遺構の遺物出土状況である。

撮影に用いた機材はMamiya社製RZ67PRO IIである。

フィルムは、富士フィルム社 フジPROVIA100F、NEOPAN ACROS100を使用した。

室内の撮影は大判カメラで行い、ストロボを用いた。カメラは酒井マシンツール社製、トヨ・トヨビュー-45GX、レンズはNikon社製ニッコールAM ED210 F5.6、カメラスタンドはトヨ・ウエイトスタンドL100である。俯瞰撮影にあたってはトヨ・無影撮影台を使用した。露出計はセコニック社

製L-408、ストロボはコメット社製CB-2400a、CLX-25miniH。使用したフィルムは発掘現場での撮影に同じである。また、拓本土器、剥片石器、接合資料の撮影においてはデジタルカメラを用いた。カメラはシグマDP3である。

c) 遺物

一次整理：出土した遺物は、水洗ののち、土器、石器にわけ、分類を行った。分類された遺物は、それぞれ遺物カードを付し、グリッドごとに土器は古い順、石器は概ね分類順に並べて番号を記した。その番号を遺物番号とした。この遺物カードの情報をパソコン（マイクロソフト社、エクセル）に入力し、遺物点数の集計を行なった。すべての遺物に以下のように注記した。

遺構出土遺物	遺跡名	遺構名	ハイフン	遺物番号	層位
	カマ8	KP-10	-	20	F2

包含層出土遺物	遺跡名	グリッド	ハイフン	遺物番号	層位
	カマ8	C8	-	44	Ⅲ

二次整理：

土器：注記後、接合作業を行なった。口縁から底部まで接合したものや、文様が明確なものを選出して図化のための復元作業を行なった。

石器：器種毎に形態分類し、全体を把握できるよう実測する遺物を抽出した。

またフレイク・チップ集中域から出土した遺物を中心に接合作業を試みた。剥離工程が推測可能なものについて接合資料をVI章に掲載した。

d) フローテーション

住居の炉跡、焼土の土を中心とした任意に採取した土壌サンプルについて、フローテーション法による土壌水洗を行なった。作業はPROJECT SEEDS MODEL TYPE-1を使用し、篩のサイズは浮遊：2.00mm、0.425mm、沈殿：2.00mmのものを用いた。得られた微細な遺物について、土器、フレイク、骨片、炭化材、炭化種子に分類した。同定可能とみられるものについて、株式会社パリオ・サーヴェイに同定を委託した。炭化材、種子の一部については、放射性炭素年代測定の試料として用いている。

(4) 収納・保管

本報告に掲載された遺物については、復元土器はダンボールに、その他の拓影土器、石器はポリエチレン袋に個別に入れ、掲載番号、掲載図を付し、59×39×15cmのプラスチックコンテナ（サンボックス製 36-2 B）に収納した。その他の遺物は報告書名、分類内容を明記し同コンテナに収納した。コンテナには遺跡名、報告書名、分類名、収納番号を記したラベルを貼り、収納台帳を作成した。これらの遺物は報告後、木古内町で保管する。

(5) 遺物の分類

a) 土器

出土遺物のうち、土器は縄文時代早期をⅠ、前期をⅡ、中期Ⅲ、後期Ⅳ、晩期をⅤ群とし、続く続縄文時代をⅥ群、擦文文化期をⅦとした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）あるいは、前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。

Ⅰ群 [縄文時代早期の土器群]

a 類：貝殻・沈線文土器群および条痕文系平底土器群

b 類：東銅路式系土器に代表される縄文平底土器

II群 [縄文時代前期の土器群]

a 類：縄文尖底土器群

b 類：円筒土器下層式に相当するもの＝当調査では出土していない

III群 [縄文時代中期の土器群]

a 類：円筒土器上層 a 式、b 式、サイベ沢Ⅷ式、見晴町式に相当するもの

b 類：椀林式、大安在 B 式、ノダツⅡ式に相当するもの

IV群 [縄文時代後期の土器]

a 類：天祐寺式、涌元Ⅰ、Ⅱ式、トリサキ式、入江式、白坂Ⅲ式に相当するもの

b 類：ウサクマイ C 式、手稲式に相当するもの

c 類：堂林式、三ツ谷式、湯の里Ⅲ式に相当するもの＝当調査では出土していない

V群 [縄文時代晩期の土器群]

a 類：大洞 B 式、大洞 B-C 式とこれに並行する在地の土器群

b 類：大洞 C₁ 式、大洞 C₂ 式とこれに並行する在地の土器群

c 類：大洞 A 式、大洞 A₁ 式とこれに並行する在地の土器群＝当調査では出土していない

VI群 [統縄文時代の土器群]＝当調査では出土していない

VII群 [擦文文化期の土器群]＝当調査では出土していない

b) 石器等

石器等は、以下のように分類した。

剥片石器に関連するものについて、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、トランシェ様石器（鏡状石器を含む）、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、原石に分類した。

磨製石器に関連するものについて、石斧、石斧片、石斧細片に分類し、礫石器に関連するものについて、たたき石、すり石、扁平打製石器、石皿・台石、砥石、石錘、加工痕ある礫、礫、礫片に分類した。

このほか、石製品としたものには、異形石器に類するもの。穿孔痕跡のある礫がある。

なお主に剥片石器の石材である頁岩について、肉眼での観察により 1～4 までの石材に分類した（巻頭図版参照）。接合資料については、同一とみられる母岩資料に枝番号を付している。

1＝灰色～黒を基調とし、稲妻を思わせる白い筋状の線を伴うもの。もしくは雲状の白斑を伴うもの。

2＝灰色～チョコレート色の 2 色以上の色彩を持つもの。もしくは灰色単色のもの。

3＝黒色を呈し、他の色が混じらないもの。

4＝キャラメル色もしくは白色の単色を基調とするもの。

(6) 基本層序

本遺跡の土層は、色調などの特徴から以下のように 3 つに大きく区分した。

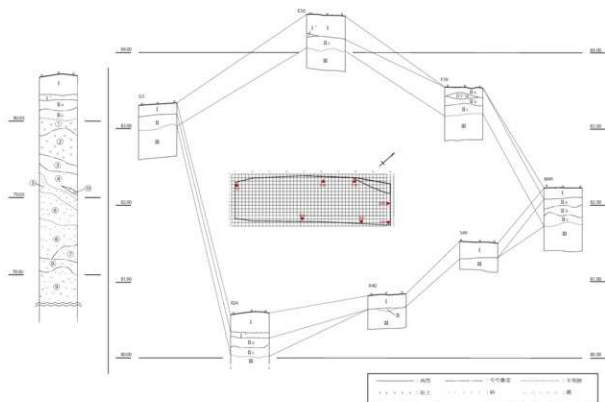
I 層：表土・耕作土

II 層：黒色土～暗褐色土～漸移層（遺物包含層）

III 層：褐色ローム層（上位は遺物包含層）

遺物包含層は II 層および III 層上部である。II 層のうち黒色土や暗褐色土の堆積は、調査区全面にはなく、風倒木などの自然攪乱のくぼみ、南西側の斜面などに認められる。そのような残存状況が良い部分では黒色土を II a 層、暗褐色土を II b 層、漸移層を II c 層と区分したところがある。II a 層と b 層の間に B-Tm とみられる褐色シルトの火山灰が断片的に確認できる。

なお基本土層を含めた全ての土層の色調について、『新版標準土色帖』（小山・竹原2004）を用い、粘性の有無、固さ、加えて混入物の種類、大きさ、マトリックスに対する割合について記述した。また土性、粘着性、堅密度を『土壤調査ハンドブック』（ペトロジスト談話会1984）の基準を用いて区分したのもある。図Ⅱ-4は調査区の土層の様子である。R24付近では、沈砂池作成のため5m近く掘り下げており、Ⅲ層より下位の堆積状態を確認できた。層位の詳細は下表のとおりである。



図Ⅱ-4 調査区内の土層

表Ⅱ-1 基本層序土層注記

I	10YR1/7/1	黒	粘性あり しまりなし	灰白色・黄褐色火山灰が塊状に混じる	層界自然
I'	10YR3/2	黒褐	粘性あり しまりあり	灰白色・黄褐色火山灰が塊状に混じる	層界自然
II	10YR2/2	黒褐	粘性あり しまりなし	30mm以下の暗褐色土ブロック塊状に7%混じる	層界やや自然
II a	10YR1/7/1	黒	粘性あり ややしまりあり	5mm以下の黄褐色土粒3%混じる	層界漸変
B-Tm	7.5YR4/6	褐	やや粘性あり しまりなし	ややシャット質	層界やや自然
II b	10YR3/4	暗褐	粘性あり ややしまりあり		層界漸変
II c	10YR4/4	褐	粘性あり ややしまりあり	10mm以下の暗褐色土粒3%混じる30~40ラインで炭化物を混じる部分あり	層界漸変
III	10YR4/6	褐	粘性あり しまりあり	10mm以下の暗褐色土粒1%以下混じる硬さにむらあり	層界漸変
①	10YR4/6	褐	粘土(黒層)		
②	10YR4/6	褐	粘土		
③	10YR5/8	黄褐	粘土(硬い)	黒褐色粘子5%混じる	
④	10YR4/6	褐	粘土(硬い)	黒褐色粘子3%混じる	
⑤	10YR5/8	黄褐	砂混粘土(硬い)	3mm以下の砂粒(泥岩・凝灰岩)30%混じる	
⑥	10YR5/8	黄褐	砂混粘土(硬い)	20mm以下の垂円礫(凝灰岩・凝灰岩)30%混じる	
⑦	10YR6/8	明黄褐	粘土	50mm以下の垂円礫(凝灰岩・泥岩・チャート)10%混じる	
⑧	7.5YR5/8	明褐	礫混粘土	30mm以下の垂円礫(凝灰岩・泥岩・チャート)30%混じる	
⑨	10YR6/8	明黄褐	砂混粘土	50mm以下の垂円礫(凝灰岩・泥岩)40%混じる	
⑩	10YR6/8	明黄褐	砂混粘土	100mm以下の垂円礫(凝灰岩・泥岩)70%混じる	
⑪	10YR6/8	明黄褐	粘土		

Ⅲ章 遺跡周辺の概要

1 地形・地質

遺跡の所在する木古内町は、北海道西南部、松前半島の中央東部に位置する。北は丸山（482.3m）と桂岳（733.5m）を結んだ線を隔てて北斗市と、北東は梯子岳（562.7m）を境に厚沢部町と、西側は瓜谷山（544.8m）、焼山（379.5m）を隔て上ノ国町と、南は建育川の右岸から袴腰岳（699.1m）を挟んで知内町に接する。東～南東方向は津軽海峡に面しており、函館湾と連続して南西方向に斜行していた海岸線が、東、南へと大きく方向を変える変換点となっている。地形はこの海岸に沿う形で発達する海成段丘、その内陸に形成される低平な丘陵山地、さらに標高300～600mの山地の三種に大別される。町内の大釜谷川、亀川、橋呉川、幸連川、大平川、佐女川、瓜谷川、木古内川は山地より発し、木古内川が東方向に流れるほかは南流している。海成段丘は大きく3つに分かれ、高位の段丘が標高40m前後、中位が標高20～30m、低位のものが標高10～15mとされている（通産省工業技術院地質調査所1979）。

このうち高位と低位の段丘はさらに2分され、計5面の海成段丘が設定されている。遺跡周辺は、南北方向に延びる山地の延長線上に当たり、西は大平川断層、東は北斗市富川付近まで続く「上磯隆起地塊」の南端に位置している。この隆起に伴い、付近は最高で標高160mに至る5つの段丘面が形成されるというものである。遺跡はこのうちH2面とされるものに立地している。H2面の標高は60～120mの間で、泉沢以東当別までの範囲で確認できる（宮内・八木1984）。

山地、海成段丘は、中生代の上磯層群を基盤とし、それを覆う新第三紀に相当する松山層群、さらにこれらを買いて山体を形成する貫入岩体から形成されている。上磯層群は黒色粘板岩、チャート、硬質砂岩、礫岩、および石灰岩を主とする地角斜性堆積物からなる。松山層は中新世中期から後期かけての海進によってもたらされた海成堆積層である。遺跡周辺の松山層は、下位から戸田川層（木古内層）茂辺地川層（厚沢部層・館層）が分布している。

戸田川層（木古内層）は、主として珪質硬質頁岩および硬質泥岩、軟質泥岩互層からなり、暗灰色泥岩層や砂岩層、および凝灰岩層を挟有している。この層には石器石材となりうるものも含まれており、先の隆起の影響に伴い褶曲している。

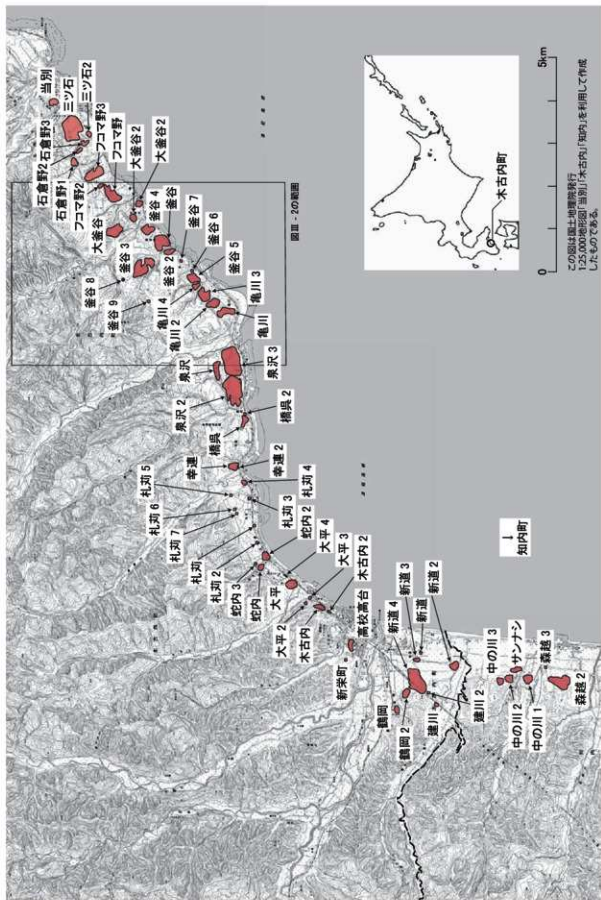
茂辺地川層（厚沢部層・館層）は次第に浅海化、寒冷となったと推定される時期の堆積物である。厚沢部層は黒色ないし暗灰色の泥岩を主とする下部の札苺部層とシルト岩を主とする佐助沢部層とに区分される。館層は主として塊状を呈する凝灰質～珪藻質シルト岩からなる。

貫入岩体としては、山体を形成するものは、丸山が粗粒玄武岩、桂岳は角閃石ダイサイト、不二山が斜長流紋岩などとなっている。このほか大釜谷川の最上流部と下流域に玄武岩の岩脈があるが、山体を形成していない（通産省工業技術院地質調査所1979）。

2 地名の由来

「釜谷」「釜屋」の地名は、日本列島によくある地名であるが、山田秀三によると、北海道のどこどこにあって「カマ・ヤ」と、青森県津軽海峡に面するものについては、アイヌ語を起源とする可能性があるという。アイヌ語ではカマは「平べったい岩」の意味で、そのような地名の場所には、たいてい岩盤が川を横切っているか、汐が引くと広い岩場になる場所であるとしている（山田1982）。

木古内町史では釜谷の地名の由来として、一遍の説話と、起源の異なる二説が紹介されている。古老の話という説話は次のようなものである。



図III-1 木古内町周辺の道跡

大永年(1521～1527)金左衛門、万右衛門の二人がこの地を訪れた際、付近の山野を歩き回ったのち大釜谷の付近でのどか濁き、岩の間から水のしずくが流れおちるのを見て喜んだ。その岩は円き釜(円形の鉄瓶)を髣髴するものであり、この岩の形状にちなんで「カマタニ」とした。というものである。

そのほかは、アイヌ語「カマヤベツ」=匾板のある川であり、川底が盤状のところが多いことからつけられたというもの。今から400年ほど前に青森県から漂流した吉田金左衛門が、この地に居住し、生国の八戸付近の釜谷の名をつけたとされるものの二説である(木古内町史編纂委員会1982)。

一方、記録にあらわれる最も古い釜谷の名前は、寛文九(1669)年のジャクシャインの蜂起関係の資料である。これには「さすかり」に4、5軒の家があり、ニシケという酋長がいること。「かまや」には3軒の家があったことが記されている(木古内町教委 1974より引用)。

この後100年以上経るが、谷元旦による『蝦夷紀行』に釜谷の由来に関わる記述がある。寛政十一(1799)年、江戸幕府の命を受けた谷元旦が、松前から函館に向かう途中、五月一日にこの釜谷の土地を訪れた際のものである。それによると「釜岩村に浜禰神の社あり村の東大釜川の東に釜山石あり大いさ数条状覆釜のごし故に名づく、村名又これによるという岩上細き溪流あってこれに注ぐ岩面に散って瀑布となる。尤も風致あり。」とされている(佐藤編・谷元旦1973)。

安政三(1856)年には松浦武四郎がこの地を通っている。それによると、二十三軒の人家があり、村の上に製塩の釜を神体としている塩禰神の社があるという話が記されている(高倉1978)。

このように、釜谷の地名の由来は、「カマ」がアイヌ語の平らな岩を意味するのか、あるいは日本語の釜を起源とするものの二つに分かれるが、1669年にはすでにそう呼ばれていたこと以外に確実な手がかりとなるものはなく、不明である。

参考として、釜谷周辺は山田の言うとおり、汐が引くと広い岩場になること。川は板状に割れる硬質泥岩・頁岩である戸田川層(木古内層)を削って下刻し、川底が盤状を呈する部分が多くみられること。さらに塩禰神社の北側、大釜谷川に近い段丘面の傾斜変換点には、大永年間に二者が見たとするものによく似た、釜状の地形を成す湧水点がある。同じものかどうか定かではないが、先の沿革史には、その岩が依然としてあり、鉄瓶の片面のような姿をしていることから「釜谷と称せらるも理なり」と記されている。

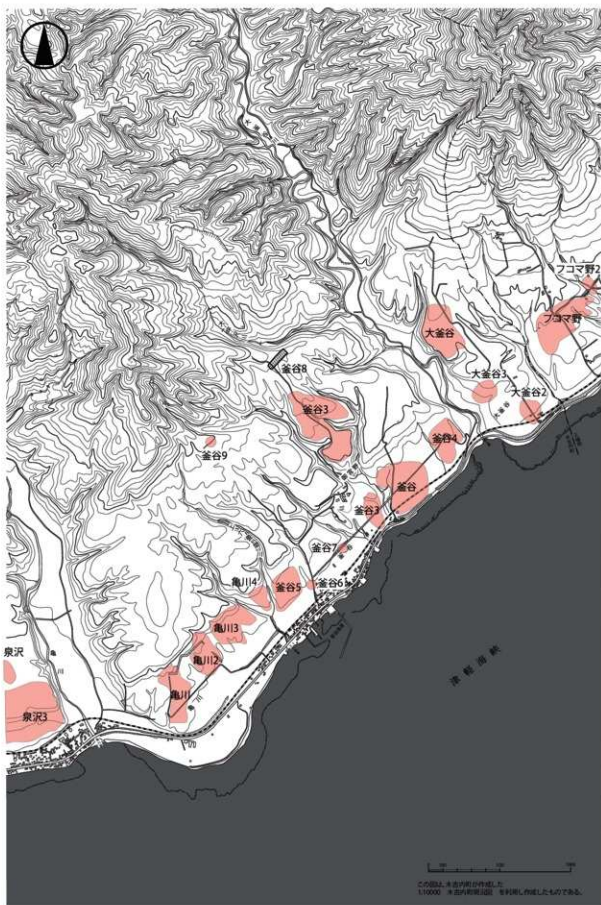
これらのことから推測すると、もともとアイヌ語で呼ばれていたカマ・ヤに、和人がその地形をみて、まさに釜のようだと納得して「釜谷」の漢字を与えたというのが実際のところではないだろうか。

3 周辺の遺跡

木古内町には、平成25(2013)年4月現在、旧石器時代から縄文文化期までの52か所の遺跡がある。当センターが近年、平成23(2011)年以降に町内で調査を行った木古内2遺跡、蛇内2遺跡、大平・大平4遺跡、札蒔5遺跡の報文において、これらは遺跡一覧表で紹介されている(北埋調報 278、280、281、292、294)。本遺跡は北斗市との境界に位置することから、北斗市の南部を含み、北は北斗市大当別川から南は木古内町大平川までの範囲にある39遺跡について説明する。このうち発掘調査の行われた遺跡は18遺跡であり、調査成果を中心に時代ごとに見てみることにする。

旧石器時代

釜谷4遺跡のV層とされた黄褐色ローム層から、前期旧石器時代の可能性があるとされた石器が報告されている。捏造事件以後の2004年、竹花和晴はそれら全てが偽石器(自然破砕礫)であるとし、この見解を否定している(竹花2004)。横山英介は当時石器とされた7点の石器のうち、1点を除い



図Ⅲ-2 遺跡周辺の地形

た6点については石器縁辺の剝離角度から人工品と認定する条件を満たしていると反論している(横山2005)。このほか当地域には、後期旧石器時代後半期に属するものとして、札苺5遺跡で美利河型細石刃核と若干の接合資料が得られている。また幸進育成牧場の敷地内で、甲斐正明より石刃製の削器が採集されている。

縄文時代早期

早期中葉の遺物が6遺跡で出土している。釜谷遺跡では重複する12軒の住居跡と、土坑1基を確認し、土器は白浜・ノダップI式、根井沼式に相当するもの、物見台、中野A式に相当するものが出土している。そのほかは遺物のみではあるが、泉沢2遺跡A地点で白浜・ノダップI、根井沼式、川汲B式に相当するものがわずかに出土している。このうちノダップI式は同遺跡B地点にも確認されている。なお時期不明とされている図20-249～263はこの時期のものである可能性が高い。釜谷5遺跡においてもわずかではあるが出土している。北斗市の図中の範囲では、三ツ石2遺跡において、貝殻腹縁文土器が出土している。本遺跡の調査において、ノダップI式、国立療養所裏1群の石器製作跡が検出されている。断片的ではあるが、他地域では出土例の少ない早期中葉の資料は、釜谷、泉沢の周辺でややまとまりを見せている。

早期後半期の資料は、蛇内2遺跡で、中茶路式期が1軒、東鋼路IV式が1軒の計2軒の住居跡が検出されている。このほか泉沢2遺跡A地点、亀川3遺跡において中茶路式、東鋼路IV式が包含層からわずかに出土している。

縄文時代前期

釜谷4遺跡では、前期前半のトドホッケ、春日町式土器が出土している。また道南地方では類例のない、同時期の可能性がある押型文の土器片も出土している。

前期後半に当たる円筒下層式の時期、この地域は道内でも有数の遺跡密集地区としてあげることができる。3軒以上の住居跡が検出される遺跡を集落とすると、住居跡、捨て場(再堆積層)、墓域などの位置関係から土地利用状況がわかる集落遺跡は、蛇内遺跡、釜谷遺跡、釜谷5遺跡、札苺5遺跡、大平遺跡、と5遺跡ある。小規模な遺構を伴うものには北斗市フコマ野遺跡などの2遺跡が加わり、包含層から破片が出土するものを含めると、ほぼすべての遺跡が該当するといった状況である。

蛇内遺跡では、円筒下層c式の住居跡3軒と同期の「捨て場遺構」に加え、墓域とみられる場所も検出されている。土坑39基のうち12基が墓である可能性が高いとしている。楕円形で埋戻しの堆積状況を呈するもので、中には石礫5点、つまみ付ナイフ1点が出土しているものや、坑底中央に自然礫を伴うものがある。

釜谷遺跡は円筒下層a～d式に至る集落遺跡で、合計76軒の住居跡が見つまっている。また、再堆積層とされた遺構は、削平された部分と対になり、大規模な土の移動が想定されている。住居跡と再堆積層の重複状況の概略を述べると、円筒下層a・b式の住居跡は主柱穴が1～3本の円形、楕円形を呈する小型のもので、再堆積層に覆われている。円筒下層b式の新しい時期に再堆積層が形成され、円筒下層c～dの住居跡は、主柱穴4本の大型住居を主とし、再堆積層の上位から構築されているという。円筒下層全期間の集落変遷と土地利用状況がたどれる貴重な遺跡となっている。

札苺5遺跡では、住居跡9軒が調査区北側に密集して検出されており、調査区外に広がる集落である。検出されている柱穴状の小ピットと焼土の多くは、同時期のものとみられる。

大平遺跡は、平成21～23(2009～2011)年の3か年にわたって調査を行い、住居跡55軒、土坑230基、剥片集中130か所に加え、円筒下層式期に築かれた「盛土遺構」が検出されている。

このほか小規模なものは、亀川3遺跡、北斗市フコマ野遺跡があげられる。亀川3遺跡では、円筒

下層 a 式の住居跡 1 軒、住居様式構 3 基が確認されている。北斗市のフコマ野遺跡では、円筒下層 b 式古手に属する竪穴状遺構が検出されている。泉沢 2 遺跡 A 地点において、円筒下層 d 2 式が包含層から出土している。

縄文時代中期

中期前半の遺構を伴う調査例は 2 例ある。

泉沢 2 遺跡 A 地点において、天祐寺式の住居の下部から、円筒上層 a 式とみられる土器を伴う地床炉の住居が検出されている。おそらくベンチ構造を持つものとみられる。

蛇内遺跡では、円筒上層 b～d 式が床面から一括出土している住居跡が 1 軒あるほか、墓とみられる 11 基の土坑を検出している。これは直径 1 m 程度の円形を呈するもので、覆土はほぼ埋戻しであること、覆土からは礫、踏石器が伴い、人為的に割られた礫が多く出土するというものである。類例は多いが、その一つとして七飯町鳴川右岸遺跡の「土壇 B 類」はこれと同様なものである（北埋報 87）。円筒上層式期の土坑の一つのあり方とみることができよう。

中期後半は、蛇内遺跡において、大安在 B 式 3 個体の一括資料が得られている。小型の楕円形の住居にともない、床面に 1 個体、壁際に 2 個体出土しているものである。同様な出土状況に、時期はやや古く前半の見晴町期であるが上ノ国町大岱沢 A 遺跡 P 4 があげられる。

縄文時代後期

縄文時代後期の資料は、すべての遺跡で出土している。そのうち遺構を伴うものは、縄文時代後期前葉に限られている。そのうち重要とみられる遺跡を紹介する。

泉沢 2 遺跡 A 地点において、住居跡 9 軒からなる集落が検出されている。うち 7 軒が天祐寺～涌元式の時期に当たるものである。2 軒は入江式に相当するものとみられ、同遺跡 B 地点にも分布がみられる。天祐寺・涌元式の分布域と、トリサキ式の分布域が若干異なることが指摘されており、同時期の編年、集落変遷を考える上で良好な資料である。

北斗市の石倉野 3 遺跡においては、天祐寺～入江式の土器が出土しており、土坑 3 基、T ビット 1 基、焼土 8 か所のほか、ローム・マウンドとされる盛土様らしき遺構が検出されている。

このほか、北斗市三ツ石 2 遺跡で涌元式の住居跡 1 軒、配石を持つ土坑墓 1 基が見つかった。包含層からは天祐寺～入江式に相当する土器が出土している。

縄文時代晩期

縄文時代晩期についても遺跡数が多く、札苺遺跡の墓と副葬品をはじめ貴重な資料もある。

札苺遺跡は、昭和 46～48（1971～73）年の 3 年間にわたり、北海道開拓記念館により調査が行われている。土坑墓 60 基を検出し、長円形の平面形を呈するもので、「砂利ブロック」と呼ばれる砂利層がある墓がこのうち 35 基を占めるといふ。ベンガラを伴うものや副葬品として石鏃、ヒスイ玉、完形の土器が出土するものも検出されている。昭和 48（1973）年 4 月には国道の拡幅工事に伴い記念館の調査地点から南よりの道路沿いが町教委により調査されている。住居跡 2 軒が検出され、札苺 I 群、II 群土器とされた、大洞 C₁、C₂ 式に相当する土器群が出土している。その後昭和 60（1985）年に当センターが調査を行い、土坑 4 基と焼土 45 か所を検出したほか、晩期初頭に位置づけられる土器の一群を確認している。

大釜谷 3 遺跡は晩期を主体とする遺跡で、38 基からなる土坑墓が検出されている。中にはヒスイ製の玉、藍胎漆器をはじめとする糸玉状や紐状の漆製品が副葬品として出土している。

泉沢 2 遺跡 B 地点では、後期終末～晩期初頭の爪形文を配する浅鉢が出土している。同遺跡 A 地点では、包含層から札苺 II 群に相当する壺形土器とそれに伴い土製の平玉が 46 点出土している。約 15 点

に焼けはじけがみられるとしている。

亀川2遺跡は札幌Ⅰ～聖山Ⅱ式までの遺物が出土しており、住居跡の1軒は同時期とみられるものである。

縄文時代

縄文時代晩期とは対照的に縄文時代の遺物は極めて少ない。北斗市の三ツ石2遺跡において、炭化物の集中を伴い恵山式土器の集中域がみついているほか、札幌遺跡の北海道開拓記念館の調査で一個体の甕が復元されているのみである。

縄文文化期以降

大平遺跡では、9世紀後半～10世紀初頭とみられる住居跡が5軒見ついている。一辺が約4mの隅丸方形、北かまどでトンネル式の煙道を持つものである。釜谷遺跡では底部が並ぶ状態でわずかながら出土している。

近世の資料は、札幌遺跡の昭和48(1973)年町教委の調査において、アイヌ文化期の墓が検出されている。頭位は東で刀、山刀、小刀、魚鉤、小物入れ、折敷、杯を副葬する成人男性の墓である。

各遺跡の石器接合資料

これまで遺跡を紹介してきた北斗市大当別川～木古内町大平川の範囲を中心とし、北斗市茂辺地の茂辺地川から、木古内町の木古内川までの範囲は、「珪質頁岩」の採取可能地として知られる地域の一つである(竹花2000)。紹介した上記の調査の多くで縄文期の石器接合資料が得られており、石器製作遺跡ではないかという指摘が目立つ。その様子を北から順に概観しておく。

北斗市のフコマ野遺跡では、縄文時代前期円筒下層前半期の堅穴状遺構が、剥片石器、微細剥片が多く出土することから、同時期の石器製作跡と想定されている。

大釜谷川右岸に位置する釜谷4遺跡は、2か所の石器集中区があり、5万点を超える石器が出土している。15件の接合資料が図示されている。詳細は不明としているが、包含層から多く出土している縄文時代前期前半の時期に伴うものではないかと推定されている。

本遺跡は、縄文時代早期中葉のノダップⅠ式期のフレイク・チップ集中域が36か所検出され、400件を超える接合資料が得られている。多くが同時期の石器である「トランシェ様石器」を製作したものとみられる。同時期の資料は、沢を下った釜谷遺跡、また同一の段丘面にある泉沢2遺跡でも確認されており、住居跡の確認された釜谷遺跡を中心とした生活圏になっていたと推測される。

亀川3遺跡では、12万点の石器が出土している。混在しているものの、前期後半の円筒下層a、b式の石器が「主体をなす」と推測されている。石鏃、石槍などに、加工途中の破損品が多くを占めることから、石器製作の拠点、あるいは供給地的性格を持つものとされている。

泉沢2遺跡A地区では、フレイク36点の接合資料が得られている。被熱しており、報告者は原石の状態で熱を加え、その後加工したと想定している。やや稜のある礫を素材とし、石核である両面調整石器は調査区外に持ち去られている。報告者は、肉眼観察ではあるが、ほとんどの石材が遺跡のそばを流れる橋川で採取可能であること、またツールが全体の1%未満であること、たたき石、フレイク、石核の多さを鑑み、「石器製作に重点を置いた小規模な集落ではないか」と推測している。

蛇内遺跡では、円筒下層c式の「捨て場」に、多くの剥片集中箇所があり、接合資料も得られている。報告者は、出土範囲が狭いこと、また石器の加工具であるたたき石が少ないことから、他の場所で剥離した剥片を、捨て場に遺棄した可能性を指摘している。同様な状況は、同じ円筒下層c式の八雲町山崎5遺跡でも指摘されている(北理調報165)。円筒下層期の石器製作にかかわる一つの傾向であるかもしれない。

大平4遺跡では、369件の接合資料が得られている。その剥離技術には二種あり、背面と腹面の位置側縁に加工されるつまみ付ナイフを製作したものと、両面加工石器を製作したとみられるものがあるとしている（北理調報280）。

大平川以南の知内側においても、いくつかの遺跡で接合資料が報告されている。

建川2遺跡においては、石材集中として44件の接合資料が得られており、縄文時代後期前葉と推測されている。図示された1点は、礫皮を除去する過程のわかる資料である。新道4遺跡F地区においては、縄文時代中期末葉とみられる37件の接合資料が得られている。両面調整石器の製作途中のものや、礫皮の残る剥片が接合する例が多い。また、時期不明であるが、鶴岡2遺跡においても、礫皮の残る剥片を主とする15件の接合資料が報告されている。

知内町では、森越遺跡に例がある。縄文時代中期前半の住居跡（3号住居）の床面から、「珪質岩」の礫十数点がまとまって出土しており、住居跡のくぼみなどからフレイクの集中域を検出している（知内町教委1974）。この珪質岩は報文中に場所は明記されていないものの原産地が近くにあるとされている。これはこれまで石器石材として紹介してきた珪質頁岩とは異なるもので、おそらく森越川中流の冷泉付近に産出する珪質岩を示しているとみられる（工業技術院地質調査所1978p44）。

北側の北斗市に目を向けると、茂辺地、矢不來、館野の遺跡密集地区にあたる。しかし多くの調査例にも関わらず、接合資料が掲載されるものには矢不來7遺跡（晩期）、館野6遺跡（前期後半）とわずかとなっている（北理調報232、295）。

以上本地域の石器出土の様相を概観したが、各遺跡の調査面積の大小にかかわる出土点数の差異や、また報告に当たっての重点の置き具合などの影響は大きいであろう。また縄文各期の時期により、集落内のどこで石器製作を行うか、行わないかという事項等、考慮すべき要素は多くある。

しかし、大当別川～大平川間の外では報告書に掲載された接合資料の数、石器製作跡であるという報告者の認識は少なくなる傾向はある。石材供給河川である大釜谷川を中心とした、この上磯隆起地塊南端部が縄文期の一つの石器石材供給および加工地域であるとしてよいであろう。

加えて時期を詳細にみると、本遺跡例を含む早期中葉から前期後半円筒下層式までの期間と、縄文時代後期前葉に相当する接合資料、または集落が多い。これらの時期には、集落の周囲で積極的に石器製作を行っていること、さらに当地が石器石材産出地として認識されていたことを示している。

このことに加え、続縄文時代以降、石器への依存が徐々に解消される擦文文化期にかけて、上磯隆起地塊周辺に遺跡数が希薄になることも示唆的である。

IV章 遺構とその出土遺物

1 概要

2か年の調査により検出された遺構は、住居跡2軒、土坑21基、Tピット3基、柱穴状小ピット15基、焼土56か所、フレイクチップ集中域が36か所となっている。

検出された2軒の住居跡は、調査区南西部のミヤノ沢に面する台地上に位置している。いずれも長辺4mに満たない小規模な竪穴住居であるが掘り込みは明瞭であり、H-1とした南側に位置する住居は石組を持つ炉を備えている。北側のH-2は長辺が4mにわずかに満たない楕円形で、覆土から縄文時代後期前葉の土器の胴部下半の破片がまとまって出土している。なお土坑P-1は、浅い皿状の落ち込みと焼土を伴う。落ち込みの規模はH-1、2とよく似ており、土坑と重複する住居跡である可能性もある。いずれも縄文時代後期前葉のものとみられる。

土坑は共通する特徴を持つ2者とそれ以外に分けられる。一つは坑口が楕円形、坑底が隅丸方形を呈し、確認面からの深さが1.4~1.5mある6基(P-4、7、13、17、18、19)である。出土遺物がほとんどないこと、自然堆積の状況など斉性が高い。P-4坑底付近から出土した炭化物の炭素年代は5,620±30yrBPの年代が得られており、縄文時代前期以前、縄文時代早期中葉の可能性もある。

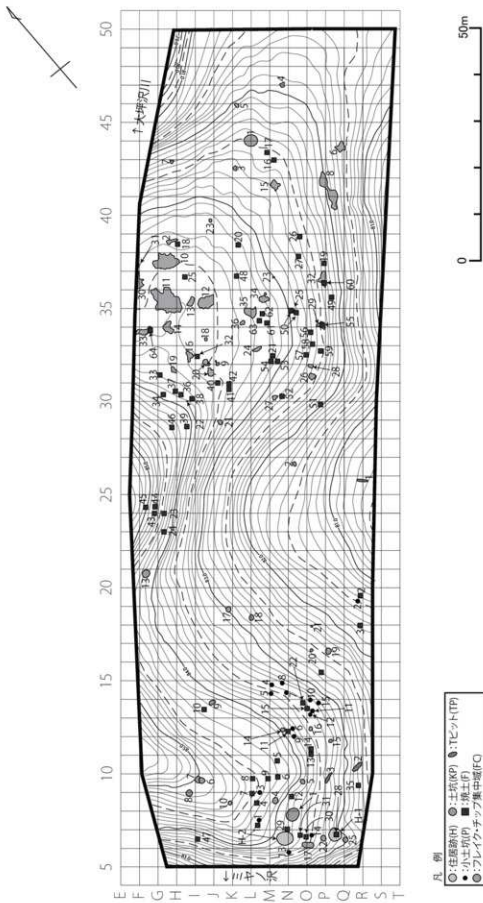
他方、坑口より坑底の径が大きいいわゆるフラスコピットが5基(P-1、6、8、22、25)ある。こちらは縄文時代後期前葉の土器や石器などが出土しており、P-1、22から出土した炭化材の年代は3,650~80±30、3,630±20yrBPとなっており、同時期のまとまった値が得られている。このほか、I39区から検出されたP-23は、小型の円筒形を呈する土坑で、袋状にやや膨らむ形状のものである。覆土の色調や周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものとみられる。

3基検出されたいわゆるTピットは、溝状の細長い平面形を呈するものである。このうち2基は調査区南端の緩斜面に北東-南西方向に長軸方位がそろって検出されており、ミヤノ沢沿いの調査区外に列状に延びていくと予想される。

柱穴状の小土坑15基は、調査区南部に集中する遺構群と同一の等高線上に分布している。このうち調査区中央に位置する10基のまとまりは、埋戻し状を呈する堆積が確認できる明瞭なものである。上部構造の想定はできないものの、概ね北の方角を指す2本一組の柱として解釈できる可能性がある。

焼土は64か所検出されている。その分布域は概ね3か所にまとまる。一つは調査区南側のミヤノ沢に沿った台地上、二つは調査区北側大坪沢川に沿うフレイク集中域に分布を同じくするもの、また三つ目は調査区北西端の調査区内で最も標高の高い位置に分布する一群である。調査区周辺は太平洋戦争後に焼畑農法を行っており影響が心配されたが、上記のまとまりの前記2者の出土炭化部を炭素年代測定したところ、南部のF-15が3,770±20yrBP、北部のF-36、56が、4,000±20yrBP、3,840±30yrBPという結果となった。いずれも焼畑の影響はないが、北部の結果は縄文時代中期後半ごろの年代を示しており、トランシェ様石器や貝殻土器といったフレイクチップ集中域に伴う遺物とはやや離れた年代となっている。このことの原因は不明である。

焼土は、上位に火山灰の落ち込みを伴ない、明瞭な焼土層を形成するものが2か所(F-15、18)あるが、3か所の分布域のいずれもこうした例は少数で、黄褐色土がわずかに変色した程度のもので、炭化物がごく少量認められるものがほとんどである。この傾向は特に北部地区で明らかであり、頻度の少ない焚火行為の結果ではないかと推察される。また成因の不明な風倒木の落ち込みに伴うものも多く、15か所となっている。フレイクチップ集中域については、出土石器の接合資料とともにVI章で一括して掲載する。なお事実記載の文責は、表IV-1、遺構一覧表に担当者として記した。



2 住居跡 (H)

H-1 (図IV-2～5、表IV-2、5、6、図版3、4、29、)

位置 P 6・7区 規模 3.24×2.94/3.04×2.78/0.18m

平面形態 やや不整な円形

確認・調査 調査区南側、ミヤノの沢に面した台地の先端、標高83.0m付近に位置する。この周辺は耕作により攪乱を受けており、Ⅱ～Ⅲ層に相当する黄褐色土まで表土を除去していた。包含層調査を行っていたところ、広範囲にわたる灰褐色～にぶい褐色土の落ち込みと焼土F-28を確認した。遺構であることが想定されたため、落ち込みとF-28の中心にかかる土層観察用のベルトを設定し周辺を掘り下げた。調査の結果、平坦な床面と石組炉、明瞭な床面と壁の立ち上がりの境を検出し、竅穴住居跡と認定した。構築面はⅡ層中と考えられる。

覆土 灰褐色～にぶい褐色を呈する。床面に近く、覆土でも下位の検出である。ここからは住居跡のくぼみを利用、もしくは住居跡と入れ子構造的に時期差の無いと考えられる焼土、F-28を検出している。

付属遺構 床面中央よりやや南側に地床炉である石組炉のHF-1がある。半截したところ、厚さ4cmほどの暗赤灰色～赤色をした断面を確認した。暗赤灰色を呈するところには炭化物を含んでいた。これを土壌サンプルとして取り上げ、フローテーション法によって炭化遺物を得ようとしたが、微細なため得られなかった。このほか、西側端に不整な皿状を呈するHP-1、直径25～30cm前後、深さ10cm程度の小ピットHP-2～4を検出している。

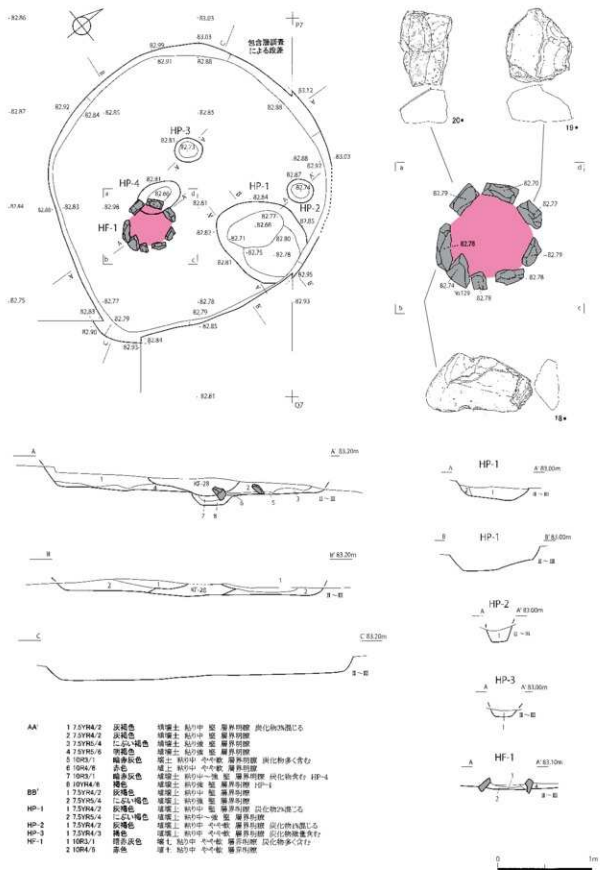
遺物出土状況 全体で342点出土している。内訳は覆土・覆土下位より304点、床面より35点、HP坑底より3点である。遺物は石組炉を持つ床面に少なく、F-28周辺の覆土に多い。これは住居跡のくぼみを利用、もしくは住居跡と入れ子構造的に時期差の無いと考えられるF-28の周辺遺物として捉えられる。分類毎に見ていくと、土器は全てIV群a類で240点出土している。剥片石器類では81点、礫石器・礫片類は18点、その他焼成粘土塊、石斧片各1点である。

時期 出土した遺物と石組炉を持つ住居の構造、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と判断する。

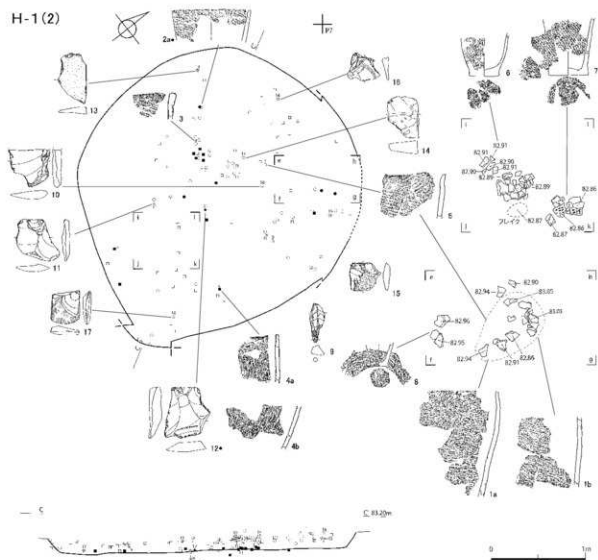
掲載遺物 1～8はIV群a類土器。1a、bは接合しないが同一個体である。太さが極端に異なるLR縄文が器面全体に粗雑につけられている。2a、bは接合しないが同一個体とみられる。外縁接合の痕跡が明瞭に残される。口縁端部は調整されて平坦面がつくられる部分がある。地文は太さの不均一な原体、もしくは0段多縄によるRL斜行縄文である。3は沈線文がつく口縁部。4a、bも接合しないが同一個体とみられる。捺糸文が施文される。5は口縁部。地文はLR斜行縄文である。6～8は底部片。6はやや張り出す底部。地文はLR斜行縄文。7は中心が厚く、器壁が直立するもの。地文はLR斜行縄文。8は小形土器。地文はLR斜行縄文。2aが床面出土の破片、F-28から出土したものが接合している。4bはP-25との接合資料である。そのほかは覆土から出土したのもしくはそれに加え、周囲の包含層との接合である。

9は石錐。縦長の剥片を用い、端部に錐部を作出している。10～12はスクレイパー。10は打点部を欠損する。背面左側縁と腹面左側縁に刃部が作出される。背面側の刃部周辺には、使用によるとみられる弱い光沢が認められる。11は横長の剥片を用い、ややえぐれてアーチ状を呈する刃部が作出される。12は床面出土。縦長剥片の左側縁に直線的な刃部が作出されている。13～15はRフレイク。13は剥片の端部が調整される。素材剥片の厚さから石錐の未成品の可能性がある。14は節理割れた厚手の剥片に意図の不明瞭な加工がなされる。15は原石面の残る剥片の打点側に加工がみられる。16はU

H-1(1)



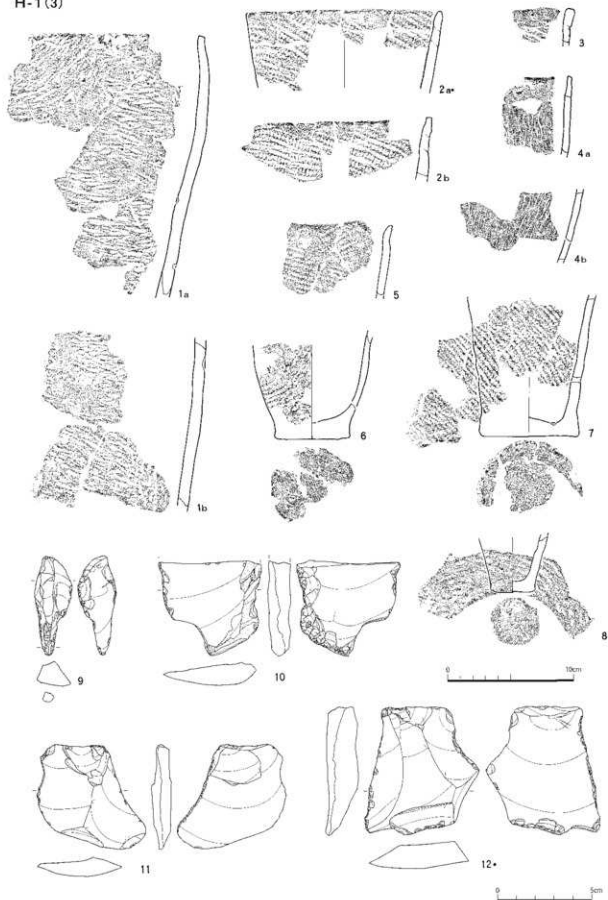
図IV-2 H-1(1)



図IV-3 H-1(2)・遺物出土状況

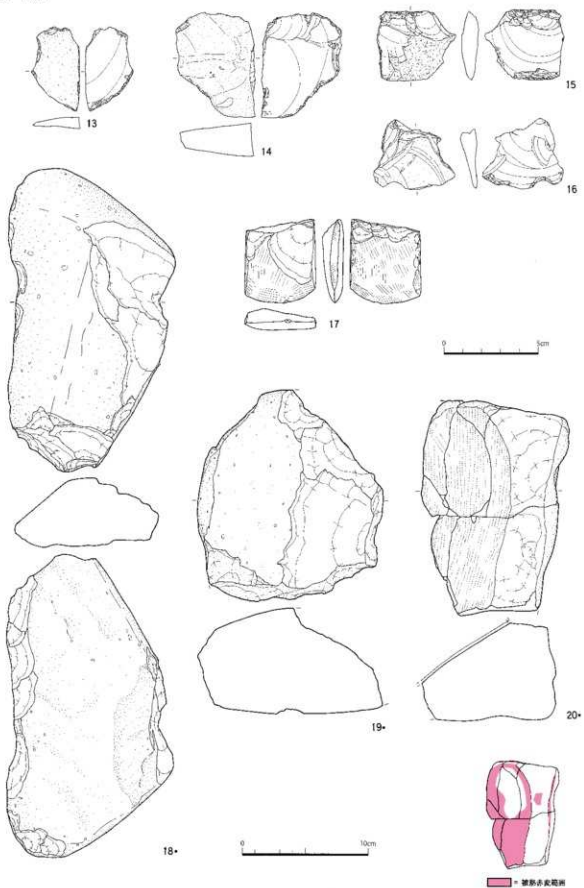
フリイク。剥片端部にノッチ状の微細な剥離痕がある。17は床面から出土した石斧片。片麻岩～角閃岩である。全面磨製により円刃片刃に仕上げられている。18～20は礫石として使用されていたもの。18、19は加工痕ある礫、20は石皿・台石片である。18、19は被熱し赤変した礫を素材とする。角を落とすかのような打ち欠きの加工がなされている。20は全体の形状が不明であるが、表面に明瞭な使用面がある。使用面は磨かれ平滑である。

H-1 (3)



图IV-4 H-1 (3)

H-1(4)



図IV-5 H-1(4)

H-2 (図IV-6～10、表IV-2、4～6、図版5、30)

位置 M・N 6区 規模 3.98×3.20/3.72×2.92/0.33m

平面形態 楕円形

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、83.8m付近に位置する。この周辺は耕作により攪乱を受けており、Ⅱ～Ⅲ層に相当する黄褐色土まで表土を除去していた。包含層調査を行っていたところ、黒褐色～褐灰色土を呈する不整形な落ち込みを検出した。この落ち込みに隣接して橙色土を呈するローム質土が広がっていた。この段階では土坑が3基重複したものか、あるいは風倒木痕であることが想定された。先ず土坑の重複と考えた黒褐色～褐灰色土の広がり長・短軸に直交する土層観察用のベルト (bb'、cc') を設定、トレンチ調査を行った。この調査で土坑3基の重複が見られず、橙色のローム質土の広がりの下に灰褐色土と遺物が続き、下位からは焼土を検出した。橙色のローム質土は最も厚いところで20cm程あった。この段階で、土坑の重複の可能性がなくなり、風倒木により壊された遺構、もしくはローム質土が意図的に入れられた遺構であることの二つが考えられた。次にこのローム質土の平面形を確認、新たに土層確認用のベルトを設定 (aa' dd')、ローム質土と褐色～褐灰色土を掘り下げていった。調査の結果、中央に焼土が広がる窪穴状の遺構で、平面形は楕円、床面と壁の境はやや緩やかである。床面は北西～南東にかけ高低差が10cm程あった。

覆土 覆土下位には黒褐色～褐灰色土があり、その上に人為的に入れられたと考えられる橙色のローム質土が厚く広範囲に堆積している。このローム質土の供給源として、周辺に検出されているフラスコ状土坑を掘り上げた土であることが推測される。

付属遺構 北西～南東にかけ傾斜がついている床面の中央に、若干盛り上がるように焼土 (HF-1) を検出した。周辺には炭化材が出土、放射性炭素年代測定 (AMS) を行ったところ3,750±20yr BP (IAAA-122281) という結果が得られた。調査による年代観と一致する。このほか、浅い小土坑が4基 (HP-1～4) を検出した。

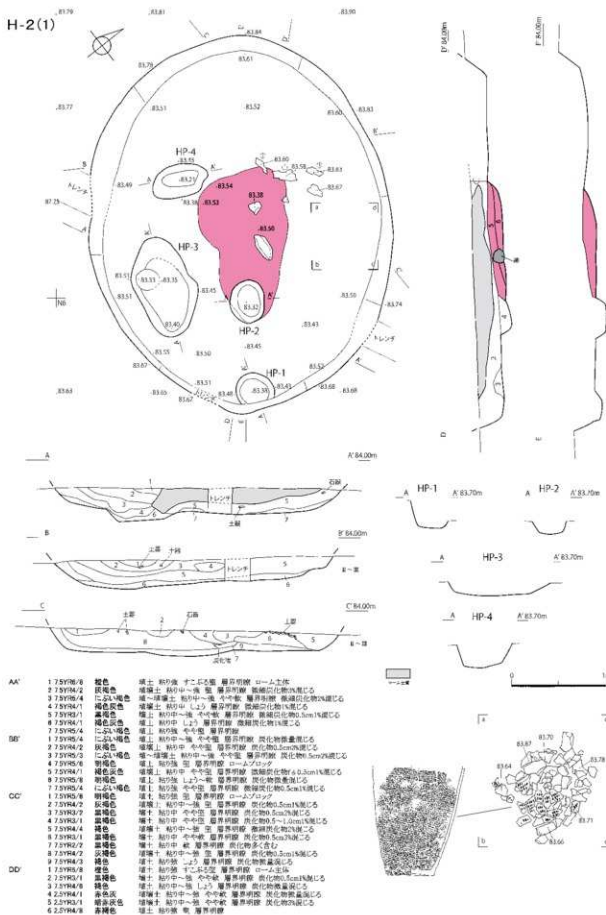
遺物出土状況 覆土からはIV群A類土器の胴部～底部にかけての1個体分が出土している。全体では609点で、内訳は覆土中から543点、焼土上の炭化物層から21点、焼土から36点、その他3点である。最も多いのは土器で、IV群A類439点、V群b類が1点の出土である。このほか剥片石器類72点、礫石器・礫片類80点、焼成粘土塊16点、石斧片1点が出土した。

時期 出土した遺物と周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と判断する。

掲載遺物 1は覆土から出土した復元土器。胴部下半が復元できた。条の横走る粗いLR縄文が底部付近まで施文される。底部、底面、内面ともに丁寧に調整され平滑に仕上げられている。2a、bは同一個体。地文はRL斜行縄文。底面には木葉痕状の沈線が1条つけられている。3は胴部。条が横走するようにLR単節縄文がつけられている。4は口縁部。かなり間隔のあくLR斜行縄文が施文されている。捻糸文かもしれない。5は小形土器の折り返しによる口縁部。6a、bは同一個体。指頭のような擦痕の残る工具により全体が調整されている。器壁は薄く、底部付近でも7mm前後である。7a、bは同一個体。複節の原体による回転施文とみられるが、破片であるため不明である。8は網目状捻糸文の施文される胴部片。9は無文地に三本組沈線手法による渦巻文を描き、それらを二本組の沈線により繋いだ文様が描かれている。10の地文は合捺を用いているとみられるが不明瞭である。

他遺構と接合関係にあるものは、6aがFC-17と接合しているのみである。H-2の層位では、7が焼土から出土したものがある。そのほかは覆土から出土したもの。それに加えて周囲の包含層から出土したものと接合である。

11、12はスクレイパーである。11は節理面を残す薄手の剥片を用いる。右側縁の両面から細部調整

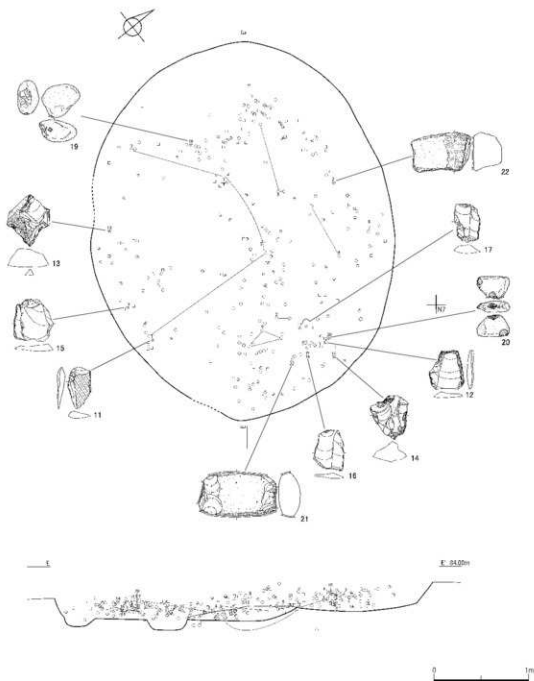


H-2(2)

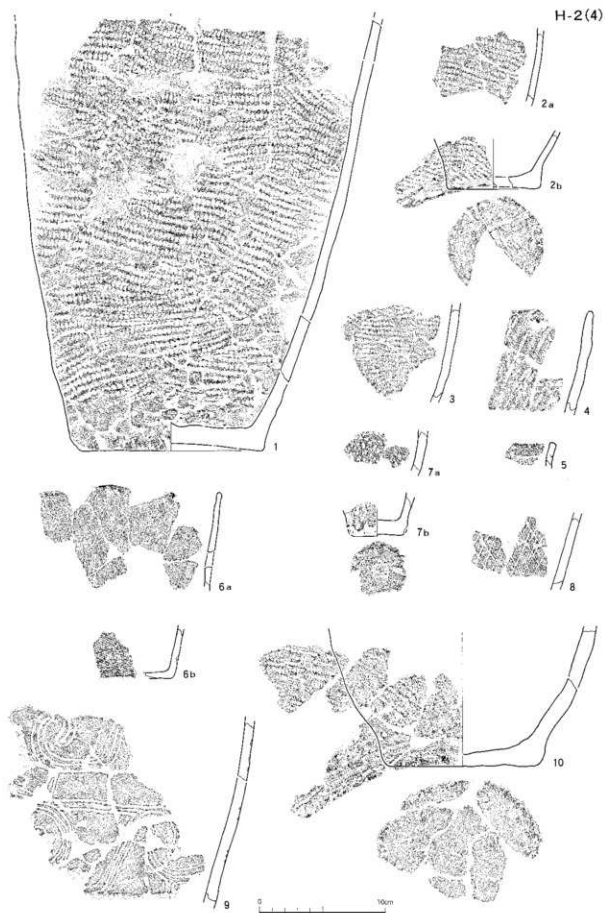


图IV-7 H-2(2)·土器出土状况

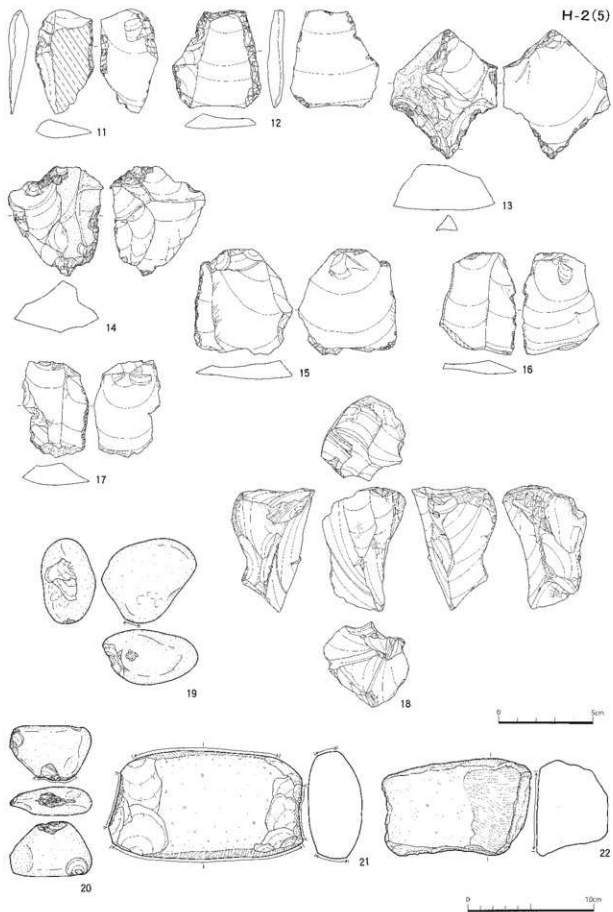
H-2(3)



図IV-8 H-2(3)・石器出土状況



图IV-9 H-2(4)



図IV-10 H-2(5)

が施されているほか、打点付近にも加工がみられる。12は縦長剥片を用い、右側縁に直線的な刃部が作出されるもの。刃部腹面側は使用痕とみられる光沢が顕著である。13、14はRフレイク。13は原石面の残る厚手の剥片を用い、突出部を作出している。石錐の未成品かもしれない。14は節理割れした厚手の剥片に意図の不明瞭な加工がみられる。15～17はJフレイク。いずれも縦長剥片を用い、側縁に微細な剥離痕がある。16、17は原石面が残る。18は石核とした。扁平な原石の端部を取り込んだ剥片を用い、縦長剥片を得ようとしたとみられる。11～18はすべて覆土からの出土である。19はたたき石。「L」字状にいびつな形状の珪岩（アブライト）を用い、端部にわずかな敲打痕が認められる。20は加工痕ある礫。扁平な泥岩の端部が打ち欠かされている。21は扁平打製石器。閃緑岩の扁平礫を用い、両端を打ち欠き長辺に幅広の使用面がある。すり面の最大幅は2.8cmである。22は石皿・台石片。砂岩の被熱礫の一部に使用による平滑な面がある。

3 土坑（P）・陥し穴（TP）

P-1（図IV-11、表IV-2、5、6、図版6、31）

位置 M・N7・8区 規模 $3.04 \times 2.60 / 1.12 \times 1.16 / 1.38\text{m}$

平面形態 いびつな円形

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.8m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を掘り下げていたところ、暗褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みの中心を通るように北西～南東方向にトレンチを設定して暗褐色土を掘り下げた。結果最も深い部分で50cmほどの皿状の断面形を検出した。落ち込みの中心より北西よりの部分がやや深くなっており、南西側の傾斜が緩い部分では焼土も検出された。坑底は褐色土中に炭化物や暗褐色土をブロック状に混じる土であった。浅い落ち込みを完掘後下位の遺構を想定し、トレンチに合わせてさらに掘り下げると、明瞭な褐色土を壁、坑底とする明瞭な断面形を確認した。平面形はいびつな円形、壁は西方向でやや垂直気味になるほかはオーバーハンクしており、坑底は平坦である。明瞭な重複状況が確認できなかったので一連の土坑としたが、検出状況からすると土坑以前に住居が重複していた可能性もある。

覆土 14層に分層した。1層はB-Tmとみられる火山灰。2～5層はレンズ状に堆積する暗褐色～黒色土である。6層は焼土の混じる堆積、7～14層はブロック状の黄褐色土や炭化物が混じる埋め戻しとみられる汚れた土である。なお、覆土13層、坑底から出土した炭化材の放射性炭素年代測定結果は、 $3,680 \pm 30$ 、 $3,650 \pm 30\text{yrBP}$ （IAAA-112584,112585）であった。

遺物出土状況 覆土から、Ⅲ群A類土器1点、Ⅳ群A類土器58点、Ⅴ群土器が4点、フレイク20点、礫片5点、すり石、たたき石が各1点出土している。

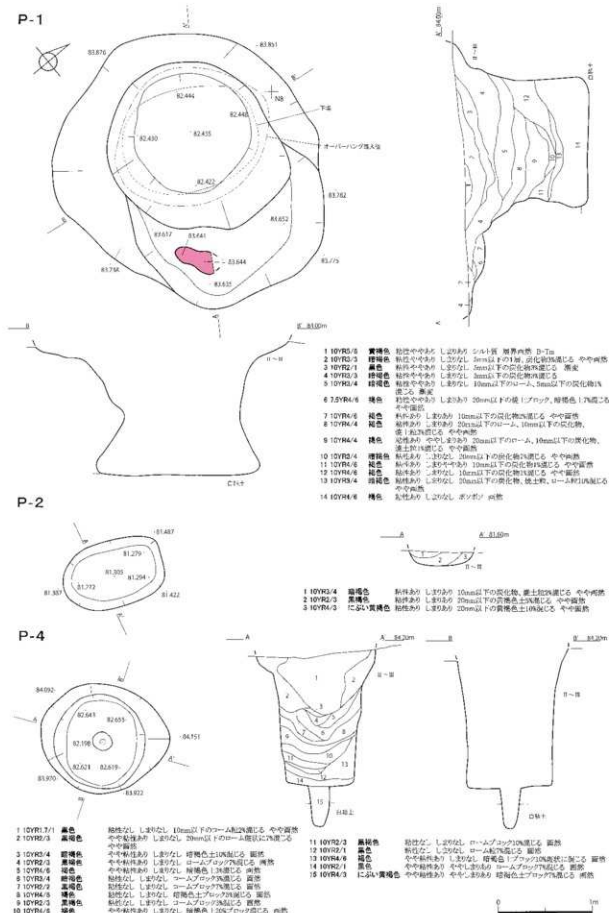
時期 出土遺物、放射性炭素年代結果から、縄文時代後期前葉のものとみられる。

掲載遺物 1はⅢ群A類の底部片。2～6はⅣ群A類である。2、3は口縁部。2は貼付帯がつくもの。3はやや内湾する口縁部。地文はいずれもLR斜行縄文である。4～6は胴部片。4は2条の沈線が器体に平行につけられている。地文はRL斜行縄文。5は胴部下半、6は底部付近である。地文はいずれもLR斜行縄文。6は条が横走するように施文されている。1～6はすべて覆土からの出土である。7はたたき石。デイサイトの円礫の端部にわずかな敲打痕がある。8はすり石。輝石安山岩製。断面形が三角形の礫を用い、二辺を使用面としている。使用面は平滑に磨かれる。

P-2（図IV-11、表IV-2、図版6）

位置 N26区 規模 $1.06 \times 0.70 / 0.90 \times 0.52 / 0.15\text{m}$

平面形態 楕円形



図IV-11 土坑(1)

確認・調査 調査区中央の斜面、標高81.7m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みは楕円形を呈していたため、南側を半載した。結果明瞭な壁、坑底を検出したため土坑とした。平面形は概ね南北方向に長軸のある楕円形を呈する。坑底は概ね平坦、壁はやや急である。

覆土 3層に分層した。全て炭化物、黄褐色土ブロックが混じる埋戻し様の堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、出土遺物と覆土の色調から、縄文時代のもともみられる。

P-4 (図IV-11、表IV-2、図版6)

位置 M8区 **規模** 1.36×1.16/0.72×0.88/1.40m

平面形態 楕円形

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.1m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、黒～黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったため、半載して壁、坑底を確認した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。

覆土 15層に分層した。上位に堆積する1～3層は自然堆積とみられる黒褐色土を基調とするもの。4～14層までは崩落もしくは埋戻しと自然堆積の互層を呈している。15層は坑底で検出した柱穴状のピットの覆土である。暗褐色土がブロック状に混じる黄褐色土で、埋戻し様の堆積である。

特徴 平面形は坑口が楕円形で坑底が隅丸方形の形状を呈する。深さは検出面から1.4m、坑口部分がラップ状にやや開くものの坑底にかけてはほぼ垂直に近く立ち上がる。坑底は平坦で中央には柱穴状のピットが検出された。なお、坑底直上から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は、5,620±30yrBP (IAAA-112586) で、縄文時代前期前半の値を示している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、炭素年代測定結果、周囲の出土遺物からすると、縄文時代前期以前、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

P-5 (図IV-13、19、表IV-2、5、図版6、31)

位置 N9区 **規模** (1.22)×1.07/(0.36)×0.40/0.96m

平面形態 円形(推測)

確認・調査 ミヤノ沢に向かい張り出した台地、標高83.9m付近に位置する。Ⅱ層の包含層調査を行ったところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。土坑であることが想定されたため半載したところ坑底部が隅丸の方形を呈し、開口部に向かい漏斗状に広がる土坑であることを確認した。

覆土 自然堆積によるものと考えられる。

遺物出土状況 6点出土している。内訳は覆土からIV群a類3点、フレイク2点、坑底から礫1点の出土である。

時期 時期を特定できる出土遺物はない。検出した層位と、同一形態を持つ土坑が縄文時代後期と考えられる土坑に切られていることからそれより古い。また遺跡の主体となる時代のものが縄文時代早期中葉であるため、この時期の土坑であることが推測される。

掲載遺物 9は覆土から出土したIV群a類土器。地文はやや条の間隔のあくLR単節縄文である。

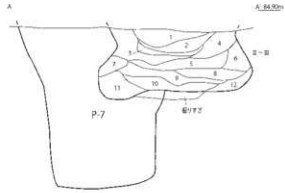
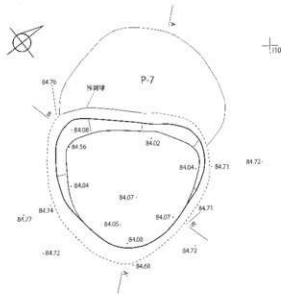
P-6 (図IV-12、19、表IV-2、5、図版6、31)

位置 I9区 **規模** 1.72×1.72/1.42×1.24/0.75m

平面形態 不整な円形

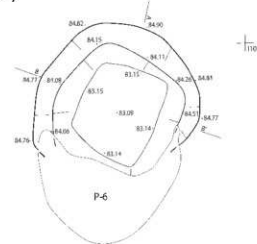
確認・調査 ミヤノ沢に向かい張り出した台地、標高85.0m付近に位置する。Ⅱ層の包含層調査を

P-6

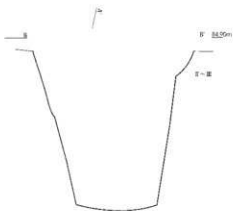


- | | | |
|-------------------|------------|-----------------------|
| 1 7.2VPR4/2 | 灰褐色 | 埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 2 7.2VPR3/2 | 黒褐色 | 埴壇土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 3 7.2VPR4/1 | 褐色 | 埴壇土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 4 7.2VPR3/4 | 暗褐色 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 5 7.2VPR3/2 | 暗褐色 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 8 7.2VPR3/4, 4/2 | 暗褐色と灰褐色の混状 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 7 7.2VPR1/1 | 黒褐色 | 埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 6 7.2VPR3/3 | 暗褐色 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 9 7.2VPR4/4 | 褐色 | 埴土 粘り中 軟 層界明瞭 |
| 10 7.2VPR3/4, 4/4 | 暗褐色と褐色の混状 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 11 7.2VPR3/3, 4/4 | 暗褐色と褐色の混状 | 埴～埴壇土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |
| 12 7.2VPR3/3 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中～強 中～全盛 層界明瞭 |

P-7



- | | | |
|--------------------|-------------|------------------------|
| 1 7.2VPR8/8 | 褐色 | 埴土 粘り強 堅 層界明瞭 |
| 2 7.2VPR1/3/1 | 褐色 | 埴土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 3 7.2VPR3/2 | 黒褐色 | 埴～埴壇土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 4 7.2VPR1/3/1 | 褐色 | 埴土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 5 7.2VPR3/1 | 黒褐色 | 埴土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 6 7.2VPR3/2 | 黒褐色 | 埴土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 7 7.2VPR1/3/1, 5/4 | 褐色とにぶい褐色の混状 | 埴～埴壇土 粘り中 中～全盛 層界明瞭 |
| 8 7.2VPR4/4, 4/1 | 褐色 | 埴壇土 粘り強 中～全盛 層界明瞭 |
| 9 7.2VPR6/6 | 褐色 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 10 7.2VPR6/6 | 褐色 | 埴土 粘り強 中～全盛 層界明瞭 |
| 11 7.2VPR6/6, 4/1 | 埴壇土と褐色の混状 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 12 7.2VPR7/6 | 黒褐色 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 13 7.2VPR7/6 | 黒褐色 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 14 7.2VPR6/6, 4/1 | 埴壇土と褐色の混状 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 15 7.2VPR6/6, 4/1 | 埴壇土と褐色の混状 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 16 7.2VPR7/6 | 黒褐色 | 埴土 粘り強 軟 層界明瞭 |
| 17 7.2VPR4/2 | 灰褐色 | 埴壇土 粘り中 軟～すこぶらじょう 層界明瞭 |
| 18 7.2VPR7/6 | 黒褐色 | 埴土 粘り強 軟～すこぶらじょう 層界明瞭 |
| 19 7.2VPR7/6 | 黒褐色 | 埴土 粘り強 中～全盛 層界明瞭 |



図IV-12 土坑(2)

0 1m

行っていたところ、橙色と灰褐色、黒褐色～暗褐色土を呈する不整形な落ち込みを検出した。土坑が重複した跡か、風倒木痕か想定されたため、落ち込みの長軸とそれに直交する短軸の土層観察用のベルトを設定、掘り下げて行った。調査の結果、断面が漏斗状を呈する土坑にフラスコ状土坑が切って構築してある、重複した土坑跡と確認した。新しいフラスコ状土坑の方をP-6とした。

覆 土 自然堆積によるものと考えられる。

遺物出土状況 6点出土している。内訳は覆土からIV群a類2点、フレイク3点、礫1点である。

時 期 時期を特定できる出土遺物はない。検出した層位と、同一形態を持つ土坑から縄文時代後期前葉と判断する。

掲 載 遺 物 10は覆土とN9区II層から出土したものが接合した。IV群a類の胴部片である。薄手で地文はLR斜行縄文である。

P-7 (図IV-12、表IV-2、図版6)

位 置 H・I9区 **規 模** (1.55)×1.42/(0.98)×0.80/1.68m

平 面 形 態 円形(推測)

確認・調査 ミヤノ沢に向かい張り出した台地上、標高85.0m付近に位置する。P-6の調査で、重複した古い方をP-7とした。開口部の平面は円形とみられ、坑底は四角で開口部より狭く、断面の形態は漏斗状となっていた。

覆 土 1～8層まで自然堆積によるものと考えられる。9層～18層までローム質土が主体で埋戻しと考えられ、19層は粘質の強いローム質土のみで埋め戻されている。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 時期を特定できる出土遺物はない。検出した層位と、縄文時代後期と考えられるフラスコ状土坑に切られていることからそれより古い。また、同様な形態の土坑が縄文時代早期中葉と考えられるため、この時期の土坑であることが推測される。

P-8 (図IV-13、表IV-2、図版7)

位 置 H8・9区 **規 模** 1.30×1.32/1.54×1.32/0.88m

平 面 形 態 円形(推測)

確認・調査 ミヤノ沢に向かい張り出した台地上、標高85.0m付近に位置する。黄褐色を呈するII層の包含層調査を行っていたところ、にぶい褐色～灰褐色土の落ち込みを確認した。土坑であることが想定されたため、半載したところ坑口部より坑底が広く、オーバーハングする壁面を検出しフラスコ状土坑であることを認定した。

覆 土 褐色土を主体とした混濁した埴～埴壤土からなり、埋戻しによるものと考えられる。

遺物出土状況 覆土中からIV群a類が1点出土した。

時 期 時期を特定できる遺物はない。周辺の遺構、遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。

P-9 (図IV-13、19、表IV-2、5、図版7、31)

位 置 I・J14区 **規 模** 1.49×0.94/1.04×0.66/0.17m

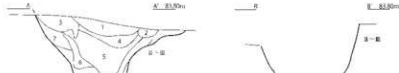
平 面 形 態 楕円形

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.2m付近に位置する。II層を調査していたところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。半載して明瞭な壁、坑底を確認した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形は楕円形、坑底は緩やかな凹凸がある。

覆 土 2層に分層した。わずかに褐色土を混じる自然堆積とみられるものである。

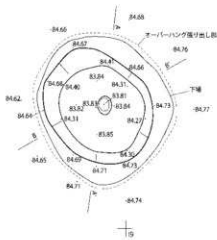
遺物出土状況 覆土からIV群a類土器1点、フレイク1点が出土している。

P-5



- | | | | |
|-----------------|------------|--------------|------|
| 1 7.5YR3/1 | 黒褐色 | 埴土 粘り中 中~強 | 層界明確 |
| 2 7.5YR2/1 | 黒褐色 | 埴土 粘り中 中~強 | 層界明確 |
| 3 7.5YR2/3 | 暗褐色 | 埴土 粘り中 中~強 | 層界不明 |
| 4 7.5YR5/8, 4/1 | 暗褐色と黄褐色の混状 | 埴土 粘り中~強 | 層界不明 |
| 5 7.5YR5/9 | 暗褐色 | 埴土 粘り強 中~上 | 層界不明 |
| 6 7.5YR2/1 | 黒褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界明確 |
| 7 7.5YR5/3 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界明確 |
| 8 7.5YR2/4 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 9 7.5YR2/3 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中~強 | 層界不明 |
| 10 7.5YR2/3 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中~強 | 層界不明 |

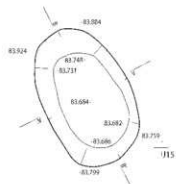
P-8



- | | | | |
|-----------------|--------------|--------------|------|
| 1 7.5YR5/4 | にぶい褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 2 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 3 7.5YR4/3 | 褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 4 7.5YR5/9 | 暗褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 5 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 6 7.5YR5/8, 5/4 | 暗褐色とにぶい褐色の混状 | 埴土 粘り中~強 中~強 | 層界不明 |
| 7 7.5YR4/4 | 褐色 | 埴土 粘り中~強 | 層界不明 |

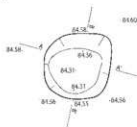


P-9



- | | | | |
|-----------|-----|----------|-----------------|
| 1 10YR2/3 | 黒褐色 | 粘性なし 中~上 | 10cm以下の層→入水層に区別 |
| 2 10YR2/4 | 暗褐色 | 粘性なし 中~上 | 10cm以下の層→入水層に区別 |

P-10



- | | | | |
|------------|-----|------------|------|
| 1 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 埴土 粘り強 中~強 | 層界不明 |
|------------|-----|------------|------|

0 1m

図IV-13 土坑(3)

時 期 不明であるが、出土遺物、土層堆積状況から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

褐 載 遺 物 11a、bはIV群a類。11aは覆土から、11bはN9区のII層から出土している。接合しないが同一個体とみられる。口縁に沿って2条の貼付帯がつけられ文様帯が区画されている。2条の貼付帯を縦断する斜位の短い貼付帯がくわえられている。地文は燃糸文であり、同一の原体が貼付帯上に押捺されている。

P-10 (図IV-13、表IV-2、図版7)

位 置 J8区 **規 模** 0.70×0.70/0.53×0.48/0.24m

平 面 形 態 やや不整な円形

確認・調査 ミヤノ沢に向かい張り出した台地、標高84.7m付近に位置する。II層の包含層調査を行っていたところ、褐灰色土の落ち込みを確認した。土坑であることが想定されたため、半載したところ平坦な坑底と急で明瞭な壁の立ち上がりを検出し土坑と認定した。

覆 土 褐灰色土の単層である。

遺物出土状況 覆土中から礫が1点出土した。

時 期 時期を特定できる遺物の出土はない。周辺の遺構、遺物から縄文時代早期中葉～後期前葉のあいだと思われる。

P-13 (図IV-14、表IV-2、図版7)

位 置 F20区 **規 模** 1.76×1.70/0.90×0.62/1.20m

平 面 形 態 楕円形

確認・調査 調査区北西側の斜面、標高84.2m付近に位置する。遺構確認作業中、黒色土の落ち込みを確認した。北西-南東方向にトレンチを設定して50cm掘り下げても坑底に達しなかった。深いフラスコビットを想定し、坑口の記録を作成した後、トレンチに合わせて方形に掘削した。その結果隅丸方形を呈する明瞭な落ち込みを確認することができた。さらに方形の軸に合わせて半載した。結果明瞭な坑底を確認した。平面形は坑口面で楕円形、坑底では隅丸方形を呈する。

覆 土 12層に分層した。レンズ状に堆積する1、2層はIIa層相当の自然堆積である。3層から坑底直上の11層に至るまでの堆積は、崩落と自然堆積を繰り返していたような様相を呈している。12層は坑底で検出された柱穴状のビットの堆積である。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 不明であるが、P-4、P-7等との形態の類似から、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

P-14 (図IV-14、表IV-2、図版7)

位 置 M12区 **規 模** 0.90×0.86/0.56×0.58/0.21m

平 面 形 態 ほぼ円形

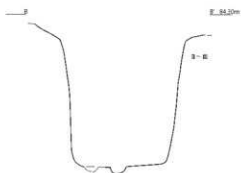
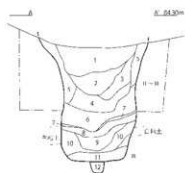
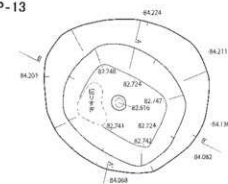
確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84m付近に位置する。II～III層を掘り下げていたところ、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは不明瞭であったため概ね南北方向にトレンチを設定して溝状に掘り下げた。その結果碗状を呈する断面形を確認した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形はほぼ円形、坑底は丸く碗状を呈する。

覆 土 ローム粒子の混じる暗褐色土の単層である。

遺物出土状況 覆土からIV群a類土器が1点、フレイクが2点出土している。

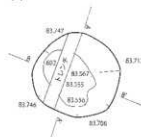
時 期 不明であるが、覆土および周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉のものである

P-13



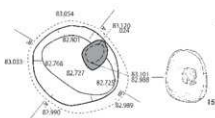
- | | | |
|-------------|-----|---|
| 1 10PR1-3/1 | 黒色 | やや粘りあり、しまりなし、自然堆積土層、やや固結 |
| 2 10PR2-2 | 黒褐色 | 粘りなし、しまりなし、10cm以下のローム状になる、やや固結 |
| 3 10PR3-2 | 黒褐色 | 粘りなし、ややしまりあり、10cm以下のローム状になる、やや固結 |
| 4 10PR2-2 | 黒褐色 | 粘りなし、しまりなきなし、ボツボツ、20cm以下のローム、炭化層に属する、黒炭 |
| 5 10PR3-4 | 暗褐色 | 粘りなし、ややしまりあり、20cm以下のロームと炭が19%ある、やや固結 |
| 6 10PR3-4 | 暗褐色 | 粘りなし、しまりなきなし、ボツボツ、炭褐色土、平均炭素土19%、やや固結 |
| 7 10PR2-2 | 黒褐色 | やや粘りあり、しまりなし、10cm以下のローム状になる、やや固結 |
| 8 10PR2-2 | 黒褐色 | 粘りなし、しまりなし、10cm以下のローム状になる、やや固結 |
| 9 10PR3-2 | 暗褐色 | 粘りなし、しまりなきなし、ボツボツ、10cm以下のローム状になる、やや固結 |
| 10 10PR4-6 | 褐色 | やや粘りあり、しまりなきあり、20cm以下の暗褐色土状になる、やや固結 |
| 11 10PR4-6 | 暗褐色 | やや粘りあり、しまりなきあり、20cm以下の暗褐色土状になる、やや固結 |
| 12 10PR4-4 | 褐色 | やや粘りあり、しまりなきなし、20cm以下の暗褐色土状になる、固結 |

P-14



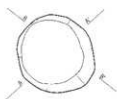
- | | | |
|-----------|-----|--|
| 1 10PR3-4 | 暗褐色 | 粘りなし、しまり中なり、10cm以下のローム状、3cm以下の炭化物に属する、黒炭層状 |
|-----------|-----|--|

P-15



- | | | |
|-----------|-----|-----------------------------------|
| 1 10PR3-3 | 黒褐色 | 粘りなし、しまりなし、5cm以下のローム、炭化層に属する、やや固結 |
| 2 10PR3-4 | 暗褐色 | 粘りなし、ややしまりあり、5cm以下のローム状になる、固結 |

P-16



- | | | |
|-----------|-----|--------------------------------------|
| 1 10PR3-4 | 暗褐色 | 粘りなし、ややしまりあり、5cm以下のローム状、炭化層に属する、やや固結 |
|-----------|-----|--------------------------------------|

0 1m

図IV-14 土坑(4)

可能性が高い。

P-15 (図IV-14、19、表IV-2、5、6、図版7、31)

位 置 P11区 規 模 0.94×0.82/0.84×0.50/0.32m

平 面 形 態 ほぼ円形

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.3m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。中心を通るように西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形はややいびつな円形。壁は坑口よりやや膨らむフラスコ状を呈する。坑底はほぼ平坦である。

覆 土 2層に分層した。ローム粒、炭化物が少量混じる黒褐色～暗褐色土である。

遺物出土状況 覆土からIV群a類土器29点、フレイク18点、たたき石、石鏝、石皿、礫が各1点ずつ出土している。

時 期 覆土および周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 12は覆土から出土したIV群a類の口縁部片である。13は石鏝。白濁した半透明の珪化岩を石材とする。丁寧な細部調整が両面に施され基部が作出されている。14はたたき石。サツマイモ状の礫の端部近くに弱い敲打痕が認められる。15は石皿・台石。円磨した礫の平坦面を利用し、使用面とするもの。角閃石安山岩製。

P-16 (図IV-14、表IV-2、図版8)

位 置 O12区 規 模 0.86×0.80/0.70×0.64/0.26m

平 面 形 態 ほぼ円形

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査していたところ、暗褐色土の落ち込みを確認した。西側を半截したところ明瞭な壁、坑底を確認した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形はほぼ円形、坑底はほぼ平坦で壁は急激に立ち上がる。

覆 土 ローム粒子、炭化物が少量混じる暗褐色土の単層である。

遺物出土状況 覆土から、IV群a類土器4点、フレイク2点が出土している。

時 期 覆土、周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

P-17 (図IV-15、表IV-2、図版8)

位 置 J18区 規 模 1.39×1.16/0.78×0.52/0.80m

平 面 形 態 楕円形

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高83.2m付近に位置する。Ⅱ層を調査中、黒色～黒褐色土の落ち込みを確認した。土坑であることが想定されたため半截したところ平坦な坑底と急で明瞭な壁の立ち上がりを検出したため土坑と認定した。平面形は、検出面が楕円形、坑底は隅丸方形で検出面より狭く、断面形は漏斗状を呈する。

覆 土 自然堆積によるものと考えられる。

遺物出土状況 覆土中よりフレイクが3点出土している。

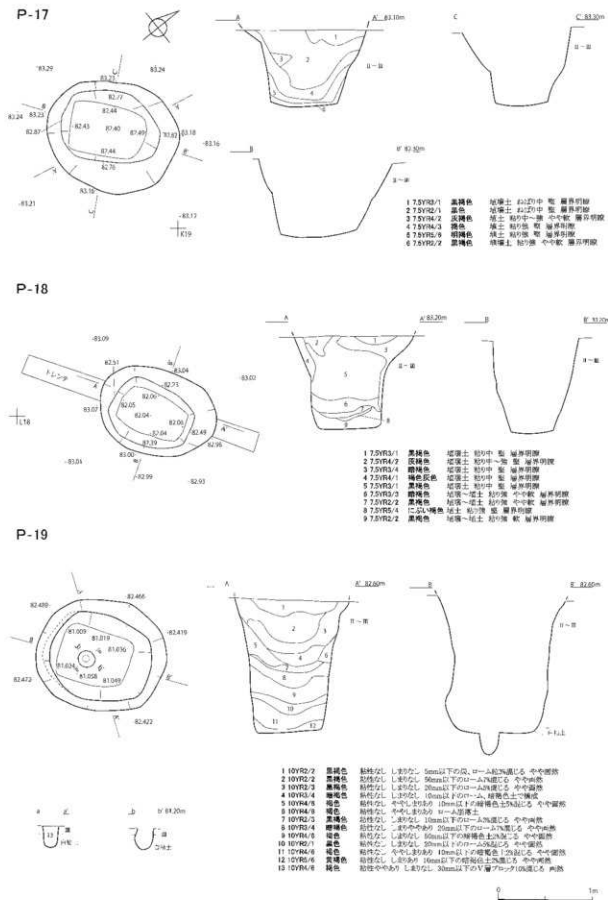
時 期 時期を特定できる出土遺物はない。周辺の遺物から縄文時代早期中葉と思われる。

P-18 (図IV-15、表IV-2、図版8)

位 置 K・L18区 規 模 1.26×0.90/0.72×0.44/0.98m

平 面 形 態 楕円形

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高83.0m付近に位置する。Ⅱ層の包含層



図IV-15 土坑(5)

調査を行っていたところ黒褐色土の落ち込みを確認した。土坑であることが想定されたため半截したところ、平坦な坑底と急で明瞭な壁の立ち上がりを検出し土坑と認定した。平面形は、検出面が楕円形、坑底は角の丸い四角形で検出面より狭く、断面形は漏斗状を呈する。

覆 土 自然堆積によるものと考えられる。

遺物出土状況 覆土中よりフレイク 1点、礫 2点の合計 3点が出土した。

時 期 時期を特定できる出土遺物はない。周辺の遺物から縄文時代早期中葉と思われる。

P-19 (図IV-15、20、表IV-2、5、図版 8、31)

位 置 P16区 **規 模** 1.34×1.18/0.64×0.56/1.40m

確認・調査 調査区東側に向かって低くなる沢状地形、標高82.4m付近に位置する。Ⅱ層を遺構確認調査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは明瞭であったため、短軸に合わせて南側を半截した。結果明瞭な壁、坑底を確認し、土坑であることがわかった。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形は坑口で楕円形、坑底で隅丸方形を呈する。壁は坑口付近でラッパ状に開き、中下半では南西側でややオーバーハングするが、ほぼ垂直に近い。

覆 土 13層に分層した。上位に堆積する 1～3層までは、ローム粒子が若干混じるが自然堆積とみられる。4層以下12層までは崩落土と開口時の自然堆積が繰り返されている様相を呈している。13層は坑底で検出された柱穴状ビットの堆積である。

遺物出土状況 覆土から、IV群 a 類土器が 1点出土している。

時 期 P-4、P-7、P-13との形態の類似から、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

掲載遺物 16は覆土から出土したIV群 a 類土器。3本一組の沈線により文様が描かれる小形の土器である。

P-20 (図IV-16、表IV-2、図版 8)

位 置 O16区 **規 模** 0.65×0.65/0.48×0.42/0.18m

平面形態 ほぼ円形

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高82.6m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの西側を半截したところ、明瞭な壁、坑底を確認したため土坑とした。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形はいびつな円形。壁は西側でやや緩やかなほかは急激に立ち上がる。

覆 土 2層に分層した。ローム粒子、炭化物が若干混じる黒褐色、暗褐色土である。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

P-21 (図IV-16、表IV-2、図版 8)

位 置 O17区 **規 模** 0.53×0.51/0.39×0.38/0.12m

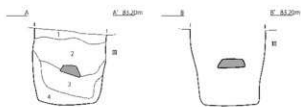
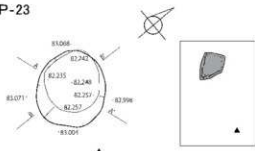
平面形態 ほぼ円形

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高82.3m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、炭化物の混じる褐色土の落ち込みを確認した。半截すると明瞭な壁、坑底を確認したため土坑とした。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形はほぼ円形、坑底は平坦で壁はやや急である。

覆 土 炭化物の混じる褐色土の単層である。

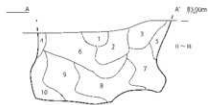
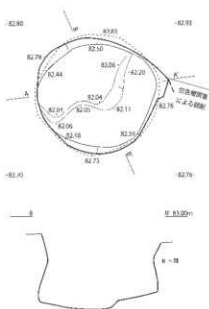
遺物出土状況 出土していない。

P-23



- 1 18YR2/3 暗褐色 赤化なし ややしまりあり 3mm以下の炭化物、ローム粒が混じる やや内側
 2 10YR2/3 黒褐色 赤化なし しまりなし 10mm以下のローム、炭化物が混じる やや内側
 3 18YR3/3 暗褐色 赤化なし しまりなし 30mm以下のロームが混じる やや内側
 4 18YR3/4 暗褐色 赤化なし しまりなし 30mm以下のロームが混じる 炭化

P-25



- 1 7.5YR4/1 黄褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 2 7.5YR5/4 に近い褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 3 7.5YR5/1 黄褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 4 7.5YR5/6 暗褐色 壤土 粘り強 凝 層界明確
 5 7.5YR5/6 暗褐色 壤土 粘り強 凝 層界明確
 6 7.5YR4/2 灰褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確 炭化物が0.5cm以下混じる
 7 7.5YR4/6 褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 8 7.5YR4/1 黄褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 9 7.5YR4/3 褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確
 10 7.5YR4/1 黄褐色 壤土 粘り中 凝 層界明確

図IV-17 土坑(7)

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

P-22 (図IV-16、20、表IV-2、5、6、図版9、31、32)

位置 O6区 規模 $(1.56) \times 1.19 / (1.36) \times 1.26 / 0.98\text{m}$

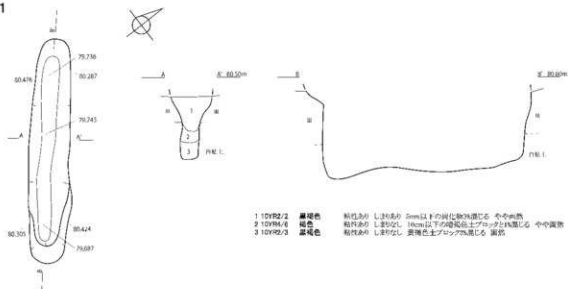
平面形態 円形(推測)

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.0m付近に位置する。黄褐色を呈するII層の調査を行っていたところ黒褐色〜にぶい褐色土の落ち込みを確認した。半截したところ覆土中に礫が出土、坑底面は広く、オーバーハングして立ち上がる壁面を検出し、フラスコ状土坑と認定した。

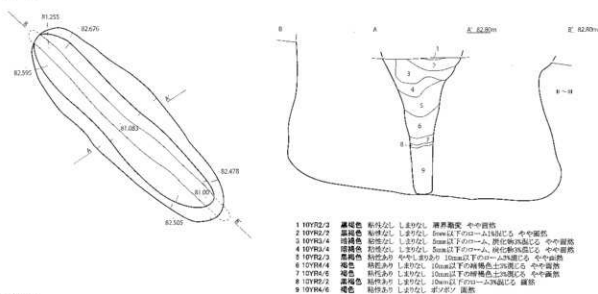
覆土 1～3、5、6層は自然堆積、4、7層は埋戻しによるもの、8～14層は壁面崩落によるものと考えられる。4～7層から大型の礫が10点出土した。覆土7層とした、大型礫を検出した層位から得られた炭化物で放射性炭素年代測定(AMS)を行ったところ3,630±20yrBP (IAAA-12 2282)という結果が得られた。調査による年代観と一致する。

遺物出土状況 覆土中より57点、坑底から1点、合計58点出土した。内訳は土器がIV群a類27点、I群a類6点、フレイク類15点、礫石器・礫類10点である。

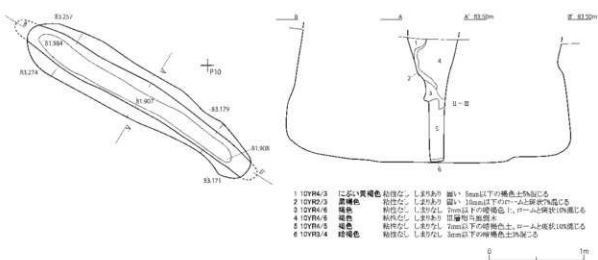
TP-1



TP-2



TP-3



図IV-18 Tピット

時 期 周辺の遺構・遺物と、埋戻しの覆土からIV群a類土器が出土していることから、縄文時代後期前葉と判断する。

掲 載 遺 物 17はI群a類土器。覆土とO6区のII層との接合資料である。無文の胴部上半部。文様あるいは調整か明らかではないが、口縁下に平行な短い沈線がある。18は覆土出土のIV群a類土器。19はRフレイクとしたもの。棒状礫の端部の剥片から、2枚の剥離を行っている。石核とすべきかもしれない。20はたたき石。棒状のデイスサイトの端部に弱い敲打痕が認められる。21は石皿・台石。輝石安山岩礫の平坦面に不明瞭な使用面がある。

P-23 (図IV-17、表IV-2、図版9)

位 置 I39区 **規 模** 0.80×0.74/0.60×0.54/0.78m

平 面 形 態 ほぼ円形

確 認 ・ 調 査 調査区北部の平坦面、標高83.2m付近に位置する。III層上面を精査中、暗褐色土の不明瞭な落ち込みを確認した。落ち込みの中心を通るよう概ね東西方向にトレンチを入れ、暗褐色土を掘り下げた。検出面から50cmほどで落ち込みの中心に礫が出土し、明瞭な壁を確認したため壁を確認しながら南側を半載した。深さ90cmの円筒形の土坑であることが分かった。記録を作成したのち遺物を取り上げて完掘した。平面形は坑口、坑底ともに円形を呈する。壁は直立するが中央がわずかに膨らむ。

覆 土 4層に分層した。坑底から50cmまでの下位に堆積する2層は、ローム質土のブロックが混じる暗褐色土であり、埋戻しとみられるものである。この2層の上には被熱した扁平な礫が置かれており、上位には2層とした自然堆積とみられる黒褐色土が堆積している。さらに上位には他遺構からのものと想定される炭化物を混じる堆積が認められる。

遺物出土状況 覆土から出土した礫は、14.8kg、輝石安山岩である。そのほか覆土から、I群a類土器1点、フレイク1点が出土している。

時 期 周囲で多く出土している、縄文時代早期中葉の時期のものともみられる。

P-25 (図IV-17、21、表IV-2、5、図版9、31)

位 置 P・Q6区 **規 模** (1.40)×1.24/(1.26)×1.08/(0.76)m

平 面 形 態 円形(推測)

確 認 ・ 調 査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高82.7m付近に位置する。II層の包含層調査を行っていたところ褐色土の落ち込みを確認した。半載したところ、坑底面は広く、やや段差が生じているが、オーバーハンクして立ち上がる壁面を検出し、プラスチック土坑と認定した。

覆 土 褐色土を主体とした混濁した土で、埋戻しによるものと考えられる。

遺物出土状況 61点出土している。内訳は坑底からIV群a類土器9点、覆土中よりIV群a類土器37点、フレイク9点、焼成粘土塊5点、礫片1点である。

掲 載 遺 物 22~25はIV群a類土器。22は口縁部。23、24は胴部。25は底部付近の破片である。出土層位は24が坑底。そのほかは覆土から出土したものである。

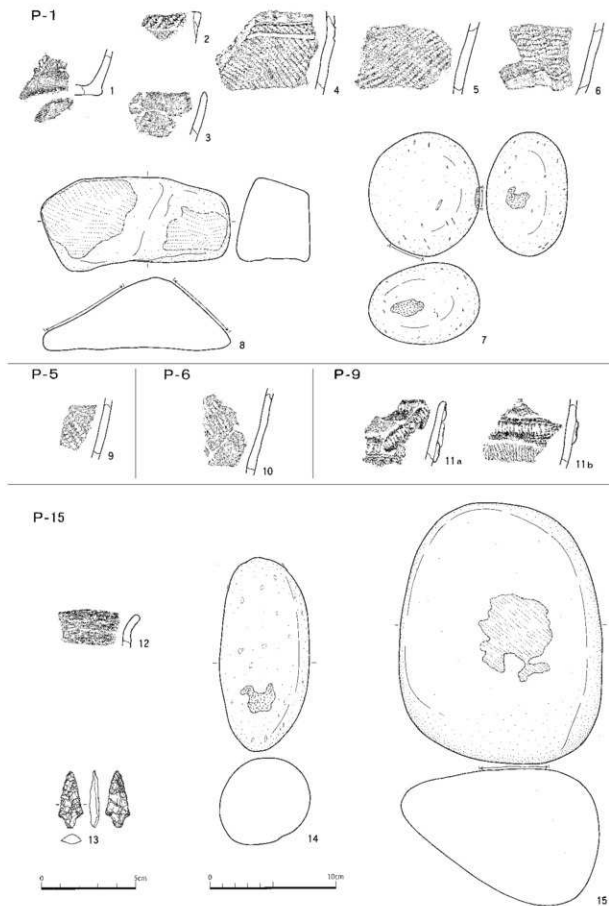
時 期 出土遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

TP-1 (図IV-18、表IV-2、図版9)

位 置 Q・R25区 **規 模** 2.36×0.46/1.95×0.14/0.66m

平 面 形 態 長楕円形

確 認 ・ 調 査 調査区東部、沢底の平坦面、標高80.6m付近に位置する。III層上面で遺構確認していたところ、黒褐色土の落ち込みを確認した。短軸に合わせて半載すると、明瞭な壁、坑底を確認した。

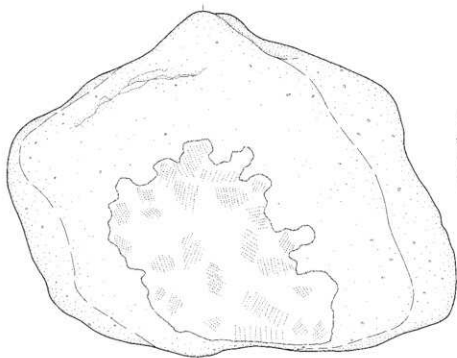
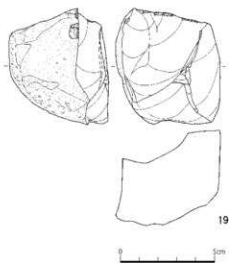
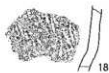


図IV-19 土坑出土の遺物(1)

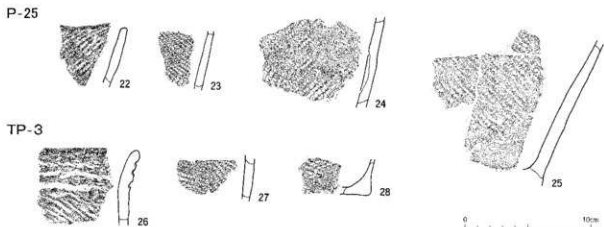
P-19



P-22



図IV-20 土坑出土の遺物(2)



図IV-21 土坑出土の遺物(3)

やや浅いものであるが、明瞭な坑底と溝状の平面形を重視しTピットと判断した。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形は長楕円形。坑底は概ね平坦であるが、南東側の先端がややくぼんでいる。

覆 土 3層に分層した。上位に堆積する黒褐色土1層と、下位の褐色土と黒褐色土の2層の堆積に分けられる。上位は自然堆積、下位は崩落の影響によるとみられるブロック状の混入土を混じる。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 不明であるが、形態および出土遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

TP-2 (図IV-18、表IV-2、図版9)

位 置 Q10区 **規 模** 2.66×0.82/2.90×0.14/1.42m

平面形態 長楕円形

確認・調査 調査区南側、ミヤノの沢に面した台地の先端、標高82.7m付近に位置する。II～III層を調査中、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの形状は細長い楕円形であったため、Tピットを想定して短軸上東側を半載した。その結果明瞭な壁、坑底を確認したのでTピットとした。記録を作成したのち完掘して調査を終了した。平面形は長楕円形。坑底は斜面に平行になるよう傾斜している。壁は長軸両端でややオーバーハンクしている。

覆 土 9層に分層した。2～4層はローム粒子が少量混じるが自然堆積とみられる。5～7層は褐色土に暗褐色土が混じる人為的な埋戻しの可能性のある堆積である。8層は自然堆積、9層は崩落によるものとみられる。

遺物出土状況 覆土から、IV群a類土器1点、フレイク2点が出土している。

時 期 不明であるが、形態および出土遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

TP-3 (図IV-18、21、表IV-2、5、図版9、31)

位 置 O・P9・10区 **規 模** 2.74×0.54/3.02×0.14/1.30m

平面形態 長楕円形

確認・調査 調査区南側、ミヤノの沢に面した台地の先端、標高83.3m付近に位置する。II～III層を調査中、黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込みは細長い楕円形を呈していたため、Tピットを想定して短軸に合わせて南西側を半載した。

覆 土 6層に分層した。4層は周囲の風倒木によるⅢ層相当の褐色土である。1～3層はその影響を受けているとみられる。5層は崩落土、6層は開口時の自然堆積層とみられる。

遺物出土状況 覆土から、IV群a類土器15点、フレイク、礫が各2点出土している。

時 期 不明であるが、形態、覆土と周囲の出土遺物から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。

掲載遺物 26～28はIV群a類土器。26は口縁部。やや外反する口縁下に縄線が3条つけられている。27は胴部。地文はLR斜行縄文である。28は底部。26～28はすべて覆土出土である。

4 柱穴状小土坑 (SP) (図IV-22～24、表IV-1、図版10～12、31、32)

概 要 土坑のうち規模が小さく柱穴状を呈するものをまとめた。厳密ではないが平面形の直径が概ね30cm以下になるものである。検出された15基の柱穴状小土坑の分布は調査区南西側に限られ、その中でもさらに2か所に分かれている。多く集中するのは、調査区東側の沢に向かう斜面である。SP-2、4～11、15の11基がこれにあたり、標高83.0～84.0mの間で検出されている。一方SP-1、3、13、14の4基は台地からミヤノ沢に向かう緩斜面で検出されている。

上屋構造を暗示する明確な配列はみられないが、SP-4と5、7と8、6と9は土坑の断面形態などの形状、またSP-6と9にあっては礫が覆土中から出土するといった特徴が似ており、お互い対を成すものである可能性がある。

これらの小土坑の時期は、検出範囲内で多く出土している縄文時代後期前葉のものが多くを占めるとみられる。当該期は住居造成に伴う人為堆積層に伴い、配列を示しがたい柱穴状小土坑がよくみられる時期であるため、本遺跡例も一つの類例である可能性は高い。ただしSP-7の覆土中からはV群土器の小片が出土している。混入かもしれないが縄文時代晩期に属する可能性も注意しておきたい。

それぞれ覆土等の特徴については以下の表IV-1にまとめた。

掲載遺物 1はSP-9覆土出土の石皿。丸みを帯びた安山岩礫の表面に使用面がある。使用面は平滑である。2はSP-13覆土出土のIV群a類土器。口唇に縄線が1条つく口縁部である。3はSP-13覆土出土のたたき石。扁平な輝石安山岩の側縁の一部に敲打痕がある。4はSP-14覆土出土のたたき石。扁平礫の周縁と正面に敲打痕が認められる。5はSP-15覆土出土のIV群a類土器。地文はLR斜行縄文である。

表IV-1 柱穴状小土坑一覧

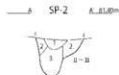
遺構名	グリッド	規模	推定時期	出土遺物(全て覆土出土)	立地	標高(m)	土層、その他特徴
SP1	L7	0.26×0.22/0.14×0.15/0.12	縄文時代後期前葉	土: IV a × 1	南西側台地上	84.2	炭化物混じる暗褐色土単層
SP2	Q20	0.48×0.46/0.16×0.18/0.38	縄文時代後期前葉?	なし	南西側東向緩斜面	81.5	暗褐色～黒褐色・埋戻し
SP3	L9	0.32×0.30/0.15×0.18/0.21	縄文時代後期前葉	土: IV a × 2	南西側台地上	84.3	炭化物混じる黒褐色土単層
SP4	M14	0.23×0.22/0.10×0.10/0.56	縄文時代後期前葉	なし	南西側東向緩斜面	83.4	炭化物混じる暗褐色、褐色
SP5	M14	0.33×0.28/0.18×0.17/0.06	縄文時代後期前葉	なし	南西側東向緩斜面	83.5	暗褐色～黒褐色・埋戻し
SP6	N12	0.22×0.16/0.08×0.07/0.22	縄文時代後期前葉	礫×1 (Da)	南西側東向緩斜面	83.6	炭化物混じる褐色土単層
SP7	M14	(0.22)×0.22/0.06×0.06/0.52	縄文時代	土: V × 1	南西側東向緩斜面	83.4	暗褐色土・埋戻し
SP8	M14	(0.25)×0.28/0.08×0.08/0.52	縄文時代後期前葉	なし	南西側東向緩斜面	83.3	炭化物混じる暗褐色土単層
SP9	N11・12	(0.26)×0.26/0.16×0.12/0.22	縄文時代後期前葉	石皿・台石×1	南西側東向緩斜面	83.9	ローム、炭化物混じる褐色土単層
SP10	O13	0.26×0.30/0.08×0.08/0.24	縄文時代後期前葉	土: IV a × 2	南西側東向緩斜面	83.3	ローム、炭化物混じる黒褐色土単層
SP11	O13	0.48×0.04/0.28×0.24/0.18	縄文時代後期前葉	土: I a × 1, IV a × 1	南西側東向緩斜面	83.4	炭化物混じる暗褐色～褐色土
SP12	O13	0.32×0.30/0.06×0.06/0.16	縄文時代後期前葉	礫×1、フレイク×1	南西側東向緩斜面	83.4	炭化物混じる褐色土単層
SP13	M5	(0.30)×0.26/-×-/0.32	縄文時代後期前葉	たたき石×1、土: IV a × 1	南西側台地上	83.6	炭化物混じる灰褐色土単層
SP14	O6	(0.08)×0.02/(0.04)×0.12/0.10	縄文時代後期前葉	たたき石×1	南西側台地上	83.5	褐色土単層・層界明確
SP15	O13	0.30×0.24/0.08×0.08/0.33	縄文時代後期前葉	土: IV a × 2	南西側東向緩斜面	83.2	炭化物混じる黒褐色土単層

SP-1



SP-1 1 10YR3/2 暗褐色 粘土や中砂り しまりなし。5cm以下の炭化物が散らばる 遺構断片

SP-2



SP-3



SP-2 1 7.5YR3/4 暗褐色 粘土あり しまりあり 5cm以下の炭化物が散らばる 中々硬軟
 2 10YR3/4 暗褐色 粘土あり 中々しまりあり 20cm以下の炭化物「」層状に3%散らばる 中々硬軟
 3 10YR2/3 黒褐色 粘土なし しまりなし 砂りとした土 硬軟

SP-3 1 10YR2/3 黒褐色 粘土なし 中々しまりあり 5cm以下の炭化物、積土質、ロームブロック状散らばる

SP-4
SP-5
SP-7
SP-8

A-A SP-4 A. 83.20m



A-A SP-5 A. 83.20m



A-A SP-7 A. 83.50m



A-A SP-8 A. 83.20m

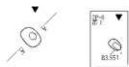


SP-4 1 10YR3/4 暗褐色 粘土なし しまりなし 5cm以下の炭化物、ローム7%散らばる 硬軟
 2 10YR4/4 褐色 粘土なし しまりなし 5cm以下の炭化物、ローム7%散らばる 硬軟
 SP-5 1 10YR3/4 暗褐色 粘土なし 中々しまりあり 10cm以下の炭化物、ローム7%散らばる
 2 10YR3/4 暗褐色 粘土なし 中々しまりあり 10cm以下の炭化物、ローム7%散らばる 硬軟
 3 10YR2/3 黒褐色 粘土なし しまりあり 20cm以下のローム7%散らばる 硬軟
 4 10YR3/3 暗褐色 粘土なし しまりなし 20cm以下のローム7%散らばる 硬軟
 5 10YR2/2 暗褐色 粘土なし しまりなし 20cm以下のローム7%散らばる 硬軟
 SP-7 1 10YR3/4 暗褐色 粘土なし しまりなし 10cm以下のローム、炭化物が散らばる
 2 10YR3/4 暗褐色 粘土なし しまりなし 10cm以下のローム、炭化物が散らばる 硬軟
 SP-8 1 10YR3/4 暗褐色 粘土なし しまりなし 10cm以下のローム、炭化物が散らばる



図IV-22 柱状小土坑(SP) (1)

SP-6

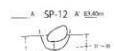
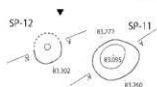


SP-9



SP-6 1 10YR4/4 褐色 粘状なし、ややしずみあり、20mm以下のローム、5mm以下の炭化物が混入。やや固結
 SP-9 1 10YR2/3 黒褐色 粘状なし、しずみなし、10mm以下のローム混入、炭化物が混入。固結

SP-10 SP-11
 SP-12 SP-15

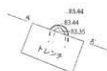


SP-10 1 10YR2/3 黒褐色 粘状なし、しずみなし、10mm以下のローム混入、炭化物が混入。固結
 SP-11 1 10YR3/4 暗褐色 粘状なし、ややしずみあり、20mm以下の炭化物、粘土粒、ロームが混入。やや固結
 2 10YR4/6 褐色 粘状なし、ややしずみあり、5mm以下の炭化物が混入。やや固結
 SP-12 1 10YR4/6 褐色 粘状なし、ややしずみあり、5mm以下の炭化物が混入。やや固結
 SP-15 1 10YR2/3 黒褐色 粘状なし、しずみなし、10mm以下のローム混入、炭化物が混入。固結

SP-13



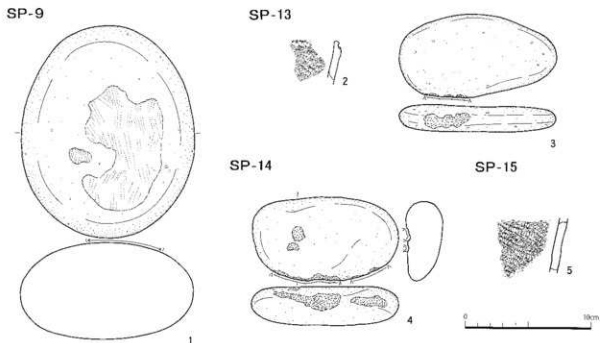
SP-14



SP-13 1 7.5YR4/2 淡褐色 硬質土、粘り中、やや固結、層状可辨、炭化物が混入
 SP-14 1 7.5YR5/1 褐色 硬質土、粘り中、やや固結、層状可辨



図IV-23 柱状穴小土坑 (SP) (2)



図IV-24 柱穴状小土坑の遺物

5 焼土 (F)

F-1 (図IV-25、表IV-3、図版12)

位置 L7区 規模 $0.68 \times 1.48 / 0.07\text{m}$

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.2m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を掘り下げていたところ、焼土を検出した。検出面を精査し、東側を半截した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して完掘した。やや南北に長い不整な形状である。Ⅱ～Ⅲ層がわずかに亦変する焼土である。南側の一部は耕作により失われている。0.4m北西にSP-1が位置する。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構、出土する遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

F-2 (図IV-25、表IV-3、図版12)

位置 R19区 規模 $0.21 \times 0.18 / 0.06\text{m}$

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高81.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を掘り下げていたところ、焼土を検出した。下位に遺構が重複している可能性があったので、焼土の長軸上に沿ってトレンチを設定してⅢ層まで掘り下げた。結果、木の根の落ち込みに伴う焼土であることが分かった。概ね円形を呈する。焼土粒子を混じる暗褐色土の堆積であり、移動した焼土とみられる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明である。土層の色調から、縄文時代のものである可能性がある。

F-3 (図IV-25、表IV-3、図版12)

位置 Q17・18区 規模 $0.82 \times 0.61 / 0.07\text{m}$

確認・調査 調査区西側に向かって低くなる沢状地形、標高81.8m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を掘

り下げていたところ、焼土を検出した。中心を通るよう、北東-南西方向にトレンチを入れⅢ層まで掘り下げた。結果やや不明瞭な焼土を確認した。北西-南東方向にやや長い不整形形状である。炭化物が混じり、下位の層との境界も漸進的であるため、その場で形成された焼土とみられる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明である。土層の色調から、縄文時代のものである可能性がある。

F-4 (図IV-25、表IV-3、図版12)

位置 L8区 **規模** 0.68×0.58/0.12m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、焼土を検出した。検出面を精査し、南東側を半載した。記録を作成して土壌サンプルを採取したのち完掘して調査終了とした。

特徴 平面形は不整形円形を呈する。暗褐色土ブロックが混じる赤褐色土の堆積であり、下層との層界は画然としているため、移動した焼土の可能性が高い。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構、出土する遺物から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。

F-5 (図IV-25、表IV-3、図版13)

位置 M10区 **規模** 0.68×0.58/0.10m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.2m付近に位置する。2011年度調査のトレンチ調査で検出して断面図を作成し、2012年度に全体を調査した焼土である。焼土部分を残して周囲を掘り下げ、記録を作成して土壌サンプルを採取した。平面形は東西に長軸のある不整形形状である。炭化物を少量伴うが焼成は弱い。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構、出土する遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

F-6 (図IV-25、表IV-3、図版13)

位置 M9区 **規模** 0.43×0.32/0.06m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.3m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。検出面を精査し、南東側を半載して記録を作成した。北西-南東方向に長軸のある不整形形状である。炭化物をわずかに混じるが焼成は弱い。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲の遺構や遺物の出土状況から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

F-7 (図IV-25、35、表IV-3、5、図版13、33)

位置 L9区 **規模** 0.48×0.46/0.08m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。概ね東西に長い楕円形の範囲に広がっている。

遺物出土状況 上面でIV群a類土器が4点出土している。

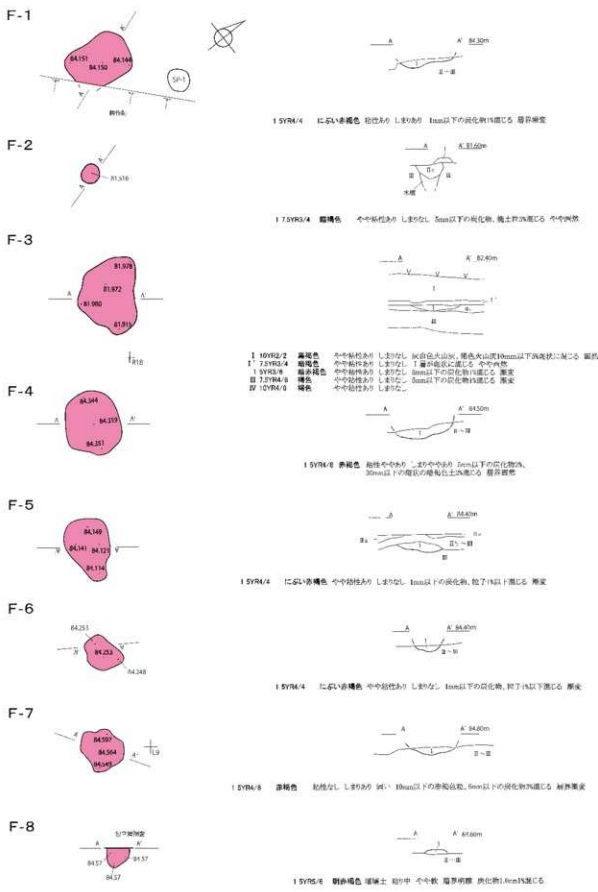
時期 上面で出土した遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 1は上面で出土したIV群a類土器。LR斜行縄文を地文とする口縁部である。

F-8 (図IV-25、35、表IV-3、6、図版13、33)

位置 L9区 **規模** (0.21)×0.22/0.04m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.5m付近に位置する。包含層調査に



図IV-25 焼土(1)

よって焼土の一部を削平し、断面観察により検出した。平面、断面ともに明赤褐色を呈し、層界は明瞭である。

遺物出土状況 焼土中から石鏃1点が出土した。

時期 時期を特定できる遺物の出土はない。縄文時代の遺構と思われる。

掲載遺物 2は石鏃。背腹両面にわたり細部調整され薄手に仕上げられている。茎を作出するがかえしは明瞭ではない。

F-9 (図IV-26、表IV-3、図版13)

位置 L9区 **規模** 0.54×0.44/0.08m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.4m付近に位置する。包含層調査で赤褐色土の広がりを検出した。半載したところ被熱した赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。

遺物出土状況 IV群a類土器2点が出土した。

時期 出土した遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

F-10 (図IV-26、表IV-3、図版13)

位置 I13区 **規模** 0.76×0.60/0.16m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高84.2m付近に位置する。包含層調査で暗赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱した暗褐色～明褐色土の断面を検出、焼土と認定した。

遺物出土状況 出土していない。

時期 時期を特定できる遺物の出土はない。縄文時代早期中葉～後期前葉にかけての遺構と思われる。

F-11 (図IV-26、35、表IV-3、6、図版14、33)

位置 M12区 **規模** 0.61×0.48/0.10m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.9m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。関連する遺構はないと判断されたので、南西側を半載した。結果明瞭に焼成するⅡからⅢ層相当の層位を確認したため焼土とした。北西-南東方向に長軸のある楕円形を呈する。掘り下げに際し土壌サンプルを採取した。

遺物出土状況 上面で石鏃が1点出土している。

時期 出土した石鏃の形状から、縄文時代後期前葉のものと思われる。

掲載遺物 3は上面で出土した石鏃。茎が明瞭に作出されている。

F-12 (図IV-26、表IV-3、図版14)

位置 N8区 **規模** 0.94×0.40/0.04m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.9m付近に位置する。風倒木のロームの盛り上がり上で検出した。検出面を精査し、南側を半載した。結果焼成するⅢ層を検出した。概ね南北に長い不整な形状である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取した。

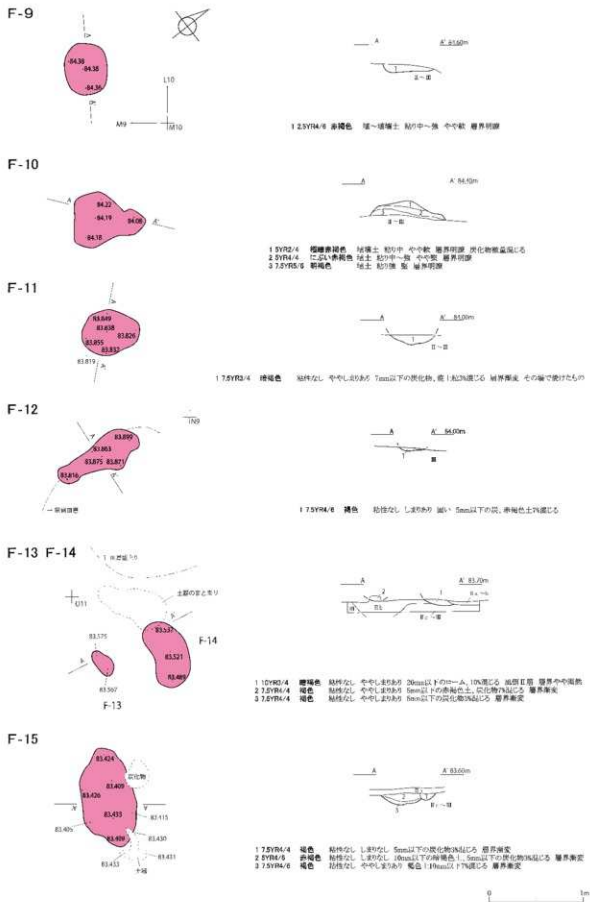
遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で検出される遺構から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

F-13・14 (図IV-26、35、表IV-3、5、図版14、33)

位置 O11区 **規模** (F-13) 0.30×0.17×0.06m・(F-14) 0.72×0.38×0.06m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.7m付近に位置する。周囲は自然攪乱の影響により層位に乱れがあったため、両焼土にかかるようにトレンチを設定して20cm掘り下



図IV-26 焼土(2)

げた。結果比較的明瞭な焼土の断面を確認した。概ね東西に長い楕円形でやや小さなF-13が南、14が北に連なって検出されている。掘り下げに際し土壌サンプルを採取した。

遺物出土状況 F-13の上面ではIV群a類土器が4点、F-14の上面でIV群a類土器が56点、フレイク2点が出土している。

時期 上面で出土した遺物から、縄文時代後期前葉のものとみられる。

掲載遺物 4～6はF-14上面で出土したIV群a類土器。4 a～cは接合しないが同一個体である。平縁で口縁部は直立するが張り出す底部から外に広がる胴部である。地文は撫糸文とみられる。5は小形の土器の口縁部。6はLR斜行縄文を地文とする胴部片。

F-15 (図IV-26、35、表IV-3、5、図版14、33)

位置 N・O13区 **規模** 1.07×0.58/0.12m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、明瞭な焼土を検出した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。関連する遺構がないと判断されたためOラインに沿って半載した。結果明瞭に焼成するⅡc層相当の堆積を確認した。概ね東西に長い楕円形の形状である。なお上面で出土した炭化クルミの放射性炭素年代は、3,770±20yrBP (IAAA-122283)である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取した。

遺物出土状況 IV群a類土器が上面で32点、Ⅱ層からはIV群a類土器2点とフレイク1点も出土している。

時期 上面出土の遺物、炭素年代測定結果から、縄文時代後期前葉のものとみられる。

掲載遺物 7、8は上面で出土したIV群a類土器。7はボタン状の貼付がつく口縁部。8は胴部下半の破片。外傾接合が明瞭である。

F-16 (図IV-27、表IV-3、図版14)

位置 M42・43区 **規模** ①1.03×0.52/0.14m ②0.28×0.18/0.02m

確認・調査 調査区北東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.5m付近に位置する。表土除去によりにぶい褐色～明赤褐色土と炭化物の広がりを確認した。半載したところににぶい褐色～明赤褐色土の被熱した断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取した。

遺物出土状況 焼土からI群a類土器が1点出土している。

時期 不明であるが、近・現代の可能性もある。

F-17 (図IV-27、表IV-3、図版14)

位置 L43区 **規模** 0.58×0.56/0.06m

確認・調査 調査区北東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.5m付近に位置する。表土除去により明赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ赤褐色土の被熱した断面を検出、焼土と認めた。

遺物出土状況 出土していない。

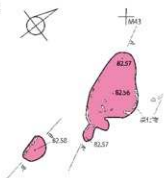
時期 不明であるが、近・現代の可能性もある。

F-18 (図IV-27、表IV-3、図版15)

位置 G・H38区 **規模** 1.06×0.78/0.18m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高84.4m付近に位置する。表土を除去後の精査中に検出した。焼土は火山灰が堆積する落ち込みを伴っていたため、遺構の重複を想定して長軸に合わせてトレンチを設定して掘り下げた。結果浅い落ち込みと重複するや

F-16



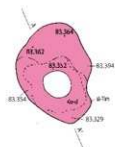
- | | | |
|--------------------|--------------------|--|
| 1 5YR4/2 | にじい青褐色 | 磁器土 粘り中 磁 層厚約10cm |
| 2 5YR5/8 | 暗赤褐色 | 磁器土 粘り中 磁 層厚約10cm 炭化物0.3~1.0cm ² ~2%混じる |
| 3 5YR3/2 | 暗赤褐色 | 磁器土 粘り中 磁 層厚約10cm |
| 4 5YR2/1 | 黒褐色 | 磁器土 粘り中~強 中~軟 層厚約10cm |
| 5 5YR5.5/4, 4/3 | 暗赤褐色に
にじい青褐色が混雑 | 磁器土 粘り中~強 層厚約10cm |
| 6 5YR5/8 | 暗赤褐色 | 磁器土 粘り中 磁 層厚約10cm |
| 7 7.5YR2/1, 5YR4/2 | 黒褐色ににじい
赤褐色の混雑 | 磁器土 粘り中 軟 層厚約10cm |

F-17



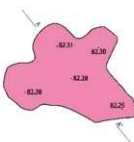
- 1 5YR4/6 赤褐色 硬~硬部土 粘り中 磁 層厚約10cm 炭化物1%混じる

F-18



- | | |
|---------------------|------------------------------|
| 1 10YR2/2 黒褐色 | 粘りなし、硬部なし、Ka-d%混じる やや硬部 |
| 2 7.5YR5/4 暗褐色 | 粘りなし ややしめりた。5cm以下の炭化物%混じる 黒炭 |
| 3 10YR3/4 暗褐色 | 粘りなし ややしめりた。5cm以下の炭化物%混じる 黒炭 |
| 4 10YR3/4 暗褐色 | 粘りなし しめりた。黒炭 |
| Ka-d 10YR6/4 にじい青褐色 | 粘りなし ややしめりた シルト 磁器 |
| B-Tn 10YR5/8 黄褐色 | 粘りなし しめりた シルト やや硬部 |

F-19



- 1 5YR3/2 暗赤褐色 磁器土 粘り中 やや強 層厚約10cm

F-20



- 1 7.5YR5/6 暗褐色 粘りなし、しめりややあり 5cm以下の炭、粘り%混じる 黒炭



図IV-27 焼土(3)

や不明瞭な焼土であることがわかった。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 上面およびⅡ層から、フレイクが8点出土している。

時期 上位にほぼ接して火山灰が堆積していること、また焼土の下位に暗褐色土が発達していることから、縄文時代以降のものの可能性が高い。

F-19 (図IV-27、35、表IV-3、6、図版15、33)

位置 O・P37区 **規模** 1.13×1.12/0.08m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.3m付近に位置する。包含層調査により暗赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱した暗赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 焼土中より40点出土した。内訳はトランシェ様石器1点、フレイク39点である。

時期 トランシェ様石器が出土していることから縄文時代早期中葉と考えられる。

掲載遺物 9はトランシェ様石器。刃部を欠損するが、調整と形状から判断した。素材剥片の打点は左側縁部で、側縁を調整中に破損した破片とみられる。

F-20 (図IV-27、表IV-3、図版15)

位置 K38区 **規模** 0.53×0.51/0.10m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.2m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、わずかに赤変する部分があるのを確認した。周囲を精査すると、赤変する部分は楕円形を呈し、わずかではあるが、炭化物を伴っていたため、焼土とした。検出面を台状に残して周囲を掘り下げた後、西側を断ち割って断面を確認した。Ⅱ～Ⅲ層が焼成する焼土である。

遺物出土状況 出土していない。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-21 (図IV-28、表IV-3、図版15)

位置 H32区 **規模** 北・0.22×0.18/0.06m 南・0.54×0.16/0.05m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高82.6m付近に位置する。包含層調査を行っていたところ、暗赤褐色～明赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱した明赤褐色～暗赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 焼土中よりフレイク4点が出土した。

時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代早期中葉と考えられる。

F-22 (図IV-28、表IV-3、図版15)

位置 N13区 **規模** 0.44×0.26/0.06m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した台地上、標高83.4m付近に位置する。調査終了時の根跡を調査中に確認した。焼土は不明瞭であったため、焼土の範囲を超えてトレンチを設定して掘り下げた。結果炭化物の混じる不明瞭な焼土の断面を確認した。概ね南北に長い不整形形状である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

F-23 (図IV-28、表IV-3、図版15)

位置 G24・25区 **規模** 0.86×0.36/0.12m

確認・調査 調査区北東部の斜面、標高84.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。焼土を台状に残し、南側を断ち割って断面を確認した。わずかに赤変が認められる不明瞭な焼土である。北東-南西方向に長い不整な楕円形である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、検出層位から縄文時代のものである可能性がある。

F-24 (図IV-28、表IV-3、図版16)

位置 G23・24区 **規模** 1.00×0.36/0.06m

確認・調査 調査区北東部の斜面、標高84.2mに位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。焼土を台状に残し、南西側を断ち割って断面を確認した。わずかに赤変が認められ、炭化物がわずかに混じる焼土である。南西から北東方向に長い不整な楕円形である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、検出層位から縄文時代のものである可能性がある。

F-25 (図IV-28、35、表IV-3、6、図版16、33)

位置 H36区 **規模** 0.47×0.45/0.06m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土と周囲の出土遺物を残して掘り下げた。南西側を半載して比較的明瞭に焼成する断面を確認した。周囲の出土遺物を検出面で取り上げ、土壌サンプルを採取し調査を終了した。平面形は楕円形を呈する。

遺物出土状況 検出面から、スクレイパーが1点、フレイク35点が出土している。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 10はスクレイパーである。原石面の残る剥片を用い、左側縁に張り出す刃部が作出される。

F-26 (図IV-28、35、表IV-3、5、図版16、33)

位置 N38区 **規模** ①0.72×0.60/0.08m ②0.88×0.60/0.04m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.6m付近に位置する。Ⅲ層上面を精査中に検出した。焼土は極めて不明瞭であったため、長軸にあわせて大きく半載した。結果炭化物の混じる比較的明瞭な断面を確認した。土壌サンプルを採取して調査を終了した。概ね東西に長い不整な形状である。

遺物出土状況 Ⅱ層から、I群a類土器が1点出土している。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 11はI群a類土器。F-26のⅡ層と、P42区、Q39区といったやや離れたⅡ層から出土した破片と接合している。尖底部に近い破片である。貝殻背押圧調整痕が残る。

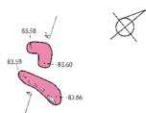
F-27 (図IV-28、表IV-3、図版16)

位置 N37区 **規模** 0.32×0.28/0.18m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.7m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。関連する遺構が確認できなかったので西側を半載した。結果自然攪乱の落ち込みに伴う焼土の断面を確認した。平面形は概ね楕円形である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

F-21



- 1 2YR6/8 暗赤褐色 湿性上 粘り中 中~粗 腐葉土層
2 5YR6/2 暗赤褐色 湿性上 粘り中 中~粗 腐葉土層 腐化材を少量含む

F-22



- 1 7.5YR4/4 褐色 粘りなし しまりあり 3mm以下の炭土粒、炭化物が混じる 下部層

F-23



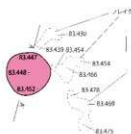
- 1 7.5YR4/4 褐色 粘りなし しまりや中あり 3mm以下の炭化物が混じる 腐葉土層

F-24



- 1 7.5YR4/6 褐色 粘りなし しまりあり 5mm以下の炭化物が混じる 腐葉

F-25



- 1 7.5YR4/4 褐色 粘りなし しまりあり 固い 3mm以下の炭化物、炭土が混じる 腐葉土層

F-26



- 1 7.5YR4/6 褐色 粘りなし しまりあり 10mm以下の炭化物が混じる 腐葉
2 10YR4/6 褐色 粘りなし しまりあり 3mm以下の炭化物が混じる 腐葉

F-27

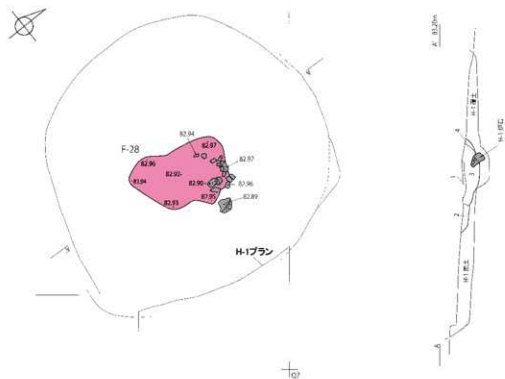


- 1 7.5YR4/4 褐色 粘りなし ややしまりなし 3mm以下の炭化物が混じる 腐葉
2 10YR4/4 褐色 粘りなし ややしまりなし 3mm以下の炭化物が混じる 腐葉



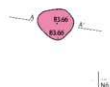
図IV-28 焼土(4)

F-28



- 1 5YR5/6 明赤褐色 硬質土 粘り中～強 中～軟 層厚明瞭 炭化物は僅く
 2 5YR3/4 暗赤褐色 硬質土 粘り中～中～軟 層厚明瞭 炭化物は僅く
 3 2.5YR4/8 赤褐色 硬質土 粘り中 層厚明瞭
 4 7.5YR6/8 褐色 硬土 粘り中～強 空 層厚明瞭

F-29



- 1 5YR3/8 暗赤褐色 硬質土 粘り中 軟～1.25 層厚明瞭 炭化物は0.5cm以下

F-30 F-31



- F-30 1 2.5YR4/4 に高い赤褐色 硬質土 粘り中～強 層厚明瞭 炭化物は僅く
 F-31 2 2.5YR5/8 明赤褐色 硬質土 粘り中～強 層厚明瞭 炭化物は僅く



図IV-29 焼土(5)

時 期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-28 (図IV-29、35、表IV-3、5、6、図版16、33、51)

位 置 P 6区 規 模 1.04×0.69/0.18m

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.0m付近に位置する。H-1の検出とともに確認した。H-1の土層観察用のベルトを、焼土の長軸がかかるよう設定、掘り下げていった。これにより覆土下位が焼成を受けている断面を検出した。調査の結果、住居跡のくぼみを利用、もしくは住居跡と入れ子構造的に時期差の無いと考えられる焼土と判断した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況：68点出土した。内訳はIV群a類土器50点、剥片石器類11点、礫石器・礫片類6点、焼成粘土塊1点である。また、H-1覆土中のもは、この焼土との関連があるものと考えられる。

時 期 H-1と時期差が無いことと、IV群a類土器が出土していることから縄文時代後期前葉と判断する。

掲載遺物 12、13は焼土中から出土しているIV群a類土器。12aがH-1床面出土の破片と接合しているため、再掲載している。12a、bは接合しないが同一個体とみられる。外傾接合の痕跡が明瞭に残される。口縁端部は調整されて平坦面がつけられる部分がある。地文は太さの不均一な原体、もしくは0段多縄によるRL斜行縄文である。13は燃糸文の胴部片。14、15はたたき石。14は扁平礫の側縁に、15は楕円形の礫の表面にやや弱い敲打痕があるもの。両者とも輝石安山岩製である。

F-29 (図IV-29、表IV-3、図版16)

位 置 M 5・6区 規 模 0.38×0.32/0.06m

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.6m付近に位置する。包含層調査により暗赤褐色土の広がりを検出した。半截したところ被熱した暗赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

F-30 (図IV-29、35、表IV-3、5、図版17、33)

位 置 N 6区 規 模 0.72×0.48/0.08m

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.7m付近。包含層調査によりにぶい赤褐色土の広がりを確認した。半截したところ被熱したにぶい赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 IV群a類土器5点、剥片類3点、合計8点出土した。

時 期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

F-31 (図IV-29、35、表IV-3、5、図版17、33)

位 置 N 6区

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した台地の先端、標高83.7m付近に位置する。包含層調査によりにぶい赤褐色土の広がりを確認した。半截したところ被熱した明赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 IV群a類土器4点、剥片類1点、合計5点出土した。

時 期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考

えられる。

掲載遺物 17は焼土から出土したIV群a類土器口縁部。地文はLR斜行縄文である。

F-32 (図IV-30、表IV-3、図版17)

位置 H32区 **規模** 0.34×0.26/0.04m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.6m付近に位置する。フレイク・チップ集中域FC-16を調査中、Iラインに沿ってできた段差で断面を確認した。断面を精査し、記録を作成したのち土壌サンプルを採取した。概ね東西に長い楕円形の範囲に広がっている。北側は包含層調査により失われているが、フレイクチップ集中域FC-16とほぼ接していたとみられる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-33 (図IV-30、36、表IV-3、5、図版17、33)

位置 G31区 **規模** 0.34×0.32/0.05m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.8mに位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。南西側を半載した結果不明瞭ではあるが、炭化物が微量混じる赤変するⅡ～Ⅲ層の堆積を確認できた。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。「へ」の字状の不整な平面形である。

遺物出土状況 上面およびⅡ層から、IV群a類土器6点、焼成粘土塊6点、フレイク2点が出土している。

時期 上面の出土遺物から、縄文時代後期前葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 18は上面で出土したIV群a類土器。地文はRL斜行縄文である。

F-34 (図IV-30、表IV-3、図版17)

位置 G30区 **規模** 0.40×0.24/0.06m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高84m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。南西側を半載すると、炭化物を微量混じり、わずかに赤みを帯びる堆積を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取し調査を終了した。平面形は概ね北東—南西方向に長い楕円形を呈する。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-35 (図IV-30、表IV-3、図版17)

位置 Q9区 **規模** 0.56×0.51/0.05m

確認・調査 調査区南側、ミヤノ沢に面した斜面上、標高82.7m付近に位置する。包含層調査によりにぶい赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱したにぶい赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

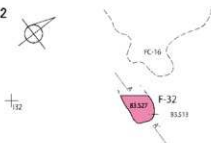
時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

F-36 (図IV-30、表IV-3、図版17)

位置 H30区 **規模** 0.39×0.29/0.05m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.9mに位置す

F-32



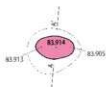
1.7.5YR5/8 暗褐色 粘状なし、しまりやあり 2mm以下の炭化物散見する 測定

F-33



1.7.5YR4/8 褐色 粘状なし、しまりやあり 5mm以下の炭化物散見する 測定

F-34



1.7.5YR4/6 褐色 粘状や中より、しまりやあり 2mm以下の炭化散見する 測定

2.10YR4/4 褐色 粘状なし、しまりやあり 2mm以下の炭化散見する 測定

F-35



1.2.4YR5/3 に近い赤褐色 硬土、粘り中～強 粘 層状明瞭、炭化材散見含む

F-36



1.7.5YR4/6 褐色 粘状なし、しまりなし 5mm以下の炭化散見する 測定

F-37



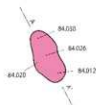
1.7.5YR4/4 暗褐色 粘状なし、しまりなし 3mm以下の炭化散見する 測定

F-38



1.7.5YR4/4 褐色 粘状なし、しまりあり 1mm以下の炭化散見する 測定

F-39



1.7.5YR4/8 暗褐色 粘状なし、しまりなし 5mm以下の炭化散見する 測定 焼成区～紅区



図IV-30 焼土(6)

る。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。西側を半截すると、炭化物が微量混じり、わずかに赤変する褐色土を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。土壌サンプルから得られた炭化材の放射性炭素年代測定結果は4,000±20yrBP (IAAA-122284)である。平面形は北東—南西方向に長い不整な楕円形である。0.5m北にF-37が位置している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 放射性炭素年代の測定結果から、縄文時代後期前葉のものである可能性がある。

F-37 (図IV-30、表IV-3、図版18)

位置 G30区 **規模** 0.46×0.30/0.06m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.9mに位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。南西側を半截すると、炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる暗褐色土を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は東西に長い不整な形状である。0.5m南にはF-36が位置している。

遺物出土状況 焼土からI群a類土器が1点出土している。

時期 周囲で検出される遺構、出土する遺物から、縄文時代中期のものである可能性が高い。

F-38 (図IV-30、表IV-3、図版18)

位置 H30区 **規模** 0.31×0.28/0.04m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.8m付近に位置する。Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を残して周囲を掘り下げた。西側を半截すると、焼土はⅡc層の落ち込み上に形成されていることが分かった。落ち込みの層界は極めて不明瞭であったため、自然の落ち込みと判断した。焼土は炭化物が微量混じるわずかに赤みを帯びるⅡc層である。平面形は概ね円形を呈する。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉、もしくは後期前葉のものとみられる。

F-39 (図IV-30、表IV-3、図版18)

位置 H28区 **規模** 0.59×0.28/0.04m

確認・調査 調査区西側の斜面、標高84.1m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲の調査を終了した。長軸に合わせて南側を半截すると、炭化物が混じり、赤変する褐色土を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取し調査を終了した。平面形は概ね東西に長い楕円形である。

遺物出土状況 出土していない。

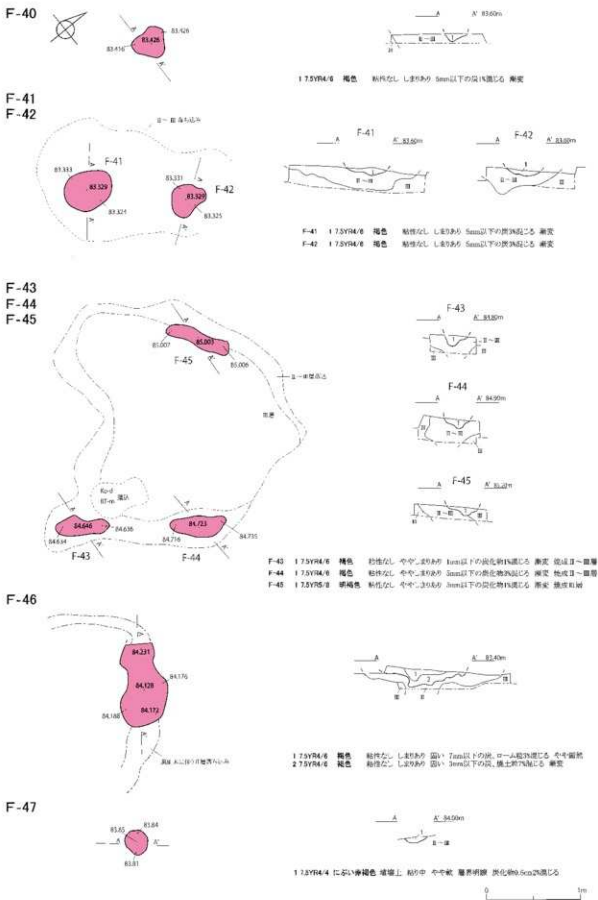
時期 不明であるが、遺跡で出土する遺物から、縄文時代のものと思われる。

F-40 (図IV-31、表IV-3、図版18)

位置 J30区 **規模** 0.38×0.32/0.08m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。南側を半截すると、炭化物が混じり赤変する褐色土を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は円形に近い不整な形状である。

遺物出土状況 焼土からフレイク9点が出土している。



図IV-31 焼土(7)

時期 周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉の可能性が高い。

F-41・42 (図IV-31、36、表IV-3、6、図版18、33)

(F-41) 位置 J30区 規模 0.53×0.42/0.08m

(F-42) 位置 J30区 規模 0.40×0.32/0.06m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。焼土は2か所で、南西、北東を軸に並んで検出された。南西をF-41、北東をF-42とした。焼土は周囲に土層の乱れを伴っていたため、焼土と土層の乱れを台状に残して周囲を掘り下げた。それぞれ南西側を半載した。結果、Ⅱ～Ⅲ層の落ち込みに伴い、わずかに赤みを帯びる焼土であることがわかった。記録を作成したのち、土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は両者とも円形に近い不整な形状である。

遺物出土状況 (F-41) 出土していない。(F-42) 上面およびⅡ層からRフレイク1点、フレイク3点が出土している。

掲載遺物 19はF-42から出土したRフレイクである。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-43・44・45 (図IV-31、表IV-3、図版19)

(F-43) 位置 F23・24区 規模 0.57×0.22/0.12m

(F-44) 位置 F24区 規模 0.60×0.22/0.08m

(F-45) 位置 F24区 規模 0.70×0.14/0.08m

確認・調査 調査区西側の斜面、標高84.7～85.0m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。F-43と44は0.8m程の距離で北東-南西方向に並んで検出され、F-45はF-43から約2m北西に位置している。これらはすべて風倒木とみられる自然攪乱の落ち込み中から検出されている。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。南側を半載すると炭化物が微量混じり、色調がわずかに赤みを帯びるⅡ～Ⅲ層相当の堆積を確認した。いずれも北東-南西方向に長い不整な長楕円形である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、遺跡から出土する遺物から、縄文時代のもものとみられる。

F-46 (図IV-31、表IV-3、図版19)

位置 G28区 規模 (0.88)×0.48/0.18m

確認・調査 調査区西側の斜面、標高84.3m付近に位置する。Ⅲ層上面を精査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。長軸に合わせて南西側を半載したところ、風倒木に伴うⅡ層の落ち込み上に形成された焼土であることがわかった。平面形は北西-南東方向に長い不整な形状である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 上面で焼成粘土塊1点、フレイク14点が出土している。

時期 不明であるが、遺跡から出土する遺物から、縄文時代のもものとみられる。

F-47 (図IV-31、表IV-3)

位置 I6区 規模 0.26×0.24/0.06m

確認・調査 調査区南西側、ミヤノ沢に面した斜面上、標高83.8m付近。包含層調査により、にぶい赤褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱したにぶい赤褐色土の断面を検出、焼土と認定した。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 時期を特定できる遺物の出土はないが、周辺の遺構・遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。

F-48 (図IV-32、表IV-3、図版19)

位置 K36区 規模 0.54×0.44/0.08m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.3m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。検出面を精査し、焼土を残して周囲の土層を掘り下げた。焼土の南西側を半載し、焼土の断面を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。北東-南西方向に長い楕円形である。中心よりやや東寄りには、褐色土の円形の落ち込みを伴っている。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周囲で多く出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-49 (図IV-32、表IV-3、図版19)

位置 P35区 規模 0.45×0.22/0.08m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.2m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。長軸に合わせて西側を半載して断面を確認したところ、自然攪乱とみられるⅡ層の落ち込みに伴う焼土であることがわかった。平面形は、概ね南北に長い不整形形状である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 上面でフレイク2点が出土している。

時期 不明であるが、周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

F-50 (図IV-32、表IV-3、図版20)

位置 N34区 規模 北西・0.44×0.36/0.06m 南東・0.38×0.32/0.06m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.9～83.0m付近に位置する。フレイクチップ集中域FC-25の精査中に確認した。北西-南東方向に不整形形状に延びるFC-25の両端で検出された焼土である。FC-25に伴う石器を取り上げたのち、焼土にかかる部分を台状に残して無遺物層まで掘り下げた。結果炭化物が微量混じり、わずかに赤みがかかる焼土断面を確認した。記録を作成し、土壌サンプルを採取して調査を終了した。両者とも平面形は概ね楕円形である。

遺物出土状況 焼土からフレイク14点が出土している。

時期 FC-25から出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

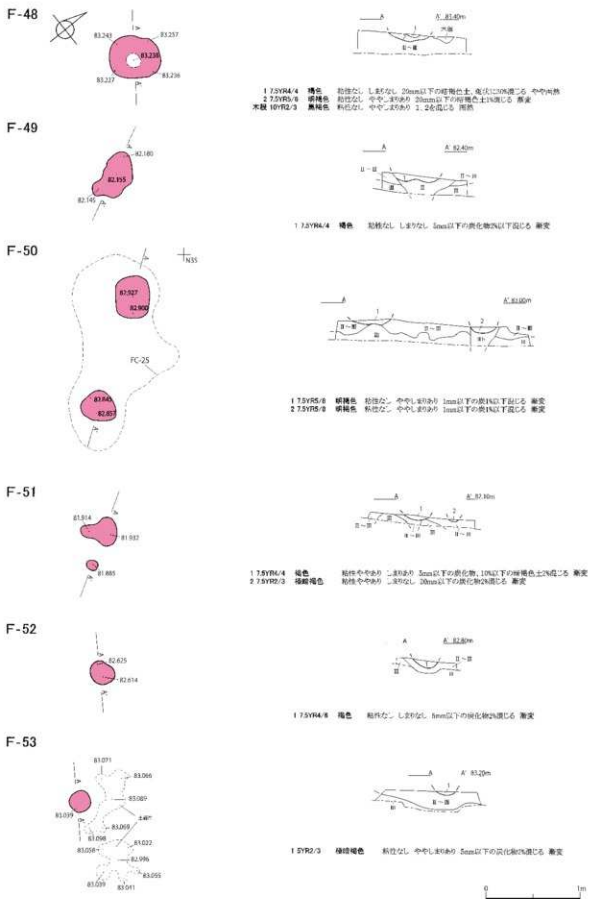
F-51 (図IV-32、表IV-3、図版20)

位置 O29区 規模 北西・0.38×0.30/0.05m 南東・0.12×0.10/0.02m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に検出した。焼土は小規模な2か所に分かれる。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。2か所ともかかるように南西側を半載した。結果やや赤みを帯びる焼土の断面を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は、北西に位置するものは東西に長い不整形形状。南東は小規模な円形である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、遺跡で出土している遺物から、縄文時代のものと思われる。



図IV-32 焼土(8)

F-52 (図IV-32、表IV-3、図版20)

位 置 M30区 規 模 0.26×0.23/0.06m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.7m付近に位置する。Ⅲ層を調査中に検出した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。南西側を半截すると、炭化物が混じり、わずかに赤みを帯びる焼成するⅡ～Ⅲ層を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取し調査を終了した。平面形は概ね円形である。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 不明であるが、遺跡で出土している遺物から、縄文時代のものとみられる。

F-53 (図IV-32、36、表IV-3、5、図版20、33)

位 置 M32区 規 模 0.23×0.23/0.04m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高83.1m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、遺物のまとまりを伴う焼土を検出した。検出面を精査し、焼土と遺物を残して周囲を掘り下げた。焼土の南西側を半截すると、明瞭に焼成し、炭化物が混じるⅡ～Ⅲ層相当の土層を確認した。伴うとみられる遺物を上面で取り上げ、土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は概ね円形である。焼土の北東側にはⅠ群a類土器がややまとまって出土している。

遺物出土状況 上面でⅠ群a類土器が21点、Ⅱ層から39点出土している。

時 期 検出面での遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

掲載遺物 20は検出面で出土したⅠ群a類土器。20a～cは同一個体。口縁部文様帯には、3段の爪形の刺突列がつけられている。口唇端部には貝殻によるとみられる刻みが施されている。体部には斜位に貝殻複線刺突文が連続して施文される。器壁が鋭角を成す尖底土器とみられる。

F-54 (図IV-33、表IV-3、図版20)

位 置 M32区 規 模 0.44×0.28/0.04m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高83.2m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。南西側を半截すると、明瞭に赤変し、炭化物が混じる堆積を確認した。土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は概ね東西に長い不整な形状である。

遺物出土状況 上面からフレイクが1点出土している。

時 期 周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-55 (図IV-33、表IV-3、図版20)

位 置 O34区 規 模 (0.42)×0.42/0.06m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.5m付近に位置する。フレイクチップ集中域FC-29を調査中に確認した。FC-29に伴う遺物を取り上げたのち、焼土の中心を通るように南西側を半截した。結果わずかに赤みを帯びる焼土の断面を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は東側を包含層調査で欠いており、不明であるが、概ね東西に長い楕円形とみられる。

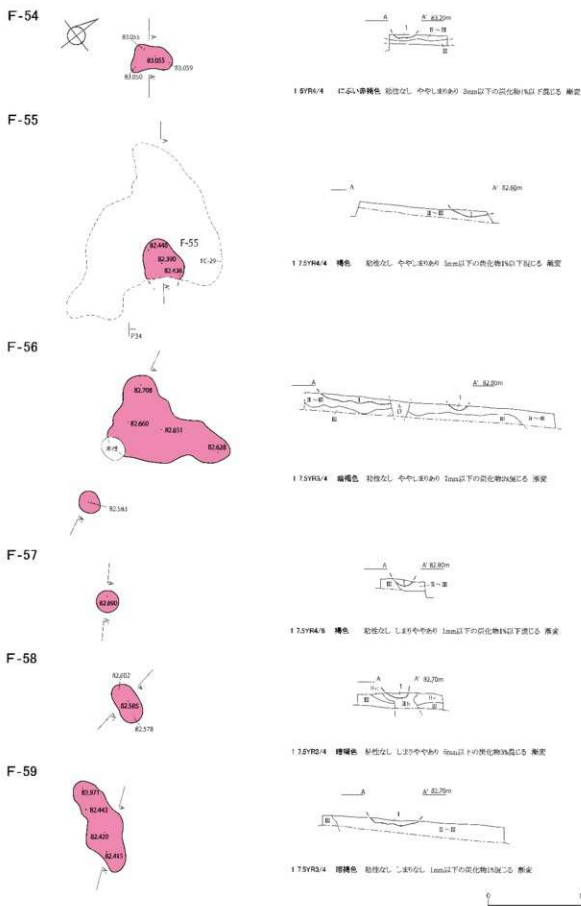
遺物出土状況 出土していない。

時 期 FC-29で出土している遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-56 (図IV-33、36、表IV-3、5、図版21、33)

位 置 O33区 規 模 北・1.30×0.88/0.06m 南・0.24×0.22/0.04m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.7m付



図IV-33 焼土(9)

近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。南北2か所に分かれるが、色調が似ていることから一連のものとした。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。2か所の焼土が幼かるように西側を半載したところ、炭化物が混じり、わずかに赤みを帯びる焼土の断面を確認した。記録を作成したのち、土壌サンプルを採取して調査を終了した。サンプルから得られた炭化材の放射性炭素年代測定結果は3,840±30yrBP (IAAA-122285)である。平面形は概ね東西に長い不整形形状である。

遺物出土状況 上面でフレイクが4点、Ⅱ層および焼土からⅣ群a類土器3点、フレイク1点が出土している。

時期 出土遺物、放射性炭素年代の結果から、縄文時代後期前葉のものとみられる。

掲載遺物 21はF-56のⅡ層から出土したⅣ群a類土器の口縁部である。

F-57 (図IV-33、表IV-3、図版21)

位置 N32区 **規模** 0.23×0.23/0.06m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.7m付近に位置する。Ⅲ層上面を精査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲の調査を終了した。焼土の南西側を半載すると、炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる焼成するⅡ～Ⅲ層相当の堆積を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は概ね円形である。

遺物出土状況 上面でフレイク1点が出土している。

時期 周囲で出土する遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-58 (図IV-33、表IV-3、図版21)

位置 O32・33区 **規模** 0.44×0.24/0.05m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.7m付近に位置する。Ⅲ層上面を精査中確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲の調査を終了した。南西側を半載すると、根跡状の落ち込みの上位に形成された不明瞭な焼土を確認した。焼土は炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びるⅡc層相当の堆積である。平面形は概ね東西に長い楕円形を呈する。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、遺跡での遺物出土状況から、縄文時代のもものとみられる。

F-59 (図IV-33、表IV-3、図版21)

位置 O32区 **規模** 1.04×0.43/0.04m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.5mに位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を掘り下げた。焼土の南西側を半載すると、炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる焼土の断面を確認した。記録を作成したのち、土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は概ね東西に長い不整形形状である。

遺物出土状況 出土していない。

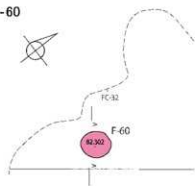
時期 不明であるが、遺跡での遺物出土状況から、縄文時代のもものとみられる。

F-60 (図IV-34、表IV-3、図版21)

位置 O36区 **規模** 0.32×0.28/0.03m

確認・調査 調査区東側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地の緩斜面上、標高82.3m付近に位置する。フレイクチップ集中域FC-32を調査中に確認した。FC-32に伴う遺物を取り上げたの

F-60



110YR/5 褐色 粘性なし、しよれなし、5mm以下の炭化物2%以下 焼変

F-61



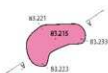
17.5YR/5 褐色 粘性なし、ややしよれあり、3mm以下の炭化物15%以下 焼変

F-62



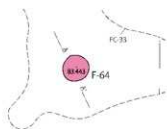
17.5YR/4 褐色 粘性なし、しよれあり、1mm以下の炭化物1%以下 焼変

F-63



17.5YR/4 褐色 粘性なし、しよれあり、1mm以下の炭化物1%以下 焼変

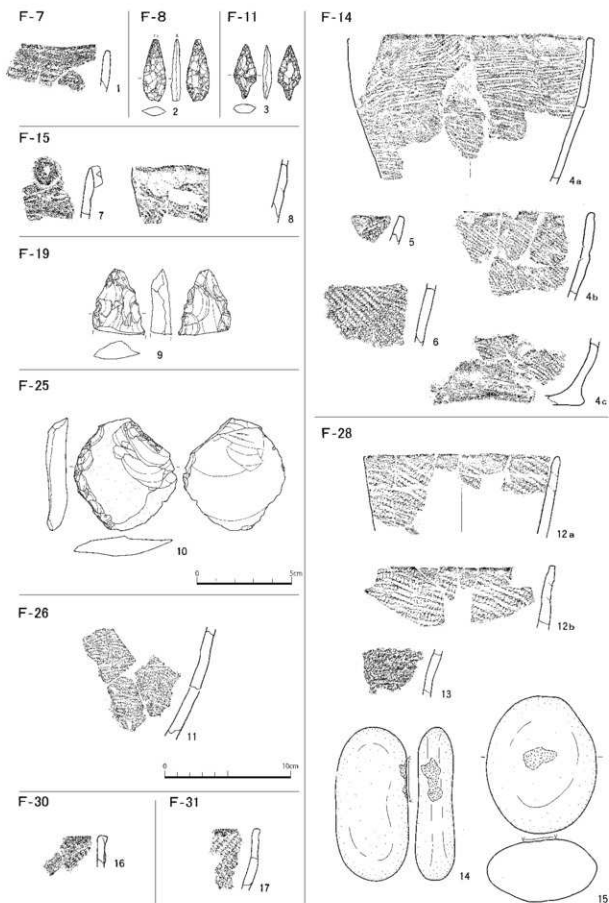
F-64



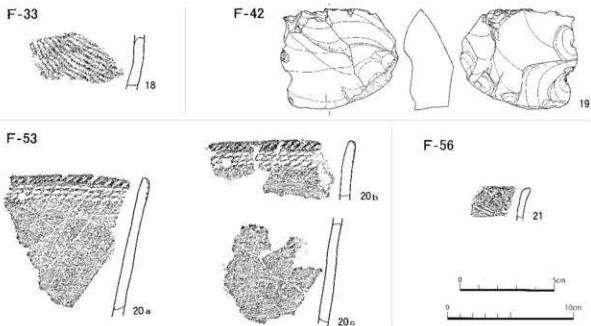
110YR/4 褐色 粘性なし、ややしよれあり、5mm以下の炭化物2%以下 焼変



図IV-34 焼土(10)



図IV-35 焼土出土の遺物(1)



図IV-36 焼土出土の遺物(2)

ち、検出面を精査した。焼土の中心にかかるようにベルトを残して周囲を掘り下げた。その結果、不明瞭な焼土を確認した。焼土は微量に炭化物が混じり、わずかに赤みを帯びる焼成したⅢ層である。平面形は概ね円形。FC-32の概ね中央に位置している。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。
遺物出土状況 出土していない。

時期 FC-32で出土している遺物から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

F-61 (図IV-34、表IV-3、図版21)

位置 L34区 **規模** 0.22×0.16/0.04m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.2mに位置する。Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を無遺物層まで掘り下げた。南側を半截すると、炭化物が微量混じる、わずかに赤みを帯びる焼成するⅡ～Ⅲ層を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。平面形は不整な円形である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

F-62 (図IV-34、表IV-3、図版22)

位置 L34区 **規模** 0.46×0.27/0.07m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.2m付近に位置する。Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、焼土を台状に残して周囲を無遺物層まで掘り下げた。長軸に合わせて西側を半截すると、炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる焼成するⅢ層を確認した。記録を作成したのち掘り下げた調査を終了した。平面形は北西-南東方向に長い不整な楕円形である。掘り下げに際し土壌サンプルを採取している。

遺物出土状況 焼土からI群a類土器1点出土している。

時期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のもの可能性がある。

F-63 (図IV-34、表IV-3、図版22)

位 置 F33区 規 模 0.28×0.28/0.04m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.3m付近に位置する。Ⅲ層を調査中に確認した。検出面を精査し、西側を半載した。結果炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる焼成するⅢ層を確認した。土壌サンプルを採取し掘り下げて調査を終了した。平面形は南北に長い不整形な形状である。

遺物出土状況 焼土からフレイクが4点出土している。

時 期 不明であるが、周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性がある。

F-64 (図IV-34、表IV-3、図版22)

位 置 L34区 規 模 0.66×0.32/0.07m

確認・調査 調査区北西側、大坪沢川と海に向かう沢地形に挟まれた台地上、標高83.6m付近に位置する。フレイクチップ集中域FC-33を調査中に確認した。FC-33に伴う遺物を取り上げたのち、焼土をベルト状に残して掘り下げた。その結果炭化物が微量混じり、わずかに赤みを帯びる焼成するⅡ～Ⅲ層を確認した。記録を作成したのち土壌サンプルを採取して調査を終了した。北西～南東方向に延びるFC-33の南東側端部に位置する。平面形はほぼ円形である。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 周囲の遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

表IV-2 住居跡・土坑一覧

遺構名	位置 (調査区)	規模/深さ 長軸×短軸/長軸×短軸/深さ	遺存者	平面形	時期	出土遺物	その他特徴	
H 1	P	6×7	3.24×2.94/3.04×2.78/0.18	楕円	不整形跡	縄文時代前期前半	土: 黄a×215, 黒石×1, 燻×18 燻土×2, 石器×1	石蔵あり
H 2	M・N	6	3.98×3.70/2.72×2.92/0.33	楕円	楕円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×600, V.L. 黒石×17, 燻跡, 燻土×15, 土器×1	灰層厚約20cm 11500±300(1AAA-11200)
F 1	M・N	7×8	3.04×2.60/1.12×1.16/1.38	2階	1びつな内郭	縄文時代前期前半	土: 黄a×1100/8×10×15, フライド×20 子石×1, 土器×1, 燻×1	灰層厚約20cm 11500±300(1AAA-11200)
F 2	N	2+8	1.06×0.70/0.90×0.52/0.15	2階	楕円形	縄文時代	なし	
F 4	M	8	1.36×1.16/0.72×0.80/1.40	2階	楕円形	縄文時代V期前半	なし	灰層厚約20cm 11500±300(1AAA-11200)
F 5	N	9	1.22(1.19)/0.70(0.70)×0.40/0.90	楕円	円形(不定)	縄文時代V期前半	土: 黄a×5, フライド×2, 燻×1	灰層厚約20cm, 燻土層1枚
F 6	I	9	1.72(1.72)/1.42×1.34/0.75	楕円	不整形跡	縄文時代前期前半	土: 黄a×2, フライド×2, 燻×1	アラスカ産フクロノツブ, 7.土器, 燻土層跡あり
F 7	H・I	9	1.05(1.02)/0.68(0.68)×0.80/1.08	楕円	円形(不定)	縄文時代V期前半	なし	灰層厚約20cm, 燻土層1枚あり
F 8	H	8×9	1.30×1.52/1.04×1.32/0.88	楕円	円形(不定)	縄文時代前期前半	土: 黄a×1	アラスカ産フクロノツブ
F 9	I・J	14	1.49×0.94/1.04×0.66/0.17	2階	楕円形	縄文時代前期前半	なし	燻土層あり
F 10	J	8	0.70×0.70/0.53×0.48/0.24	楕円	楕円形	縄文時代	燻×1	
F 13	F	20	1.76×1.70/0.90×0.82/1.20	2階	楕円形	縄文時代V期前半	なし	灰層厚約20cm
F 14	M	12	0.90×0.86/0.56×0.58/0.21	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×1, フライド×2	灰層厚約20cm, 燻土層1枚あり
F 15	P	11	0.94×0.82/0.84×0.50/0.32	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×2, フライド×15, 燻土×1 (燻土×2層あり)	小形アラスカ産フクロノツブ
F 16	O	12	0.86×0.80/0.70×0.64/0.26	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×6, フライド×2	
F 17	J	18	1.39×1.16/0.78×0.52/0.80	楕円	楕円形	縄文時代V期前半	フライド×3	灰層厚約20cm, 燻土層1枚あり, 燻土層跡あり
F 18	K・L	18	1.26×0.90/0.72×0.44/0.98	楕円	楕円形	縄文時代前期前半	フライド×1, 燻×2	灰層厚約20cm, 燻土層1枚あり, 燻土層跡あり
F 19	P	16	1.24×1.18/0.64×0.75/1.40	2階	楕円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×1	アラスカ産フクロノツブ
F 20	O	16	0.65×0.65/0.48×0.42/0.18	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	なし	灰層厚約20cm, 燻土層1枚あり
F 21	O	17	0.53×0.51/0.39×0.38/0.12	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	なし	
F 22	O	6	(1.86)×1.19/(1.36)×1.36/0.96	楕円	円形(不定)	縄文時代前期前半	土: 黄a×27, I.a×5, フライド×15, 燻土×1	アラスカ産フクロノツブ 燻土層1枚あり, 燻土層跡あり, 燻土層跡あり 11500±300(1AAA-11200)
F 23	I	30	(4.0)×1.34/(1.26)×1.06/(0.76)	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	土: I.a×11, フライド×1, 燻跡, アラスカ産 フクロノツブ	アラスカ産フクロノツブ
F 25	P・Q	6	0.80×0.74/0.60×0.54/0.29	楕円	円形(不定)	縄文時代前期前半	土: 黄a×1	アラスカ産フクロノツブ
F 27	I・Q・R	25	2.36×0.46/1.95×0.14/0.66	2階	長條形	縄文時代前期前半	なし	燻土層跡, 燻土層あり, 燻土層跡あり
F 28	Q	10	2.66×0.82/2.90×0.14/1.42	2階	長條形	縄文時代前期前半	土: 黄a×1, フライド×2	燻土層跡, 燻土層あり
F 3	O・P	9×10	2.74×0.54/3.02×0.14/1.30	2階	ほぼ円形	縄文時代前期前半	土: 黄a×15, フライド×2, 燻×2	燻土層跡, 燻土層あり

表IV-3 焼土一覧

遺構名 (調査区)	規模/深さ 長軸×短軸/深さ	遺存者	出土遺物	焼定時期	特徴	遺構名 (調査区)	規模/深さ 長軸×短軸/深さ	遺存者	出土遺物	焼定時期	特徴	
F 1	7	0.85×0.67/0.37	2階	なし	焼定時期	F 1	7	0.85×0.67/0.37	2階	なし	焼定時期	
F 2	8	0.92×0.76/0.36	2階	なし	焼定時期	F 2	8	0.92×0.76/0.36	2階	なし	焼定時期	
F 3	Q	17	0.82×0.67/0.41	2階	なし	焼定時期	F 3	Q	17	0.82×0.67/0.41	2階	なし
F 4	L	8	0.68×0.58/0.32	2階	なし	焼定時期	F 4	L	8	0.68×0.58/0.32	2階	なし
F 5	M	10	0.88×0.78/0.39	2階	なし	焼定時期	F 5	M	10	0.88×0.78/0.39	2階	なし
F 6	N	9	0.67×0.52/0.29	2階	なし	焼定時期	F 6	N	9	0.67×0.52/0.29	2階	なし
F 7	L	9	0.87×0.68/0.38	2階	土: 黄a×4	焼定時期	F 7	L	9	0.87×0.68/0.38	2階	土: 黄a×4
F 8	L	9	0.71×0.52/0.26	2階	土: 黄a×3	焼定時期	F 8	L	9	0.71×0.52/0.26	2階	土: 黄a×3
F 9	L	9	0.74×0.61/0.38	2階	土: 黄a×2	焼定時期	F 9	L	9	0.74×0.61/0.38	2階	土: 黄a×2
F 10	L	13	0.76×0.60/0.38	2階	なし	焼定時期	F 10	L	13	0.76×0.60/0.38	2階	なし
F 11	M	12	0.81×0.70/0.39	2階	土: 黄a×1	焼定時期	F 11	M	12	0.81×0.70/0.39	2階	土: 黄a×1
F 12	N	8	0.94×0.78/0.39	2階	土: 黄a×3	焼定時期	F 12	N	8	0.94×0.78/0.39	2階	土: 黄a×3
F 13	O	11	0.70×0.57/0.36	2階	土: 黄a×4	焼定時期	F 13	O	11	0.70×0.57/0.36	2階	土: 黄a×4
F 14	N・O	11	1.07×0.78/0.42	2階	土: 黄a×3, フライド×1	焼定時期	F 14	N・O	11	1.07×0.78/0.42	2階	土: 黄a×3, フライド×1
F 15	M	10	0.91×0.72/0.38	2階	土: 黄a×3, フライド×1	焼定時期	F 15	M	10	0.91×0.72/0.38	2階	土: 黄a×3, フライド×1
F 16	L	4	0.58×0.56/0.30	2階	なし	焼定時期	F 16	L	4	0.58×0.56/0.30	2階	なし
F 17	G	18	1.06×0.76/0.38	2階	フライド×2	焼定時期	F 17	G	18	1.06×0.76/0.38	2階	フライド×2
F 18	O・P	17	1.13×1.12/0.38	2階	アラスカ産フクロノツブ×1 アラスカ産燻×1	焼定時期	F 18	O・P	17	1.13×1.12/0.38	2階	アラスカ産フクロノツブ×1 アラスカ産燻×1
F 19	K	16	0.73×0.52/0.32	2階	なし	焼定時期	F 19	K	16	0.73×0.52/0.32	2階	なし
F 20	H	12	1.01×1.18/0.40	2階	なし	焼定時期	F 20	H	12	1.01×1.18/0.40	2階	なし
F 21	N	13	0.84×0.76/0.39	2階	なし	焼定時期	F 21	N	13	0.84×0.76/0.39	2階	なし
F 22	O	12	0.86×0.76/0.37	2階	なし	焼定時期	F 22	O	12	0.86×0.76/0.37	2階	なし
F 23	G	12	0.75×0.56/0.36	2階	なし	焼定時期	F 23	G	12	0.75×0.56/0.36	2階	なし
F 24	P	6	0.47×0.45/0.20	2階	アラスカ産フクロノツブ×1 アラスカ産燻×1	焼定時期	F 24	P	6	0.47×0.45/0.20	2階	アラスカ産フクロノツブ×1 アラスカ産燻×1
F 25	N	16	0.71×0.60/0.38	2階	土: I.a×1	焼定時期	F 25	N	16	0.71×0.60/0.38	2階	土: I.a×1
F 26	N	6	0.72×0.48/0.30	2階	なし	焼定時期	F 26	N	6	0.72×0.48/0.30	2階	なし
F 27	N	6	0.61×0.50/0.30	2階	なし	焼定時期	F 27	N	6	0.61×0.50/0.30	2階	なし
F 28	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし	焼定時期	F 28	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし
F 29	G	11	0.74×0.52/0.30	2階	なし	焼定時期	F 29	G	11	0.74×0.52/0.30	2階	なし
F 30	O	10	0.87×0.74/0.38	2階	土: 黄a×6, 燻跡×1 フライド×2	焼定時期	F 30	O	10	0.87×0.74/0.38	2階	土: 黄a×6, 燻跡×1 フライド×2
F 31	Q	9	0.67×0.52/0.30	2階	なし	焼定時期	F 31	Q	9	0.67×0.52/0.30	2階	なし
F 32	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし	焼定時期	F 32	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし
F 33	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし	焼定時期	F 33	H	12	0.74×0.76/0.34	2階	なし
F 34	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 34	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 35	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 35	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 36	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 36	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 37	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 37	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 38	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 38	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 39	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 39	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 40	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 40	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 41	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 41	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし
F 42	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし	焼定時期	F 42	J	18	0.78×0.78/0.34	2階	なし

表IV-4 遺構出土復元土器

掲載図	番号	分類	グループ・遺構	番号	層位	遺物番号	点数	未接合・接合	特徴	胎土中の主な混入物													
IV-9	1	Iva	KH M	2	II	260 115	115 6	接合 接合 接合 接合 接合	副部 下半、 器底の構造より 器底の縁文が器底 付近まで撫文	砂粒(チャート・ 白色石)海綿骨 針													
											KH KH N N N	2 6 6 6 6	II II II II II	260 260 260 260 260	115 111 111 111 111	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合							
																	未注記	31	未接合				
																				同一個体未接合計			46

表IV-5 遺構出土土器一覽

掲載図	番号	拓本番号	分類	グループ・遺構	番号	層位	遺物番号	点数	未接合・接合	特徴	胎土中の主な混入物														
IV-4	1a	50-a		Iva	KH P	1 II	1 5	10 2	未接合 接合 接合 接合 接合																
												未注記	97	1	接合										
																KH KF Q	1 28 6	II II II	13 1 1	1 1 1	接合 接合 接合				
																						接合計			16
																						同一個体未接合計			16
	1b	50-b		Iva	KH KH KH KH KH P	1 II II II II II	1 1 1 1 1 6	45 16 16 16 16 5	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	胎土・合漿、 沈殿物の内埋、 する深鉢	砂粒(泥質・ チャート)、 海綿骨針														
												未注記	97	1	接合										
																KH KF Q	1 28 6	II II II	13 1 1	1 1 1	接合 接合 接合				
																						接合計			16
																						同一個体未接合計			16
	2a	49-a		Iva	KH KH KH KH KH P	1 II II II II II	1 1 1 1 1 6	13 9 16 16 16 5	接合 接合 接合 接合 接合 接合																
												未注記	133	2	接合										
																KH P	1 6	II II	1 4	1 1	接合 接合				
																						接合計			19
同一個体未接合計																						14			
2b	49-b		Iva	KH KH KH KH KH KH P	1 II II II II II II	1 1 1 1 1 6	57 77 78 78 81 13 5	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	胎土の石 質多量	海綿骨針															
											未注記	133	2	接合											
															KH P	1 6	II II	1 4	1 1	接合 接合					
																					接合計			19	
																					同一個体未接合計			14	
IV-4	3	54	Iva	KH	1	II	91	1	接合	胎土の石質多量	海綿骨針														
IV-4	4a	79-a	Iva	KH	1	II	49	2	接合																
												4b	79-b	Iva	KH	25	II	2	2	接合					
IV-4	5	52	Iva	KH	1	II	97	2	接合																
												IV-4	6	56	Iva	KH	1	II	110	29	接合				
IV-4	7	57	Iva	KH	1	II	102	10	接合																
												IV-4	8	53	Iva	KH	1	II	98	1	接合				
IV-9	2a	61-a	Iva	KH	2	II	177	1	接合																
												IV-9	2b	61-b	Iva	KH	2	II	178	1	接合				
IV-9	2b	61-b	Iva	KH	2	II	261	1	接合																
												IV-9	2b	61-b	Iva	KH	2	II	262	1	接合				
IV-9	2b	61-b	Iva	KH	2	II	262	2	接合																

IV-9	3	63	Iva	KH	2	II	265	1	未接合								
												KH	2	II	278	1	未接合
IV-9	4	51	Iva	KH	2	II	260	1	接合								
												KH	2	II	291	3	接合
IV-9	4	51	Iva	KH	2	II	260	1	接合								
												KH	2	II	280	1	接合
IV-9	5	55	Iva	KH	2	II	108	1	接合								
												KH	2	II	116	1	接合
IV-9	6a	58-a	Iva	KH	2	II	291	3	接合								
												KH	2	II	291	3	接合
IV-9	6b	58-b	Iva	KH	2	II	222	1	未接合								
												KH	2	II	291	2	未接合
IV-9	7a	59-a	Iva	KH	2	II	158	1	接合								
												KH	2	II	255	1	接合
IV-9	7b	59-b	Iva	KH	2	II	248	3	接合								
												KH	2	II	248	3	接合
IV-9	8	62	Iva	KH	2	II	214	1	接合								
												KH	2	II	237	1	接合
IV-9	8	62	Iva	K	5	I	4	1	未接合								
												L	11	II	2	1	未接合
IV-9	9	64	Iva	KH	2	II	296	1	接合								
												KH	2	II	271	10	接合
IV-9	9	64	Iva	KH	2	II	273	3	未接合								
												KH	2	II	271	3	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	16	1	接合								
												KH	2	II	7	3	接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	131	1	接合								
												KH	2	II	136	1	接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	145	5	接合								
												KH	2	II	155	1	接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	110	29	1	接合							
												KH	2	II	110	29	接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	110	53	1	未接合							
												KH	2	II	110	53	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	1	II	102	10	接合								
												KH	1	II	102	10	接合
IV-9	10	60	Iva	KH	1	II	102	15	未接合								
												KH	1	II	39	2	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	145	2	未接合								
												KH	2	II	148	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	148	1	未接合								
												KH	2	II	151	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	154	1	未接合								
												KH	2	II	180	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	182	1	未接合								
												KH	2	II	204	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	291	1	未接合								
												KH	2	II	299	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	17	1	未接合								
												KH	2	II	78	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	98	1	未接合								
												KH	2	II	129	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	142	1	未接合								
												KH	2	II	142	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	144	1	未接合								
												KH	2	II	145	2	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	145	2	未接合								
												KH	2	II	148	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	151	1	未接合								
												KH	2	II	154	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	180	1	未接合								
												KH	2	II	182	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	204	1	未接合								
												KH	2	II	291	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	17	1	未接合								
												KH	2	II	78	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	98	1	未接合								
												KH	2	II	129	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	142	1	未接合								
												KH	2	II	142	1	未接合
IV-9	10	60	Iva	KH	2	II	144	1	未接合								
												KH	2	II	145	2	未接合

調査年度	発掘番号	分類	遺物番号	層位	遺物数	未接合	特徴	出土中の主な遺物	
			O 10 II 4 I		1				
			同一個体未接合計50						
IV-19	1	172	IIIa	KP 1	覆土 6	1	掘削片	砂粒(チャート、セメント、石膏、海綿骨針)	
IV-19	2	65	IVa	KP 1	覆土 15	1	口縁部・ベンチ	砂粒(チャート、セメント)	
IV-19	3	66	IVa	KP 1	覆土 1	3	接合	内湾口縁部	
IV-19	4	69	IVa	KP 1	覆土 1	1	掘削片	多量の砂粒(チャート、セメント、石膏、海綿骨針、石)	
IV-19	5	68	IVa	KP 1	覆土 1	1		砂粒(チャート、セメント)	
IV-19	6	67	IVa	KP 1	覆土 7	1	接合	口縁部	
IV-19	7	68	IVa	KP 1	覆土 8	1	接合	口縁部	
IV-19	9	70	IVa	KP 5	覆土 4	1		掘削片	
IV-19	10	71	IVa	KP 6	覆土 3	1	接合	掘削片	
IV-19	11a	72-a	IVa	KP 9	覆土 1	1	掘削片	砂粒(チャート、セメント)	
IV-19	11b	72-b	IVa	N 9 II 4 I	1	1		掘削片	
IV-19	12	73	IVa	KP 15	覆土 1	1		外湾口縁部	
IV-20	16	74	IVa	KP 19	覆土 1	1		小形、沈殿物	
				KP 22	覆土 11	2	接合		
				KP 22	覆土 13	2	接合		
				O 6 II 6	3	2	接合		
				同一個体未接合計3					
IV-20	18	75	IVa	KP 22	覆土 11	1		掘削片	
IV-21	22	78	IVa	KP 25	覆土 6	1		波状口縁部	
IV-21	23	76	IVa	KP 25	覆土 2	1		掘削片	
				KP 25	灰 4	2	接合		
				KP 25	灰 1	1	接合		
				同一個体未接合計3					
				KP 25	覆土 6	4	接合		
				KP 25	覆土 2	4	接合		
				KP 25	覆土 6	1	接合		
				KP 25	覆土 2	9	接合		
				KP 25	覆土 6	3	接合		
				同一個体未接合計17					
IV-21	26	81	IVa	TP 3	覆土 1	1		口縁部、掘削片	
IV-21	27	82	IVa	TP 3	覆土 4	1		口縁部、掘削片	
IV-21	28	83	IVa	TP 3	覆土 4	1		掘削片	
IV-24	2	84	IVa	SP 13	覆土 2	1		掘削片	
				SP 15	覆土 1	1		掘削片	
IV-35	1	86	IVa	KP 7	上面 1	2	接合	波状口縁部	
				KP 7	上面 1	2	接合		
				KF 14	上面 2	15	接合		
				N 11 II 6	1	1	接合		
				N 11 II 7	1	1	接合		
				KP 14	上面 2	4	接合		
				未注記					
				接合計24					
IV-35				KP 13	上面 1	4	接合	掘削片	
				KP 14	上面 1	5	接合		
				KP 14	上面 2	21	接合		
				I 10 II 3	2	2	接合		
				N 11 II 5	2	2	接合		
				N 11 II 6	1	1	接合		
				同一個体未接合計35					
IV-35	5	87	IVa	KP 14	上面 1	1		小形口縁部	
IV-35	6	88	IVa	KP 14	上面 2	1		掘削片	
IV-35	7	89	IVa	KP 15	上面 1	1		掘削片	
IV-35	8	101	IVa	KP 15	上面 2	1		掘削片	
				KP 15	上面 1	11	接合		
				KP 26	II 1	1	接合		
				P 42	II 1	1	接合		
				Q 39	II 1	1	接合		
				接合計9					
IV-35	11	2	Ia	J 41 II 1	1	1	未接合	掘削片	
				Q 38 II 2	2	2	未接合		
				同一個体未接合計3					
				KP 28	焼土 13	9	接合		
				KP 28	焼土 16	1	接合		
				KH 1	灰 153	2	接合		
				未注記					
				KP 28	焼土 13	5	接合		
				接合計19					
IV-35			12a	49-a	KH 1	覆土 77	1	未接合	掘削片
				49-b	KH 1	覆土 77	1	未接合	掘削片
				49-c	KH 1	覆土 78	1	未接合	掘削片
				49-d	KH 1	覆土 79	1	未接合	掘削片
				49-e	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-f	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-g	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-h	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-i	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-j	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-k	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-l	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-m	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-n	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-o	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-p	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-q	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-r	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-s	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-t	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-u	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-v	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-w	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-x	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-y	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				49-z	KH 1	覆土 81	1	未接合	掘削片
				同一個体未接合計14					
IV-35	13	90	IVa	KP 28	焼土 13	1		掘削片	
IV-35	16	91	IVa	KP 30	焼土 1	2	接合	掘削片	
IV-35	17	92	IVa	KP 31	焼土 3	1	接合	掘削片	
IV-36	18	93	IVa	KP 53	上面 1	1		掘削片	
				5a	3-a	2	7	接合	
				5b	3-b	2	4	接合	
				5c	3-c	2	3	接合	
				接合計14					
IV-36			Ia	KF 53	II 2	1	未接合	掘削片	
				M 31	II 1	1	未接合	掘削片	
				同一個体未接合計2					
IV-36	21	94	IVa	KP 56	II 1	1		掘削片	
				FC 2	II 9	1	1	未接合	
				FC 10	II 28	1	1	未接合	
				FC 10	II 68	1	1	未接合	
				FC 10	II 158	1	1	未接合	
				FC 13	II 1	1	1	未接合	
				FC 10	II 141	4	接合		
				FC 10	II 20	2	1	未接合	
				FC 13	II 1	1	1	未接合	
				FC 13	II 1	1	1	未接合	
				FC 10	II 119	1	1	未接合	
				H 37	II 3	2	1	未接合	
				I 37	II 2	2	1	未接合	
				H 35	II 3	2	1	未接合	
				I 37	II 7	2	1	未接合	
				H 35	II 7	2	1	未接合	
				同一個体未接合計6					
				FC 11	II 168	4	接合		
				FC 11	II 161	1	1	未接合	
				G 36	II 1	1	1	未接合	
				接合計7					
				FC 11	II 191	1	未接合		
				FC 11	II 216	2	1	未接合	
				FC 11	II 171	1	未接合		
				FC 11	II 189	1	未接合		
				H 35	II 1	1	1	未接合	
				H 35	II 2	1	1	未接合	
				同一個体未接合計7					
IV-36	8	173	IIIa	FC 11	II 92	1		掘削片	
				FC 11	II 69	1	1	未接合	
				H 35	II 3	3	接合		
				FC 13	II 1	3	接合		
				FC 13	II 1	3	接合		
				FC 13	II 1	4	接合		
				接合計13					
IV-36			Ia	FC 13	II 27	1	未接合	掘削片	
				FC 10	II 159	1	未接合	掘削片	
				H 35	II 2	3	未接合	掘削片	
				H 35	II 3	20	未接合	掘削片	

図番	遺物番号	日付	石器	層位	点数	石材	母岩番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
図IV-4	KH 1	73	2012/8/30	石鏃	覆土	1	Sh	3	5.30	2.10	1.50	11.13	
	KH 10	61	2012/8/29	スクレイパー片	覆土	1	Sh	1	5.10	5.50	1.20	31.99	
図IV-4	KH 11	40	2012/8/28	スクレイパー	覆土	1	Sh	2	5.60	5.80	1.00	25.78	
	KH 12	121	2012/9/5	スクレイパー	床	1	Sh	2	6.80	6.00	1.60	64.51	
図IV-5	KH 13	2	2012/8/28	Rフレイク	覆土	1	Sh	2	4.40	2.90	0.60	6.83	
	KH 14	55	2012/8/29	Rフレイク	覆土	1	Sh	2	5.60	4.30	1.20	38.81	
図IV-5	KH 15	17	2012/8/28	Rフレイク	覆土	1	Sh	2	3.70	4.25	0.90	13.46	
	KH 16	10	2012/8/28	Uフレイク	覆土	1	Sh	3	3.80	4.30	0.85	9.76	
図IV-5	KH 17	63	2012/8/29	石弁片	床	1	片麻岩or 角閃岩	4.36	3.78	1.13	30.74		
図IV-5	KH 18	126	2012/9/9	加工痕のある礫	が石	1	Px-An	13.20	23.90	5.70	1980.00		
	KH 19	130	2012/9/6	加工痕のある礫	が石	1	Px-An	(16.70)	(14.60)	8.50	2353.00		
図IV-5	KH 20	127	2012/9/5	石皿・台石片	が石	6	Px-An	(17.00)	(11.70)	7.90	(1943.00)		
	KH 21	40	2012/9/12	スクレイパー	覆土	1	Sh	2	5.50	3.10	1.00	12.87	
図IV-10	KH 22	170	2012/9/14	スクレイパー	覆土	1	Sh	2	5.20	4.70	0.95	19.53	
	KH 23	126	2012/9/14	Rフレイク	覆土	1	Sh	3	6.80	5.70	2.40	82.38	
図IV-10	KH 24	166	2012/9/14	Rフレイク	覆土	1	Sh	2	5.80	5.00	2.15	59.16	
	KH 25	49	2012/9/12	Uフレイク	覆土	1	Sh	1	5.65	5.20	0.90	31.71	
図IV-10	KH 26	107	2012/9/12	Uフレイク	覆土	1	Sh	1	5.40	4.10	0.70	17.53	
	KH 27	175	2012/9/14	Uフレイク	覆土	1	Sh	1	5.10	3.50	1.20	22.34	
図IV-10	KH 28	294	2012/8/30	石核	覆土	1	Sh	2	6.60	4.50	4.50	90.81	
	KH 29	130	2012/9/4	たたき石	覆土	1	AP	6.60	7.50	2.20	235.00		
図IV-10	KH 30	165	2012/9/14	加工痕のある礫	覆土	1	MS	4.30	6.40	2.30	63.60		
	KH 31	270	2012/9/20	扁平打製石器	覆土	1	Di	8.60	15.30	4.40	988.00		
図IV-10	KH 32	277	2012/9/20	石皿・台石片	覆土	1	SS	11.70	7.90	5.70	5170.00		
	KH 33	KP 1	2	2011/10/5	たたき石	覆土1層	Da	9.70	8.70	6.40	748.00		
図IV-19	KP 2	10	2011/10/5	すり石	覆土	1	Px-An	7.40	15.00	5.90	500.00		
	KP 3	15	9	2012/5/31	石鏃	覆土	1	SW	3.00	1.35	0.55	1.44	
図IV-19	KP 4	15	3	2012/5/30	たたき石	覆土	1	Px-An	(15.30)	7.60	6.60	(904.00)	
	KP 5	15	15	2012/6/4	石皿・台石	覆土	1	hb-An	27.50	21.50	14.50	11500.00	
図IV-20	KP 6	22	14	2012/8/31	Rフレイク	覆土	1	Sh	1	6.00	5.30	5.00	200.00
	KP 7	22	10	2012/9/13	たたき石	床	1	Da	16.10	6.40	4.00	545.00	
図IV-20	KP 8	22	1	2012/9/9	石皿・台石	覆土	1	Px-An	36.30	47.50	13.50	31900.00	
	KP 9	2	2	2012/5/31	石皿・台石	覆土	1	An	22.40	18.30	10.30	5000.00	
図IV-24	SP 10	13	1	2012/9/3	たたき石	覆土	1	Px-An	12.40	6.50	2.10	245.00	
	SP 11	14	1	2012/9/3	たたき石	覆土	1	Px-An	11.50	6.60	3.10	315.00	
図IV-35	KF 12	8	1	2012/5/17	石鏃	焼土	1	Sh	2	3.35	1.20	0.50	1.80
	KF 13	11	1	2012/5/24	石鏃	II	1	S・Sh	2	2.90	1.25	0.45	1.37
図IV-35	KF 14	19	2	2012/7/5	トランシュ様石器	焼土	1	Sh	2	3.50	2.30	1.10	8.51
	KF 15	25	1	2012/7/31	スクレイパー	検出面	1	Sh	1	5.95	5.80	1.10	34.27
図IV-35	KF 16	28	15	2012/9/4	たたき石	焼土	1	Px-An	12.00	5.70	3.20	290.00	
	KF 17	28	14	2012/9/4	たたき石	焼土	1	Px-An	10.90	8.70	4.90	590.00	
図IV-36	KF 42	1	2012/9/13	Rフレイク	II	1	Sh	2	5.40	6.25	2.20	90.00	

表IV-6 遺構出土掲載石器一覧

図番	遺物番号	日付	石器	層位	点数	石材	母岩番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図VI	16a	20-a	FC 35 II 1 1 K 34 II 2 1 K 34 II 3 3 K 34 II 2 3 L 34 II 2 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	4 4 4 4 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 61										
図VI	10	13	Ia FC 13 II 32 FC 15 II 45 FC 30 II 2 1 FC 13 II 2 7 G 37 I 2 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	45 45 2 7 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
同一個体未接合計 115											
図VI	11	15	Ia FC 15 II 2 1 FC 30 II 2 1 FC 13 II 2 7 G 37 I 2 1	未接合 未接合 未接合 未接合	2 2 7 2	未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 12										
図VI	12	14	Ia H 26 II 1 1 I 28 II 1 1 FC 16 II 12 1 FC 16 II 13 1 FC 16 II 20 1 FC 16 II 21 1 FC 16 II 23 1 FC 16 II 26 2 H 33 II 2 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	1 1 12 13 20 21 23 26 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 117										
図VI	13	17	Ia FC 16 II 12 1 FC 16 II 13 1 FC 16 II 20 1 FC 16 II 21 1 FC 16 II 23 1 FC 16 II 26 2 H 33 II 2 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	12 13 20 21 23 26 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 115										
図VI	14	18	Ia FC 30 II 39 FC 32 II 1 1	未接合 未接合	39 1	未接合 未接合					
図VI	15	19	Ia FC 32 II 1 1 FC 32 II 1 1	未接合 未接合	1 1	未接合 未接合					
図VI	16a	20-a	Ia FC 35 II 1 1 K 34 II 2 1 K 34 II 3 3 K 34 II 2 3 L 34 II 2 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	4 4 4 4 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 16										
図VI	17	22	Ia FC 96 II 1 1 J 34 II 1 1 FC 36 II 1 1 G 36 II 3 1 H 34 II 1 1 K 34 II 2 1	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合	1 1 1 3 1 2	未接合 未接合 未接合 未接合 未接合 未接合					
	同一個体未接合計 15										
図VI	19	97	Iva FC 17 II 1 1	未接合	1	未接合					
図VI	20	98	Iva FC 17 II 2 1	未接合	1	未接合					
図VI	21	96	Iva FC 17 II 1 1 FC 17 II 1 2	未接合 未接合	1 2	未接合 未接合					

V章 包含層出土の遺物

1 土器 (図V-1~5、表V-1、2、図版34~37)

包含層から出土した土器、土製品の総点数は、7,018点である。内訳は多いものからIV群a類土器が5,437点、I群a類土器が1,394点、V群b類土器が78点、III群a類土器が76点、出土点数が10点以下の少数なものに、III群b類、V群a類、II群a類、そして焼成粘土塊がある。

点数の多い、IV群a類土器とI群a類土器について若干補足する。IV群a類土器は南側を分布の中心とし、20ラインまでに約8割が収まる。特にM~Pまでの範囲に集中しており、当期の遺構の集中域と重なる。I群a類土器はこれとは逆に30~40ラインでの出土が顕著であり、フレイクチップ集中域の分布範囲と重なる。

I群a類土器 (図V-1-1~27、V-3-65、表V-1、2、図版34、36)

ノダップI式、国療裏(七飯町国立療養所裏)I群土器に相当する、貝殻腹縁土器である。土器型式による細分は行わず、文様別に記す。

口縁部文様帯に爪形の刺突文がつけられるもの(1~14)

1は3段以上の多段のもの。この1点のみの出土である。振りはないが明瞭な爪形文が確認できるだけで6段施文されている。口唇には棒状工具による刻みが施されている。口唇部内面に付着した炭化物の放射性炭素年代測定結果は、8,600±30yrBP (IAAA-130766)である。

2~4は口縁下の狭い範囲に3段の爪形文が施文される。口唇はいわゆる「外削ぎ」の形状である。2a~dは同一個体。口唇端部に貝殻腹縁圧痕による斜位の刻みが施される。爪形文による文様帯の下位から体部には貝殻腹縁圧調整が施される。器形は尖底から直線的に立ち上がり、全体として三角錐状とみられる。3、4は口縁部のみの破片。3は爪形文が平行に、4は左下がりの斜位につけられている。3の裏面には一部貝殻条痕がつけられている。

5~10は概ね平行な2段の爪形文により文様帯が構成されるもの。5a、bは同一個体。口唇端部には貝殻腹縁の刻みが施され、貝殻腹縁圧調整がすり消されたような痕跡を残している。6はやや尖り気味の口唇のもの。体部には貝殻背押圧調整が施されている。7~9は口唇がいわゆる「平頭」状をなすものである。体部には貝殻腹縁連続波状圧痕文が施文される。7、8の口唇頂部には絡条体とみられるものにより刻みが施されている。10は口唇がやや丸いもの9と同じ文様構成であるもの。体部に2段の貝殻腹縁波状圧痕文が施文される。

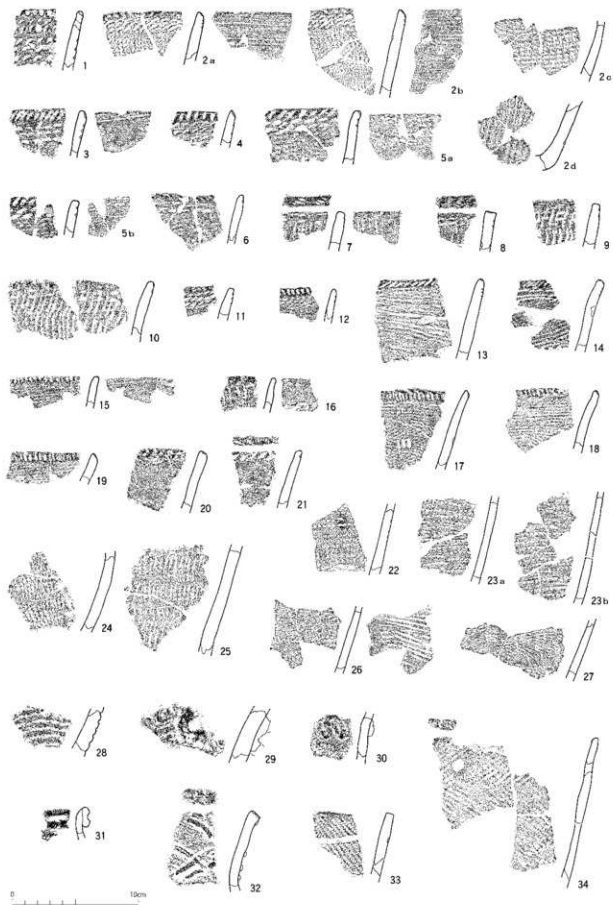
11、12は小型の土器で口縁に3段に亘る鋭利な工具による刺突文がつけられている。11、12の端部には絡条体の圧痕による刻みが施されている。

13、14は爪形文が横位に連続して3段の文様帯を形成するもの。口唇はやや丸みを帯び器面には貝殻背押圧調整が施されている。13の口唇は貝の鉄面の歯列を利用して圧痕したいわゆる「貝殻鉄歯圧痕文」(小笠原1974)である。14の口唇には貝殻腹縁による刻みが施される。なお13の表面に付着した炭化物に対し、放射性炭素年代測定を行ったところ、8,680±30yrBP (IAAA-130767)の結果を得た。

15、16は貝殻腹縁圧痕文が施される小形の土器。15は横位に、16は縦位である。

17~19は貝殻端部を使用したとみられる、背押圧調整が施されるもの。内削ぎの口唇には貝殻によるとみられる刻みが施される。17の口縁下部分には縦位の爪形文が3つ施文されている。

20、21は体部が無文となるもの。20の口唇端部には貝殻とみられるものによる刻みが施される。21には口唇端部に絡条体と爪形刺突文が施文される。



図V-1 包含層出土の土器(1)

22～27は胴部片。22は貝殻腹縁押圧調整が施されたのち、爪形の刺突文が2つつけられている。23 a、bは同一個体。貝殻腹縁文の横位施文である。24、25は貝殻腹縁連続波状圧痕文。26、27は貝殻背押圧調整が施される。26は裏面にもみられる。

II群 a 類土器 (図V-1-28、表V-2、図版35)

図示した1点のみ出土している。28は底部付近の破片。原体を押し付けたとみられる縄線がつけられている。

III群 a 類土器 (図V-1-29～32、表V-2、図版35)

調査区南部にも点在するが、中央部の20～30ラインにかけて、J23区に最も集中している地区がある。他の分類とは異なる分布状況を示す。29は円筒土器上層 a 式とみられるもの。突起下の貼付部分とみられる。30は円筒上層 b 式の口縁部。鋸歯状の貼付帯である。31は見晴町式の口縁部。口唇に沿って沈線がつけられる。32はサイベ沢Ⅶ式。縄線のつく貼付帯により文様が描かれている。

III群 b 類土器 (図V-1-33、34、表V-2、図版35)

9点が出土している。分布はのちのIV群 a 類とほぼ同じ、調査区南部に集中している。33は口縁部。RL縄文が施文されたのち沈線が描かれている。34はRLとLRの原体により羽状の縄文が施文されているもの。ノダップⅡ式かと判断して当類に含めたが、II群 a 類かもしれない。

IV群 a 類土器 (図V-2～4-35～104、表1、2、図版35～37)

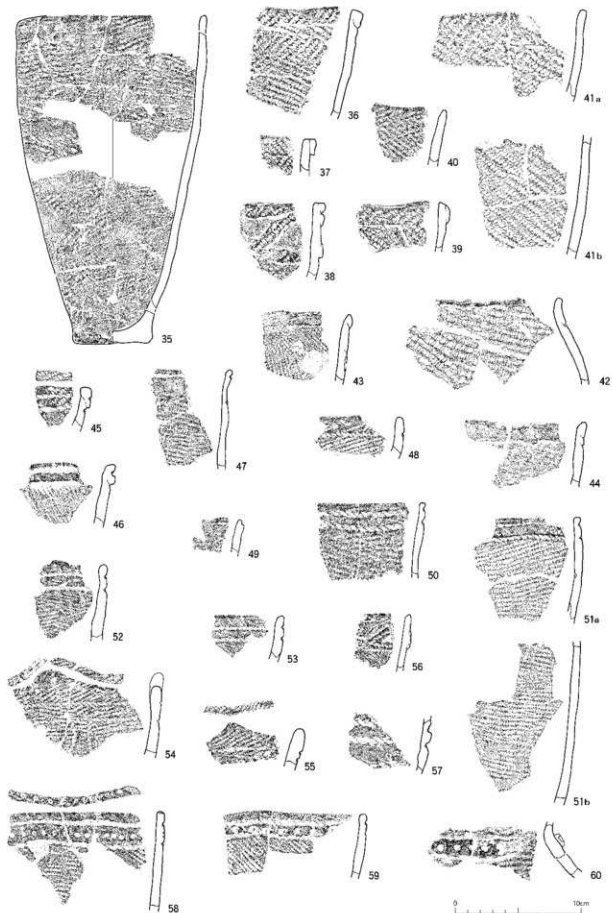
5,437点出土している。調査区南部の遺構検出地区に最も多く出土している。縄文時代後期前葉棟瓦台式にほぼ収まる内容とみられる。

35は復元土器。胴部上半が直立し、下半はややすぼまる細長の器形である。口唇内面は撫でられ平滑に調整されるが、底部はわずかに張り出し粗い調整が残されている。LR単節が概ね条が横走気味に上半はやや密に、下半は粗に施文される。

36～44は折り返し、貼付、条の逆行により口縁が緑どられるもの。36、37は口縁部が肥厚し頂部が平らに調整されるもの。肥厚した口縁部に、LR縄文を縦横に施文することにより条の方向を変えている。36の肥厚部は折り返し、37は貼り付けられている。38、39は添付帯による文様が描かれるもの。38は2条の貼付帯が斜位につながれているもの。39は波状口縁かもしれない。40、41は口唇が肥厚しないが、条の向きを変えているもの。原体はいずれもRL単節である。42は壺形の器形を呈するもの。条の逆行はないが、口唇はやや肥厚する。器面全体にLR斜行縄文が縦位に施文される。43は燃糸文。折り返しにより肥厚した口縁部には方向を変えて施文されている。44は折り返し部分が無文となるもの。地文は粗いRL斜行縄文である。

45～57は縄線のみにより文様が描かれるものを一括した。45、46は肥厚する口縁部に平行する縄線がつけられるもの。46の地文は燃糸文である。47は口縁下に2条の縄線がつけられているもの。48は縄線で区切られた口縁部が無文となるもの。49は口唇端部に縄線がつくもの。50、51は2条の縄線間が無文となるもの。50～53は平行する2条の縄線により文様が描かれるもの。50の地文は条が横走気味となるRL斜行縄文。51 a、bは同一個体。地文はLR斜行縄文である。52は突起とみられる部分があるもの。53の地文は燃糸文かもしれない。54、55は山形突起をもち、斜行縄文の上から縄線がつけられているもの。54は直線を基調とした2本一組の縄線文が描かれるもの。55は、突起の頂部のみである。57は口頸部のみられる破片。太い原体による縄線が3条認められる。

58～60は刺突文がつけられるもの。58、59は条の縄線間に刺突文が連続してつけられている。58は竹管状の工具、59は縄文の端部によるものとみられる。60は壺形土器の頸部に貼付帯がつけられ、貼付帯上に竹管状の工具により刺突文がつけられている。



図V-2 包含層出土の土器(2)

61～67は文様に沈線があるものを一括した。61はLR縄文地に沈線による円形、直線文が描かれるもの。胴部下半とみられる。62a、bは同一個体。62aは口縁部付近の破片。口唇に貼付帯がつけられ、貼付帯上に縄線がつけられている。口縁は2か所の小ぶりの突起がつけられている。62bは胴部片。61によく似た円形文と直線文が描かれている。63は半截竹管状の工具による沈線文が描かれているもの。64は胴部片。2本一組の沈線により直線的な文様がつけられている。Ⅲ群a類の可能性もある。65は丁寧に調整された無文面上に沈線が一条つけられているもの。底部に近い破片とみられるが、胎土から1群a類の可能性もある。66はLR縄文地に沈線による文様が描かれるもの。沈線で緑どられた一部の縄文がすり消されている。67はRL縄文地に不明瞭な沈線がつけられるもの。

68～71は縄文のみのもの。68は横走する撚糸文とみられるもの。69、70は口縁部付近に施文されないもの。71はLRとRLの二種の原体により、条が横走する縄文がつけられるもの。

72～75は体部に網目状（格子目状）の撚糸文がつけられるもの。72は器形をほぼ復元できたもの。山形突起が作出され、突起下には短い粘土紐がつけられている。73a、bは同一個体。aは不明瞭ではあるが口縁部とみられる。体部は粗い目の網目状撚糸文がつけられる。74は小型のもの。平滑に調整された無文面上に、網目状撚糸文が施文されている。

75～78は無文のもの。75a、bは同一個体。表裏面にわたり刷毛目状に調整されている。76は折り返しによる口縁部。77はやや内湾する口縁部。78はやや小型のもの。

79～87は縄文のつく胴部。79、80は結束第1種の縄文で、79は斜行、80は羽状となるもの。79は縦位、80は横位に施文されている。79はⅢ群a類の可能性もある。81はLRと2本のLの原体による合撚りである。82a、bは同一個体。地文であるLR単節の条が横走する。83はやや間隔のあくLR単節縄文である。84a、bは同一個体。やや条の間隔のあくLR単節縄文が器面全体に施文されている。85は0段多条のもの。87は無節Lの回転施文である。

88～98は底部片を一括した。88～90は底部に沈線文があるもの。88は葉脈圧痕上をなぞるように強調されているもの。LR斜行縄文が底部付近まで施文され、やや張り出す底部には指頭圧痕や調整工具の痕跡が残る。89も同様に、葉脈圧痕上に沈線が施文されているとみられる。90は沈線のみで文様が描かれている。破片であるため全体は不明である。体部はLR縄文が縦位に施文され、底部は削られて鈍角を成す。91a、bは接合しないが同一個体である。細かいLR斜行縄文が器面全体に施文される。底面は丁寧に磨かれ平滑である。92はやや開き気味の器形となるもの。粗いLR斜行縄文が底部付近まで施文され、底面は平滑に調整されている。93は無文でやや上底気味になる。94は小形の土器で底部が明瞭に張り出す。95は器壁が直立する。器面は底面も含め丁寧に調整され平滑である。96は底部が直立し、器壁は開き気味となる。97は底部から斜めに立ち上がる器形。地文はRL斜行縄文。底部の接地部分は棒状の工具により調整が一周している。98は底部からなだらかに広がる器形のもの。壺形とみられる。

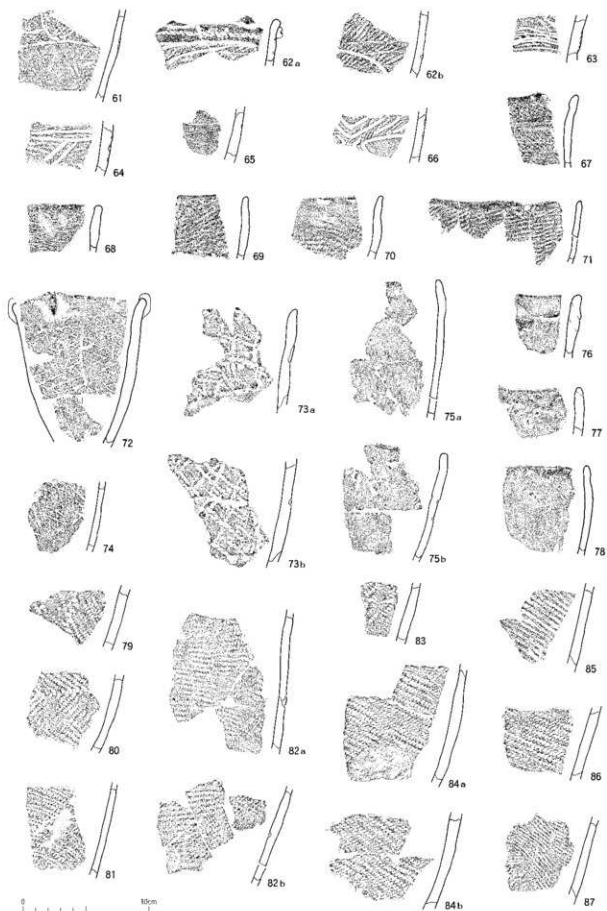
99～104はミニチュア土器を一括した。99～101は口縁部。99は沈線、100は撚糸文、101は無文である。102～104は底部片。102は斜めに立ち上がる器形。103は上底。104は張り出す底部である。

Ⅳ群b類土器（図V-5-105、表V-2、図版37）

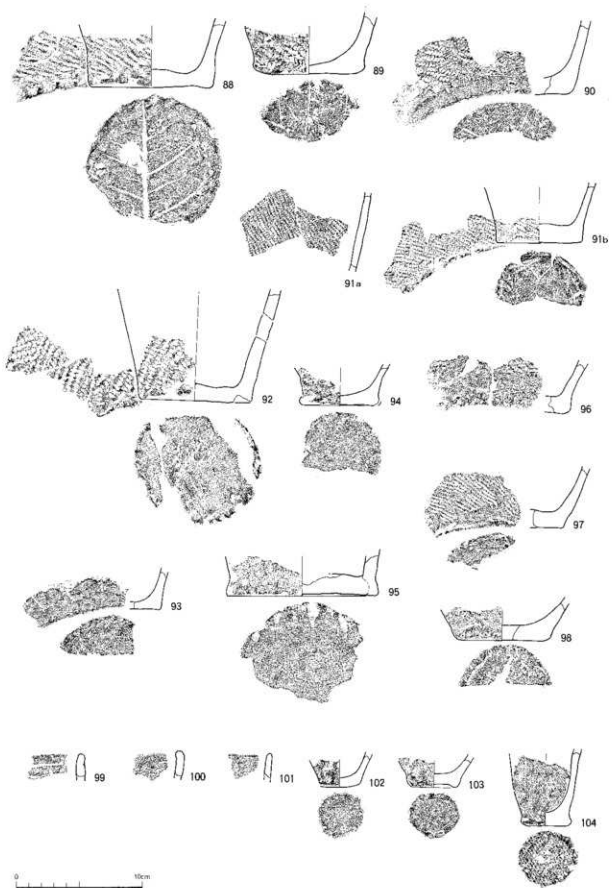
105は口縁部のみ。砂粒の混じらない精製な胎土で、丁寧に調整され口唇は角っている。この1点のみ当分類とした。胎土、調整の上で類似するものは出土していない。

Ⅴ群土器（図V-5-106～111、表V-2、図版37）

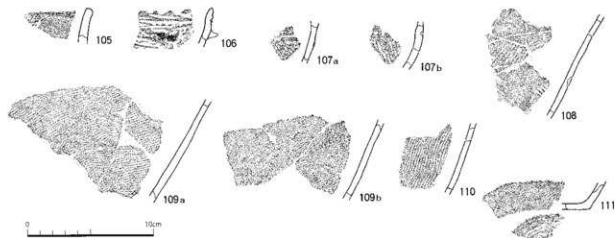
83点出土している。特に住居跡H-2周辺に多く出土する。106は鉢形土器の口頸部文様帯部分。口唇は細かい波状を呈し、沈線文と刺突文により装飾されている。107a、bは接合しないが同一個体



図V-3 包含層出土の土器(3)



図V-4 包含層出土の土器(4)



図V-5 包含層出土の土器(5)

とみられるもの。2条の沈線間に竹管状工具による刺突文がつけられている。地文は無節Rである。108は沈線文で区画された部分にLR斜行縄文がつけられているもの。鉢形土器の胴部とみられる。109、110は細かいLR斜行縄文が器面全体に施文されるもの。109a、bは接合しないが同一個体とみられる。111は底部片。斜めに立ち上がる器形を呈する。

2 石器等 (図V-6～26、表V-3、図版38～47)

調査により包含層から出土した石器等の総点数は、17,779点である。そのうち最多数を占めるのは、フレイクであり、16,798点出土し石器製作の断片とみられるRフレイク192点、石核62点を含めると総点数の96%を占めている。

剥片石器では、トランシェ様石器を含む筒状石器が破片も含め177点で最も多く、スクレイパー84点、石鏃30点、石錐13点、両面調整石器10点、石槍8点、つまみ付きナイフ5点などとなっている。

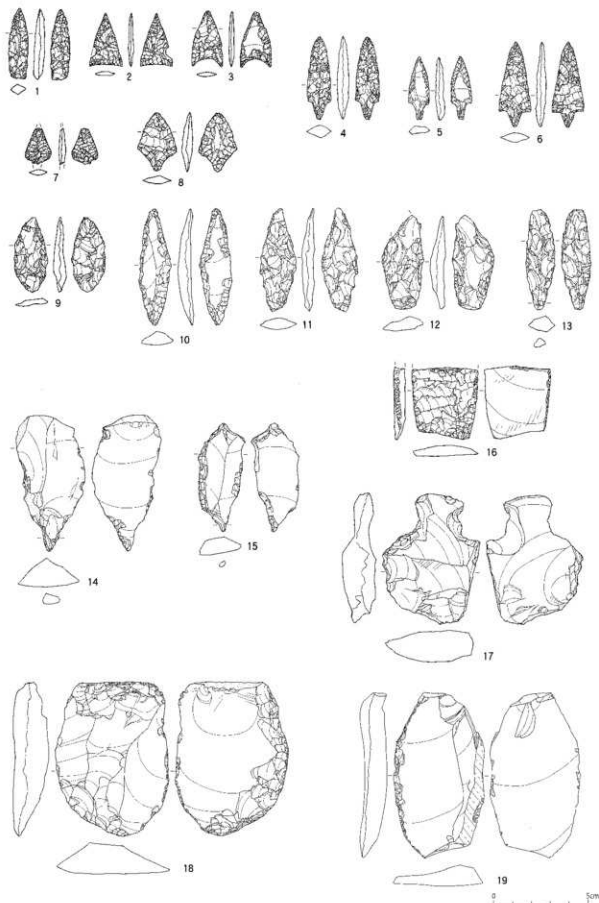
礫石器は、石斧が6点、その破片も8点出土している。すり石が破片も含め45点、たたき石37点、半円状扁平打製石器1点、石皿・台石が破片も合わせ7点となっている。

礫石器が少ないこと、またフレイク、石核、Rフレイクで90%以上を占めることなど、石器製作を主とする遺跡であることが各器種の点数に反映されているとみられる。

石鏃 (図V-6-1～9、表V-3、図版38)

石鏃は破片が1点を含む30点が出土している。1は細長のもの。同形のものは2点出土している。やや厚手で棒状に近いが、明瞭な尖頭部が作出される。2、3は三角形のもの。3点出土し、2点を図化した。2は黒曜石製。正面右辺の一部を欠損する。入念な細部調整が施され、薄手に仕上げられている。3は三角形のものうち、基部に抉りがあるもの。素材の背腹面を残しているが、両面にわたって細部調整がなされ、薄手に加工されている。

4～8は茎があるもの。18点出土し5点実測した。4、5は頁岩製。かえしが明瞭に作出されている。4はやや厚手に、5は素材の背腹面を残して加工されている。6は白色半透明のメノウを石材と



図V-6 包含層出土の石器(1)

する。入念に細部調整がなされ、側縁も直線状に整形されている。7は黒曜石製の小形のもの。両端を欠損しており、かえしは不明瞭である。8は幅広のもの。基部にアスファルト様の付着物がみられる。9は木葉型を呈するが、調整が粗く未成品とみられるものである。石材は頁岩製が最も多く、26点であり、黒曜石製が2点、メノウ1点、珪化岩1点となっている。なお図化した2点の黒曜石製石器は産地分析を行っている。2は94%以上、7は59%の確率で北海道赤井川村に産する黒曜石を用いているという結果となった（第Ⅶ章参照）。

石槍（図V-6-10～12、表V-3、図版38）

石槍は破片4点を含む8点が出土している。すべてが頁岩製で調整が粗く側面が直線でないものが多い。そのうち4点を図化している。10は縦長剥片を素材とし、両面にわたって浅い細部調整が施されている。器体が幾分反っているが、両端に尖頭部が作出される。11、12は同一グリッドの至近で出土したものの、いずれも両面に粗い細部調整がなされ、概ね木葉状に整形される。

石錐（図V-6-13～15、表V-3、図版38）

破片2点を含め13点が出土している。13は棒状のもの。2点のうち1点を図化した。粗く調整された石槍のようにも見える。器体がややねじれており、刺突部とみられる部分があるので当分類とした。14、15は剥片の一部に刺突部を作出したものの、8点のうち2点を図化した。いずれも縦長剥片の端部に刺突部が作出されている。

つまみ付きナイフ（図V-6-16、17、表V-3、図版38）

破片1点を含む5点出土している。16は端部の破片である。背面に入念な細部調整が施され、右側縁の腹面にも急角度の細部調整がなされている。調整方法から縄文時代早期のつまみ付きナイフの端部とみられる。17は剥片の一部に粗い調整でつまみ部が作出されるもの。

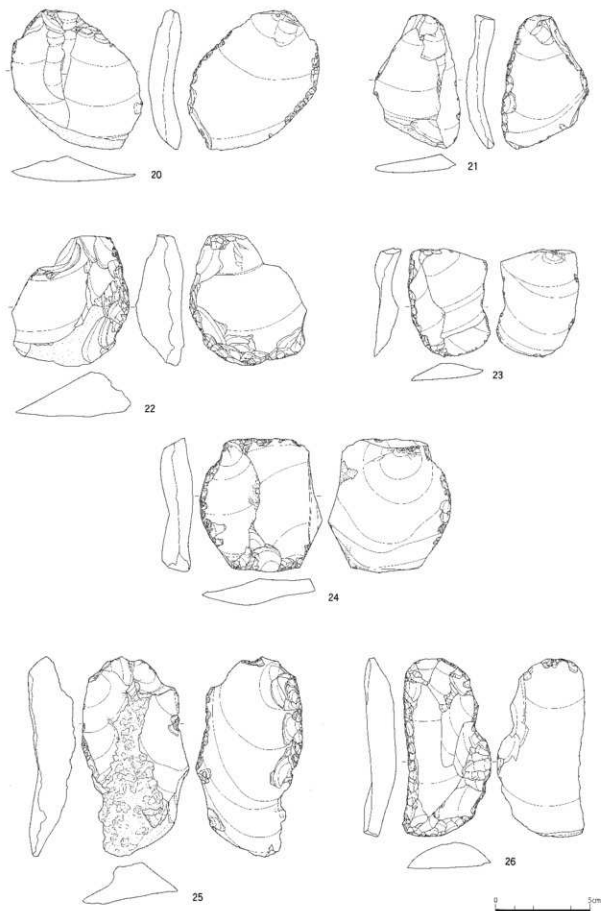
スクレイパー（図V-6-9-18～41、表V-3、図版38～40）

スクレイパーは84点出土している。18～25は縦長の剥片を用い、張り出す刃部がつくもの。同様なものは包含層から27点出土している。うち8点を図化した。18は節理面を打点とし、腹面右側縁を刃部とする。19は右側縁に原石面を残す。20、21は端部に原石面がある。腹面右側縁が細部調整され刃部としている。22は厚手の剥片を用いる。背面に原石面を残し、右側縁が両面に細部調整されるもの。23は左側縁を刃部とする。刃部付近は背腹両面に使用痕跡とみられる光沢が認められる。24はヒンジ部分の残る素材剥片を用い、左側縁が細部調整されるもの。細部調整は一部両面に及んでいる。25は背面に起伏の多い原石面を大きく残す剥片を用いるもの。腹面右側縁が細部調整される。

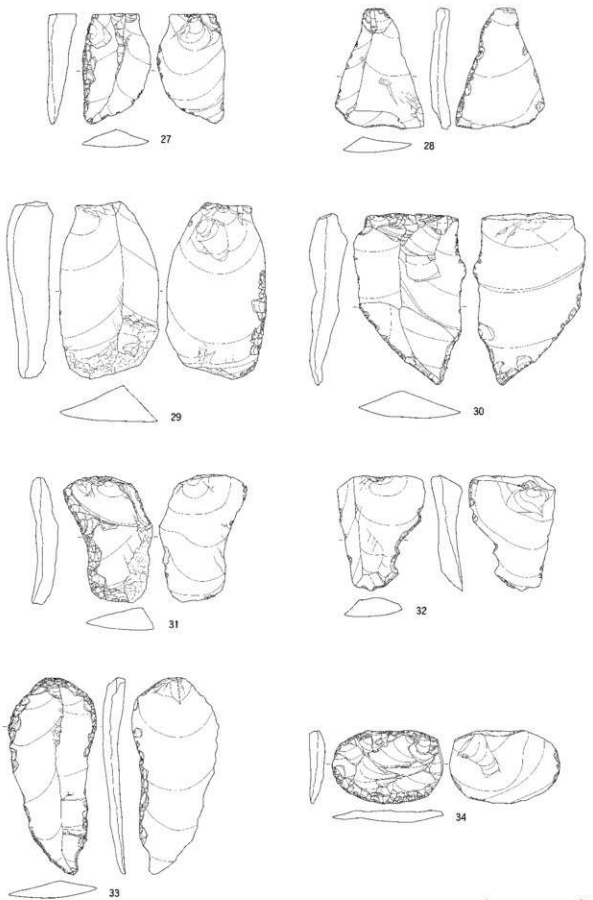
26～30は縦長剥片を用い、直線的な刃部がつくもの。17点出土し、5点を図化した。26は左側縁に丁寧な細部調整がなされ、刃部が作出されている。腹面刃部側には使用痕とみられる光沢が認められる。27は石刃様の剥片を用いる。28は台形様の剥片を用い、腹面左側縁に細部調整が施され、主要な刃部とするもの。刃部周辺は両面にわたり使用痕とみられる光沢が認められる。29は端部に原石面の残る剥片を用いるもの。腹面右側縁が一部細部調整される。刃部周辺に弱い光沢が認められる。30は左側縁の端部側を刃部とするもの。刃部付近にやや弱い光沢がある。

31～33は刃部が内側にカーブし、アーチ状を呈するもの。5点出土し、うち3点を図化している。31は背面右側に原石面を大きく残している。左側縁を刃部とする。32は打面に原石面が残る。右側縁が細部調整され、急角度の内湾する刃部が作出されている。33は薄手の剥片を用いる。腹面左側縁に細部調整が施され、内湾する刃部が作出される。

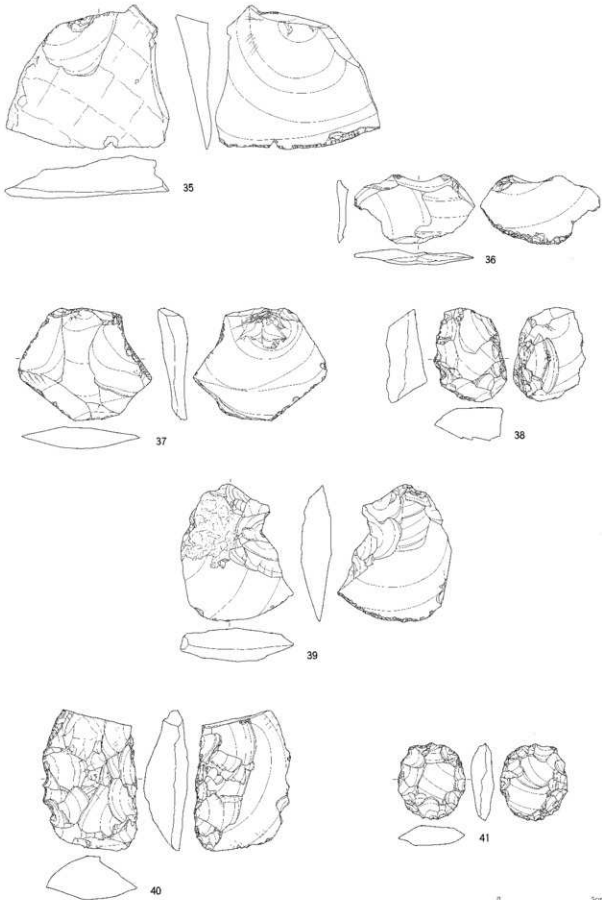
34～37は横長の剥片を用いるもの。8点が出土し4点を図化している。34は周縁が調整され楕円形を呈する。端部側を主要な刃部とし、使用痕とみられる明瞭な光沢を伴う。35、36は端部の腹面側に



図V-7 包含層出土の石器(2)



図V-8 包含層出土の石器(3)



図V-9 包含層出土の石器(4)

細部調整が施されるもの。35は節理面を除去とみられる剥片を用い、刃部の周囲にわずかな光沢が認められる。37は右側縁に内湾するアーチ状の刃部が作出されるもの。薄紫色の他に例のない頁岩を用いる。

38は素材剥片の半周以上に加工が施されるラウンドスクレイパー状のもの。この1点のみの出土である。厚手の剥片を用い、背面周縁に粗い調整が施されている。39は意図の不明瞭な二次加工を受けるもの。概ね縦長の剥片を用い、端部腹面側に微細な調整が施されるが、右側縁の背腹両面に粗く加工されている。刃部を利用したトランシェ様石器を製作途中の可能性もある。

両面調整石器 (図V-9-40、41、表V-3、図版40)

10点出土している。2点を図化した。40は原石面の残る縦長の剥片を用い、両面が調整される。端部を刃部としたトランシェ様石器の可能性もある。41は剥片の周縁を調整し、円盤状に整形されるもの。

トランシェ様石器 (籠状石器を含む) (図V-10-16-42~146、表V-3、図版40~44)

トランシェ様石器の定義によれば、形態の特徴として台形もしくは二等辺三角形であること。製作方法として刃部が石器の中で最も古い面をなすこととし、地理的には東北北部から北海道南部までに分布するとしている(富樫1976)。本遺跡においてもこの方針を踏襲し分類を行った。しかし製作遺跡という性格上、二次加工のみられる剥片、Rフレイクとの区分は困難を極めた。トランシェ様石器自体が粗い加工のものが多いに加え、加工途中の失敗品や結局使用に至らなかった不良品を多く含むためとみられる。出土品の実態を伝えることを目的に、なによりトランシェ様石器に「見える」ことを基準に分類した。従来スクレイパーの先端にあるべき籠状石器の一部であるトランシェ様石器をRフレイクの前としたのはこのような理由からである。また、狭義には含まれない刃部に二次加工がみられるものも含めた。これらの中からどのような形状を目指して製作され、使用に至ったかは、Ⅷ章の総括での課題としたい。

本遺跡での出土例は、素材剥片の長辺側縁を背腹両面から粗く調整し、台形~三角形に仕上げられている。長さを基準に三つに区分し、主に形態、刃部の形状、製作技法の特徴について記す。

小形(長さ5cm、幅3.5cm以下)(図V-10-42~68、表V-3、図版40、41)

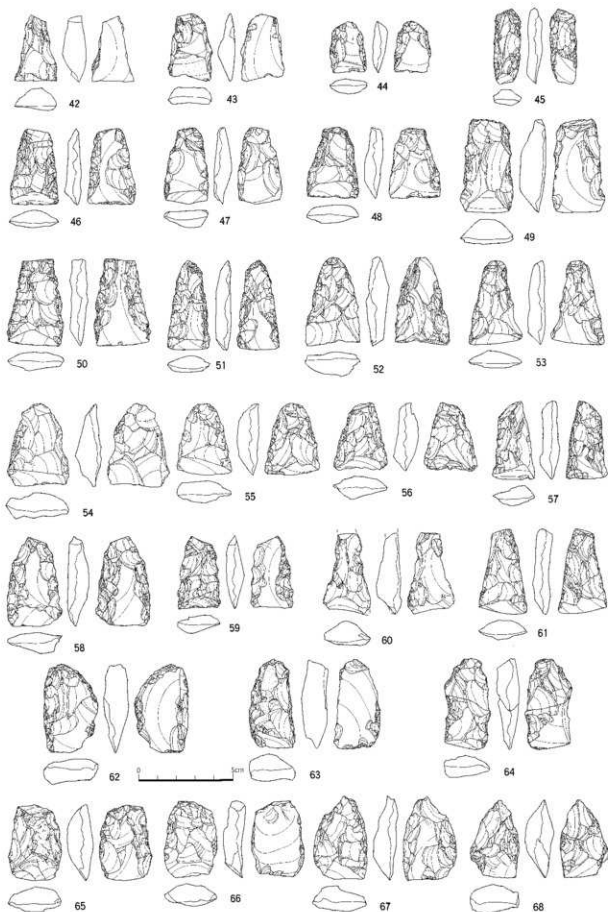
42~50は概ね台形を呈し短冊形のもの。42~45はトランシェ様石器としたもので4cm以下の最も小さなもの。形態は概ね正台形(42~44)、長方形に近いもの(45)がある。刃部正面観は42が直線状、43、45が正アーチ、44が逆アーチ状である。素材剥片は44の打点が上の縦位の剥片を用いるほかは横向けの剥片である。46~50は整った正台形を呈する。刃部正面観は50が直線状、48が正アーチ、46、47、49が逆アーチである。46、48は刃部腹面側に使用によるとみられる剥離痕がある。50は刃部にわずかな光沢と微細な剥離痕がある。素材剥片は48以外が横置き剥片を用いる。

51~55は概ね三角形を呈するもの。51~53は二等辺三角形に近い。51、53の刃部正面観は逆アーチを呈し、51の刃部腹面側には使用によるとみられる光沢がある。52は原石面もしくは節理面を刃部としている。54、55は正三角形に近い。54は刃部背面側に、左側縁から刃部を取り込む剥離を行う。刃部再生かもしれない。刃こぼれ状の微細剥離も認められる。

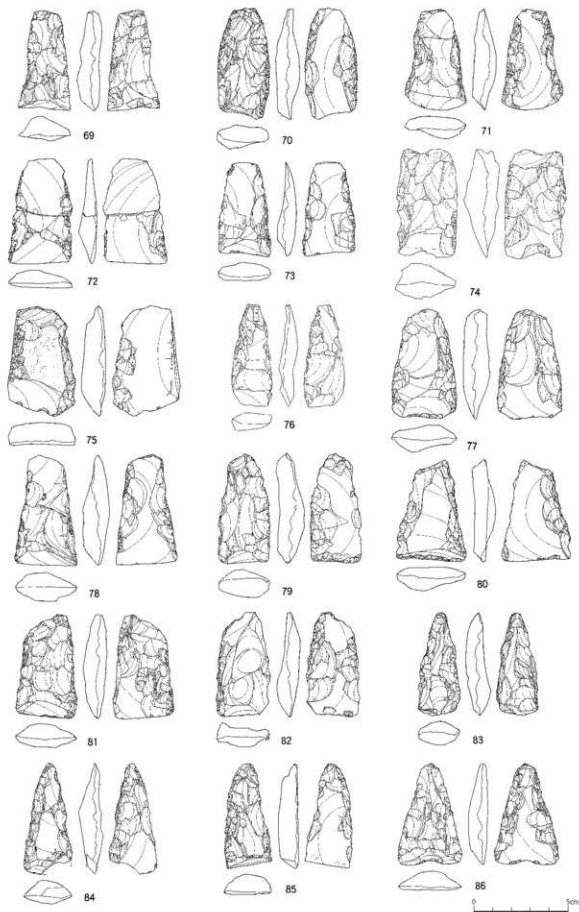
56~59は概ね台形を呈するが、上端が切出状のもの。56、57は刃部腹面側に細部調整がなされる。58、59の刃部は逆アーチ。上端は素材剥片の縁辺である。59の刃部背面側に微細な剥離痕がある。

60、61は概ね台形を呈し、側縁がやや抉れているもの。いずれの刃部もきれいな逆アーチである。

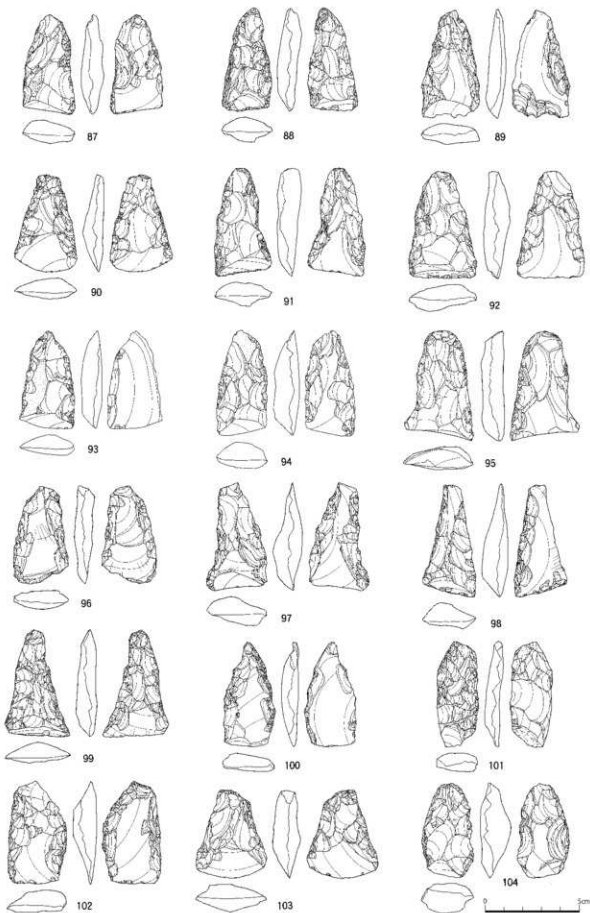
62~68は定形外ではあるが、類似の刃部をもつもの。62は右側縁に、63は背面に原石面を大きく残す。ともに刃部腹面側に微細な剥離痕がある。64は逆アーチ状の刃部腹面側に微細な剥離痕がある。



図V-10 包含層出土の石器(5)



図V-11 包含層出土の石器(6)



図V-12 包含層出土の石器(7)

65～68は幅広で長さが短いもの。65は背面に原石面を大きく残す。66は打点が上に位置する剥片を用いる。67、68の先端はやや尖る。68は背面側に原石面が残る。アーチ状の刃部背面にはごく微細な剥離痕が認められる。

中形（長さ6cm、幅4cm以下）（図V-11～13-69～110、表V-3、図版41、42）

69～82は概ね正台形を呈するもの。刃部正面観は71、75が正アーチ、69、70、72～74、77、80、81が逆アーチ。78が直線状でそのほかは調整などの影響により不明なものである。素材剥片の打点の位置は、上に位置するもの（A）がなく、右側縁を打点側とするもの（B）、69、70、72、73、75～77、80、81である。左側縁を打点とするもの（C）は71、74、76、78、79、82となっており、すべて横置きで剥片を用いるものである。71、73、77、81の刃部背面側に使用によるとみられる刃こぼれ状の剥離痕が認められる。72は接合したものの。右側縁の調整時に破断したものとみられる。79は刃部腹面側、80は刃部背面側に調整がみられる。79はパティナが二重となっており、ガジリの可能性が高い。

83～94は概ね三角形を呈するもの。刃部正面観は83が正アーチ。85～87、90、92～94が逆アーチであるほか、88、91が概ね直線状。84、89は調整により不明である。素材剥片の打点の位置はBが85、86、89、91、Cが84、87、90、92～94であるほかは不明である。85～87の刃部腹面側には使用によるとみられる光沢が認められる。88、91の刃部背面側には使用によるとみられる微細な剥離痕がある。83、89は刃部付近にも調整があり、加工失敗品の可能性がある。

95～102は側縁がやや挟れるもの。刃部正面観は正アーチのものではなく、逆アーチが98のみ他はほぼ直線状か、調整により不明なものである。素材剥片は96がA、100がB、97、98がCである。102は背腹両面に腹面を思わせる膨らみがあり、素材剥片の形状が不明である。98、99の刃部には腹面に明瞭な光沢があり、背面に微細な剥離痕が認められる。96の刃部背面側に剥離痕があるが、二重パティナとなっており、ガジリの可能性が高い。

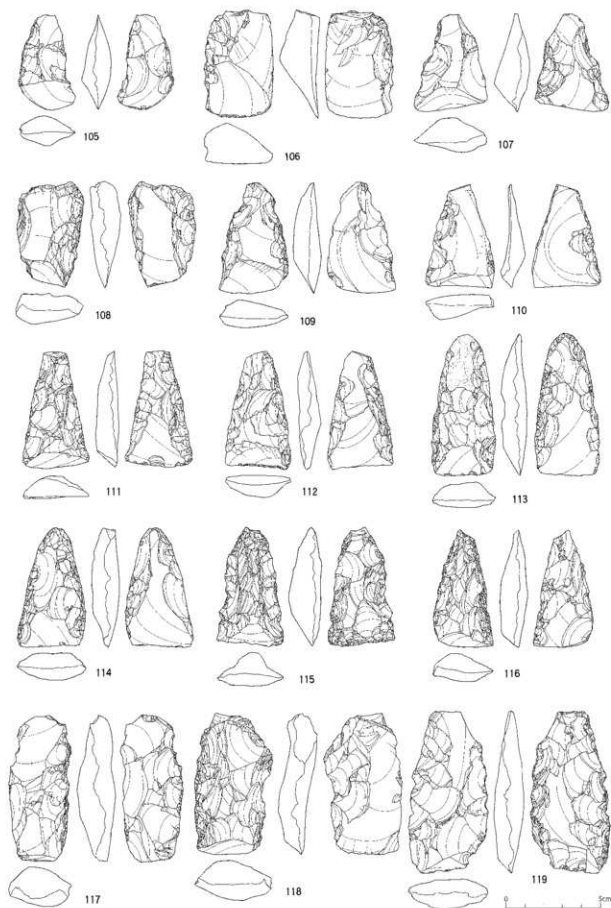
103～110は上記以外の形状、もしくは幅広のもの。刃部正面観は105、106が直線状となる以外は逆アーチである。素材剥片は106がA、103、104、108～110がB、105、107がCである。106の刃部背面側には使用によるとみられる微細な剥離痕がある。105は刃部右側縁の横方向の剥離痕が最も新しく、刃部再生かもしれない。

大形（長さ6cm、幅4cmを超えるもの）（図V-13～16-111～146、表V-3、図版42～44）

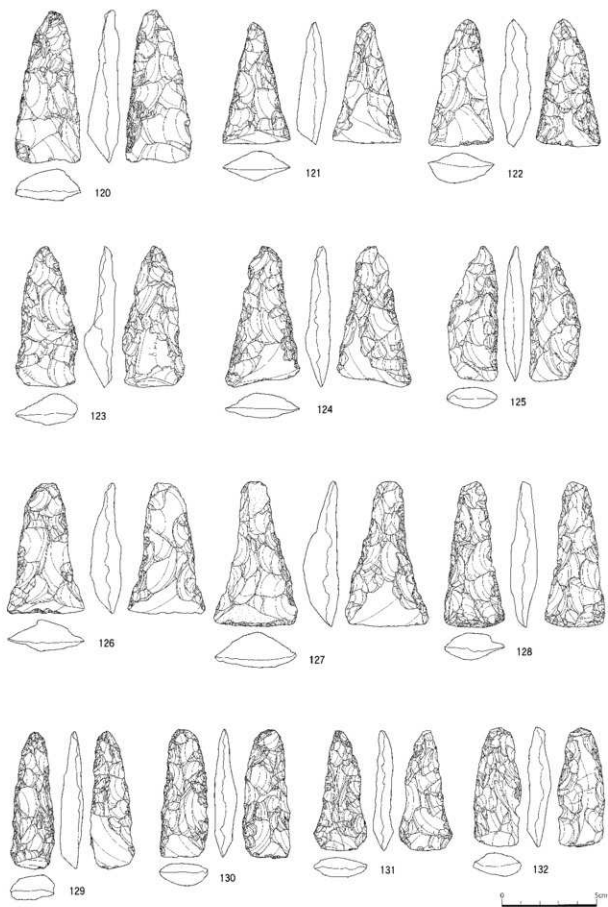
111、112、115～119は概ね正台形を呈するもの。刃部正面観は、115が正アーチ。112、116、118が逆アーチ。111が直線状である。素材剥片は117、118がA、111、116がB、112がCである。111には刃部腹面にわずかな光沢と微細剥離痕。112には刃部背面に微細剥離痕がある。115は刃部腹面が細部調整され、アーチ状の刃部が作出されている。117は刃部を上に変化した。119は刃部腹面に調整痕がある。

113、114、120～127は概ね三角形を呈するもの。126、127はやや側縁に挟りがある。刃部の形状が判然とするものは、124、125が直線状。120、123が判然としなほはわずかな逆アーチを呈する。素材剥片は123が不明であるほかはすべて横置きで、Bが114、120～122、124、125、Cが113、126、127である。120、121は刃部腹面に光沢が認められる。120は刃部を再生するような右側縁からの剥離痕がある。113、122、126、127には刃部に微細な剥離痕がある。

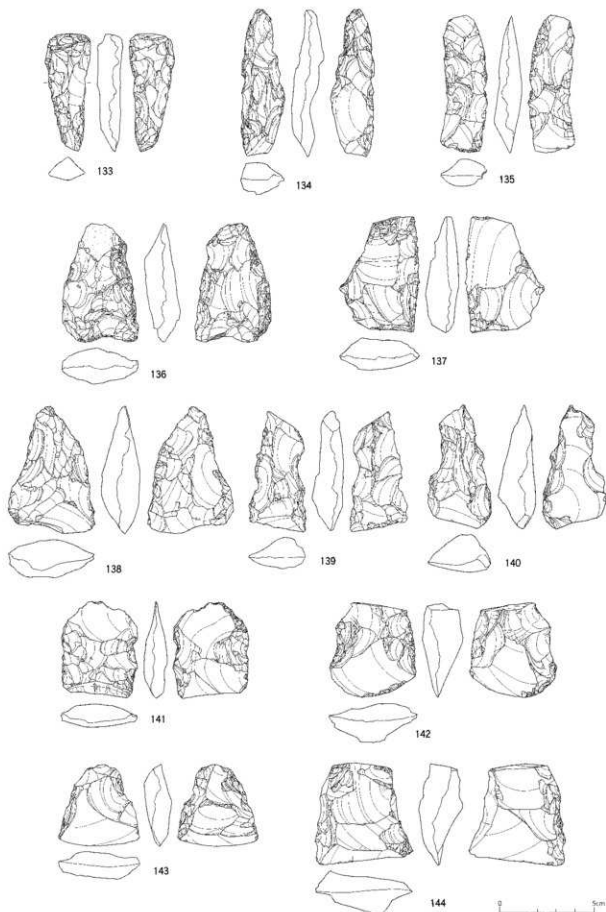
128～135は細身のもの。うち128～132は概ね正台形～三角形を呈する。133～135はそれ以外の形状である。刃部正面観の形状は、128、129、131、132が逆アーチ。130、134、135が直線状。133は幅が狭く判別不能である。素材剥片は、133がA、129と135がB、132がCである。129の刃部腹面にはわずかな光沢が認められる。130の刃部背面には微細な剥離痕がある。128は刃部両面が調整され、やや



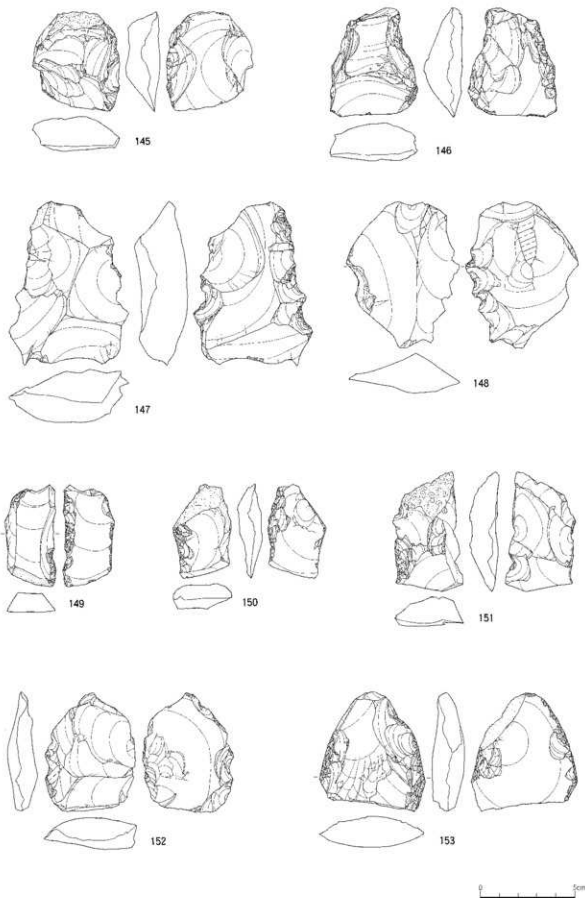
図V-13 包含層出土の石器(8)



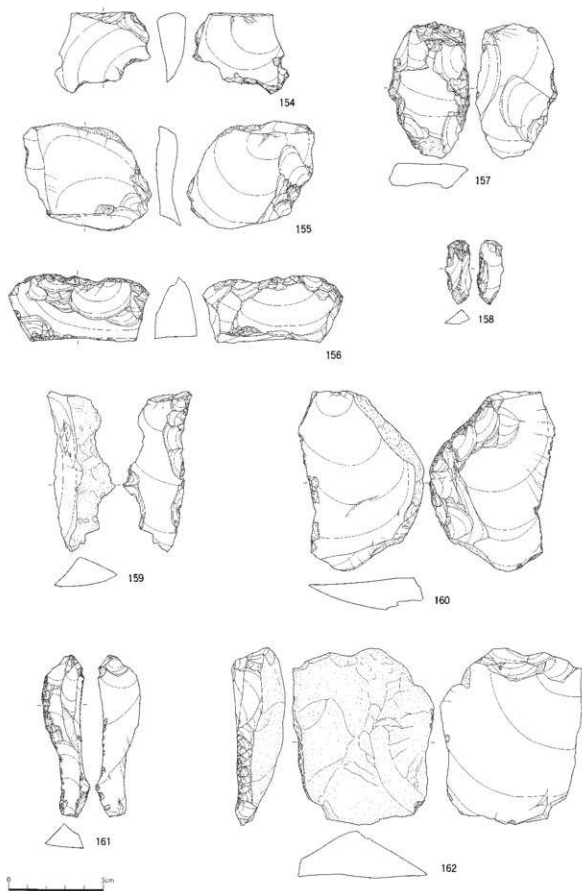
図V-14 包含層出土の石器(9)



図V-15 包含層出土の石器(10)



図V-16 包含層出土の石器(11)



図V-17 包含層出土の石器(12)

凸凹するが逆アーチの刃部が作出されている。135は刃部背面側にいくつかの調整痕がみられる。133は幅狭であるが刃部がある。

136~140は上記に含まれない形状で、未成品もしくは失敗品の可能性があるもの。

141~146は長さや幅に近い幅広のものをまとめた。刃部の形状は141~143、146が逆アーチ。144は判然とせず、145が直線的である。素材剥片は144が不明であるほかは横置き剥片で、Bが141~143、145で146はCである。142には刃部背面側に、146には腹面側にわずかに微細剥離痕がある。

Rフレイク (図V-16~18-147~166、表V-3、図版44、45)

191点出土している。20点を図化した。147、148は主に腹面側に粗い調整が施されるもの。両面調整石器の未成品の可能性もある。149~152は形態からトランシェ様石器を製作したとみられるが、加工途中のものである。153~158は剥片石器の製作を試みるが未遂に終わっているもの。154は剥片端部に抉り状の加工が施される。158は石錐かもしれない。159~164は、剥片に意図の不明瞭な調整加工が施されるもの。159、160は厚手で細身の剥片の一部に加工が施される。161~164は原石面の残る比較的大形の剥片の一部に加工が施される。161の左側縁は刃こぼれ状の微細剥離があり、腹面側にはわずかに光沢が認められる。165、166は石核状のもの。いずれも原石の3分の1ほどの大きさを剥離し、剥離面と側面に数枚の剥離を行うもの。

Uフレイク (図V-18、19-167~174、表V-3、図版45、46)

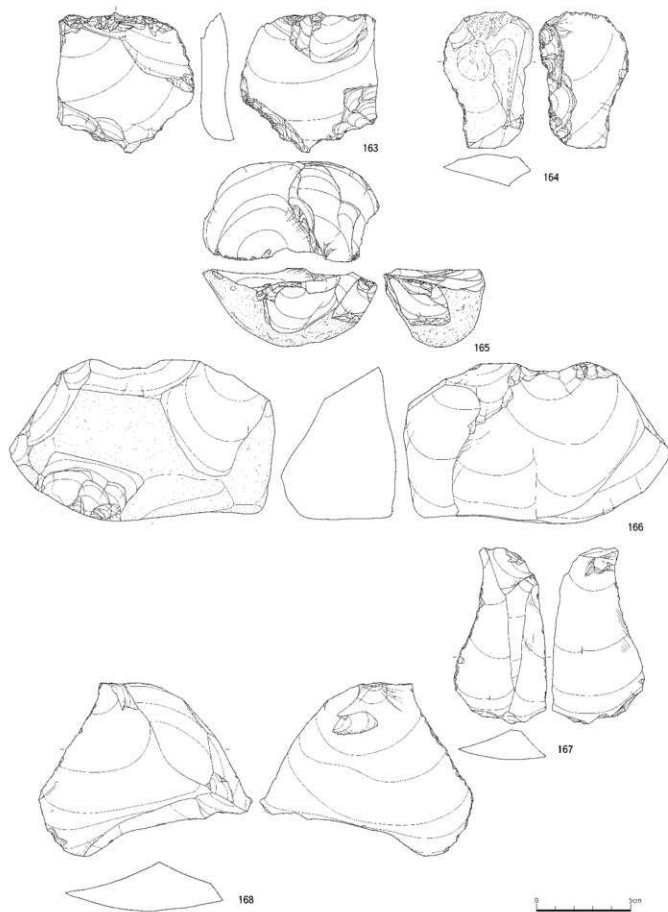
67点出土している。8点を図化した。167~169、174は縦長剥片、170、171は横長剥片の側縁に微細な剥離が認められるもの。169の右側縁、171の端部には光沢も認められる。172、173はトランシェ様石器と同様な用途で利用されたとみられるもの。

石核 (図V-19、20-175、176、表V-3、図版46)

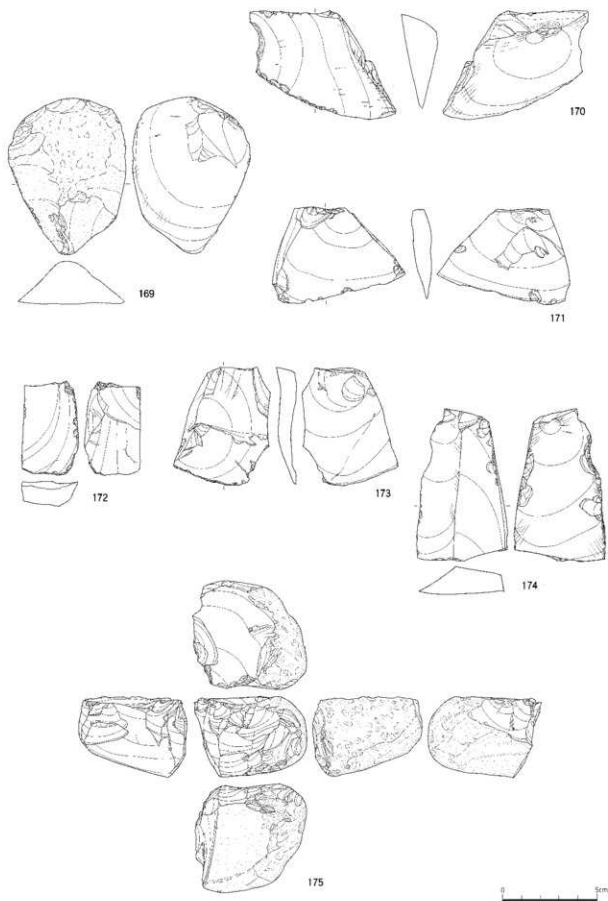
62点出土している。2点を図化した。175は石材1の頁岩。3面に原石面が残る小形の原石を利用する。176は石材2の頁岩。節理割れを起こした石片から内側の良く珪化した部分を取り込むように、不定方向からの剥離が試みられている。

石斧関連遺物 (図V-21-177~179、表V-3、図版46)

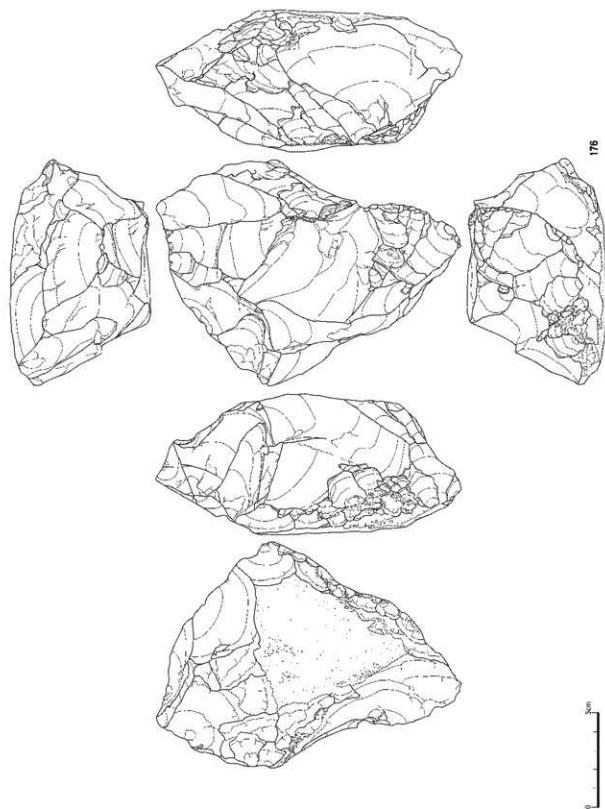
石斧は破片も含めて14点出土している。その内訳は石斧6点、概ね完形の2分の1以下とみられる石斧片4点、剥片状の石斧細片が4点となっている。このうち石斧3点を図化した。117は扁平な凝灰岩を粗く整形して製作されているものである。器面に調整痕が明瞭に残されている。なお、基端は丸みを帯び基部は直線状。刃部はほぼ直刃で若干片刃となる。横方向の調整痕が残り完全には研がれていない。刃部の刻みは石材の硬軟によるものであろう。178は緑色片岩製。剥片状の破片を研ぎだして石斧状にしたもの。左右非対称で基部が丸みを帯びる。右側縁の丸みが強く敲打痕を残す。刃部は左上がりの偏刃を呈し直線状でやや片刃である。179は緑色泥岩製。基部が膨らみを帯びる短冊状を呈する。刃部はやや右上がりの偏刃で明瞭な片刃である。基部周辺に敲打痕が残る。



図V-18 包含層出土の石器(13)



図V-19 包含層出土の石器(14)



図V-20 包含層出土の石器(15)

たたき石 (図V-21、22-180~191、表V-3、図版46、47)

たたき石は37点出土している。180、181は楕円形を呈する礫を用いるもの。11点が出土している。180はデイスait礫を素材とする。断面形も楕円形を呈し、卵状を呈する礫の端部に近い位置に弱い敲打痕がみられる。同様に端部に敲打痕があるものは11点中、8点である。181は断面形が長楕円形で扁平な輝石安山岩礫を用いるもの。背腹の平坦な部分に使用部分が明らかにくぼむ明瞭な敲打痕を有する。背腹に敲打痕があるものは11点中3点である。

182、183は「L」字状に一部に突出部のある、概ね扁平な礫を素材とするもの。2点出土しすべて図化した。182は珪岩、183はチャート製である。ともに突出部を含めた端部に明瞭な敲打痕があり、使用面は変形し平坦になるほどである。

184~189は丸みを帯びたいびつな礫を素材とする。言葉に表現しがたいが、185、186はいびつな楕円形、187~189はいびつな球形を基調とした持ちやすく共通する特徴をもつ。12点が出土し、6点を図化した。184~186は主に端部を中心に敲打痕があるもの。同様なものは12点中9点ある。184は概ね三角形を呈する。3か所すべての端部に敲打痕が認められる。185、186は砂岩製。185は端部のほかに稜線の一部にも敲打痕がある。187、188は周縁に広く敲打痕があるもの。出土した2点すべて図化した。いずれも庭球大のいびつな砂岩礫を素材とし、端部と長辺の稜線に明瞭な敲打痕がある。189は卵大の珪岩礫を用いる。端部周辺に明瞭な敲打痕がある。

190、191は上記の細分に含まれない10点の中からの2点である。190は砂岩の扁平礫を用い、端部が敲打されるほか、周縁に打ち欠きがみられる。191は断面が台形を呈する柱状のデイスait礫を用い、一稜に打ち欠きを伴う敲打が認められるもの。

すり石 (図V-22、23-192~201、表V-3、図版47)

破片も含め46点が出土している。

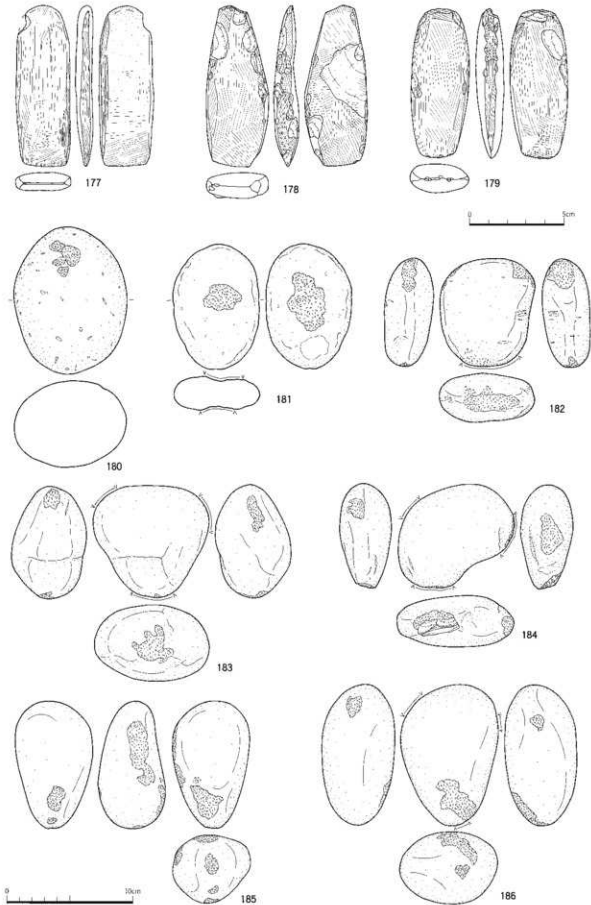
192~198はいわゆる断面が三角形を呈するもの。長辺10cm以下の破片としたもの19点を含み39点が出土している。192、193はデイスait製。すり面の幅がやや広めのもので、いずれも2.1cmである。194は砂岩製でたたき石と複合するもの。端部と表面の幅広部分の中央に敲打痕がある。素材礫の長辺の一稜に擦り痕がある。195、196は安山岩製。195は一稜に最大で2.4cmの幅広な使用痕がある。196は石皿片の転用品の可能性のあるもの。一稜に細い使用痕があるほか、正面の平坦面は平滑に擦られる部分がある。197、198は流紋岩製。197は表面がすべすべした礫を用いる。一稜を使用し、最大1.0cmの幅の狭い使用痕がある。198は多孔質の礫の二稜を使用する。使用面は幅広で、最大2.5cmである。

199、200は扁平礫の一面を使用面とするもの。出土した2点すべてを図化した。199は安山岩を素材とし、長辺の一辺を擦ったもの。200は輝石安山岩礫の表面に擦り痕があるもの。

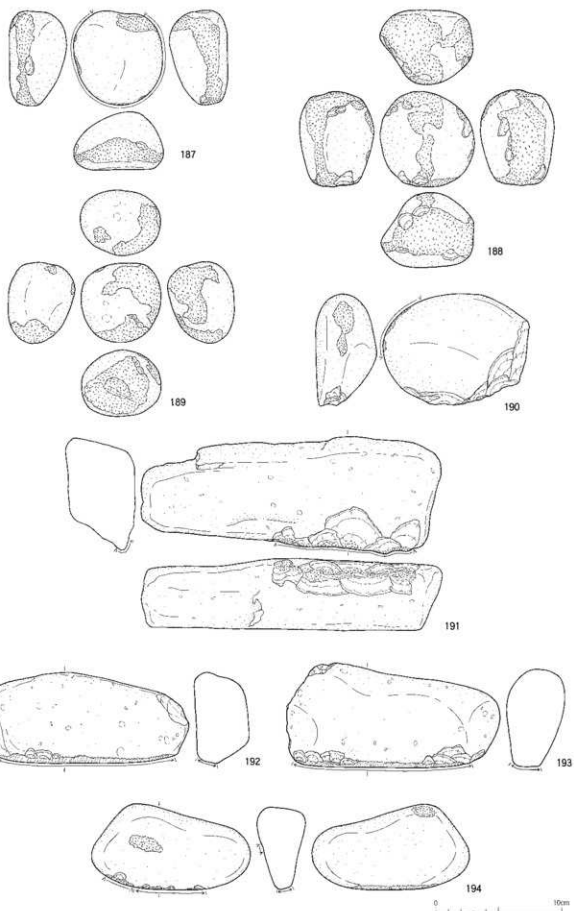
201はいわゆる扁平打製石器。この1点のみ出土している。3分の1ほどは欠損し、全体は不明であるが、デイスaitの扁平礫を用いて周縁を打ち欠き一稜に使用面があるもの。

石皿・台石 (図V-23-202、表V-3、図版47)

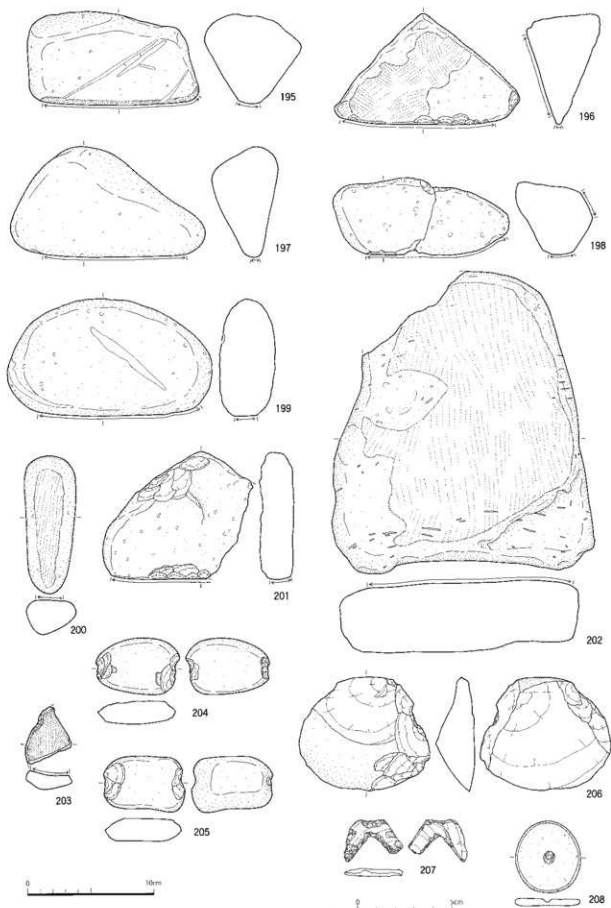
石皿・台石は破片3点を含む7点が出土している。202はデイスaitの扁平礫を用い、表面を使用するもの。使用面は平滑である。



図V-21 包含層出土の石器(16)



図V-22 包含層出土の石器(17)



図V-23 包含層出土の石器(18)・石製品

砥石（図V-23-203、表V-3、図版47）

砥石は図化した1点のみの出土である。203は破片とみられ、全体の形状が不明であるが、凝灰岩の礫を用い、一面を使用するもの。使用面は平滑で擦痕を残しており、くぼみが認められる。

石錘（図V-23-204、205、表V-3、図版47）

石錘は3点出土し2点を図化した。図化していないものも含め、すべて扁平な砂岩の長辺両端を加工するものである。204は背腹両面からえぐり部分が加工され、205は背面のみから加工される。

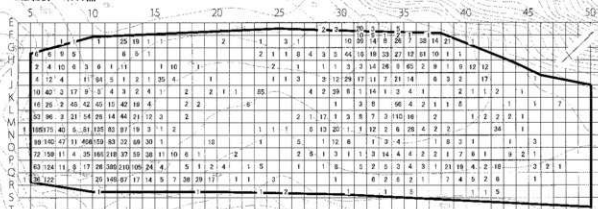
加工痕のある礫（図V-23-206、表V-3、図版47）

加工痕のある礫は3点出土している。そのうち1点を図化した。206は砂岩の剥片を用い、平面側に意図の不明瞭な加工が認められるもの。

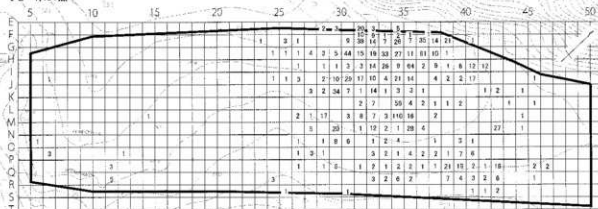
石製品（図V-23-207、208、表V-3、図版47）

2点出土し、すべて図化した。207は頁岩製。いわゆる異形石器とみられるもの。208は安山岩の扁平な小礫を用い、中央に穿孔を試みた痕跡があるもの。玉の未成品とみられる。

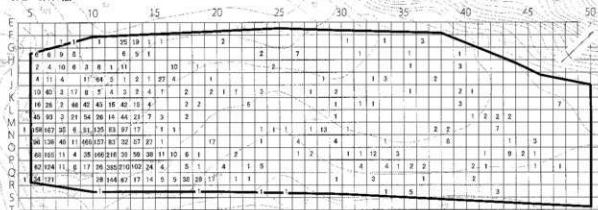
土器総計 7,018点



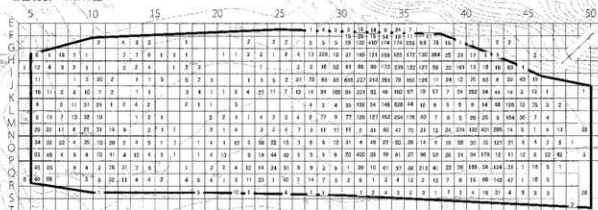
I a 1,401点



IV a 5,437点

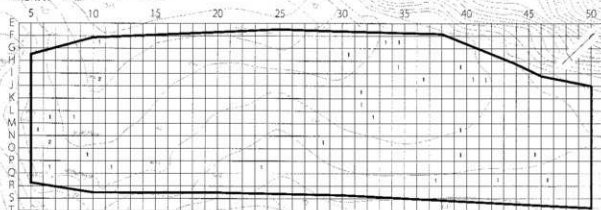


石鏝総計 17,779点

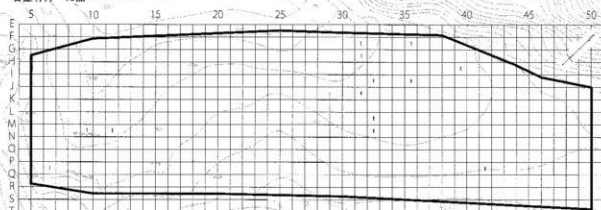


図V-24 グリッド別出土点数(数)

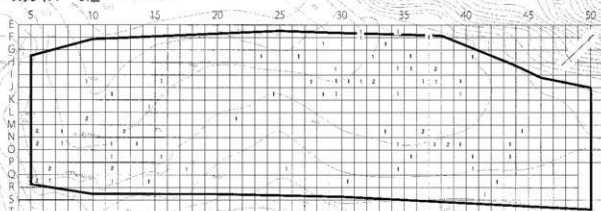
石鏡(片) 30点



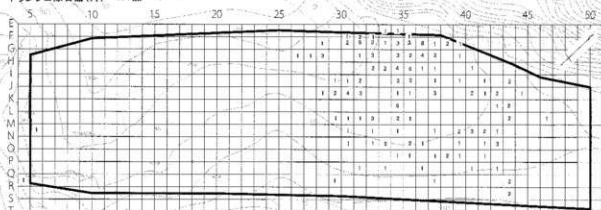
石鏡(片) 13点



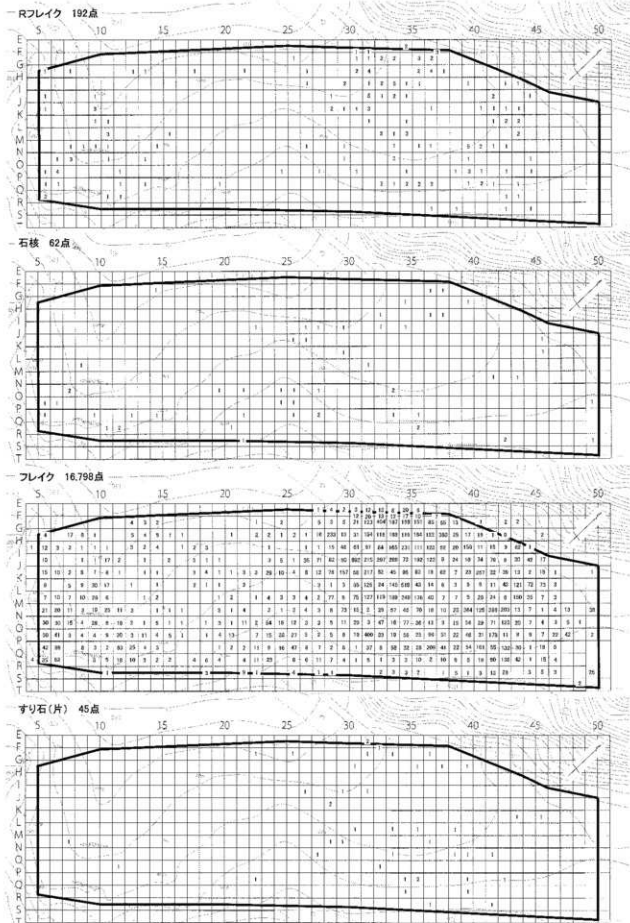
スクレイパー 84点



トランシェ様石器(片) 177点



図V-25 グリッド別出土点数(2)



図V-26 グリッド別出土点数(3)

表V-1 包含層出土復元土器

周縁号	番号	分類	グッド・遺構	番号	層位	遺物番号	点数	未接合・接合	特徴	胎土中の主な混入物		
ⅧV-2	35	Ⅳa	M	9	Ⅱ	6	2	接合	胸部上平面に付く大きな彫り筋が直線的な点線文	砂粒(チャーナー)・骨針		
				M	10	Ⅱ	4	9			接合	
				M	10	Ⅱ	5	6			接合	
				M	10	Ⅱ	7	21			15	接合
				N	9	Ⅱ	3	3			接合	
				N	10	Ⅱ	3	2			未接合	
		同一個体未接合計		7								

表V-2 包含層出土拓本土器一覧

周縁号	番号	拓本番号	分類	グッド・遺構	番号	層位	遺物番号	点数	未接合・接合	特徴	胎土中の主な混入物								
ⅧV-1	1	48	Ⅰa	R	40	Ⅰ	1	1	-	9段の爪彫り文の深さ時代別(第3)と自然土質	中心部に付いたチャーナー・骨針・骨片の混入								
												2a	12-a	L	34	Ⅱ	3	4	接合
												2b	12-b	L	34	Ⅱ	3	2	接合
ⅧV-1	2d	12-d	Ⅰa	L	34	Ⅱ	3	2	接合	9段の爪彫り文の深さ時代別(第3)と自然土質	磨りつぶされた砂粒・骨針								
					L	34	Ⅱ	4	2			接合							
					L	34	Ⅱ	4	2			接合							
					L	34	Ⅱ	4	2			接合							
					L	34	Ⅱ	5	1			接合							
		同一個体未接合計		12															
ⅧV-1	3	44	Ⅰa	M	27	Ⅱ	1	2	接合	3段爪彫り文、目録の刻み	上段の白皮、海綿骨針								
					M	27	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	4	43	Ⅰa	L	34	Ⅱ	4	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					L	34	Ⅱ	4	1			接合							
ⅧV-1	5a	46-a	Ⅰa	E	31	Ⅱ	1	4	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					Q	33	Ⅱ	1	2			接合							
ⅧV-1	6	26	Ⅰa	F	37	Ⅰ	2	2	接合	2段爪彫り文	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					Q	37	Ⅰ	4	1			接合							
ⅧV-1	7	34	Ⅰa	J	29	Ⅱ	1	1	接合	2段爪彫り文、筋条状彫り文	石・骨針・骨片・チャーナー・骨針・骨片の混入								
					N	30	Ⅱ	2	1			接合							
ⅧV-1	9	37	Ⅰa	J	29	Ⅱ	2	1	接合	2段爪彫り文	石・骨針・骨片・チャーナー・骨針・骨片の混入								
					N	30	Ⅱ	2	1			接合							
ⅧV-1	10	41	Ⅰa	L	28	Ⅱ	2	2	接合	9段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					L	28	Ⅱ	2	2			接合							
ⅧV-1	11	28	Ⅰa	G	34	Ⅱ	1	1	接合	9段爪彫り文、目録の刻み	石・骨針・骨片・チャーナー・骨針・骨片の混入								
					Q	30	Ⅱ	1	2			接合							
ⅧV-1	12	30	Ⅰa	J	27	Ⅱ	1	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					J	27	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	13	31	Ⅰa	G	28	Ⅱ	1	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					E	34	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	14	24	Ⅰa	H	35	Ⅱ	3	3	接合	3段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					E	34	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	15	33	Ⅰa	H	39	Ⅱ	1	1	接合	3段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					H	39	Ⅱ	2	2			接合							
ⅧV-1	16	47	Ⅰa	Q	38	Ⅱ	1	1	接合	3段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					Q	38	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	17	32	Ⅰa	H	35	Ⅲ	3	1	接合	3段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					H	35	Ⅲ	3	1			接合							
ⅧV-1	18	39	Ⅰa	K	36	Ⅱ	1	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					F	34	Ⅱ	1	2			接合							
ⅧV-1	19	25	Ⅰa	F	34	Ⅱ	1	2	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					F	34	Ⅱ	1	2			接合							
ⅧV-1	20	42	Ⅰa	L	27	Ⅱ	1	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					G	36	Ⅲ	3	1			接合							
ⅧV-1	21	29	Ⅰa	G	36	Ⅲ	3	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					E	31	Ⅲ	3	1			接合							
ⅧV-1	22	23	Ⅰa	E	31	Ⅱ	1	1	接合	2段爪彫り文、目録の刻み	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					E	31	Ⅱ	1	1			接合							
ⅧV-1	23a	35-a	Ⅰa	G	33	Ⅱ	1	4	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					L	34	Ⅱ	1	4			接合							
ⅧV-1	23b	35-b	Ⅰa	P	33	Ⅱ	2	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針								
					P	33	Ⅱ	2	1			接合							
		同一個体未接合計		1															

ⅧV-1	24	27	Ⅰa	L	34	Ⅲ	3	1	接合		石・骨針・骨片・チャーナー・骨針	
					L	35	Ⅲ	4	1			接合
					F	36	Ⅲ	4	1			未接合
ⅧV-1	25	38	Ⅰa	J	29	Ⅱ	2	4	未接合		石・骨針・骨片・チャーナー・骨針	
					J	29	Ⅱ	1	1			未接合
ⅧV-1	26	6	Ⅰa	G	30	Ⅱ	2	1	接合	内側した胎土		
					FC	10	Ⅲ	11	1			未接合
					FC	11	Ⅱ	2	1			未接合
					K	35	Ⅲ	1	1			接合
					K	35	Ⅲ	2	1			接合
ⅧV-1	27	40	Ⅰa	K	35	Ⅲ	1	1	接合	海綿骨針、石		
					K	35	Ⅲ	2	1			接合
					K	35	Ⅲ	2	1			接合
ⅧV-1	28	175	Ⅱa	I	38	Ⅱ	1	1	-	縄線	石・骨針・骨片・チャーナー・骨針	
					I	38	Ⅱ	1	1			-
ⅧV-1	29	177	Ⅲa	J	9	Ⅱ	1	1	-	行彫り文	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					J	9	Ⅱ	1	1			-
ⅧV-1	30	36	Ⅲa	I	29	Ⅱ	2	1	未接合	磨りつぶされた砂粒	内側した胎土	
					I	29	Ⅱ	2	1			未接合
					I	29	Ⅱ	3	1			未接合
ⅧV-1	31	176	Ⅲa	N	7	Ⅱ	2	1	未接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					N	7	Ⅱ	2	1			未接合
ⅧV-1	32	178	Ⅲa	O	29	Ⅱ	1	3	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					O	29	Ⅱ	1	3			接合
ⅧV-1	33	179	Ⅲb	P	13	Ⅱ	2	1	-	短爪彫り文	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					P	13	Ⅱ	2	1			-
ⅧV-1	34	180	Ⅲa	O	5	Ⅱ	6	3	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					O	5	Ⅱ	6	3			接合
ⅧV-2	36	118	Ⅳa	K	9	Ⅱ	4	3	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					K	9	Ⅱ	4	3			接合
ⅧV-2	37	121	Ⅳa	F	13	Ⅲc	1	1	-	短爪彫り文	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					F	13	Ⅲc	1	1			-
ⅧV-2	38	120	Ⅳa	M	11	Ⅱ	2	1	-	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					M	11	Ⅱ	2	1			-
ⅧV-2	39	119	Ⅳa	I	10	Ⅱ	3	1	-	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					I	10	Ⅱ	3	1			-
ⅧV-2	40	123	Ⅳa	L	17	Ⅰ	1	1	-	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					L	17	Ⅰ	1	1			-
ⅧV-2	41a	142-a	Ⅳa	N	9	Ⅱ	6	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					N	9	Ⅱ	5	1			接合
					N	9	Ⅱ	6	1			接合
ⅧV-2	41b	142-b	Ⅳa	M	6	Ⅱ	7	2	未接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					M	6	Ⅱ	7	2			未接合
ⅧV-2	42	128	Ⅳa	P	13	Ⅱ	3	7	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					P	13	Ⅱ	3	7			接合
ⅧV-2	43	122	Ⅳa	K	39	Ⅱ	2	2	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					K	39	Ⅱ	2	2			接合
ⅧV-2	44	132	Ⅳa	P	6	Ⅱ	5	2	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					P	6	Ⅱ	5	2			接合
ⅧV-2	45	111	Ⅳa	K	6	Ⅱ	2	1	-	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					K	6	Ⅱ	2	1			-
ⅧV-2	46	114	Ⅳa	K	9	Ⅱ	3	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					K	9	Ⅱ	3	1			接合
ⅧV-2	47	116	Ⅳa	O	11	Ⅱ	3	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					O	11	Ⅱ	3	1			接合
ⅧV-2	48	108	Ⅳa	F	13	Ⅲc	1	1	-	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					F	13	Ⅲc	1	1			-
ⅧV-2	49	110	Ⅳa	N	6	Ⅱ	2	2	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					N	6	Ⅱ	2	2			接合
ⅧV-2	50	113	Ⅳa	L	9	Ⅱ	3	2	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					L	9	Ⅱ	3	2			接合
ⅧV-2	51a	138-a	Ⅳa	M	9	Ⅱ	6	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					M	9	Ⅱ	6	1			接合
ⅧV-2	51b	138-b	Ⅳa	M	9	Ⅱ	6	2	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					M	9	Ⅱ	6	2			接合
ⅧV-2	52	109	Ⅳa	K	8	Ⅱ	5	2	未接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					K	8	Ⅱ	5	2			未接合
ⅧV-2	53	115	Ⅳa	N	9	Ⅱ	3	1	接合	磨りつぶされた砂粒、骨針	磨りつぶされた砂粒、骨針	
					N	9	Ⅱ	3	1			接合

図版図号	番号	拓本番号	分類	グループ番号	別位	遺物番号	未接合点数	特徴	胎土中の主な混入物
図V-2	54	106	Iva	M 10 M 10 I 1 II 5	1	1	1	磁器による土質、珪、砂、石灰質	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
図V-2	55	107	Iva	O 9 I 1	1	1	1	一般文様の磁器	同上
図V-2	56	117	Iva	O 6 I 1	1	1	1	彫刻文・磁器	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
図V-2	57	112	Iva	O 10 II 4	1	1	1	彫刻面に磁器	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
図V-2	58	102	Iva	P 11 P 19 Q 13 P 14 P 14	II 6 II 1 II 1 II 2 II 2	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1	磁器支型による彫刻文様	同上
図V-2	59	104	Iva	同一個体未接合計	11	4	1	未接合	同上
図V-2	60	103	Iva	N 9 N 19 O 10 P 11 P 11	II 4 II 4 II 4 II 6 II 8	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1	彫刻土質、珪質、砂、チャート	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
図V-3	61	145	Iva	Q 11 II 11	II 5	2	1	磁器による土質	同上
図V-3	62a	105-a	Iva	P 14 II 2	II 1	2	1	彫刻文	同上
図V-3	62b	105-b	Iva	P 14 II 3	II 1	3	1	彫刻文	同上
図V-3	63	155	Iva	Q 14 I 1	I 1	1	1	中級文書による文様	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
図V-3	64	154	Iva	L 14 II 4	II 1	4	1	2本一組の文様	同上
図V-3	65	156	Iva or Ia	F 36 I 2	I 2	2	1	彫刻面に文様	同上
図V-3	66	153	Iva	G 5 II 1	I 1	1	1	彫刻文、赤褐色	同上
図V-3	67	127	Iva	G 5 II 2	II 1	2	1	彫刻文様	同上
図V-3	68	124	Iva	N 9 N 9 II 6 II 5	II 6 II 5	2 1	1	一般文様の磁器	同上
図V-3	69	125	Iva	N 8 II c	I 1	1	1	一般文様の磁器	同上
図V-3	70	129	Iva	M 7 I 1	I 1	1	1	一般文様の磁器	同上
図V-3	71	126	Iva	M 9 M 10 II 5 II 2	II 6 II 5 II 2	1 1 1 1	1 1 1 1	一般文様の磁器	同上
図V-3	72	140	Iva	M 38 M 38 M 38	II 3 II 3 II 2	3 3 2	1	彫刻文、赤褐色	同上
図V-3	73a	144-a	Iva	P 11	II 6	3	1	彫刻文	砂粒(灰質・チャート)、石灰質、珪質
				P 11	II 8	2	1		
図V-3	73b	144-b	Iva	P 10	II 3	1	1	彫刻文	同上
				P 11	II 6	1	1		
図V-3	74	150	Iva	同一個体未接合計	11	4	1	未接合	同上
図V-3	75a	130-a	Iva	K 8	II c	3	1	彫刻文	同上
				K 8	II c	4	1		
				K 8	II c	4	1		
図V-3	75b	130-b	Iva	同一個体未接合計	11	4	1	未接合	同上
図V-3	76	131	Iva	L 9	II 3	1	1	彫刻文	同上
				L 9	II 3	1	1		
				L 29	II 1	1	1		
図V-3	77	135	Iva	L 29	II 1	1	1	無文口縁	同上
図V-3	78	134	Iva	N 10 II 4	II 1	4	1	彫刻文	同上
図V-3	79	148	Iva	N 9 II 5	II 1	5	1	彫刻文	同上
図V-3	80	149	Iva	P 12 II 7	II 1	7	1	彫刻文	同上
図V-3	81	146	Iva	P 14 II 3	II 3	3	1	彫刻文	同上
図V-3	82a	141-a	Iva	N 10 II c	II 4	4	1	彫刻文	同上
図V-3	82b	141-b	Iva	同一個体未接合計	8	3	1	未接合	同上
図V-3	83	130	Iva	M 9 M 9 O 12 N 11 N 11	II 6 II 6 II 1 II 1 II 3	6 1 1 1 1	1	彫刻文	同上
図V-3	84a	143-a	Iva	同一個体未接合計	84	1	1	未接合	同上
図V-3	84b	143-b	Iva	M 9 M 9 O 12 N 11 N 11	II 6 II 7 II 1 II 1 II 3	6 1 1 1 1	1	彫刻文	同上
図V-3	85	147	Iva	同一個体未接合計	84	1	1	未接合	同上
図V-3	86	157	Iva	K 13 II 2	I 1	2	1	一般文様の磁器	同上
図V-4	87	151	Iva	N 9 II 4	II 1	4	1	不定文様の磁器	同上
図V-4	88	160	Iva	M 5 M 5 M 5	II 10 II 10 II 10	2 2 1	1	木製文様	同上
図V-4	89	163	Iva	Q 13 O 12	II 1 II 1	1 1	1	木製文様	同上
図V-4	90	165	Iva	Q 13 O 12	II 1 II 1	1 1	1	木製文様	同上
図V-4	91a	159-a	Iva	M 6 M 6 M 5	II 5 II 5 II 3	1 1 1	1	彫刻文	同上
図V-4	91b	159-b	Iva	K 12 K 12 K 13 K 13	II 1 II 2 II 2 II 2	1 1 1 1	1	彫刻文	同上
図V-4	92	158	Iva	同一個体未接合計	8	1	1	未接合	同上
図V-4	93	161	Iva	N 19 II 1	II 1	1	1	一般文様の磁器	同上
図V-4	94	168	Iva	I 16 II 2	II 1	2	1	彫刻文	同上
図V-4	95	167	Iva	M 7 O 10 O 10	II 7 II c II 4	2 3 2	1	彫刻文	同上
図V-4	96	166	Iva	同一個体未接合計	4	1	1	未接合	同上
図V-4	97	162	Iva	Q 6 II 3	II 1	3	1	彫刻文	同上
図V-4	98	164	Iva	K 10 II 2	II 2	2	1	彫刻文	同上
図V-4	99	133	Iva	M 6 II 5	II 2	5	1	彫刻文	同上
図V-4	100	136	Iva	Q 6 II 5	II 1	5	1	彫刻文	同上
図V-4	101	137	Iva	Q 10 II 5	II 1	5	1	彫刻文	同上
図V-4	102	169	Iva	Q 6 II 2	II 1	2	1	彫刻文	同上
図V-4	103	171	Iva	G 13 II c	II 2	2	1	彫刻文	同上
図V-4	104	170	Iva	P 6 II 4	II 2	4	1	彫刻文	同上
図V-5	105	181	Ivb	P 13 II 4	II 1	4	1	彫刻文	同上
図V-5	106	182	Vb	L 14 II 5	II 1	5	1	彫刻文	同上
図V-5	107a	184-a	Vb	M 34 M 34	II 2	2	1	彫刻文	同上
図V-5	107b	184-b	Vb	未注記	1	1	1	彫刻文	同上
図V-5	108	185	Vb	M 7 II 6	II 4	6	1	彫刻文	同上
図V-5	109a	187-a	Vb	M 5 M 5	II 12 II 12	6 6	1	彫刻文	同上
図V-5	110	186	Vb	O 6 I 2	I 2	2	1	彫刻文	同上
図V-5	111	183	Vb	H 5 II c	II 12	1	1	彫刻文	同上

表V-3 包含層出土掲載石器一覧

図番号	グ リ ッ ド	遺 物 番 号	日付	石器	層位	点数	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図V-6 1	H	34 6	2012/8/2	石鏃	II	1	Sh	3.72	1.01	0.56	2.09
図V-6 2	F	34 10	2012/10/9	石鏃	II	1	Oba 産地分析1	2.74	1.69	0.28	0.85
図V-6 3	I	40 1	2012/6/29	石鏃	II	1	Sh	2.92	1.60	0.28	1.18
図V-6 4	O	45 3	2012/10/15	石鏃	II	1	Sh	4.40	1.30	0.60	3.14
図V-6 5	P	6 4	2012/8/21	石鏃	II	1	Sh	3.40	1.10	0.40	1.49
図V-6 6	Q	37 1	2011/9/21	石鏃	I	1	Ag	4.60	1.70	0.50	2.72
図V-6 7	I	41 4	2012/7/30	石鏃	II	1	Oba 産地分析2	(1.88)	1.42	0.40	(0.89)
図V-6 8	F	33 11	2012/10/9	石鏃	II	1	Sh	3.08	2.01	0.53	2.47
図V-6 9	I	36 6	2012/8/24	石鏃	II	1	Sh	3.95	1.75	0.65	4.02
図V-6 10	J	10 2	2012/5/30	石槍	II	1	Sh	6.20	1.70	0.80	6.13
図V-6 11	P	35 2	2011/9/21	石槍	I	1	Sh	5.50	1.90	0.70	5.47
図V-6 12	P	35 1	2011/9/21	石槍	I	1	Sh	5.00	2.20	0.80	6.54
図V-6 13	J	30 7	2012/9/12	石鏃	II	1	Sh	5.30	1.60	0.90	6.05
図V-6 14	L	32 7	2012/9/27	石鏃	II	1	Sh	7.20	3.40	1.10	32.85
図V-6 15	M	9 9	2012/5/15	石鏃	II	1	Sh	5.70	2.30	0.90	11.50
図V-6 16	J	22 1	2012/5/31	つまみつきナイフ片	II	1	Sh	3.80	3.50	0.70	10.83
図V-6 17	J	26 1	2012/7/3	つまみつきナイフ	I	1	Sh	6.90	5.20	1.80	56.72
図V-6 18	M	36 3	2012/9/27	スクレイパー	II	1	Sh	8.20	6.00	1.80	87.77
図V-6 19	I	29 5	2012/7/17	スクレイパー	II	1	Sh	8.90	4.80	1.30	52.38
図V-7 20	H	34 3	2012/7/4	スクレイパー	II	1	Sh	7.40	6.60	1.30	69.09
図V-7 21	G	26 4	2012/7/17	スクレイパー	風倒木	1	Sh	7.10	4.70	0.80	28.88
図V-7 22	E・F	36・37	2012/9/27	スクレイパー	I	1	Sh	6.90	6.30	2.40	89.49
図V-7 23	N	38 6	2012/8/3	スクレイパー	II	1	Sh	5.80	4.40	1.00	22.99
図V-7 24	P	11 3	2012/5/24	スクレイパー	II	1	Sh	7.10	6.50	1.70	69.30
図V-7 25	O	43 5	2012/6/14	スクレイパー	II	1	Sh	10.60	5.70	2.30	100.00
図V-7 26	F	28 1	2012/7/4	スクレイパー	II	1	Sh	9.40	4.60	1.40	70.22
図V-8 27	Q	5 3	2012/8/9	スクレイパー	I	1	Sh	5.90	3.60	1.50	22.27
図V-8 28	G	35 9	2012/7/11	スクレイパー	I	1	Sh	6.40	4.70	0.80	20.52
図V-8 29	M	33 4	2012/10/2	スクレイパー	II	1	Sh	9.40	5.30	2.20	99.32
図V-8 30	F	33 1	2012/8/2	スクレイパー	II	1	Sh	9.10	5.90	1.90	74.17
図V-8 31	L	21 1	2011/10/13	スクレイパー	I	1	Sh	6.70	4.75	1.20	32.74
図V-8 32	I	39 1	2012/5/25	スクレイパー	II	1	Sh	6.10	4.60	1.55	30.40
図V-8 33	Q	42 4	2012/9/14	スクレイパー	重機上げ	1	Sh	10.40	4.70	1.15	35.49
図V-8 34	P	34 3	2011/10/3	スクレイパー	III	1	Sh	3.90	5.90	0.80	20.15
図V-9 35	N	34 3	2012/9/27	スクレイパー	II	1	Sh	7.70	8.70	1.50	84.58
図V-9 36	E	34 2	2012/10/9	スクレイパー	II	1	Sh	3.70	6.40	0.60	12.23
図V-9 37	P	17 1	2012/7/9	スクレイパー	II	1	Sh	6.00	7.10	1.30	41.50
図V-9 38	G	40 4	2012/6/19	スクレイパー	II	1	Sh	5.00	3.90	2.10	38.07
図V-9 39	I	32 7	2012/8/29	スクレイパー	II	1	Sh	7.30	6.00	1.60	53.57
図V-9 40	F	10 2	2012/5/15	両面調整石器	II	1	Sh	7.50	5.00	2.25	78.40
図V-9 41	L	6 3	2012/8/24	両面調整石器	I	1	Sh	4.10	3.60	1.10	16.36
図V-10 42	G	32 11	2012/7/17	トランシェ様石器	II	1	Sh	3.50	2.30	1.20	7.22
図V-10 43	J	37 6	2012/7/4	トランシェ様石器	II	1	Sh	3.60	2.40	0.90	6.62
図V-10 44	G	36 5	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	2.70	2.00	0.70	4.18
図V-10 45	O	35 1	2011/9/21	トランシェ様石器	I	1	Sh	4.00	1.50	0.80	4.84
図V-10 46	N	35 3	2012/9/21	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.00	2.60	1.00	8.72
図V-10 47	L	29 1	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.10	2.40	0.90	8.61
図V-10 48	L	32 8	2012/9/27	トランシェ様石器	II	1	Sh	3.70	2.80	0.90	9.83
図V-10 49	H	34 7	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.95	2.80	1.30	19.59
図V-10 50	K	43 5	2012/6/7	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.60	3.10	0.90	12.47
図V-10 51	L	30 4	2012/10/5	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.70	2.30	0.80	9.08
図V-10 52	H	32 9	2012/8/28	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.70	2.90	1.10	13.79
図V-10 53	I	39 3	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.40	2.80	0.90	8.94
図V-10 54	F	32 4	2012/10/9	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.40	3.35	1.55	15.80
図V-10 55	G	32 8	2012/7/11	トランシェ様石器	II	1	Sh	3.80	3.00	1.10	8.71
図V-10 56	E	34 1	2012/10/9	トランシェ様石器	II	1	Sh	3.65	2.90	1.10	10.42
図V-10 57	G	36 10	2012/8/7	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.20	2.30	1.00	7.54
図V-10 58	F	36 9	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.80	3.00	1.10	14.04
図V-10 59	N	41 4	2012/6/5	トランシェ様石器	I	1	Sh	3.90	2.30	1.00	6.67
図V-10 60	I	31 1	2012/7/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.30	2.50	1.30	32.30
図V-10 61	I	35 2	2012/7/4	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.50	2.60	0.80	9.26
図V-10 62	K	42 4	2012/6/26	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.70	2.90	1.40	16.83
図V-10 63	O	41 4	2012/6/18	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.70	2.50	1.40	15.58

図番号	グ リ ッ ド	遺 物 番 号	日 付	石 器	層 位	点 数	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	
図V-10 64	L	34	7	2012/10/15	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.85	2.50	1.20	12.55
図V-10 65	J	40	10	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.00	2.85	1.35	14.41
図V-10 66	H	32	8	2012/8/28	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.00	2.80	1.00	13.34
図V-10 67	F	35	9	2012/7/31	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.50	2.90	1.20	13.89
図V-10 68	H	31	9	2012/10/10	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.20	2.65	1.50	13.61
図V-11 69	G	37	8	2012/7/17	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.30	2.85	1.20	14.54
図V-11 70	N	33	7	2012/9/26	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.90	2.80	1.30	20.82
図V-11 71	G	26	3	2012/7/17	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.35	3.30	1.20	17.51
図V-11 72	M	39	4	2012/6/5	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	3.40	1.00	13.46
図V-11 73	I	34	6	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.00	2.80	0.95	12.64
図V-11 74	E・F	32	3	2012/9/27	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.70	3.30	2.75	31.38
図V-11 75	G	28	3	2012/9/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.90	3.60	1.30	28.38
図V-11 76	G	35	8	2012/7/11	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.40	2.20	0.80	8.37
図V-11 77	F	32	5	2012/10/9	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.80	3.50	1.40	25.55
図V-11 78	M	34	2	2012/10/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.85	3.30	1.50	21.64
図V-11 79	J	31	6	2012/7/4	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	2.80	1.40	20.73
図V-11 80	F	38	1	2012/5/25	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.40	3.80	1.10	20.94
図V-11 81	J	30	8	2012/9/12	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.50	3.50	1.20	21.57
図V-11 82	F	36	8	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.50	2.80	1.10	13.10
図V-11 83	H	34	1	2012/7/4	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.50	2.30	1.10	12.97
図V-11 84	I	29	6	2012/9/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.90	2.60	1.20	12.97
図V-11 85	H	36	5	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.50	2.60	1.10	14.46
図V-11 86	H	37	4	2012/7/19	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.40	3.25	1.00	13.51
図V-12 87	L	34	4	2012/10/12	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.30	2.85	1.20	16.33
図V-12 88	O	38	3	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.50	2.60	10.50	14.47
図V-12 89	O	34	4	2012/10/4	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	3.10	1.00	16.82
図V-12 90	M	32	3	2012/10/5	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.20	3.40	1.10	14.72
図V-12 91	J	37	7	2012/8/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	3.00	1.30	18.51
図V-12 92	K	34	7	2012/10/15	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	3.60	1.35	24.70
図V-12 93	L	32	1	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.20	2.90	1.10	14.81
図V-12 94	F	34	1	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	2.70	1.30	19.50
図V-12 95	J	30	9	2012/9/12	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.85	3.70	1.20	17.79
図V-12 96	F	32	9	2012/10/10	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.20	2.95	0.95	14.45
図V-12 97	F	38	4	2012/6/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	3.30	1.60	16.70
図V-12 98	Q	29	1	2012/10/5	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.00	2.80	1.40	15.98
図V-12 99	N	35	2	2012/9/21	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	3.50	1.20	15.03
図V-12 100	J	37	7	2012/5/25	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	2.90	0.90	12.62
図V-12 101	M	40	8	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.60	2.30	0.80	11.47
図V-12 102	M	40	7	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	SW	5.50	3.20	1.50	19.23
図V-12 103	H	34	11	2012/8/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.70	3.80	1.50	20.58
図V-12 104	N	39	5	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.00	2.80	1.70	20.67
図V-13 105	J	44	1	2012/7/4	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.00	3.00	1.50	15.51
図V-13 106	G	36	4	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	3.20	2.00	36.71
図V-13 107	G	39	5	2012/6/18	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.20	3.90	1.80	24.32
図V-13 108	N	42	7	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	3.60	1.55	29.10
図V-13 109	M	30	1	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.90	3.70	1.50	27.26
図V-13 110	E・F	30	4	2012/9/27	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.50	3.70	1.00	15.66
図V-13 111	G	37	4	2012/7/4	トランシェ様石器	I	1	Sh	6.20	3.60	1.25	23.05
図V-13 112	G	28	4	2012/9/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.30	3.50	1.20	21.16
図V-13 113	F	36	10	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.50	3.50	1.40	33.87
図V-13 114	F	36	4	2012/7/19	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.40	3.70	1.50	30.15
図V-13 115	P	31	2	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.30	3.50	1.70	27.97
図V-13 116	L	32	6b	2012/9/27	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.35	3.20	1.45	24.23
図V-13 117	I	34	2	2012/7/4	トランシェ様石器	I	1	Sh	7.70	3.40	2.00	49.51
図V-13 118	R	43	1	2011/10/4	トランシェ様石器	III	1	Sh	7.50	4.20	1.50	52.49
図V-13 119	K	34	2	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	8.60	4.20	1.60	54.17
図V-14 120	K	43	7	2012/6/19	トランシェ様石器	I	1	Sh	8.05	3.50	1.60	36.85
図V-14 121	F	31	10	2012/10/10	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.50	3.60	1.40	24.34
図V-14 122	Q	37	3	2012/9/14	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.80	3.50	1.60	27.73
図V-14 123	G	34	4	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.50	3.30	1.60	28.62
図V-14 124	N	36	2	2012/9/27	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.40	4.00	1.50	24.80
図V-14 125	L	43	6	2012/6/27	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.20	2.70	1.10	19.19
図V-14 126	G	31	6	2012/8/29	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.90	4.10	1.60	28.36
図V-14 127	F	36	6	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.60	4.50	1.80	36.74
図V-14 128	G	32	7	2012/7/11	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.70	3.30	1.50	26.42
図V-14 129	O	37	5	2012/10/15	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.30	2.30	1.10	19.16
図V-14 130	Q	43	4	2012/6/11	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.80	2.50	1.20	19.31
図V-14 131	G	34	5	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.40	2.85	1.05	14.06
図V-14 132	F	35	8	2012/7/31	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.30	2.50	1.10	16.05
図V-15 133	F	34	11	2012/10/9	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.20	2.40	1.35	17.60
図V-15 134	M	40	9	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.80	2.40	1.30	21.58
図V-15 135	H	40	1	2012/5/28	トランシェ様石器	II	1	Sh	7.30	2.60	1.80	20.42
図V-15 136	J	34	4	2012/9/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.30	4.10	1.60	40.89

図番号	グ リッ ド	遺 物 番 号	日付	石 器	層 位	点 数	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	
図V-15 137	F	28	3	2012/9/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.20	4.30	1.60	41.07
図V-15 138	F	31	12	2012/10/10	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.70	4.20	2.00	51.31
図V-15 139	H	35	6	2012/7/31	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.40	3.05	1.60	24.88
図V-15 140	H	33	5	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.55	3.40	2.00	32.94
図V-15 141	J	40	5	2012/7/31	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.10	4.05	1.30	24.81
図V-15 142	R	43	2	2011/10/4	トランシェ様石器	III	1	Sh	5.00	4.60	2.20	39.97
図V-15 143	F	35	11	2012/8/8	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.30	4.30	1.50	17.15
図V-15 144	F	31	11	2012/10/10	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.40	5.25	2.30	44.13
図V-16 145	P	33	6	2012/10/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.30	4.60	1.80	46.17
図V-16 146	G	28	5	2012/9/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.70	4.65	2.00	48.06
図V-16 147	G	36	6	2012/7/30	Rフレイク	II	1	Sh	8.60	6.30	2.35	105.00
図V-16 148	F	32	10	2012/10/10	Rフレイク	II	1	Sh	7.70	6.00	2.10	72.01
図V-16 149	F	33	5	2012/8/3	Rフレイク	II	1	Sh	5.40	2.80	1.00	15.78
図V-16 150	H	33	7	2012/8/2	Rフレイク	II	1	Sh	4.95	3.00	1.15	15.57
図V-16 151	J	36	1	2012/7/3	Rフレイク	II	1	Sh	6.30	3.70	1.50	32.08
図V-16 152	M	14	2	2012/5/25	Rフレイク	II	1	Sh	6.30	4.80	1.40	45.68
図V-16 153	H	22	1	2011/11/1	Rフレイク	IIa	1	Sh	6.30	5.70	1.10	59.72
図V-17 154	H	29	1	2012/7/3	Rフレイク	II	1	SW	4.20	5.10	1.50	24.04
図V-17 155	H	33	9	2012/8/27	Rフレイク	II	1	Sh	5.70	6.80	1.05	48.14
図V-17 156	F	35	9	2012/7/31	Rフレイク	II	1	Sh	3.60	7.50	2.25	69.37
図V-17 157	R	38	1	2011/9/21	Rフレイク	I	1	S・Sh	7.20	4.35	1.20	43.36
図V-17 158	O	11	9	2012/5/23	Rフレイク	II	1	Sh	3.40	1.40	0.70	3.58
図V-17 159	O	40	6	2012/7/5	Rフレイク	II	1	Sh	8.50	3.70	1.50	36.59
図V-17 160	P	19	1	2011/10/17	Rフレイク	I	1	Sh	8.60	2.50	1.20	21.13
図V-17 161	Q	10	1	2012/7/9	Rフレイク	II	1	Sh	9.40	7.50	2.65	185.00
図V-17 162	F	32	6	2012/10/9	Rフレイク	II	1	Sh	9.50	6.60	1.10	100.00
図V-18 163	H	35	11	2012/7/31	Rフレイク	II	1	Sh	7.40	7.35	1.45	105.00
図V-18 164	I	31	3	2012/7/3	Rフレイク	II	1	Sh	7.20	4.80	1.50	51.61
図V-18 165	G	31	7	2012/8/29	Rフレイク	II	1	Sh	5.30	9.25	5.30	205.00
図V-18 166	H	42	1	2012/5/25	Rフレイク	II	1	Sh	8.50	14.10	6.10	690.00
図V-18 167	E・F	33	2	2012/9/27	Uフレイク	II	1	Sh	9.40	4.90	1.50	65.38
図V-18 168	F	36	11	2012/7/30	Uフレイク	II	1	Sh	9.20	11.40	2.55	180.00
図V-19 169	G	39	2	2012/5/25	Uフレイク	II	1	Sh	8.30	6.25	2.30	110.00
図V-19 170	N	35	4	2012/9/21	Uフレイク	II	1	Sh	5.70	7.80	1.70	58.59
図V-19 171	G	31	10	2012/8/29	Uフレイク	II	1	Sh	5.15	7.10	0.95	32.59
図V-19 172	J	25	1	2012/9/7	Uフレイク	II	1	Sh	5.00	3.05	1.20	21.66
図V-19 173	K	27	1	2012/7/3	Uフレイク	II	1	Sh	6.25	3.20	0.90	31.33
図V-19 174	Q	3	1	2011/9/21	Uフレイク	II	1	Sh	8.10	4.90	1.50	70.38
図V-19 175	N	7	8	2012/8/8	石核	II	1	Sh	6.10	6.05	4.20	190.00
図V-20 176	J	45	3	2012/10/12	石核	II	1	Sh	12.00	16.00	7.50	1290.00
図V-21 177	Q	43	9	2012/6/13	石斧	III	1	Tu	8.50	2.90	0.90	29.80
図V-21 178	M	7	6	2012/8/24	石斧	I	1	Grn	8.50	3.30	1.40	55.90
図V-21 179	O	7	1	2012/8/3	石斧	II	1	Grs	7.90	3.10	1.60	64.30
図V-21 180	N	9	4	2012/5/15	たたく石	II	1	Du	11.60	9.00	6.90	937.00
図V-21 181	G	34	8	2012/8/1	たたく石	II	1	Px-An	9.80	6.70	2.90	210.00
図V-21 182	G	5	1	2012/8/8	たたく石	I	1	Qua	8.60	7.50	3.90	354.00
図V-21 183	J	33	1	2012/7/3	たたく石	I	1	Cha	8.20	9.20	4.10	395.00
図V-21 184	M	40	6	2012/8/2	たたく石	I	1	MS	8.90	9.10	6.00	578.00
図V-21 185	F	17	1	2011/10/13	たたく石	I	1	SS	10.10	6.20	5.30	423.00
図V-21 186	M	38	1	2012/8/3	たたく石	II	1	SS	11.10	7.70	5.70	638.00
図V-22 187	J	34	6	2012/9/3	たたく石	II	1	SS	7.20	6.80	4.30	342.00
図V-22 188	M	40	1	2012/5/25	たたく石	II	1	SS	7.50	7.40	5.90	450.00
図V-22 189	K	48	2	2012/5/28	たたく石	II	1	Qua(AP)	6.40	6.30	5.20	280.00
図V-22 190	R	44	1	2011/10/4	たたく石	III	1	SS	8.80	11.40	4.70	635.00
図V-22 191	P	6	1	2012/8/8	たたく石	II	1	Du	23.80	9.50	5.70	1788.00
図V-22 192	I	36	8	2012/8/30	すり石	II	1	Du	7.20	15.90	4.30	750.00
図V-22 193	G	39	1	2012/5/25	すり石	II	1	Du	8.20	16.80	5.00	880.00
図V-22 194	F	25	1	2012/7/3	すり石	I	1	SS	6.80	12.50	4.60	400.00
図V-23 195	N	38	2	2012/5/25	すり石	II	1	An	7.40	13.60	7.60	990.00
図V-23 196	G	30	9	2012/8/31	すり石	II	1	An	8.70	14.60	5.80	525.00
図V-23 197	G	37	1	2012/5/25	すり石	II	1	Rh	8.70	15.30	5.40	675.00
図V-23 198	E・F	31	2	2012/10/10	すり石	II	1	Rh	6.10	13.80	6.50	415.00
図V-23 199	L	34	6	2011/10/3	すり石	II	1	Rh	6.10	13.80	6.50	415.00
図V-23 199	L	38	1	2012/5/25	すり石	II	1	An	9.30	16.20	4.80	875.00
図V-23 200	O	11	4	2011/10/14	すり石	I	1	Px-An	10.80	4.00	2.80	165.00
図V-23 201	M	36	1	2012/9/20	扁平打製石器	II	1	Du	10.00	(11.80)	3.30	(473.00)
図V-23 202	H	35	16	2012/8/30	石皿	II	1	Du	23.80	20.70	5.70	1429.00
図V-23 203	K	8	1	2011/10/18	砥石	I	1	Tu	(4.50)	(3.60)	1.30	(13.40)
図V-23 204	I	31	13	2012/9/3	石鏝	II	1	SS	4.40	6.60	1.90	74.60
図V-23 205	F	37	12	2012/7/27	スクレイパー	II	1	SS	4.40	6.40	1.80	82.20
図V-23 206	O	25	1	2011/10/6	加工痕のある礫	II	1	SS	8.90	10.30	3.80	293.00
図V-23 207	M	24	1	2012/9/18	石製品(異形石器)	II	1	Sh	2.20	3.10	0.40	2.13
図V-23 208	M	28	5	2012/10/12	石製品	II	1	Ah	3.82	3.42	0.47	10.06

VI章 フレイク・チップ集中域と接合資料

1 概要

調査において検出されたフレイクチップ集中域は36か所である。これらのうち住居跡H-1周辺で検出されたFC-17を除いた35か所については、調査区北側を流れる大坪沢川沿いの台地上に集中して検出されている。検出された集中域の中でも濃淡があり、標高83~84m間、調査区北西端側台地上において、焼土21か所とともに16か所が集中して検出されている。FC-2、9、10、11、12、13、14、16、18、19、20、21、22、30、31、33がこれにあたる。調査において、大型の破片が多く接合が期待される場合に、概ね長辺が3cm以上の遺物に対して出土地点記録を行った。記録を行った7か所の集中域はすべて上記の集中域に分布するものである。またFC間での接合関係が認められるのもこの集中域に限られており、ここ以外の部分では、各々遺構内の出土遺物は接合することはあって各FC間をまたぐものではない。

こうした偏りがみられるが、出土遺物のうち唯一時期を判断できるいわゆる「トランシェ様石器」については、20ライン以北の調査区でフレイクなどの他の遺物と分布を同じくしている。加えて集中域の出土遺物としても偏りはみられず、分布の差異が時期的なものではないことを示唆している。

これらのフレイクチップ集中域、焼土、出土土器について時期判定の参考とするため、放射性炭素年代測定を行っている。結果によると、焼土F-36から出土した炭化物の年代は、4,000±20yrBP、標高82.7mの北西集中域からやや外れた焼土F-56出土の炭化材の年代は3,840±30yrBP。R40区、G28区から出土した縄文時代早期中葉土器の炭素年代は8,600±30yrBPであり、焼土と出土遺物の間には差があるようであるが、検出層位からは違いは認められないため、FC-17以外のフレイクチップ

表VI-1 フレイクチップ集中域一覧

遺構名	アオリ	規模	指定時期	出土土器	出土石片・石	出土燧石・礫	立地	標高(m)	土層、その特徴
FC 1	R・L	43・44	3.04×2.25	早期中葉	RF×1, F×1,417		北西側台地上	82.3	
FC 2	G	28	0.85×0.34	早期中葉	1a×11 RF×2, F×216, TR×2	礫×2	北西側台地上	82.4	
FC 3	K	42	1.10×0.26	早期中葉	F×165, CO×1, TR×2		北西側台地上	82.8	
FC 4	M	46・47	1.56×1.00	早期中葉	F×215		北西側台地上	81.9	
FC 5	K	45	0.85×0.62	早期中葉	F×96, 石礫×1		北西側台地上	82.0	
FC 6	F・Q	43	2.30×2.34	早期中葉	F×198, CO×2		東側台地上	81.2~7	
FC 7	G	42	1.00×0.50	早期中葉	F×439		北西側台地上	82.3	
FC 8	O・P	40・41・42	8.86×1.86	早期中葉	1a×10 RF×2, F×3,005, TR×1, RF×1	礫片×4	東側台地上	81.9	
FC 9	J	31・32	1.54×0.80	早期中葉	F×1,825, TR×4, RF×1, RF×1		北西側台地上	83.4	
FC 10	F・G・H	37	5.80×2.10	早期中葉	1a×45 RF×5, F×1,613, TR×7, CO×2, RF×2	礫×1, 礫片×2	北西側台地上	83.5	
FC 11	F・G・H	34・35・36	8.10×5.36	早期中葉	1a×63 RF×5, SP×2, F×2,297, TR×14, CO×1, RF×2	礫×3, 礫片×8	北西側台地上	83.6	
FC 12	I	34・35	3.25×2.43	早期中葉	1a×6 RF×1, F×1,725, TR×4,		北西側台地上	83.5	
FC 13	H	35	2.25×1.54	早期中葉	1a×96 RF×1, SP×1, F×556, TR×1,	たたまき石×1	北西側台地上	83.6	
FC 14	H	33・34	2.56×1.98	早期中葉	1a×37 RF×1, F×353, TR×1	短石×1	北西側台地上	83.6	
FC 15	M	41	2.56×2.36	早期中葉	RF×3, F×9,406, TR×2		北西側台地上	82.7	
FC 16	H	32	2.42×1.45	早期中葉	1a×28 RF×1, F×430, TR×1, 石礫×1,	礫×1, 礫片×2	北西側台地上	83.6	
FC 17	N・O	5・6	2.68×1.22	後期前葉	1a×103 RF×1, F×37	加工面を有する礫×1	北西側台地先端	83.4	
FC 18	I	33	0.88×0.66	早期中葉	F×666, 石礫×1		北西側台地上	83.6	
FC 19	G	31	1.54×1.00	早期中葉	1a×1 F×84		北西側台地上	83.7	
FC 20	I	31・32	4.00×1.34	早期中葉	1a×1 F×2,778, TR×4, 石礫×1, 石礫×1, RF×1,	すり石×1, 礫片×1	北西側台地上	83.5	
FC 21	J	28	1.22×1.04	早期中葉	1a×1 F×354, TR×1,		北西側台地上	83.4	
FC 22	H	29	0.20×0.16	早期中葉	F×41		北西側台地上	83.9	
FC 23	M	36	0.40×0.29	早期中葉	F×3, CO×1		北西側台地上	83.9	
FC 24	L	32	2.06×0.28	早期中葉	1a×1 F×322		北西側台地上	83.3	
FC 25	N	34	2.08×1.02	早期中葉	1a×3 RF×1, 1F×1, F×888		東側台地上	83.0	
FC 26	O	33	1.56×1.42	早期中葉	F×360, TR×1, CO×1		東側台地上	82.5	
FC 27	M	30	1.20×1.16	早期中葉	F×175		東側台地上	82.8	
FC 28	O	33	1.50×1.44	早期中葉	1a×2 F×123		東側台地上	82.6	
FC 29	O	33・34	1.90×1.41	早期中葉	RF×2, F×118		東側台地上	82.5	
FC 30	E・F	36	3.70×1(1.60)	早期中葉	1a×3 1F×1, F×116, TR×2, CO×2	すり石×3, 礫×3, 礫片×4	北西側台地上	83.4	
FC 31	E・F	37	0.26×0.04	早期中葉	F×28		北西側台地上	83.4	
FC 32	O	35(31)×1(1.60)	早期中葉	1a×3 RF×1, 1F×1, F×368, TR×1		東側台地上	82.4		
FC 33	E・F	33	3(6.6)×1(1.50)	早期中葉	1a×7 RF×1, SP×1, F×275, TR×2, CO×1	石片×1, 礫×1	北西側台地上	83.6	
FC 34	L	35	2.34×1.96	早期中葉	1a×5 RF×1, F×954, TR×1	礫片×2	北西側台地上	83.2	
FC 35	R・L	34	2.66×2.30	早期中葉	1a×46 F×1,304, TR×1		北西側台地上	83.3	
FC 36	K	34	1.10×0.86	早期中葉	1a×7 F×177		北西側台地上	83.4	

集中域については、一括して掲載する。

これらのことから、検出地点、時期ともに異なるとみられるFC-17を末尾とし、出土遺物地点の記録を行っていないもの（FC-1、3、4、5、6、7、8、14、18、19、21、23、24、25、26、27、28、29、31、32、34、35、36、17）を先行し、行ったもの（FC-2、9、10、11、12、13、15、16、20、22、30、33）を後に掲載する。この12か所の集中域の事実記載については個別に記述を行い、そのほかについては表VI-1に出土遺物や検出高度などの項目を一括して掲載した。

2 遺物出土位置を記録したフレイク・チップ集中域

FC-2（図VI-3、11、12、19、20、表VI-2～5、図版22、48、51）

位 置 G38区 規 模 0.98×0.84m

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.4m付近に位置する。表土除去後、Ⅱ～Ⅲ層に相当する黄褐色土を掘り下げていたところ、フレイクなどの頁岩片が集中する部分を検出した。大きさ3cm以上の遺物を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げ、範囲と出土地点を記録した。

遺物出土状況 235点出土している。I群a類土器11点、トランシェ様石器2点、Rフレイク2点、フレイク218点等である。

時 期 出土石器の特徴から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-9（図VI-3、13、表VI-3、図版23、48、49）

位 置 J31・32区 規 模 1.24×0.80m

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.4m付近に位置する。表土を除去後、Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中する部分を検出した。うち数点はトランシェ様石器を含んでいたため、集中する部分を台状に残して掘り下げた。遺物が出土しなくなった時点で調査を終了し、範囲、大きさ3cm以上の遺物の位置を記録した。範囲内の土壌は採取してフローテーション作業を行い、微細遺物を回収した。

遺物出土状況 1,831点出土している。Rフレイク1点、トランシェ様石器4点、両面調整石器1点、フレイク・チップ1,825点である。

時 期 トランシェ様石器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-10（図VI-4、11、24～29、表VI-2～5、図版48、49、54～57）

位 置 F・G・H37区 規 模 5.80×2.10m

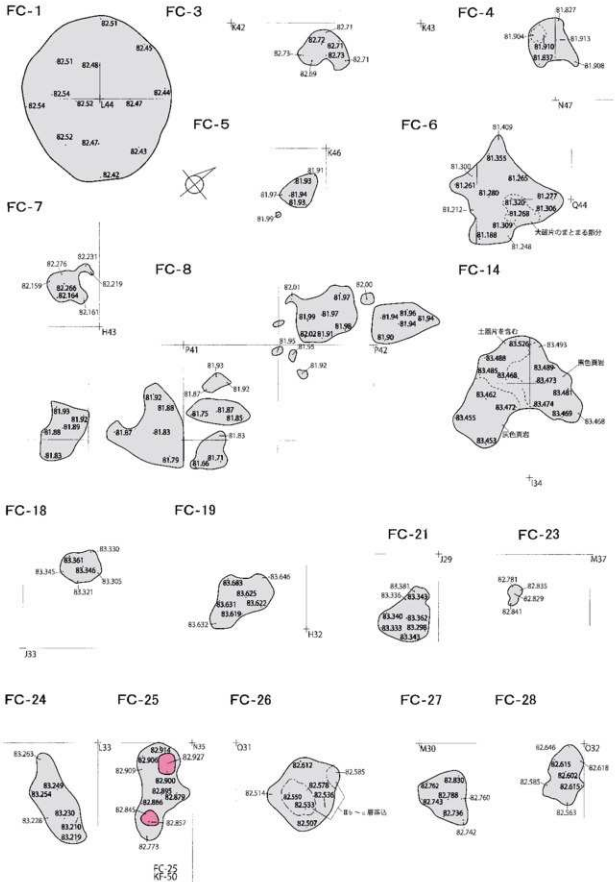
確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.5m付近に位置する。表土を除去し、上面を精査したところ、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。2グリッド以上の広範囲であったため、3cm以上の大きさを目安に遺物を残して掘り下げた。その結果まとまりが認められる範囲を大きく囲み、FC-10とした。範囲、出土地点を記録した。図示した小片の集中域では土壌を採取し、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

遺物出土状況 2,678点出土している。I群a類土器45点、IV群a類土器2点、両面調整石器2点、トランシェ様石器7点、Rフレイク5点、石核2点、フレイク・チップ2,612点等である。

時 期 トランシェ様石器、I群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-11（図VI-5、11、14、28～32、表VI-2～5、図版24、48、49、57～60）

位 置 F・G・H34・35・36区 規 模 8.10×5.38m



図VI-1 フレイク・チップ集中域(1)

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.6m付近に位置する。表土除去後、Ⅱ～Ⅲ層上面を精査していたところ、フレイクなどの頁岩片が集中する部分を検出した。3グリッド以上の広範囲であったため、3cmを目安に遺物を残して掘り下げた。その結果まとまりが認められる範囲を囲み、FC-11とした。範囲、出土地点を記録した。図示した小片の集中域では土壌を採取し、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

遺物出土状況 2,397点出土している。Ⅰ群a類土器63点、Ⅲ群a類土器2点、スクレイパー2点、トランシェ様石器14点、両面調整石器2点、Rフレイク5点、石核1点、フレイク・チップ2,297点等である。

時期 トランシェ様石器、Ⅰ群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-12 (図VI-6、15、表VI-3、図版24、49)

位置 I34・35区 **規模** 3.25×2.43m

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と大きさ約3cm以上の遺物について出土地点を記録した。なお範囲内の土壌は、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

遺物出土状況 1,736点出土している。Ⅰ群a類土器6点、トランシェ様石器4点、Rフレイク1点、フレイク・チップ1,725点である。

時期 トランシェ様石器、Ⅰ群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-13 (図VI-6、11、15、表VI-2、3、図版25、48、49)

位置 H36区 **規模** 2.26×1.04m

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.6m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と大きさ約3cm以上の遺物について出土地点を記録した。

遺物出土状況 536点出土している。Ⅰ群a類土器96点、トランシェ様石器1点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク・チップ436点、たたき石1点である。

時期 トランシェ様石器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-15 (図VI-7、15、33、表VI-3、4、図版25、49、61)

位置 M41区 **規模** 2.26×2.26m

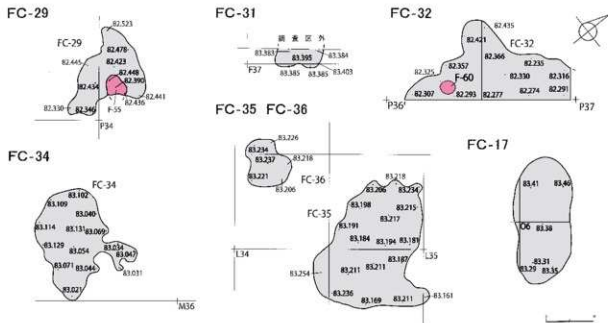
確認・調査 調査区北東側緩斜面、標高82.7m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と出土地点を記録した。なお範囲内の土壌は、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

遺物出土状況 9,415点出土している。トランシェ様石器2点、Rフレイク3点、原石1点、フレイク・チップ9,409点である。

時期 トランシェ様石器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-16 (図VI-7、11、15、33、表VI-2～4、図版25、48、49、50、61)

位置 H32区 **規模** 2.42×1.46m



図VI-2 フレイク・チップ集中域(2)

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.6m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、土器片とともにフレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と出土地点を記録して調査を終了した。

遺物出土状況 464点出土している。I群a類土器28点、石鏃1点、トランシェ様石器1点、Rフレイク1点、フレイク430点等である。

時期 トランシェ様石器、I群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-20 (図VI-8、16、17、表VI-3、図版26、50)

位置 I 31・32区 **規模** 4.00×1.34m

確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.5m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。集中は南北2か所の範囲に分かれている。範囲と大きさ3cm以上の遺物の出土地点を記録した。なお範囲内の土壌は、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

遺物出土状況 2,789点出土している。I群a類土器1点、石鏃1点、石槍1点、スクレイパー1点、トランシェ様石器4点、Rフレイク1点、石核1点、フレイク2,778点、すり石1点、礫片1点

時期 トランシェ様石器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

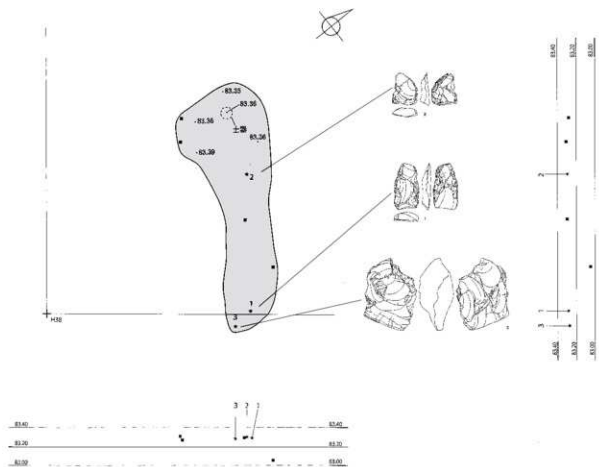
FC-22 (図VI-9、19、表VI-4、5、図版26、51、52)

位置 H 29区 **規模** 0.20×0.16m

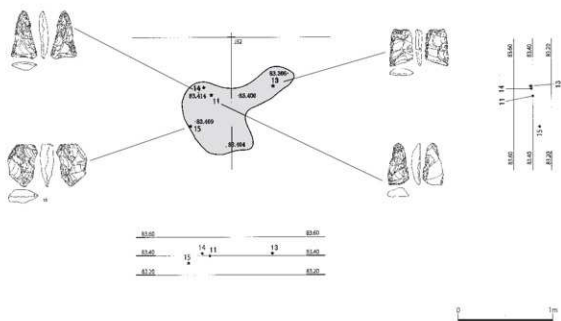
確認・調査 調査区北西側台地上、標高83.9mに位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。検出時点で4枚の剥片が確認できたが、集中地点の下位に埋まっていることが伺われたため、位置を記録しながら掘り下げた。合計12枚の剥片を取り上げたが、図IV-9のように、約20×20cmの範囲に折り重なるようにして出土している。

遺物出土状況 41点出土している。全てフレイクである。

FC-2

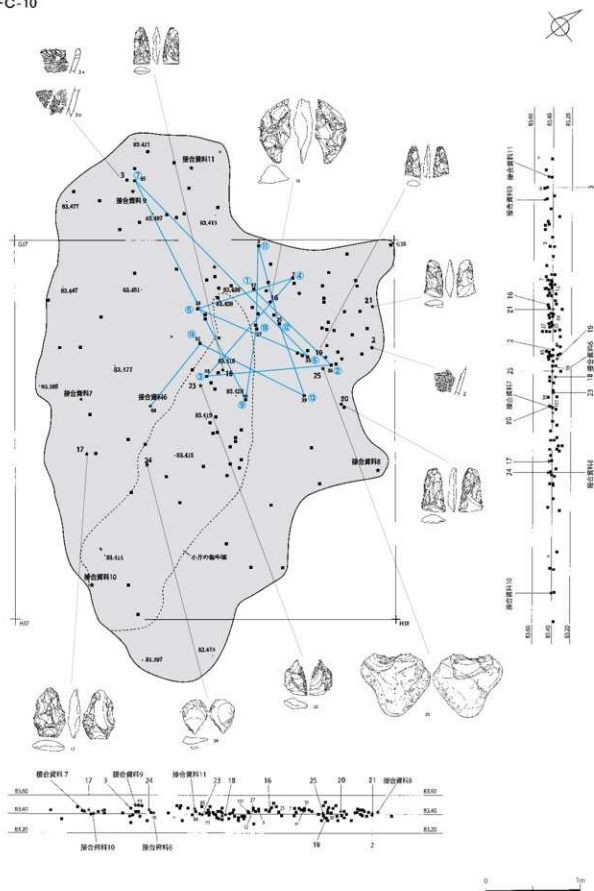


FC-9

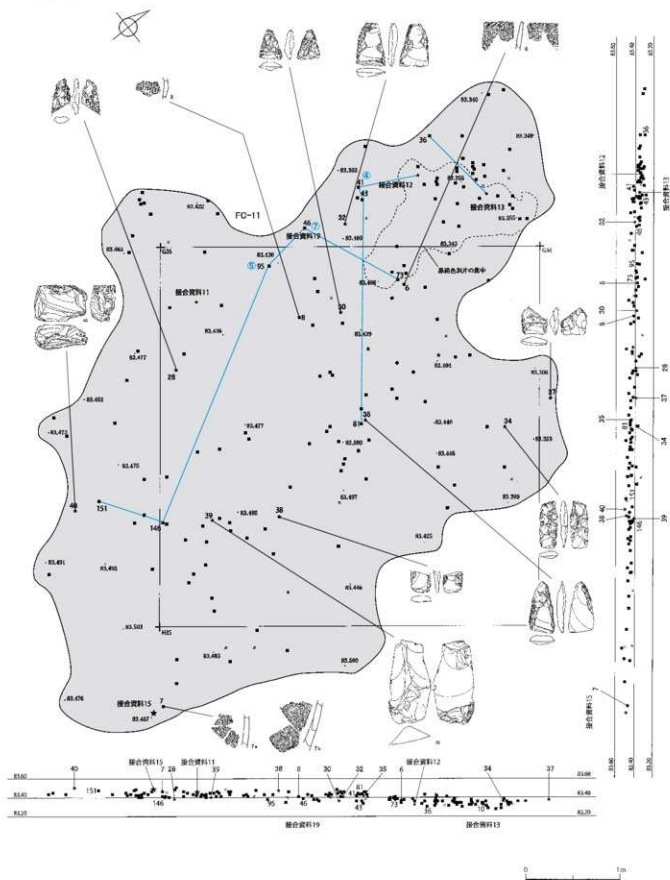


図VI-3 フレイク・チップ集中域(3)

FC-10

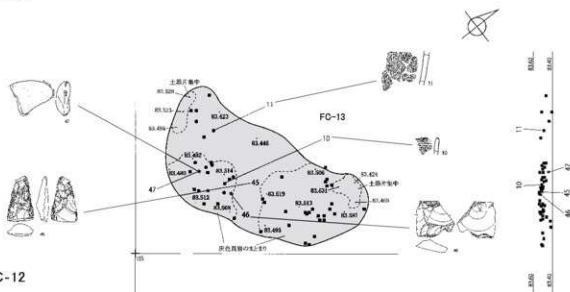


図VI-4 フレイク・チップ集中域(4)

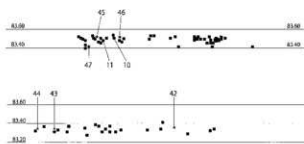
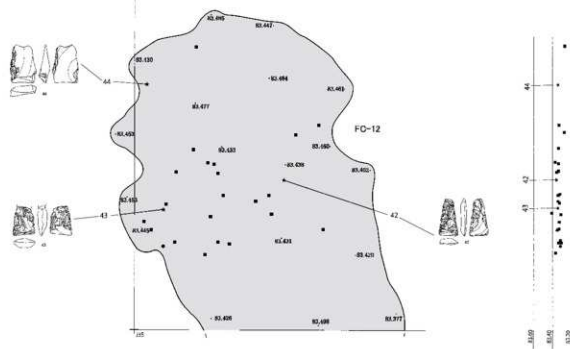


図VI-5 フレイク・チップ集中域(5)

FC-13

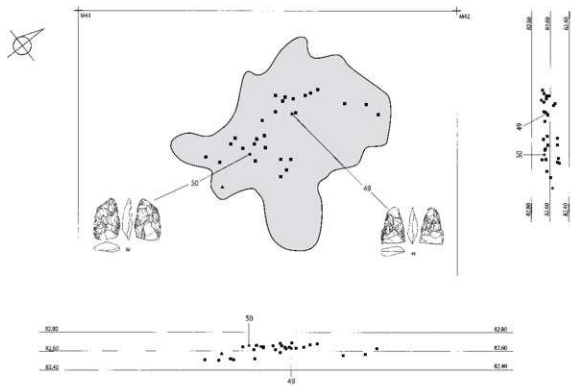


FC-12

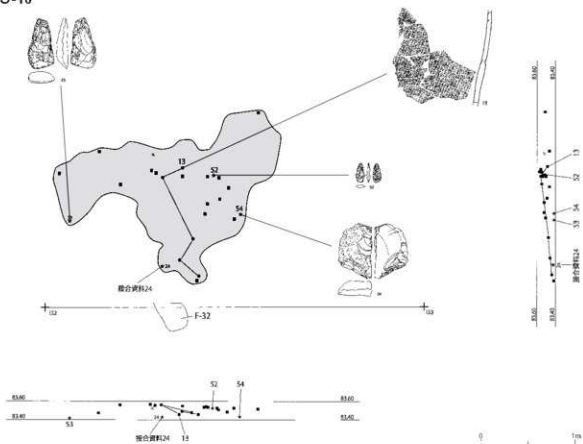


図VI-6 フレイク・チップ集中域(6)

FC-15

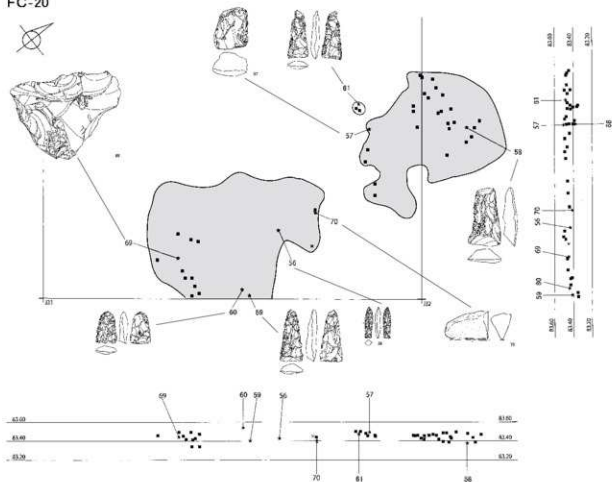


FC-16

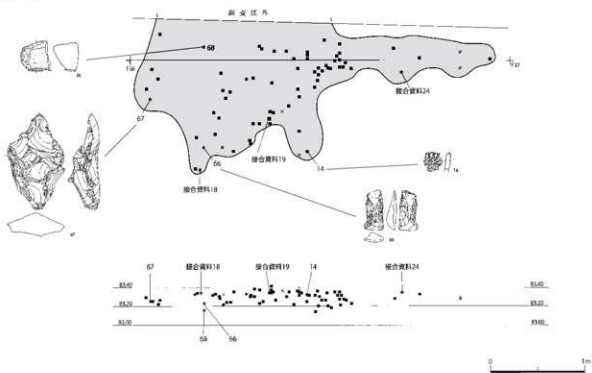


図VI-7 フレイク・チップ集中域(7)

FC-20

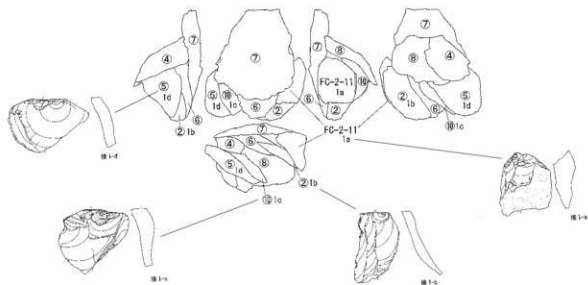
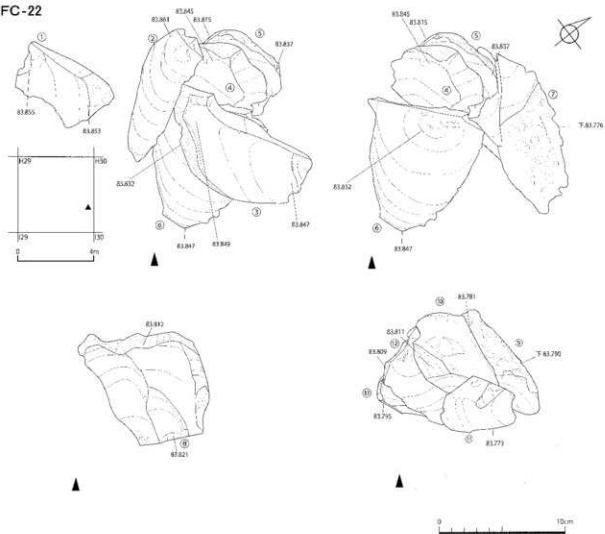


FC-30



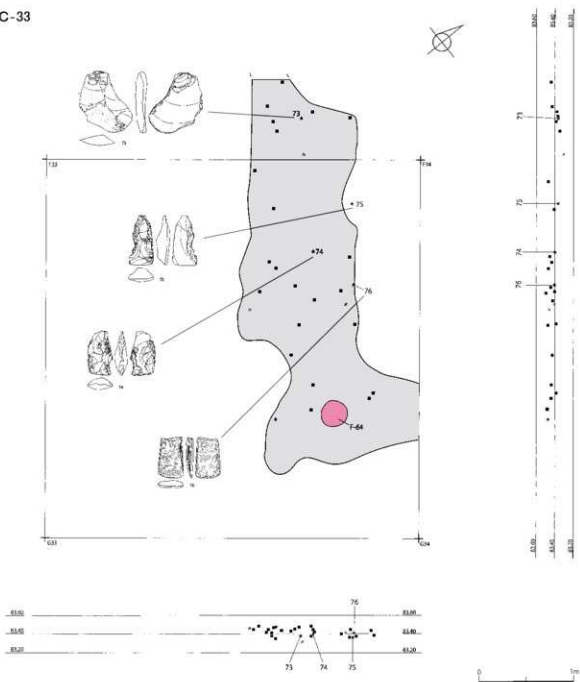
図VI-8 フレイク・チップ集中域(8)

FC-22



図VI-9 フレイク・チップ集中域(9)

FC-33



図VI-10 フレイク・チップ集中域(10)

時 期 周囲での遺物出土状況から、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-30 (図VI-8、11、16、31~33、36、表VI-2~5、図版27、48、50、59~61、63)

位 置 E・F36区 規 模 3.70×(1.64)m

確 認・調 査 調査区北西側台地上、北西側調査区境に沿った標高83.4m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中域は北西側調査区外に延びる。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と大きさ約3cm以上の遺物の出土地点を記録し

て掘り下げ、調査を終了した。

遺物出土状況 132点出土している。I群a類土器3点、トランシェ様石器2点、Uフレイク1点、石核2点、フレイク・チップ116点、すり石2点等である。

時期 トランシェ様石器、I群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

FC-33 (図VI-10、18、表VI-3、図版50)

位置 E・F33区 **規模** (3.66)×1.25m

確認・調査 調査区北西側台地上、北西側調査区堺に沿った標高83.6m付近に位置する。Ⅱ～Ⅲ層を調査中、フレイクなどの頁岩片が集中している部分を検出した。集中する範囲を残してⅡ～Ⅲ層を掘り下げた。範囲と出土地点を記録した。集中域は北西側調査区外に延びる。なお範囲内の土壌は、フローテーションマシンによる微細遺物の回収作業を行った。

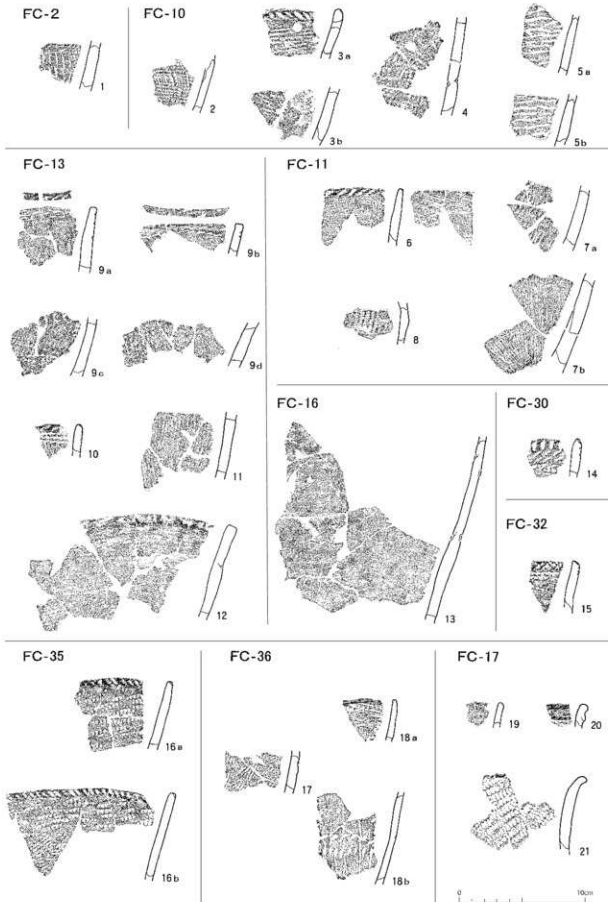
遺物出土状況 292点出土している。I群a類土器7点、石錐1点、スクレイパー1点、トランシェ様石器2点、Rフレイク1点、石核1点、フレイク・チップ275点、石斧1点、礫・礫片が3点である。

時期 トランシェ様石器、I群a類土器が出土していることから、縄文時代早期中葉のものである可能性が高い。

3 フレイク・チップ集中域出土遺物

掲載遺物：土器 FC-2、1は貝殻腹縁による調整痕がつく胴部片。2～5はFC-10から出土したものの。2は貝殻腹縁調整痕。3a、bは同一個体。風化が激しく不明瞭ではあるが、口唇端部に棒状工具による刻みが斜位に施される。地文は貝殻背押圧調整痕がつく。口唇下に補修孔がある。4は貝殻背押圧調整痕の胴部。下半に近い部分とみられる。5a、bは同一個体。貝殻腹縁刺突文がつけられる。6～8はFC-11出土。6はほぼ垂直に立ち上がる口縁部。口唇端部に貝殻腹縁による刻みが施される。体部は貝殻腹縁押圧調整痕が内面口縁部にも施される。7a、bは同一個体。胴部下半の破片。間隔の狭い貝殻腹縁圧痕文が施されている。8はⅢ群a類としたが、Ⅳ群a類の可能性もある。RL縄文が器面深くに施される胴部片。9～12はFC-13からの出土。9a～dは同一個体。角形を呈する口唇端部に貝殻腹縁圧痕が、口縁下には2段の爪形刺突列がつけられている。体部は貝殻腹縁押圧調整痕が施される。10は口唇端部に絡条体による刻みが施される。口唇下には3段の爪形刺突列がつけられている。11は間隔の狭い貝殻腹縁圧痕文が施される胴部。12は口唇がやや角張る口縁部。貝殻腹縁押圧調整痕が施されるが、なでの調整がされ無文である。口唇端部は刻みがつけられているが、原体は不明である。胎土には白色岩片が明瞭に混入する。13はFC-16出土。無文の胴部下半。胎土に白色岩片が混入する。14はFC-30出土。口唇端部に貝殻腹縁による刻み、口縁に3段の爪形刺突列が施される。15はFC-32出土。切出状の口縁部。口唇端部に貝殻腹縁による斜位の刻みがつけられ、口縁には横走する腹縁圧痕文が2列施される。16はFC-35出土。16a、bは同一個体。口唇には斜位の刻み、口縁には貝殻腹縁圧痕文が、体部には貝殻腹縁押圧調整痕が施されている。17、18はFC-36出土。17は胴部片。貝殻背押圧調整痕がつけられる。18a、bは同一個体。櫛状の工具による調整が施されたのち、口縁に1段、胴部に2段の爪形刺突列が施される。刺突列は口縁には横位に連続して、胴部は上位が斜位、下位が横位に連続してつけられている。19～21はFC-17出土。19は無文の口縁部。20は折り返し口縁。21の地文はLR斜行縄文である。

掲載遺物：石器 1～3はFC-2出土。1、2はトランシェ様石器。1は中形で正台形を呈する。素材剥片は打点が左側縁のC、刃部正面観は直線状で、背面が急角度となる片刃に整形されている。



図VI-11 FC出土の土器

2は小形で三角形のもの。背面に原石面が残る。素材剥片は横置きである。刃部正面観は逆アーチで、背面側が急角度となる片刃である。3はRフレイク。石核状となるもので、節理による割れを起こした剥片を利用し、よく珪化した部分で数枚の剥離を行う。石材は2である。

4はFC-3出土のトランシェ様石器。中形で概ね三角形を呈する。素材剥片は横向き、刃部正面観は逆アーチで、背面が急角度の片刃である。

5はFC-5出土の石槍。破片であるが基部とみられる。両面が丁寧に調整されている。

6はFC-6出土の石核。節理割れした残核を利用し、数枚の剥離を行うもの。

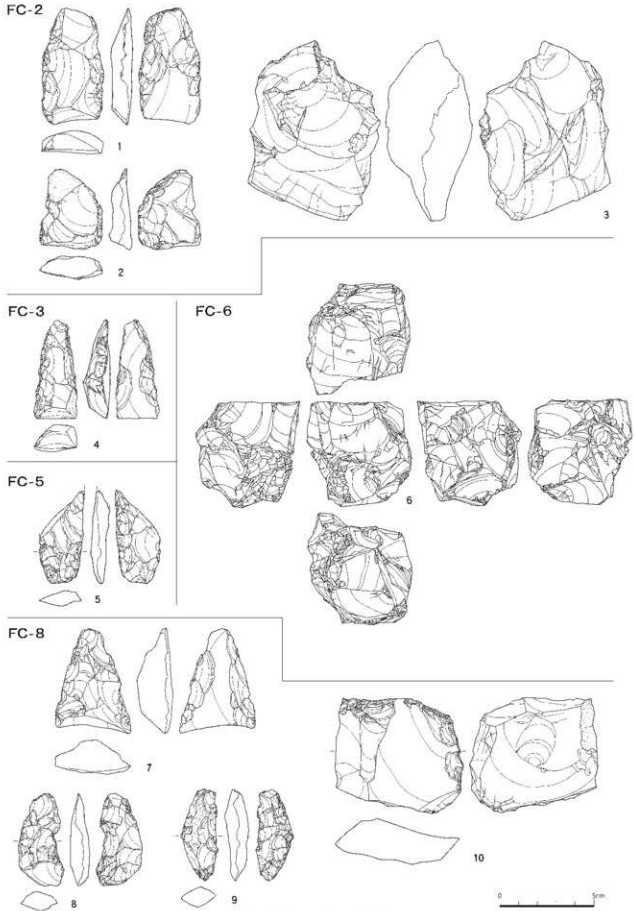
7～10はFC-8出土。7はトランシェ様石器、中形で三角形を呈する。素材剥片は横置きである。刃部正面観は逆アーチで、背面側が急角度となる片刃である。8は両面調整石器、両面に粗い調整が施されるが、加工の意図は不明である。9、10はRフレイク。9は原石面の残る剥片を利用し、両面に粗い調整がなされる。石槍の未成品かもしれない。10は形状からトランシェ様石器の素材剥片の可能性がある。

11～15はFC-9出土。11～13はトランシェ様石器。11は正台形の小形のもの。背面右側縁の最新の剥離により破断している。素材剥片は縦置きである。刃部正面観は逆アーチで、ほぼ両刃に近い。12は中形三角形のもの。素材剥片が横置き。刃部は腹面側が急角度となる片刃である。13の素材剥片は縦置きである。中形三角形であり、刃部は直線で背面側にガジリとみられる二重のバティナをもつ。14は両面調整石器。粗い調整が両面に施される。トランシェ様石器から加工したものかもしれない。15はRフレイク。横長の剥片の両端部に粗い調整が施される。横置きのトランシェ様石器素材剥片であろう。

16～25はFC-10出土。16、17は両面調整石器。粗い調整が両面にほどこされている。17は加工されたトランシェ様石器かもしれない。18～22はトランシェ様石器。18は中形正台形、19、20は小形、21、22は破片である。18の素材剥片は横置き。刃部は直線状で、背面側が急角度となる片刃である。19は概ね正台形。素材剥片は横置き。背面に原石面を残し簡便な加工である。刃部正面観は逆アーチ状で、背面側が急角度となる片刃である。20は小形三角形。21、22は破片であるが、三角形を呈するとみられる。23、24はRフレイク。23はトランシェ様石器、24は石錐の製作途中とみられる。25は石核とした。石材1の丸みを帯びた原石の縁辺から、数枚の剥離を行う。

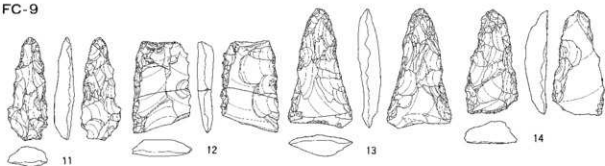
26～41はFC-11出土。26～38はトランシェ様石器。26、27は小形三角形を呈する。素材剥片はいずれも横置きである。刃部は直線で背面側が急角度となる片刃である。刃部腹面側にわずかな光沢、背面に微細な剥離がある。27の刃部は直線、背面側が急角度となる片刃である。28は中形正台形。流紋岩か凝灰岩を素材とする。剥片は横置き、刃部正面観はやや逆アーチ。背面側が急角度の片刃である。29、30は大形三角形。29は横置きの剥片を用いる。刃部正面観は逆アーチで、背面急角度の片刃である。30はやや幅広となるもの。素材は横置き。刃部は腹面側が急角度となる片刃。刃こぼれ状の剥離に加え、腹面側に若干の調整がある。31～33は不定形のもの。31は故意が偶然かは不明であるが、彫器様の刃部再生剥離が認められる。32は2点の接合。右側縁中央の最新の剥離により破断した未成品である。33は製作途中とみられる。素材剥片は縦置きである。35～38は破片。39、40はRフレイク。39は縦長の剥片の端部に数枚の調整がなされる。40は節理割れした剥片に意図の不明瞭な加工がみられる。41は石核である。

42～44はFC-12出土のトランシェ様石器。小形正台形である。素材剥片はすべて横置きである。42の刃部正面観は逆アーチで背面が急角度となる片刃である。腹面側に微細剥離とわずかな光沢を伴っている。43の刃部は逆アーチで背面が急角度となる片刃である。44は簡素な加工のもの。刃部は逆アー

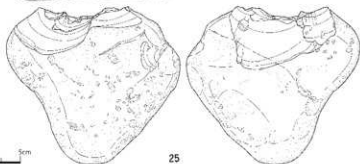
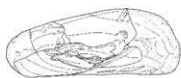
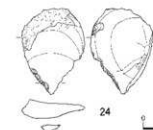
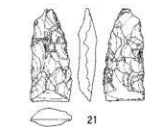
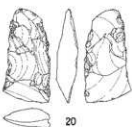
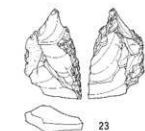
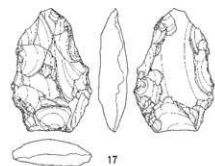
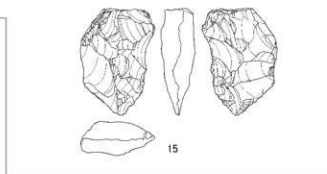
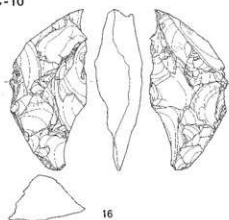


図VI-12 FC出土の石器(1)

FC-9

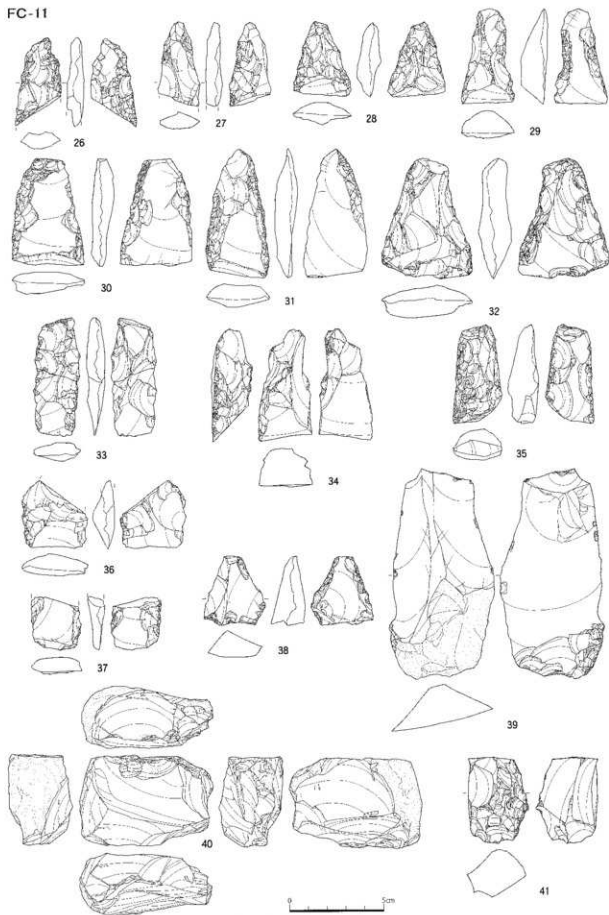


FC-10



図VI-13 FC出土の石器(2)

FC-11

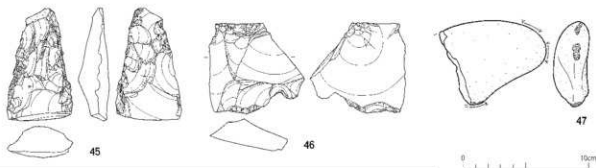


図VI-14 FC出土の石器(3)

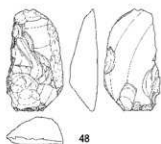
FC-12



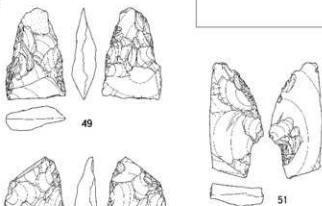
FC-13



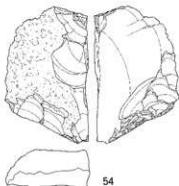
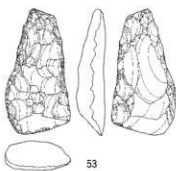
FC-14



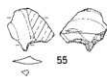
FC-15



FC-16



FC-18

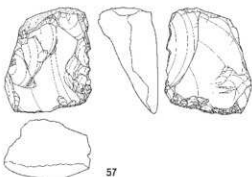


図VI-15 FC出土の石器(4)

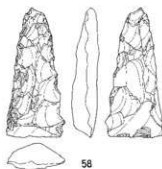
FC-20(1)



56



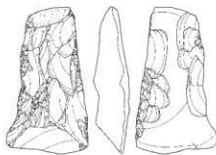
57



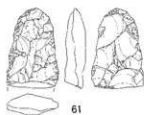
58



59



60



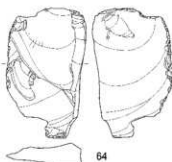
61

FC-21



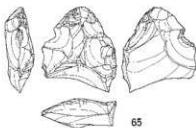
62

FC-25

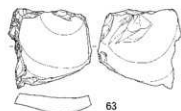


64

FC-29

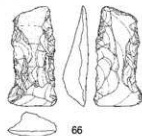


65

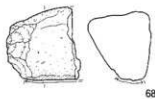


63

FC-30



66



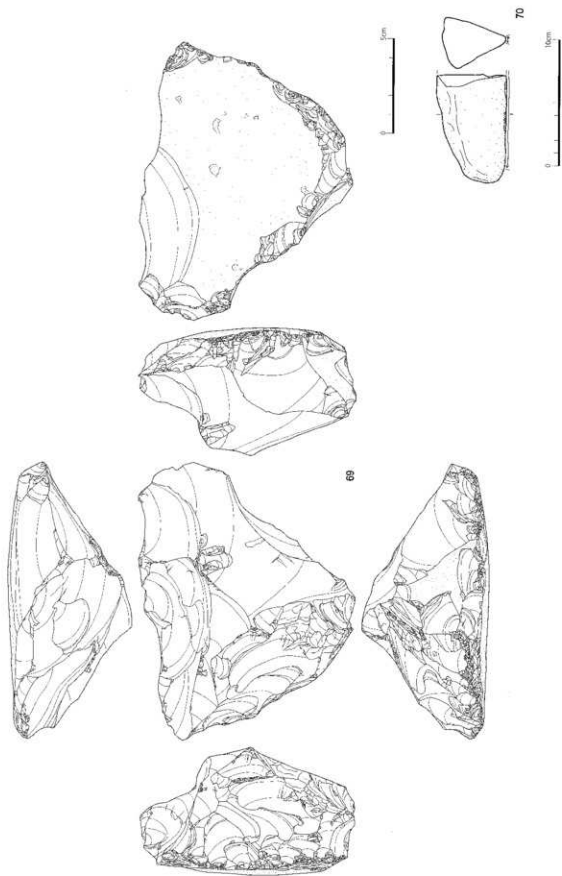
68



67

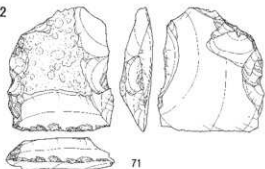


図VI-16 FC出土の石器(5)

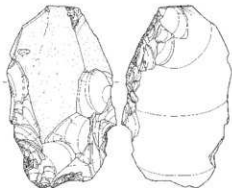


図VI-17 FC出土の石器(6)

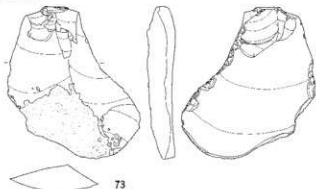
FC-32



71



FC-33

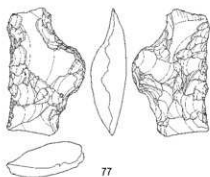


73

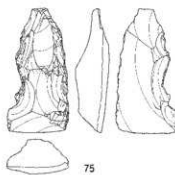


72

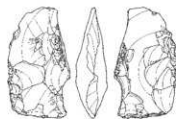
FC-34



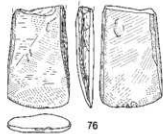
77



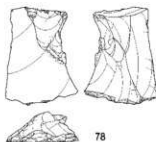
75



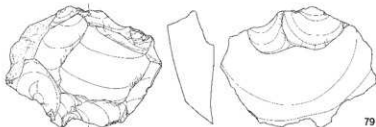
74



76



78



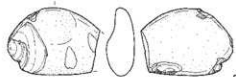
79

0 5cm

FC-17



80



81

0 10cm

図VI-18 FC出土の石器(7)

チで、背面急の片刃である。刃部腹面側にわずかな光沢がある。

45～47はFC-13出土。45はトランシェ様石器。素材剥片は横置き。刃部正面観は逆アーチで背面急角度の片刃である。46はRフレイク。剥片の端部に加工があるもの。左側縁を刃部とするトランシェ様石器の未成品のようである。47はたたき石。「L」字状に突出する部分のある砂岩礫を用いる。欠けているが図の下にした部分に明瞭な敲打痕がある。

48はFC-14出土。被熱によるはじけで形状がよくわからないが、トランシェ様石器とみられる。

49～51はFC-15出土。49、50はトランシェ様石器。49は三角形。50は概ね台形である。49は素材剥片横置きBで、刃部はほぼ直線、背面急の片刃である。50は横置き。刃部正面観はほぼ直線で、背面急の片刃である。51はRフレイク。剥片の打点部分に再加工がみられる。図下の縁辺を刃部とするトランシェ様石器の未成品とみられる。

52～54はFC-16出土。52は石鏃。入念な両面の加工により五角形に仕上げられる。53はトランシェ様石器。素材剥片は横置き。刃部は逆アーチで背面急角度の片刃。腹面側に明瞭な光沢。背面に微細剥離がある。54はRフレイク。原石面の残る剥片の一部に再加工がみられる。

55はFC-18出土の石錐。剥片の一部に先端部が作出されている。

56～61、68、69はFC-20出土である。56は石鏃。両面が入念に調整され、全体が五角形に仕上げられる。やや厚手である。57はスクレイパーである。原石面の残る剥片の縁辺に刃部が作出される。トランシェ様石器に近い。58～61はトランシェ様石器である。58～60は大形、61は破片である。58、59は三角形である。58の刃部正面観はほぼ直線で背面側が急角度となる片刃である。刃部腹面側に微細な剥離痕がある。59の刃部は逆アーチ。背面急の片刃である。刃部腹面側には明瞭な光沢と調整痕がある。60は簡素なつくりのもの。背面に原石面が残る。素材剥片は横置き。刃部はほぼ直線、背面側が急角度の片刃である。68はRフレイクである。粗割された原石の、よく珪化した部分を取り除くように剥離されている。

69は断面が三角形を呈するすり石の破片である。閃緑岩礫を用い、一稜を使用するもの。すり面の幅は狭く、最大で0.6cmである。

62はFC-21出土のトランシェ様石器。小形で概ね三角形である。素材剥片は横置き。刃部正面観はわずかな逆アーチで、背面が急角度の片刃となる。

63、64はFC-25出土。63はRフレイク。剥片の一侧縁に意図の不明瞭な加工がある。64はUフレイク。原石面の残る縦長剥片の縁辺に使用によるとみられる微細な剥離痕がある。

65はFC-29出土のRフレイク。剥片の一侧縁を残し、縁辺の両面にわたって粗い調整が施されている。トランシェ様石器を意図したものかもしれない。

66、67、70はFC-30出土。66はトランシェ様石器。中形でやや不整な台形である。素材剥片は横置き。刃部正面観はわずかな逆アーチ。背面急角度の片刃である。67は石核。節理割れた剥片から剥離している。70はすり石。断面三角形を呈するものの破片である。デイサイト礫を用いる。すり面の幅は広く、最大で1.8cmである。

71、72はFC-32出土のRフレイクである。71は原石面の残る薄手の剥片を用い、側縁の一部が加工される。72はやや厚手の縦長剥片を用いる。背面側の端部周辺に二次加工がある。

73～76はFC-33出土。73はスクレイパー。原石面の残る縦長剥片を用い、右側縁に内湾する刃部が作出されている。74、75はトランシェ様石器。素材剥片は両方も横置き。74は中形で概ね台形を呈する。刃部は背面側が急角度となる片刃で、腹面側に微細剥離がみられる。75は大形で台形に近い形状のもの。刃部正面観は逆アーチで背面側が急角度となる片刃である。76は石斧。全面研磨により

整形される。基部は直線状、やや円刃、片刃である。右側縁に擦り切り技法によるとみられる段差を残している。緑色凝灰岩製。

77～79はFC-34出土のRフレイク。77はトランシェ様石器として製作されたが、打点を除去できなかったものとみられる。78は折断した剥片の一端に急角度の調整がなされているもの。79は厚手の剥片の打点部分を加工している。

80、81はFC-17出土。80はRフレイク。剥片の打点部に数枚の加工がなされる。81は加工痕ある礫。泥岩の扁平礫の端部が打ち欠かされている。

4 接合資料

フレイク・チップ集中域出土資料と包含層出土資料の接合を試みた結果、428件の接合資料が得られた。以下そのうち39件について図化した。なお、剥片剥離の工程は大きな打面転移を契機に1段階として網掛けで表現し、剥離の方向を矢印の向きで、接合資料中の剥離順を○数字で表現している。矢印は剥片の背面に記したものを実線で、腹面に記したものを点線であらわした(図IV-20上参照)。

接合資料1 (図VI-19、20、表VI-4、5、図版51、52)

関係遺構 FC-2、FC-22 総重量 756.29g 石材 1-12

接合器種と点数 FC-2出土のRフレイク1点と、FC-22出土のフレイク7点、計8点の接合資料である。

概要 扁平な亜円礫を素材とする。剥離工程の様子がほぼ把握できる。

(段階1) 端部を剥離して表皮を除去し、その剥離面を打面として剥片剥離を行う①。(段階2) その剥離面を打面とし、剥離を連続して行う②、③。(段階3) さらにその面を打面とし、打点を左右にずらしながら連続して剥離している④～⑧。1a～dは段階3で得られたフレイクである。

接合資料2 (図VI-21、表VI-4、5、図版52)

関係遺構 FC-3 総重量 272.43g 石材 2-3

接合器種と点数 FC-3から出土した石核1点とフレイク1点、計2点の接合資料である。

概要 節理の多い原石を素材とする。3面に原石面を残しており、表皮除去により作出した平坦面を打面とし、展開図正面において剥片剥離を行う。接合剥片は最終剥離から3枚前の剥離において節理割れを起こして剥離したものである。その後2回の剥片剥離を試みるが、階段状剥離となり小片を得られたのみで、2aの残核に至っている。

接合資料3 (図VI-21、表VI-4、5、図版52)

関係遺構 FC-3、K43 総重量 35.68g 石材 2-7

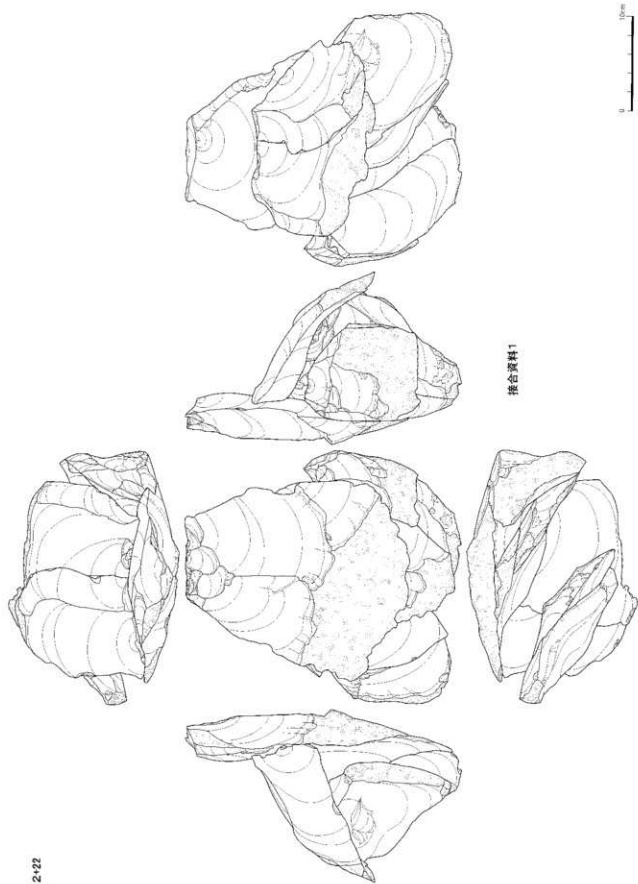
接合器種と点数 FC-3から出土したトランシェ様石器1点、フレイク2点と、包含層から出土したフレイク1点、計4点の接合資料である。

概要 トランシェ様石器は横置き剥片を用いているが、リングが直線に近く、ほぼ平坦面であることから打点から離れた部分とみられる。節理割れした破片かもしれない。接合した3枚のフレイクは二次加工の細部調整剥片である。二次加工は背腹両側縁になされ、器体は概ね三角形に整形されている。刃部の正面観は直線状。角度は60.2°である。刃部は使用された痕跡がないが、二次加工時により刃部と器軸の角度がつきすぎたため、使用に至らなかったとみられる。

接合資料4 (図VI-22、表VI-4、5、図版53)

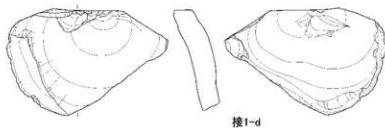
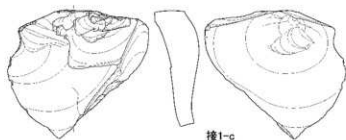
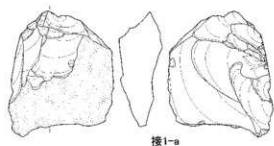
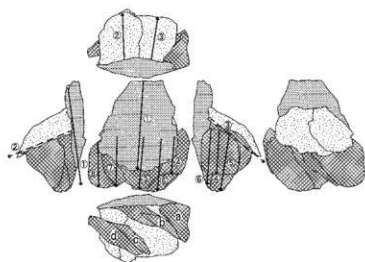
関係遺構 FC-8、O40、P40、42、Q41 総重量 477.978g 石材 1-6

接合器種と点数 FC-8から出土したフレイク2点、包含層出土のRフレイク1点、フレイク8点の計11点の接合資料である。

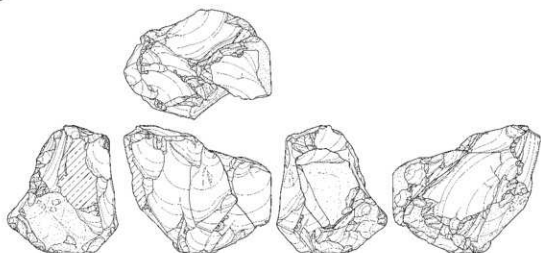


圖VI-19 接合資料(1)

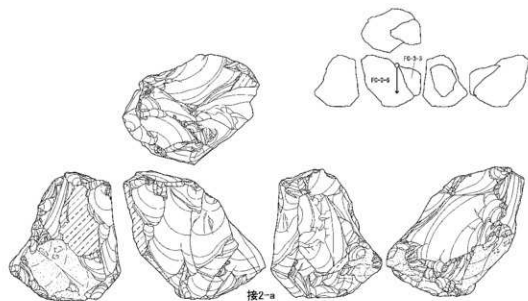
FC-2+22



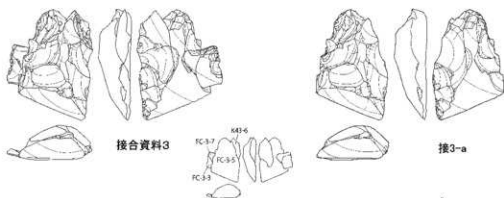
図VI-20 接合資料(2)



接合資料2

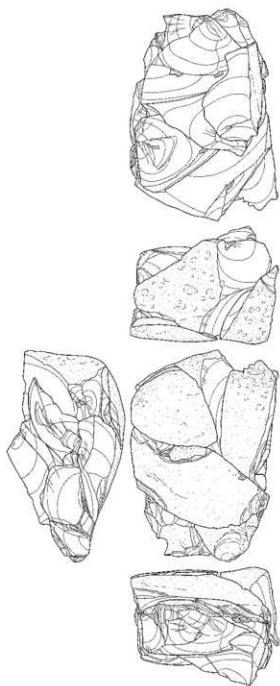


接2-a

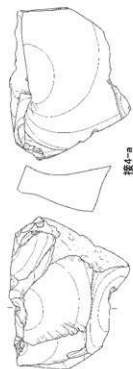
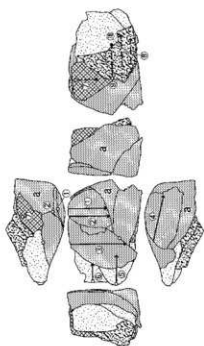


圖VI-21 接合資料(3)

FC-8



接合資料4



図VI-22 接合資料(4)

概 要 亜円礫を素材とする。端部の表皮を除去しながら剥片剥離を行う工程である。そのうち1点が再加工され、Rフレイクとなっている。

(段階1) 礫端部の調整打面から、2枚の剥離行い①、②、(段階2) 打点を左奥の石核側に移して大きく剥離する③。剥片は節理で割れて2片となり、うち1片は再加工され④Rフレイクとなっている(4a)。その後数枚の剥離を経て、(段階3) 打面を90°左に倒して剥離し⑤、再び打面を戻して1枚剥離を行い(未接合)、さらに再び⑤の剥離の位置から剥離を行っている⑥。この剥離は大きく階段状となる。打面を段階3に戻して剥離し⑦、さらに打面を90°右に倒して3枚の剥離を行う⑧~⑩。

接合資料5 (図VI-23、表VI-4、図版53)

関係遺構 FC-8、O41、P42 **総重量** 724.65g **石材** 1-17

接合器種と点数 FC-8から出土したフレイク11点と、包含層から出土したフレイク4点、計15点の接合資料である。

概 要 亜円礫端部の表皮を除去し、剥片剥離を行う工程である。

(段階1~3) 図面下の調整打面から交差状に打点を移して、原石面の大きな凹凸を除去している①、②、③。(段階4) ③を除去した面を打面として、剥片剥離を行う④、⑤。(段階5) 打面を180°転移して、打点をずらしながら連続して剥離を行う⑥~⑩。(段階6) さらに打面を90°下に展開して2枚の剥離を行っている⑫、⑬。

接合資料6 (図VI-24、25、表VI-4、5、図版54)

関係遺構 FC-10、F36 **総重量** 1894.62g **石材** 2-1

接合器種と点数 FC-10から出土した石核1点、フレイク13点、包含層から出土したトランシェ様石器1点、計15点の接合資料である。

概 要 亜円礫を斜割した原石を素材とし、剥片剥離を行い、石核に至る工程の接合資料である。剥片の1点は二次加工されトランシェ様石器となっている。

(段階1) 斜割によりできた突出部を剥ぎ取る剥離を行う①。(段階2) ①の剥離面を打面とし、打点をずらしながら斜割面を剥離している②~④。(段階3) ④の剥離面を打面とし、原石面の凸部を除去する剥離を行い⑤、続けて交差状に剥離を行う⑥、⑦。この剥離によりできた稜線を取り込むように、同一方向から剥離を行っている⑧、⑨。⑧はトランシェ様石器となる(6a)。(段階4) 打面を90°右に展開し、交互に打点を動かしながら剥離を行う⑩~⑭。後数枚の剥離を経て残核(6b)にいたる。

接合資料7 (図VI-26、表VI-4、5、図版55)

関係遺構 FC-10、E-F36、37、G37、38、L36 **総重量** 264.79g **石材** 2-5

接合器種と点数 FC-10出土のフレイク1点、包含層出土のRフレイク1点、フレイク5点、計7点の接合資料である。

概 要 亜円礫の原石を用い、表皮を除去する工程の接合資料である。

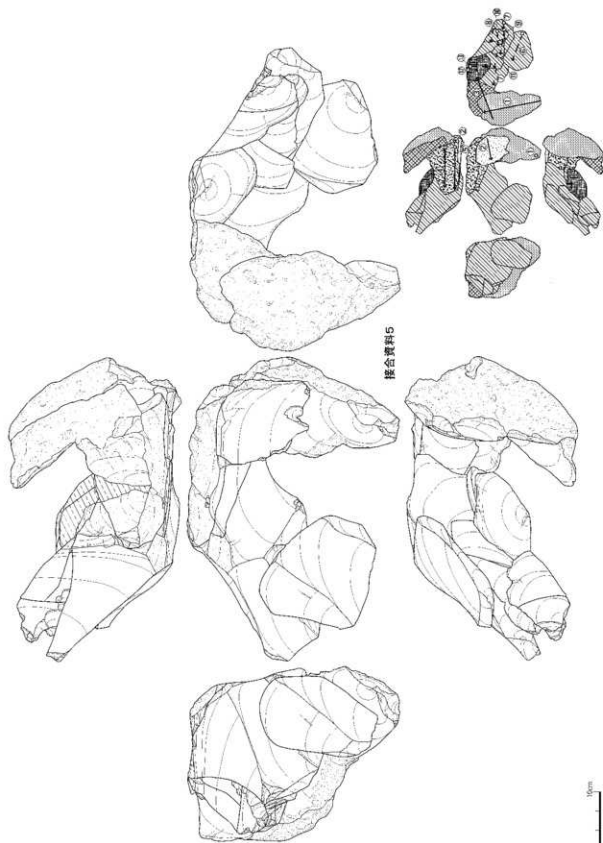
(段階1) 調整打面より連続して剥片剥離を行う①、②。②で形成された面を打面として、1枚の調整を行う(未接合)。(段階2) その調整打面から、表皮を剥ぎ剥離を介しながら数枚連続して剥離を行う③、④。(段階3) 打面転移を行い、表皮を剥ぎ取った⑤後、(段階4) 再び打面転移し2枚の剥片が得られる⑥、⑦。うち⑥は意図の不明瞭な二次加工によるRフレイクとなっている(7a)。

接合資料8 (図VI-27、表VI-4、5、図版56)

関係遺構 FC-10、G34、H34、J31 **総重量** 312.8g **石材** 2-4

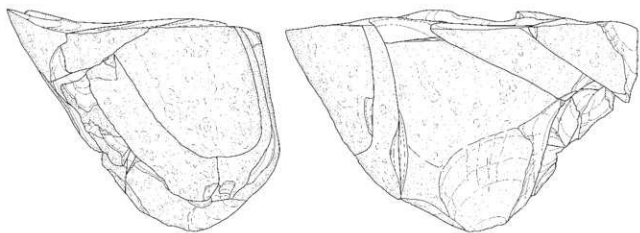
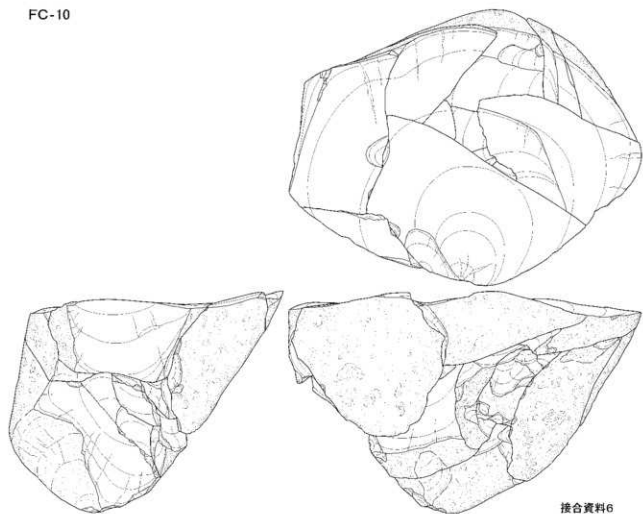
接合器種と点数 FC-10から出土したフレイク1点、包含層から出土したRフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク1点、計4点の接合資料である。

FC-8



図VI-23 接合資料(5)

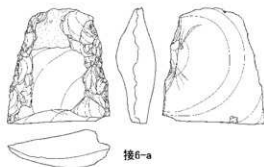
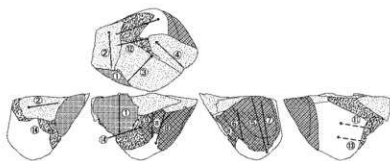
FC-10



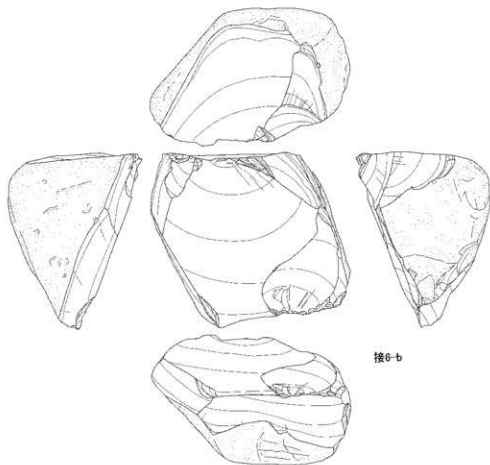
0 10cm

圖VI-24 接合資料(6)

FC-10



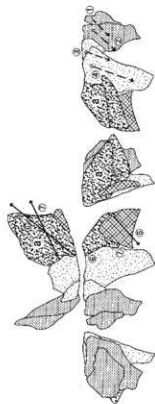
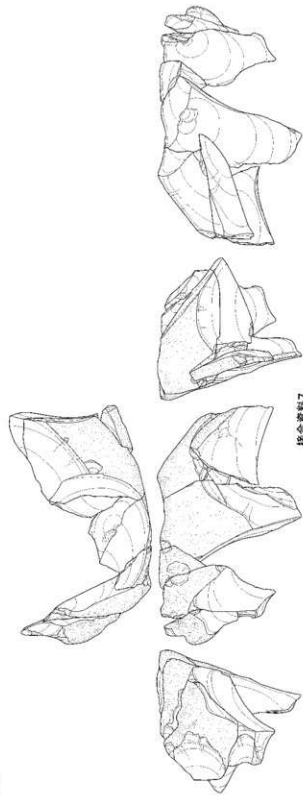
接6-a



接6-b

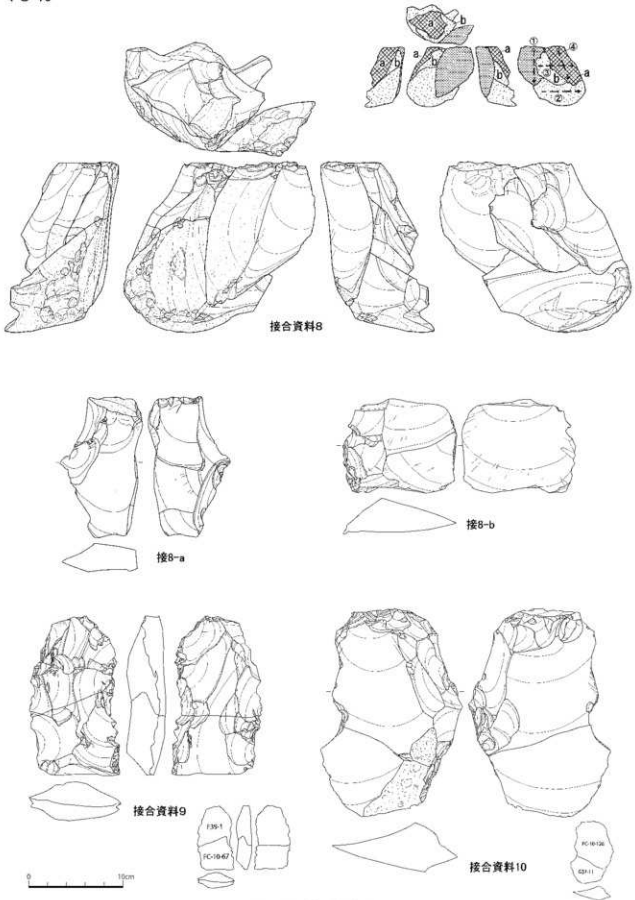


図VI-25 接合資料(7)



図VI-26 接合資料(8)

FC-10



図VI-27 接合資料(9)

概 要 角の残る角礫を用い、素材礫の縁辺から剥離する工程がわかる接合資料である。

(段階1) 上面の原石面を打面とする剥離①の後、(段階2) 打面を90°倒し、剥離を行う②、③。再び打面を段階1の原石面に戻し、数枚の剥離を行う④、④は二次加工されRフレイクとなっている(8a) また③の縁辺には使用によるとみられる微細剥離痕がある(8b)。

接合資料9 (図VI-27、表VI-4、5、図版56)

関係遺構 FC-10 F39 **総重量** 86.47g **石 材** 3-8

接合器種と点数 FC-10、包含層から出土した破片が接合し、トランシェ様石器となった。

概 要 接合資料9は横長剥片を素材とし、両側縁が調整され、概ね台形状に整形されている。刃部正面観は逆アーチを呈する。刃角は67.7°で、使用による光沢や刃こぼれは認められない。二次加工時に折断したとみられ、契機となった右側縁中央の最終剥離以降は調整されないことから、トランシェ用石器の加工失敗品とみられる。

接合資料10 (図VI-27、表VI-4、5、図版56)

関係遺構 FC-10、G37 **総重量** 157.50g **石 材** 1-3

接合器種と点数 FC-10から出土したRフレイクと包含層から出土したフレイクが接合したものの。

概 要 原石面の残る縦長剥片を用い、右側縁の両面で二次加工されている。接合面のリングからすると、原石面を打点とするものであり、意図的に剥片の一部を剥離した可能性がある。

接合資料11 (図VI-28、29、表VI-4、5、図版57)

関係遺構 FC-10、FC-11、F37、G35、O39 **総重量** 1792.42g **石 材** 1-5

接合器種と点数 FC-10出土フレイク1点、FC-11出土のフレイク6点、包含層出土の石核1点、フレイク5点、計13点の接合資料である。

概 要 凹凸の多い垂円礫の原石から、表皮を除去して剥片剥離を行う工程が観察される接合資料である。

(段階1) 展開図下面に作出された調整打面から、2枚の剥離により表皮を除去している①~③。(段階2) 打面転移を行い、左展開図の左下方向から、数枚の剥離を行っている④。(段階3) 段階2により作出された打面から、図上方に打点を移動させながら連続して剥離作業を行っている⑤~⑧。11aは⑦を剥離した後の残骸である。11bは同一母岩とみられるもの。剥片の左側縁、腹縁の両側縁に細部調整される。Rフレイクである。

接合資料12 (図VI-29、表VI-4、5、図版58)

関係遺構 FC-11、E31、F35、G35 **総重量** 275.81g **石 材** 1-3

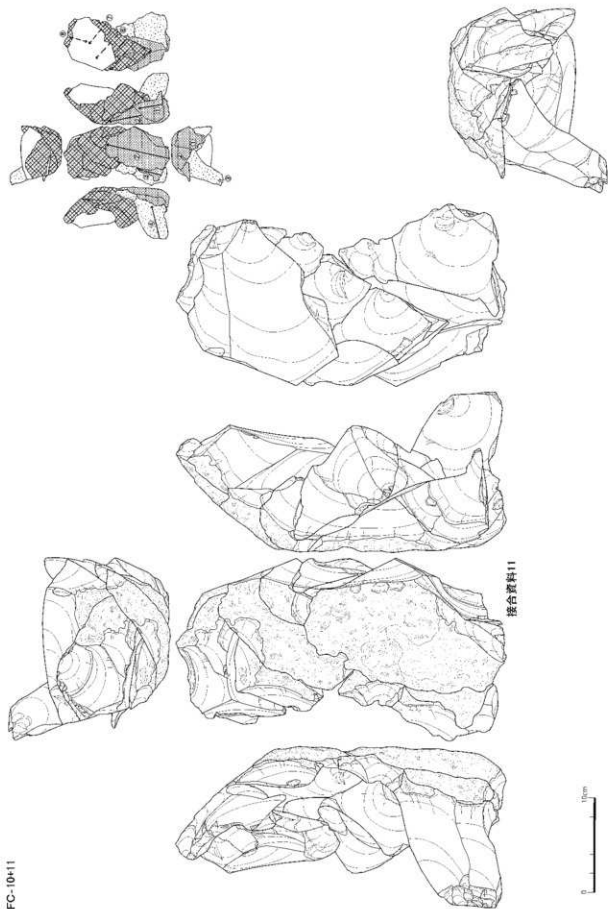
接合器種と点数 FC-11出土のRフレイク1点、フレイク7点、包含層出土のスクレイパー1点、フレイク2点、計11点の接合資料である。

概 要 平行四辺形に近い形状に節理割れしたフレイクから、剥片剥離を行う接合資料である。

(段階1) 平行四辺形の一側縁に頭部調整を行い①、(段階2) 側縁を打ち欠くように剥離を行うが、節理割れを起こして3枚以上の剥片となっている②。うち1点は二次加工され、スクレイパーとなっている(12a)。(段階3) ついで素材フレイクの右側縁に2回の剥離が行われ③、④、③と同時に素材フレイクも節理割れを起こしている。割れた素材フレイクの一方は二次加工されRフレイクとなっている(12b)

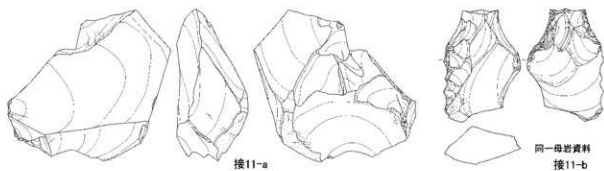
12aはスクレイパーである。剥片端部に急角度の細部調整が施される。12bはRフレイク。節理割れた剥片を用い、側縁が二次加工されるもの。端部を刃部とした、トランシェ様石器を意図したものの可能性がある。

FC-10+11

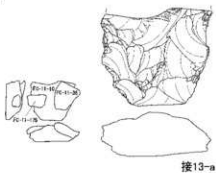
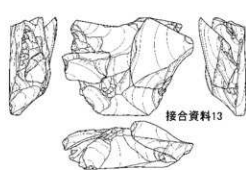
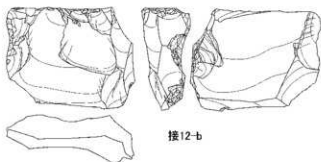
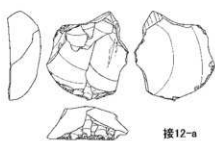
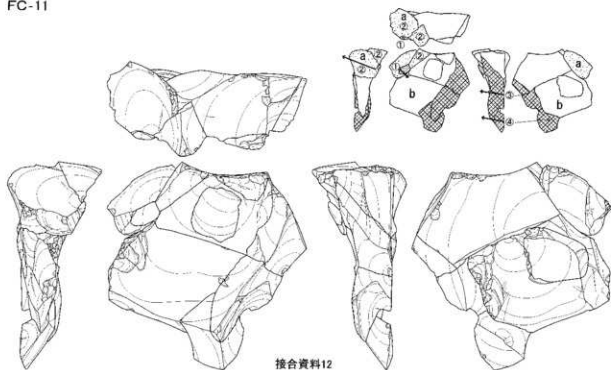


図VI-28 接合資料(10)

0 1 2 cm



FC-11



0 10cm

図VI-29 接合資料(11)

接合資料13 (図VI-29、表VI-4、5、図版58)

関係遺構 FC-11 総重量 73.58g 石材 1-10
 接合器種と点数 FC-11から出土したトランシェ様石器1点と調整剥片2点、計3点の接合資料である。
 概要 トランシェ様石器は刃部付近のみの破片である。刃部は逆アーチを呈し、刃角は59.3°である。細部調整は背面側からのみ行われており、接合するものはそのうちの2点である。

接合資料14 (図VI-30、表VI-4、5、図版58)

関係遺構 FC-11、G35 総重量 29.25g 石材 2-15
 接合器種と点数 FC-11、包含層G35区から出土した破片が接合し、1点のトランシェ様石器となった。
 概要 接合資料14は、横長剥片を素材とし、背腹両面両側縁が細部調整されほぼ三角形に仕上げられている。刃部は逆アーチ状を呈する。刃角は61.7°である。背面右側縁中央の最終剥離時に折れた失敗品とみられる。

接合資料15 (図VI-30、表VI-4、5、図版58、59)

関係遺構 FC-11、H35 総重量 73.47g 石材 1-3
 接合器種と点数 FC-11から出土したスクレイパーと包含層出土のフレイク、計2点の接合資料である。
 概要 連続して剥離されたフレイクのうち1点の端部が調整され、スクレイパーとなるもの。15aはスクレイパー。剥片の端部に急角度の細部調整が施され、搔器状の刃部が作出されている。

接合資料16 (図VI-30、表VI-4、5、図版59)

関係遺構 FC-11、F30 総重量 30.15g 石材 3-7
 接合器種と点数 包含層F30区から出土したトランシェ様石器と、FC-11から出土したフレイク2点、計3点の接合資料である。
 概要 横長のフレイクを加工し、トランシェ様石器を製作する過程をあらわす接合資料である。

横長でやや厚手の素材剥片を用い、打点の膨らみや基部にあたる左側縁部に二次加工が施される。概ね三角形に仕上げられるが、完成品として使用されたかどうかはわからない。刃部はやや逆アーチを呈する。刃角は46.2°である。刃部腹面側左には、刃部と直交方向の微細剥離が認められる(16a)。

接合資料17 (図VI-30、表VI-4、5、図版59)

関係遺構 FC-11、FC-14、G27 総重量 243.15g 石材 1-5
 接合器種と点数 G27から出土したトランシェ様石器と、FC-11、14から出土したフレイク2点、計3点の接合資料である。

概要 横長剥片の打点部分を二次加工中、節理割れた破片の接合資料である。うちの1片はさらに加工され、トランシェ様石器となっている。なお石材は接合資料11と同じとみられるものである。

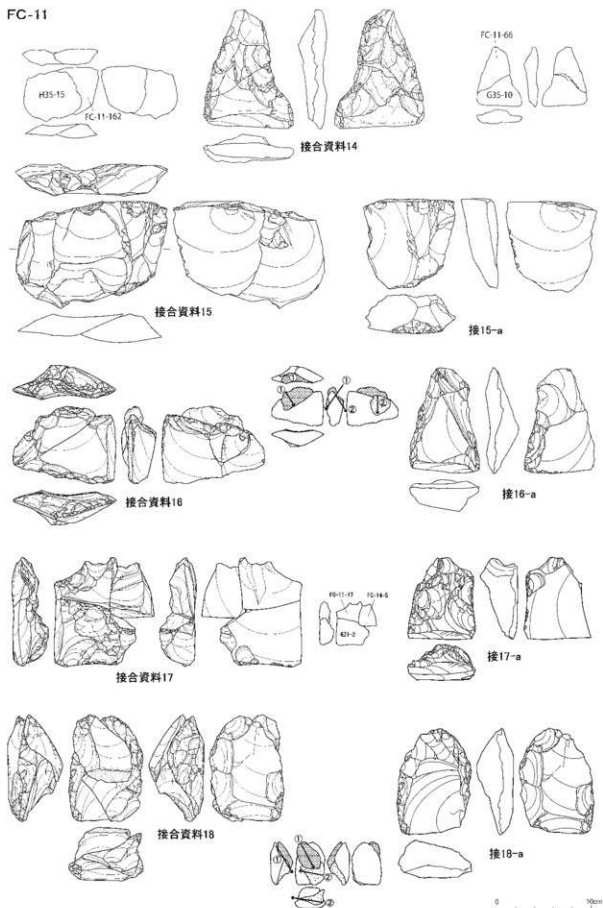
17aはトランシェ様石器。背面側が細部調整され、概ね台形に仕上げられる。刃部の形状は逆アーチを呈し、角度は62.0°である。

接合資料18 (図VI-30、表VI-4、5、図版59)

関係遺構 FC-11、FC-30、F35 総重量 54.85g 石材 1-2
 接合器種と点数 FC-30から出土したトランシェ様石器1点と、FC-11、G35から出土したフレイク各1点の計3点の接合資料である。

概要 原石面の残る厚手の縦長剥片から、トランシェ様石器に加工する剥片が接合している。素材となる剥片は、石核から剥離する前に、刃部となる剥離が原石面を打面として行われている。接合したフレイクは、背面側の二次加工によるものである。(段階1、2)縦長の剥片の周縁両面を加

FC-11



図VI-30 接合資料(12)

工し、「U」字状に整形されている①、②。

18aはトランシェ様石器。縦長剥片を素材とし、端部は丸みを帯びる整形がなされる。刃部の形状はアーチ状、角度は54.6°である。素材剥片、端部、刃部の形状や角度も他とやや異なる。

接合資料19 (図VI-31、32、表VI-4、5、図版59、60)

関係遺構 FC-11、FC-30、F35、36、37、G35、36、39、H33、35、J39、表採

総重量 986.15g **石 材** 1-3

接合器種と点数 FC-11から出土したフレイク13点、FC-30のフレイク1点、包含層出土の石核1点、Rフレイク3点、フレイク7点、計25点の接合資料である。

概 要 接合資料は3方向に原石面が残っており、その様子からいびつな亜円礫を素材としている。表皮を除去しながら剥片剥離を行う工程がわかる。

(段階1) 原石の稜線を利用し表皮が除去される①。(段階2) これを打面とし、打点をずらしながら連続して剥離を行い、表皮の出っ張りを除去している②~④。(段階3) 原石面の残る角から打点を交互にずらしながら剥離を行い⑤~⑧、側面からの打面調整をはきでさらに同一方向から剥離を行う⑨~⑪。⑩、⑪で剥離が大きく階段状なったため、打面転移し(段階4) 連続した剥離を行う⑫。(段階5) 作業面を180°転換し、礫表皮を大きく除去して残核にいたる⑬。なお段階6のトーンは、段階4後半で石核から節理割れた破片の調整剥片が接合したものである。

19aはRフレイク。剥片の一部に意図の不明瞭な剥離がみられる。19bもRフレイク。原石面のあるフレイクの周縁に二次加工が認められる。19cは残核となったもの。

接合資料20 (図VI-33、表VI-4、5、図版61)

関係遺構 FC-14、16、18、30、H33、133 **総重量** 214.82g **石 材** 2-2

接合器種と点数 FC-14出土のフレイク2点、FC-16出土のフレイク1点、FC-18出土のフレイク3点、FC-30出土のフレイク1点、包含層出土のRフレイク2点、フレイク5点、計14点の接合資料である。

概 要 接合資料からは、原石面の状況から亜円礫を素材とし、節理割れの破片からスクレイパーを得ていることがわかる。接合した剥片は縦横に走る節理により不規則な割れが多く認められ、剥離順の関係を把握するのは困難である。20aは節理部分避けて得られた剥片を利用して二次加工を施している。スクレイパーである。縦長剥片を用い、腹面側右側縁に二次加工が施される。加工時に節理割れを起こし、剥離作業を終了している。20b、cは接合しないが同一母岩から得られたとみられるトランシェ様石器。いずれも原石面が残る横長剥片を利用し、概ね三角形に整形されるもの。bは背腹両面に二次加工され、刃部の形状は逆アーチ、角度は53.9°である。cはやや厚手で、刃部の形状は直線状。角度は44.2°である。

接合資料21 (図VI-33、表VI-4、5、図版61)

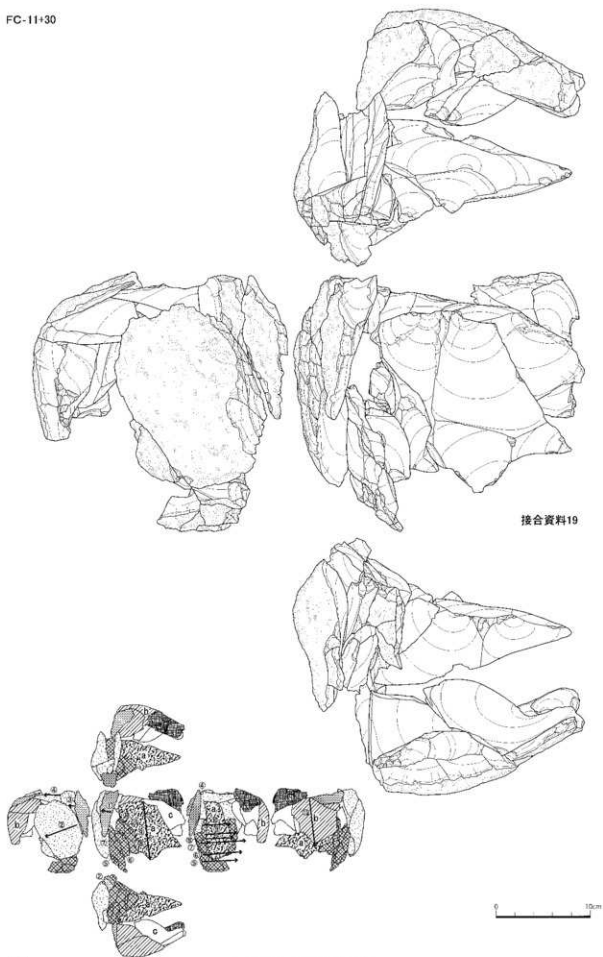
関係遺構 FC-15、L46、M41 **総重量** 77.98g **石 材** 1-9

接合器種と点数 FC-15から出土したフレイク1点と、包含層から出土したトランシェ様石器1点、フレイク1点、計3点の接合資料である。

概 要 トランシェ様石器と調整剥片2点が接合した。

原石面の残る横長の剥片を素材とし、刃部を除く周縁を加工して成形されている。素材剥片打点部、背面原石部を除去する加工が施され、トランシェ様石器の形状を呈するが、刃部に光沢、刃こぼれなどの痕跡がないことから、使用には至らなるとみられる。

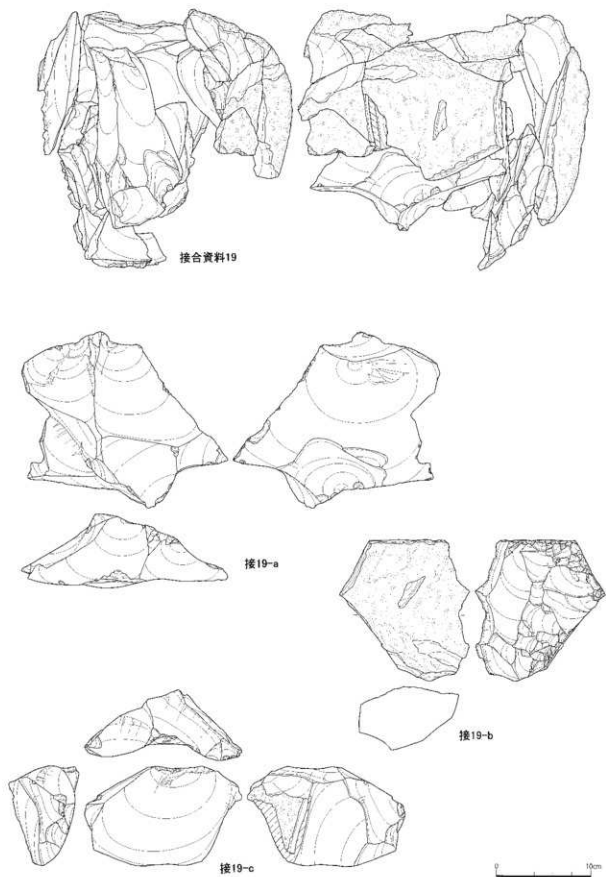
21aはトランシェ様石器。横長剥片を素材とし、周縁を二次加工して整形される。刃部は直線状で角度は68.7°である。



接合資料19

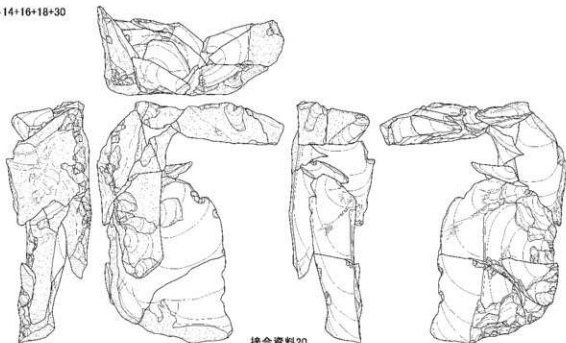
図VI-31 接合資料(13)

FC-11+30

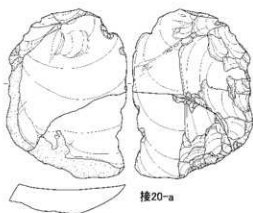


図VI-32 接合資料(14)

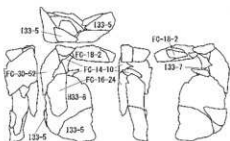
FC-14+16+18+30



接合資料20



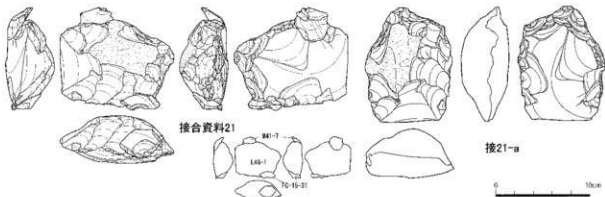
接20-a



同一層岩資料
接20-b

同一層岩資料
接20-c

FC-15



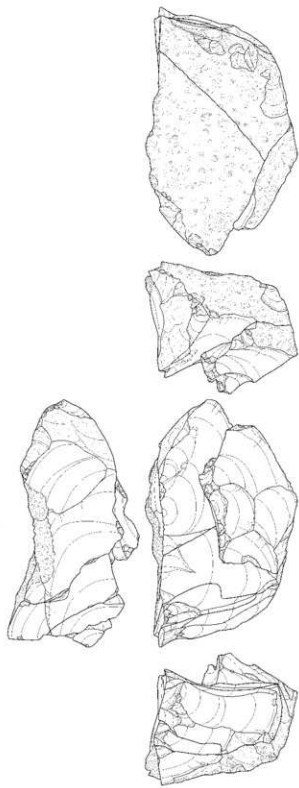
接合資料21

接21-a

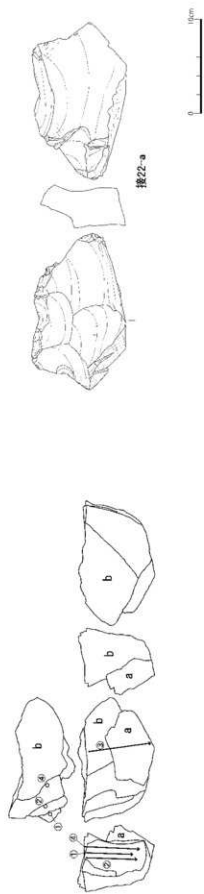
0 10cm

圖VI-33 接合資料(15)

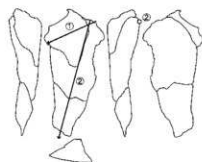
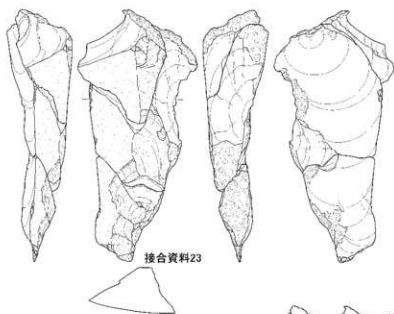
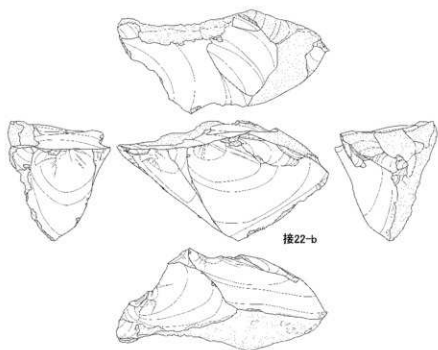
FC-23



接合資料22



図VI-34 接合資料(16)



図VI-35 接合資料(17)

接合資料22 (図VI-34、35、表VI-4、5、図版62)

関係遺構 FC-23、H31、I33、M36 総重量 591.97g 石材 3-2

接合器種と点数 FC-23から出土した石核1点、包含層から出土したRフレイク1点、フレイク3点、計5点の接合資料である。

概要 接合資料は3方向に原石面を残す。その様子から、やや角のある亜角礫を用いたとみられる。剥片剥離作業から石核に至る工程がわかる。

素材の長辺に設けられた調整打面より、端部から交互に打点を動かしなが剥離し①～④、残核に至っている。22aは折れた剥片に二次加工がみられるRフレイク。22bは石核である。

接合資料23 (図VI-35、表VI-4、図版62)

関係遺構 包含層K35、R38、表採 総重量 154.44g 石材 3-2

接合器種と点数 包含層から出土したフレイク3点の接合資料である。

概要 原石面を除去する2回の剥離である①、②。接合していないが、接合資料22の打面調整剥片とみられる。

接合資料24 (図VI-36、表VI-4、5、図版63)

関係遺構 FC-30、F31、G32、H31 総重量 189.58g 石材 2-8

接合器種と点数 FC-30出土の石核1点、包含層から出土したフレイク6点、計7点の接合資料である。

概要 扁平な楕円形礫を素材とし、剥片剥離から残核に至る過程がわかる接合資料である。原石の端部から、扁平な部分の表皮を除去する剥離を行う。(段階1) 剥離された面を打面として、打点を左右に移動させながら剥離を行う①、②。(段階2) 打面を剥離し③、(段階3) 再び1、2と同一方向から剥離を行う④。数枚の剥離ののちさらに打面を調整して剥離し⑤、残核に至る。24aは残核である。

接合資料25 (図VI-36、表VI-4、5、図版63)

関係遺構 FC-32、N35 総重量 24.74g 石材 3-10

接合器種と点数 FC-32から出土したトランシェ様石器と、包含層出土のフレイク1点、計2点の接合資料である。

概要 トランシェ様石器の素材剥片採取時に節理割れしたとみられるフレイクが接合した。トランシェ様石器は右側縁背面に細部調整が施されるが、左側縁はほとんど調整されていない。器体が薄くなりすぎたためか、あるいは器軸まで剥離が至ってしまったため、製作途中で作業終了したものとみられる。刃部の正面観は直線状で、刃角は67.5°である。

接合資料26 (図VI-36、表VI-4、5、図版63)

関係遺構 FC-34、L35 総重量 41.79g 石材 3-9

接合器種と点数 FC-34出土のフレイク1点とトランシェ様石器1点、計2点の接合資料である。

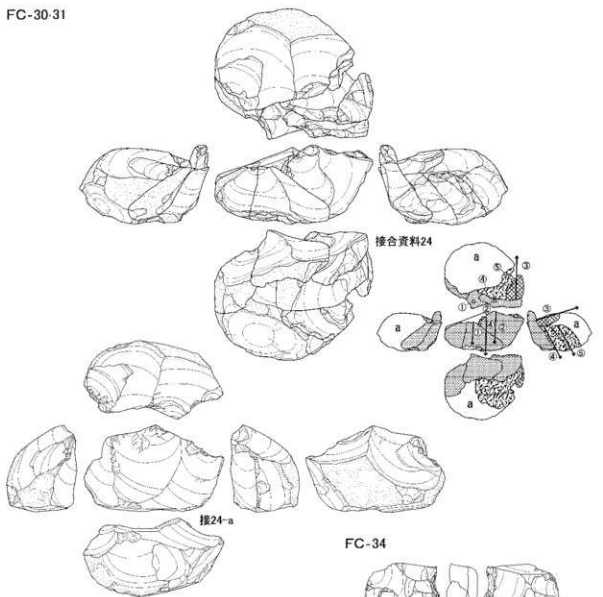
概要 トランシェ様石器は大形を意図して製作したとみられるが、二次加工中に折れ、基部は欠損している。折れた後も腹面右側縁に調整されている。再加工を試みるが、おそらく幅に対して厚みがありすぎることから、完成に至らなかったものとみられる。横長の剥片を素材とし、刃部正面観は弱い逆アーチを呈する。刃角は51.9°である。

接合資料27 (図VI-37、38、表VI-4、5、図版63、64)

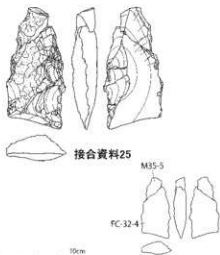
関係遺構 FC-35、F37、K34、35、37、L34 総重量 729.87g 石材 1-1

接合器種と点数 FC-35から出土したフレイク8点、包含層から出土したRフレイク1点、フレイク6点、計15点の接合資料である。

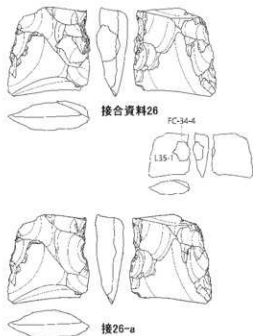
FC-30-31



FC-32

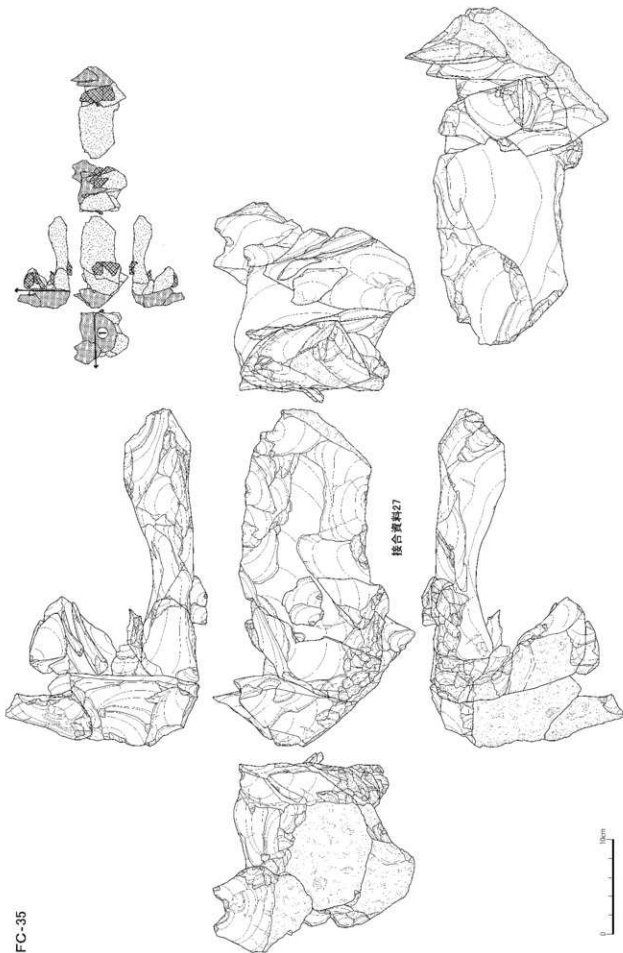


FC-34

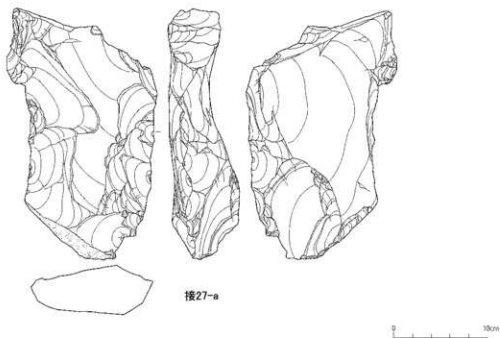


図VI-36 接合資料(18)

FC-35



図VI-37 接合資料(19)



図VI-38 接合資料(20)

概 要 接合資料27は2面に原石面を残している。ややいびつな楕円の球に近い形状とみられる。節理が多く、また稲妻状の白色帯がある独特の石材であることから、剥離面接合より節理面の模様類似による接合がほとんどであり、剥離行程の復元は困難である。

(段階1) 原石面の長軸から表皮を大きく取り込んで剥離した時点①で、(段階2) 原石は少なくとも3つの節理割れ破片となったとみられる。段階3として網掛けしたものは、節理割れ以後の調整剥片である。

27aはRフレイクとしたもの。段階2で節理割れしたフレイクを利用し、背腹両面から粗い二次加工を施し短冊状に整形されている。

接合資料28 (図VI-39、表VI-4、5、図版65)

関係遺構 FC-35、H32、L34 **総重量** 241.72g **石 材** 1-1

接合器種と点数 FC-35から出土したトランシェ様石器1点、フレイク9点、包含層出土のRフレイク1点、フレイク1点、計12点の接合資料である。

概 要 接合資料27とは同一母岩とみられる。28との関係は不明である。(段階1) 明瞭な打点のある剥片が3枚あり、これらは方向と打点が近く、同一打面で採取連続して採取された剥片のうち3枚とみられる①～③。段階2とした接合は、段階1剥離後の調整剥片とみられるものである。

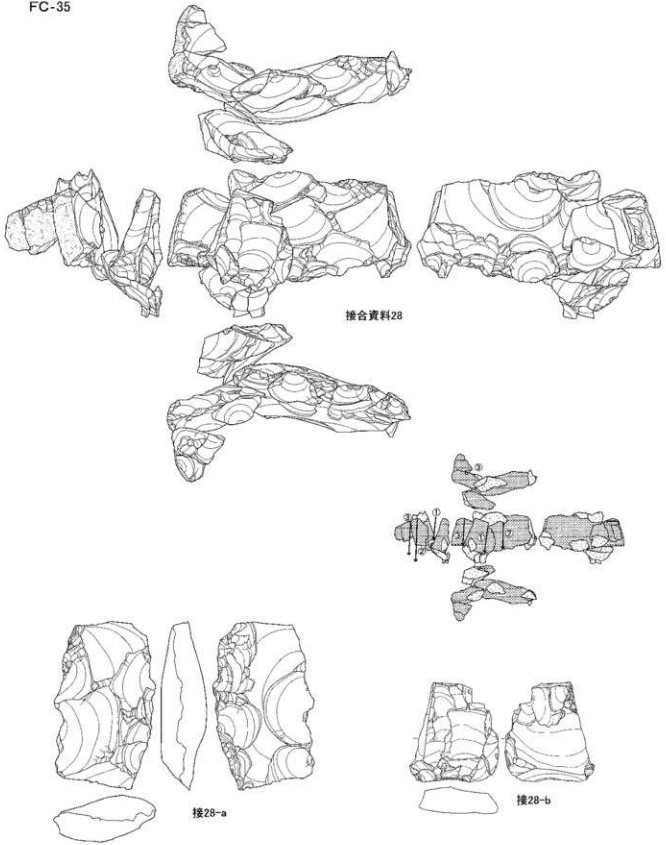
28aはトランシェ様石器とした。段階1②で得られた横長の剥片を用い、両側縁に粗い二次加工が施されている。加工時に刃部が階段状の剥離となっており、製品とはなっていない。28bは段階1①で得られた剥片を用いたRフレイク。素材剥片の打点部に意図の不明瞭な二次加工がみられる。

接合資料29 (図VI-40、表VI-4、5、図版66)

関係遺構 包含層I26、27、33、J31 **総重量** 352.11g **石 材** 2-9

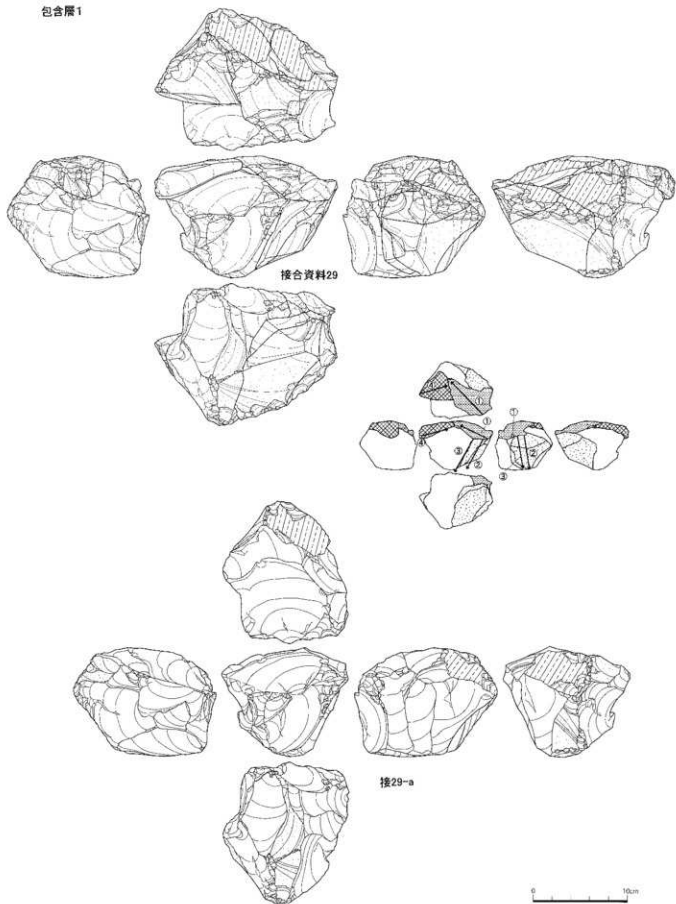
接合器種と点数 石核1点、フレイク4点の計5点からなる接合資料である。

FC-35



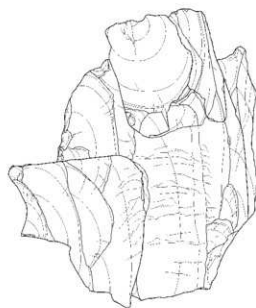
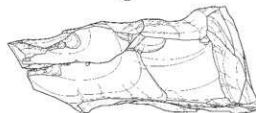
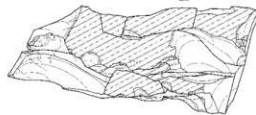
図VI-39 接合資料(21)

包含層1

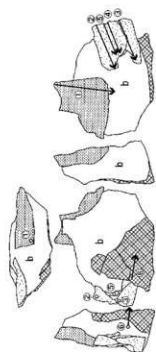


圖VI-40 接合資料(22)

包含層2



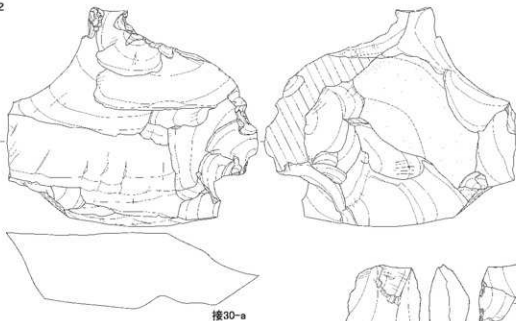
接合資料30



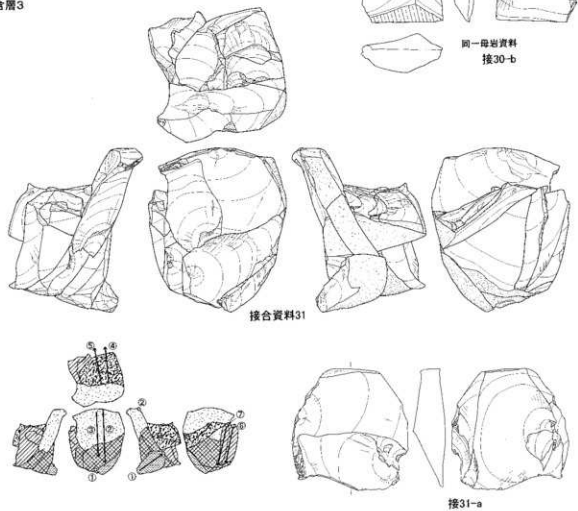
図VI-41 接合資料(23)



包含層2

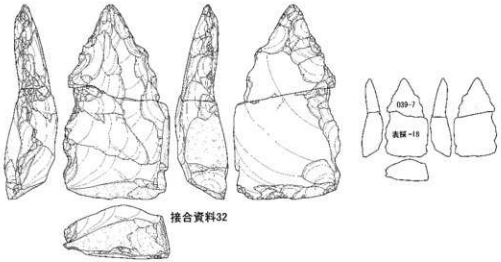


包含層3

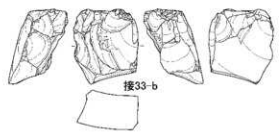
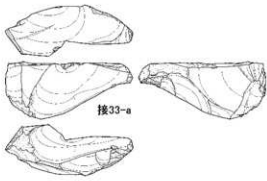
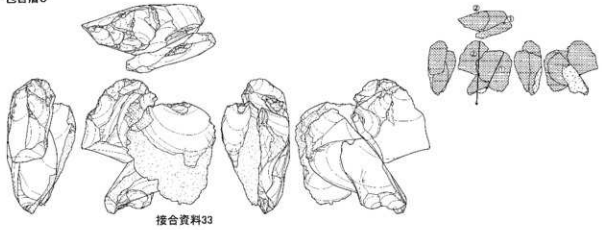


圖VI-42 接合資料(24)

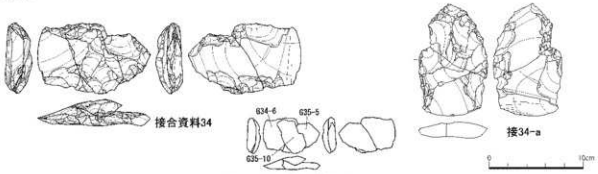
包含層4



包含層5



包含層6

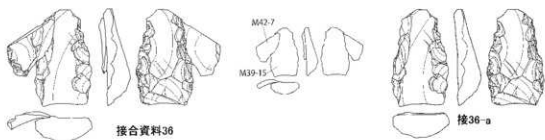


図VI-43 接合資料(25)

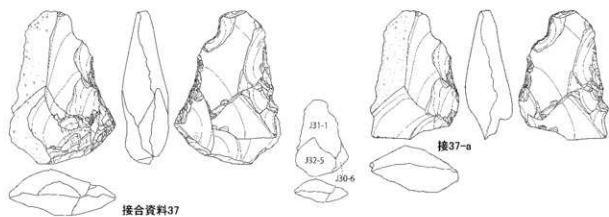
包含層7



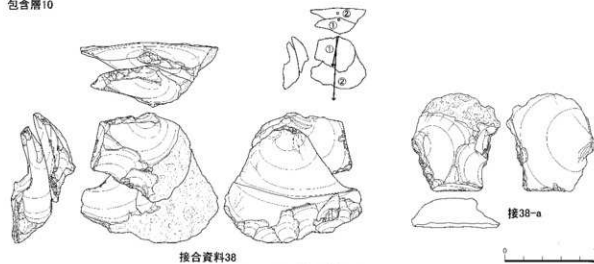
包含層8



包含層9



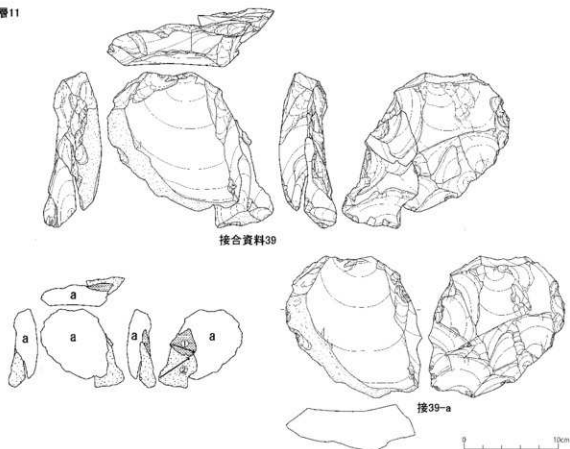
包含層10



圖VI-44 接合資料(26)

0 10mm

包含層11



図VI-45 接合資料(27)

概要 角礫を原石とする。数枚程度の剥離であるが、原石から石核に至る剥離工程がわかる。

(段階1) 原石の角を利用し、礫皮を除去する①。除去した面を打面とし、剥片剥離を行う②、③。さらに剥離面を打面とし、打面を転移する(未接合)。(段階3) 残る原石面を除去し④、剥離を行い、残核に至っている。なおこの最終剥離は接合していないが、段階1でできた稜線を取り込み、横長の剥片を得ているため、トランシェ様石器の素材となった可能性がある。29aは残核である。

接合資料30 (図VI-41、42、表VI-4、5、図版66、67)

関係遺構 包含層E・F32、33、F30、32、G32、P35 総重量 798.0g 石材 2-16

接合器種と点数 包含層から出土した石核1点、フレイク7点、計8点の接合資料である。

概要 節理面で割れた角礫を素材とする。凝灰質の頁岩である。

(段階1) 素材礫の稜線を利用し、剥片剥離を行う①が、大きな階段状剥離となる。(段階2) 打面を90°右へ動かし剥離している②~④。(段階3) 段階2の剥離面を打面とし剥離が行われるが、石核の3分の2ほどの剥片が節理割れして⑤、作業を終えている。

30aは接合しないが同一母岩とみられる。段階1以前に、正面図右上方の剥離時に得られたと想定できる剥片を素材とする。縦長剥片を用いたトランシェ様石器である。腹面側両側縁に二次加工が施される。原石面を刃部とする。形状は直線状、角度は55.7°である。30bは残核。

接合資料31 (図VI-42、表VI-4、5、図版68)

関係遺構 包含層R42、Q42、M40 総重量 239.55g 石材 1-7

接合器種と点数 包含層から出土したRフレイク1点と、フレイク7点、計8点の接合資料である。

概要 3面に原石面が残る、半球状であることから、円礫を素材するとみられる。接合資料

は円礫から打面を作成し、分割するように剥離し、大きな剥片は再加工される工程がわかる。

(段階1) 礫の表皮を除去する①。(段階2) 除去された面から、大きく2枚の剥離を行う②、③。②、③はそれぞれ再加工される。(段階3) 段階2で作出された打面より、剥片剥離が連続して行われる④、⑤。(段階4) さらに段階3の剥離面を打面とし、剥離作業を行う⑥、⑦。31aは段階2、②で剥離された剥片を利用したもの。段階1、2でできた、平坦面を取り込むような剥離が試みられている。

接合資料32 (図VI-43、表VI-4、5、図版68)

関係遺構 包含層O39、表採 総重量 935.55g 石材 2-11

接合器種と点数 包含層から出土したトランシェ様石器片が接合し、大形の製品となった。

概要 原石面が2面に残る横長の剥片を用い、両側縁が両面から細部調整され、概ね三角形に仕上げられている。細部調整時に2片に折れているが、刃部側の破片は破面から加工が試みられている。刃部の正面観は直線状、角度は68.5°である。

接合資料33 (図VI-43、表VI-4、5、図版68)

関係遺構 包含層M39、N39 総重量 124.05g 石材 1-8

接合器種と点数 包含層から出土したRフレイク2点、フレイク2点、計4点の接合資料である。

概要 接合資料には2面に原石面があり、その様子から、やや角のある亜円礫を素材とすると思われる。接合資料からは剥離された2枚の剥片を二次加工する様子が見られる。

(段階1) 原石面を除去した調整打面から、2回の剥片剥離が行われる①、②。(段階2) ②は節理面で2片に分割し、2片とも二次加工され、Rフレイク(33ab)となっている。

33aは素材剥片の背面両側縁が細部調整され、概ね台形に整形されている。刃部の形状は弱い逆アーチを呈するが、角度は77.4°あり、形状も不完全であり、使用に至ったかは疑わしいため、Rフレイクとした。33bは素材剥片の節理割れ面から剥離されている。

接合資料34 (図VI-43、表VI-4、5、図版69)

関係遺構 包含層G34、35 総重量 24.77g 石材 2-10

接合器種と点数 包含層から出土したトランシェ様石器とフレイクが接合したものである。

概要 トランシェ様石器の調整剥片が接合している。素材となった剥片は横長で、両面両側縁から細部調整され、概ね三角形に整形されつつある。接合フレイクは打点部背面側の厚い部分を取り込むように、正面右側縁上部から、器軸に対して斜位に剥離される。調整はその後も継続しているが、正面左側縁中位の最終剥離時に破断していると思われる。

接合資料35 (図VI-44、表VI-4、5、図版69)

関係遺構 包含層G36、J30 総重量 27.78g 石材 3-3

接合器種と点数 包含層から出土したトランシェ様石器とフレイク、計2点の接合資料である。

概要 トランシェ様石器腹面に残るリングから推測すると、接合資料2点は同一の方向から連続して剥離されていると思われる。35aはトランシェ様石器。横長剥片を素材とし、両面の両側縁が細部調整され、三角形に仕上げられている。刃部の正面観は直線状、角度は46.1°である。側面の細部調整は部分的に刃部にも及んでおり、刃部の形状もしくは角度の調整を試みたものとみられる。

接合資料36 (図VI-44、表VI-4、5、図版69)

関係遺構 包含層M39、42 総重量 20.95g 石材 1-18

接合器種と点数 包含層から出土したトランシェ様石器とフレイク、計2点の接合資料である。

概要 剥片からトランシェ様石器にいたる作業の接合資料。トランシェ様石器36aは、両面の両側縁が二次加工され、概ね台形状に仕上げられる。刃部の正面観は直線状で、角度は54.3°であ

る。

接合資料37 (図VI-44、表VI-4、5、図版69)

関係遺構 包含層 J 30、31、32 総重量 74.64 g 石材 2-5

接合器種と点数 包含層から出土したトランシェ様石器1点と、フレイク2点、計3点の接合資料である。

概要 原石面が残る横長剥片を素材とし、打点と端部にあたる2辺を二次加工しトランシェ様石器とするものである。接合したフレイクは、刃部にあたる部分の厚みを取り込んで除去を試みている。しかし器体の筋理に伴い大きく割れて刃部を失っており、それ以上の調整はされていない。

接合資料38 (図VI-44、表VI-4、5、図版70)

関係遺構 包含層 F 36、J 31 総重量 98.55 g 石材 3-6

接合器種と点数 包含層から出土したRフレイクとフレイク、計2点の接合資料である。

概要 原石面が大きく残るフレイクを素材とし、同一面から3回の剥離を行っている①、②。38aは①が二次加工されたRフレイク。表皮を除去した面を取り込んで剥離されている。両側縁が加工され、トランシェ様石器製作を試みられるが、途中で終了している。

接合資料39 (図VI-45、表VI-4、5、図版70)

関係遺構 包含層 J 37、N29、O35 総重量 136.2 g 石材 1-2

接合器種と点数 包含層から出土したRフレイク1点とフレイク2点、計3点が接合している。

概要 原石面を取り込んだ厚手の剥片から、剥片剥離作業を行っている。(段階1、2)素材剥片の縁辺で、周縁をめぐるように剥離されている①、②。39aはRフレイク。

表VI-2 フレイク・チップ集中域出土土佐土器一覧

掲載順	番号	出土番号	分類	グリッド番号	層位	遺物番号	点数	未接合	特徴	粘土中の主な混入物
図VI-11	1	4	Ia	FC 2	II	9	1	-	砂鉄(チューG)	白磁片、石炭、白粉角片、石膏
図VI-11	2	5	Ia	FC 10	II	28	1	-	海産貝殻	白磁片、石膏
図VI-11	3	7	Ia	FC 10 H 41	II	68 158	1	1	白磁片に黒土質の粉	白磁片、石膏
図VI-11	4	9	Ia	FC 10 FC 10 FC 13	II	141 20 1	1	1	白磁片、海産貝殻	白磁片、石膏
図VI-11	5a 5b	8-a 8-b	Ia	FC 10 H 37 H 35	II	119 3 2	1	1	海産貝殻、長石、石膏、白磁片	白磁片、石膏
図VI-11	6	10	Ia	FC 11 P 35	II	75 1	1	1	白磁片に黒土質の粉	白磁片、石膏
図VI-11	7a 7b	11-a 11-b	Ia	FC 11 FC 11 FC 11 H 35 H 35	II	168 161 1 2 2	1	1	白磁片、海産貝殻	白磁片、石膏
図VI-11			Ia	FC 11 FC 11 FC 11 H 35 H 35	II	191 214 189 1 2	1	1	石炭、白粉角片	白磁片、石膏
図VI-11	8	17c	Ⅱa or Ⅱb	FC 11 H 92	II	92 69	1	1	R.L. 黄文	白磁片、石膏
図VI-11	9a 9b 9c 9d	16-a 16-b 16-c 16-d	Ia	FC 13 FC 13 FC 13 FC 13	II	3 3 3 4	1	1	白磁片に黒土質の粉、海産貝殻、石膏	白磁片、石膏
図VI-11			Ia	FC 13 FC 10 H 35 H 35 H 35 H 35 J 31	II	27 159 3 3 4 2 1	1	1	白磁片、石膏	白磁片、石膏
図VI-11			Ia	FC 13 FC 10 H 35 H 35 H 35 J 31	II	27 159 3 3 4 2 1	1	1	白磁片、石膏	白磁片、石膏
図VI-11	19	97	Iva	FC 17	II	1	1	-	無文口縁	砂鉄(黒)石炭
図VI-11	20	98	Iva	FC 17	II	2	1	-	折り返し口縁	砂鉄(黒)石炭、白粉角片
図VI-11	21	96	Iva	FC 17 FC 17	II	1 4	1 4	1 4	折返し口縁	砂鉄(黒)石炭、白粉角片

表VI-3 フレイク・チップ集中域出土掲載石器一覧

図番号	グリッド	遺物番号	日付	石器	層位	点数	石材	母岩番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図VI-12 1	FC 2	6	2012/7/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	1	6.15	3.35	1.10	23.33
図VI-12 2	FC 2	3	2012/7/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	1	4.30	3.40	1.15	15.24
図VI-12 3	FC 2	7	2012/7/3	R フレイク	II	1	Sh	2	9.50	7.00	4.60	210.00
図VI-12 4	FC 3	1	2012/6/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	2	5.30	2.25	1.35	15.77
図VI-12 5	FC 5	1	2012/6/13	石槌	II	1	Sh	1	(4.90)	(2.40)	0.85	(9.12)
図VI-12 6	FC 6	1	2012/7/2	石槌	II	1	Sh	2	5.60	5.60	5.20	190.00
図VI-12 7	FC 8	17	2012/6/25	トランシェ様石器	II	1	Sh	2	5.60	4.05	1.85	28.50
図VI-12 8	FC 8	18	2012/6/25	両面調整石器	II	1	Sh	1	5.00	(2.40)	1.00	(10.23)
図VI-12 9	FC 8	3	2012/6/19	R フレイク	II	1	Sh	3	4.80	(2.00)	1.20	(9.40)
図VI-12 10	FC 8	22	2012/6/25	R フレイク	II	1	Sh	2	6.10	(6.80)	4.10	(90.00)
図VI-13 11	FC 9	3	2012/7/26	両面調整石器	II	1	Sh	1	5.50	2.15	1.05	10.30
図VI-13 12	FC 9	5+8	2012/7/26	トランシェ様石器	II	1	Sh	2	4.90	3.20	0.80	12.89
図VI-13 13	FC 9	2	2012/7/26	トランシェ様石器	II	1	Sh	2	6.40	3.40	1.15	18.80
図VI-13 14	FC 9	1	2012/7/26	トランシェ様石器	II	1	Sh	2	5.55	2.80	1.15	15.32
図VI-13 15	FC 9	4	2012/7/26	R フレイク	II	1	Sh	2	5.70	4.00	1.70	34.58
図VI-13 16	FC 10	14	2012/6/19	両面調整石器	II	1	Sh	1	8.55	(4.10)	2.50	(65.00)
図VI-13 17	FC 10	117	2012/7/31	両面調整石器	II	1	Sh	1	6.55	4.30	1.50	36.53
図VI-13 18	FC 10	91	2012/7/31	両面調整石器	II	1	Sh	2	(4.10)	(2.15)	0.80	(6.75)
図VI-13 19	FC 10	53	2012/7/31	トランシェ様石器	II	1	Sh	4	5.85	3.10	1.10	16.29

図番号	遺構	遺物番号	日付	石器	層位	点数	石材	母岩番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図VI-13 20	FC	10 38	2012/6/19	トランシュ様石器	II	1	Sh	3	4.95	2.55	1.10	11.55
図VI-13 21	FC	10 15	2012/6/19	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	4.90	2.20	0.90	9.82
図VI-13 22	FC	10 153	2012/7/27	トランシュ様石器片	II	1	Sh	2	(2.90)	(2.55)	0.90	(5.93)
図VI-13 23	FC	10 96	2012/7/31	Rフレイク	II	1	Sh	1	4.80	3.00	1.30	15.55
図VI-13 24	FC	10 115	2012/7/31	Rフレイク	II	1	Sh	1	4.50	(3.30)	0.90	(13.29)
図VI-13 25	FC	10 37	2012/6/19	石核	II	1	Sh	1	8.40	9.00	3.45	280.00
図VI-14 26	FC	11 208	2012/8/3	トランシュ様石器片	II	1	Sh	2	4.70	2.40	0.90	6.91
図VI-14 27	FC	11 194	2012/8/3	トランシュ様石器片	II	1	Sh	1	(4.40)	(2.25)	0.90	(7.65)
図VI-14 28	FC	11 100	2012/8/2	両面調整石器	II	1	Sh	2	4.00	3.10	1.20	9.72
図VI-14 29	FC	11 202	2012/8/3	両面調整石器	II	1	Sh	2	5.00	2.80	1.40	15.89
図VI-14 30	FC	11 84	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Rh?	5	5.65	3.80	1.10	22.24
図VI-14 31	FC	11 219	2012/8/9	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	6.80	3.35	1.10	23.88
図VI-14 32	FC	11 45	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	6.40	4.85	1.70	44.18
図VI-14 33	FC	11 178 + 201	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	3	6.30	2.50	1.00	13.67
図VI-14 34	FC	11 57	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	4	6.00	2.90	2.10	28.44
図VI-14 35	FC	11 80	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	5.20	2.50	1.60	20.77
図VI-14 36	FC	11 207	2012/8/3	トランシュ様石器片	II	1	Sh	2	(3.60)	3.50	1.15	(11.11)
図VI-14 37	FC	11 56	2012/8/3	トランシュ様石器片	II	1	Sh	2	3.70	3.25	1.80	14.92
図VI-14 38	FC	11 125	2012/8/3	トランシュ様石器片	II	1	Sh	3	(2.80)	2.65	0.85	(6.56)
図VI-14 39	FC	11 163	2012/8/3	Rフレイク	II	1	Sh	3	11.20	5.55	2.00	190.00
図VI-14 40	FC	11 152	2012/8/3	Rフレイク	II	1	Sh	2	4.60	(3.25)	2.50	(32.50)
図VI-14 41	FC	11 216	2012/8/3	石核	II	1	Sh	1	4.80	7.10	3.25	190.00
図VI-15 42	FC	12 20	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	3	4.90	2.50	0.70	9.93
図VI-15 43	FC	12 4	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	(3.90)	2.90	1.25	(13.76)
図VI-15 44	FC	12 25	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	5.00	3.45	1.20	18.81
図VI-15 45	FC	13 35	2012/8/3	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	6.00	3.50	1.60	27.55
図VI-15 46	FC	13 30	2012/8/3	Rフレイク	II	1	Sh	2	4.80	5.10	3.35	34.59
図VI-15 47	FC	13 42	2012/8/3	たたき石	II	1	SS		(6.70)	(8.50)	2.70	(183.00)
図VI-15 48	FC	14 9	2012/8/2	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	5.40	3.00	1.50	23.20
図VI-15 49	FC	15 12	2012/8/9	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	4.90	3.20	1.20	14.78
図VI-15 50	FC	15 23	2012/8/10	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	5.50	3.50	1.20	21.68
図VI-15 51	FC	15 38	2012/8/10	Rフレイク	II	1	Sh	1	6.10	2.80	1.05	16.55
図VI-15 52	FC	16 7	2012/8/31	石核	II	1	Sh	4	2.55	(1.15)	0.40	(0.75)
図VI-15 53	FC	16 25	2012/8/31	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	6.70	3.50	1.50	10.06
図VI-15 54	FC	16 2	2012/8/31	Rフレイク	II	1	Sh	3	7.30	4.50	2.00	70.33
図VI-15 55	FC	18 1	2012/9/4	石核	II	1	Sh	2	2.30	(2.55)	0.40	(2.62)
図VI-16 56	FC	20 10	2012/9/13	石核	II	1	Sh	2	4.10	(1.05)	0.65	(3.02)
図VI-16 57	FC	20 12	2012/9/13	スタレイバー	II	1	Sh	3	5.60	4.60	2.80	62.94
図VI-16 58	FC	20 30	2012/9/13	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	6.90	3.10	1.40	24.23
図VI-16 59	FC	20 6	2012/9/13	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	4.20	2.75	1.00	11.60
図VI-16 60	FC	20 35	2012/9/13	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	6.40	2.70	1.05	15.30
図VI-16 61	FC	20 11	2012/9/13	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	7.70	4.35	1.90	49.29
図VI-16 62	FC	21 2	2012/9/12	トランシュ様石器片	II	1	Sh	2	4.80	2.30	0.90	8.84
図VI-16 63	FC	25 1	2012/10/4	Rフレイク	II	1	Sh	1	4.20	(4.50)	0.80	(19.23)
図VI-16 64	FC	25 5	2012/10/9	Uフレイク	II	1	Sh	2	6.90	4.25	1.10	32.00
図VI-16 65	FC	29 1	2012/10/12	Rフレイク	II	1	Sh	2	4.50	4.00	1.40	20.35
図VI-16 66	FC	30 7	2012/10/12	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	5.25	2.60	1.25	12.23
図VI-16 67	FC	30 1	2012/10/12	石核	II	1	Sh	2	12.80	7.60	3.00	240.00
図VI-16 68	FC	30 13	2012/10/12	すり石片	II	1	Da		8.60	(5.90)	5.20	(200.00)
図VI-16 69	FC	20 19	2012/9/13	Rフレイク	II	1	Sh	2	11.60	14.80	6.40	770.00
図VI-17 70	FC	20 8	2012/9/13	すり石片	II	1	Di		5.50	(8.50)	4.10	(220.00)
図VI-18 71	FC	32 5	2012/10/12	Rフレイク	II	1	Sh	2	6.60	5.70	1.60	58.64
図VI-18 72	FC	32 5	2012/10/12	Rフレイク	II	1	Sh	2	9.70	(5.85)	2.10	120.00
図VI-18 73	FC	33 26	2012/10/15	スタレイバー	II	1	Sh	1	8.05	7.10	1.50	61.51
図VI-18 74	FC	33 14	2012/10/15	トランシュ様石器	II	1	Sh	2	5.90	3.40	1.75	28.90
図VI-18 75	FC	33 10	2012/10/15	トランシュ様石器	II	1	Sh	1	6.60	3.25	1.80	31.53
図VI-18 76	FC	33 8	2012/10/15	石斧	II	1	G-Tu		5.41	3.34	0.97	29.85
図VI-18 77	FC	34 2	2012/10/16	Rフレイク	II	1	Sh	1	6.80	4.20	1.90	35.07
図VI-18 78	FC	34 3	2012/10/16	Rフレイク	II	1	Sh	3	5.20	3.90	1.65	100.00
図VI-18 79	FC	34 3	2012/10/16	Rフレイク	II	1	Sh	3	(6.40)	8.30	2.30	(23.22)
図VI-18 80	FC	17 4	2012/8/31	Rフレイク	II	1	Sh	1	(4.60)	7.70	1.10	(58.66)
図VI-18 81	FC	17 8	2012/8/31	加工痕のある礫	II	1	MS		5.30	7.20	2.20	84.20

表VI-4 掲載接合資料一覧

図番号	掲載番号	母岩番号 番号/種	接合 接合No.	接合 条件	点取	試番	接合遺物の内容・重量							
							グリッド 遺物名	遺物 番号	層位	器種	点取	原石面 有無	割開 番号	重量(g)
図VI-19	接合資料1	1 12 97	接合	点取	FC	2	11	II	F	1	○	(4)	75.20	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	3	II	F	1	○	(6)	42.60	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	4	II	F	1	○	(2)	61.15	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	5	II	F	1	○	(8)	87.67	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	7	II	F	1	○	(1)	220.00	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	8	II	F	1	○	(3)	110.00	
	1同一母岩	1 12 99	接合	点取	FC	22	12	II	F	1	○	(2)	60.77	
		1 12 97	接合	点取	FC	22	10	II	F	1	○	(7)	77.64	
		1 12 98	接合	点取	FC	22	1	II	F	1	○	(1)	91.78	
		1 12 98	接合	点取	FC	22	9	II	F	1	○	(1)	19.44	
		1 12 99	接合	点取	FC	22	13	II	F	1	○	(1)	85.03	
		1 12 99	接合	点取	FC	22	13	II	F	1	×	(1)	85.03	
図VI-21	接合資料2	2 3 124	接合	点取	FC	3	3	II	F	1	○	(1)	40.43	
		2 3 124	接合	点取	FC	3	6	II	Co	1	○	(1)	232.00	
図VI-21	接合資料3	2 7 35	接合	点取	FC	3	5	II	Tr	1	×	(1)	29.18	
		2 7 35	接合	点取	FC	3	3	II	F	1	×	(1)	0.67	
		2 7 35	接合	点取	FC	3	7	II	F	1	×	(1)	0.85	
		2 7 35	接合	点取	K	43	6	II	F	1	×	(1)	4.98	
		2 7 36	接合	点取	FC	6	2	II	F	1	○	(1)	4.99	
		2 7 36	接合	点取	Q	43	8	II	F	1	○	(1)	0.42	
	3同一母岩	2 7 35,36	未接合	点取	FC	3	2	II	F	1	○	(1)	1.76	
		2 7 35,36	未接合	点取	FC	3	3	II	F	1	×	(1)	0.57	
		2 7 35,36	未接合	点取	FC	3	7	II	F	1	○	(1)	1.35	
		2 7 35,36	未接合	点取	FC	3	7	II	F	2	×	(1)	7.93	
		2 7 35,36	未接合	点取	H	33	13	II	F	1	○	(1)	0.78	
		2 7 35,36	未接合	点取	K	43	8	II	F	1	○	(1)	2.05	
図VI-22	接合資料4	1 6 82	接合	点取	FC	8	47	II	F	1	○	(8)	5.32	
		1 6 82	接合	点取	FC	8	49	II	F	1	○	(9)	13.17	
		1 6 82	接合	点取	P	42	2	I	F	1	○	(2)	9.12	
		1 6 82	接合	点取	P	40	8	II	F	1	○	(1)	12.76	
		1 6 82	接合	点取	P	40	8	II	RP	1	○	(3)	140.00	
		1 6 82	接合	点取	P	40	6	II	F	1	○	(4)	56.08	
		1 6 82	接合	点取	Q	41	3	II	重機上げ	F	1	○	(3)	86.80
		1 6 82	接合	点取	O	40	7	II	F	1	○	(6)	76.27	
		1 6 82	接合	点取	P	40	7	II	F	1	○	(5)	18.82	
		1 6 82	接合	点取	P	40	3	I	F	1	×	(7)	38.42	
		1 6 82	接合	点取	P	40	8	II	F	1	○	(9)	21.22	
		図VI-23	接合資料5	1 17 121	接合	点取	FC	8	8	II	F	1	○	(1)
1 17 121	接合			点取	FC	2	9	II	F	1	○	(1)	1.19	
1 17 121	接合			点取	(2) FC	8	9	II	F	1	×	(2)	1.40	
1 17 121	接合			点取	(3) FC	8	9	II	F	1	×	(3)	6.89	
1 17 121	接合			点取	FC	8	14	II	F	1	○	(4)	54.08	
1 17 121	接合			点取	(1) FC	8	16	II	F	1	○	(5)	28.95	
1 17 121	接合			点取	(2) FC	8	16	II	F	1	○	(7)	185.00	
1 17 121	接合			点取	(1) FC	8	21	II	F	1	×	(8)	2.24	
1 17 121	接合			点取	(2) FC	8	21	II	F	1	○	(9)	12.15	
1 17 121	接合			点取	FC	8	32	II	F	1	×	(6)	72.61	
1 17 121	接合			点取	FC	8	35	II	F	1	×	(9)	10.94	
1 17 121	接合			点取	O	41	1	II	F	1	×	(9)	12.97	
5同一母岩	1 17 121		接合	点取	(1) O	41	5	II	F	1	×	(1)	5.70	
	1 17 121		接合	点取	(2) O	41	5	II	F	1	○	(2)	16.06	
	1 17 121		接合	点取	P	42	4	II	F	1	○	(3)	70.37	
	1 17 122		接合	点取	FC	32	6	II	F	1	○	(1)	51.73	
	1 17 122		接合	点取	K	43	8	II	F	1	○	(1)	8.54	
	1 17 122		接合	点取	N	37	2	II	F	1	○	(1)	120.00	
図VI-24	接合資料6	2 1 1	接合	点取	FC	10	36	II	Co	1	○	(1)	630.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	65	II	F	1	○	(7)	120.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	33	II	F	1	○	(6)	71.71	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	84	II	F	1	○	(5)	120.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	27	II	F	1	○	(9)	100.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	25	II	F	1	×	(2)	38.12	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	7	II	F	1	○	(4)	77.94	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	36	II	F	1	○	(2)	160.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	12	II	F	1	○	(1)	105.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	3	II	F	1	○	(1)	79.52	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	93	II	F	1	○	(3)	170.00	
		2 1 1	接合	点取	FC	10	101	II	F	1	○	(9)	35.98	
2 1 1	接合	点取	FC	10	85	II	F	1	×	(4)	69.26			
2 1 1	接合	点取	FC	10	39	II	F	1	○	(1)	55.95			
2 1 1	接合	点取	F	36	7	II	Tr	1	○	(8)	61.14			

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 未接合	点取	採番	接合産物の内容・重量							
							グリッド 遺構名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	刻痕 番号	重量(g)
図VI-26	接合資料7	2-5-21	接合	点取		FC	10	100	II	RF	1	○	(7)	50.92
		2-5-21	接合			E・F	36.37	4	I	RF	1	○	(8)	67.73
		2-5-21	接合			G	37	5	I	F	1	○	(1)	20.73
		2-5-21	接合			(1) G	37	9	I	F	1	○	(4)	58.96
		2-5-21	接合			(2) G	37	9	I	F	1	○	(3)	4.93
		2-5-21	接合			G	38	3	II	F	1	○	(2)	47.97
		2-5-21	接合			L	36	3	II	F	1	○	(3)	13.98
		2-5-23	接合			FC	30	22	II	F	1	○	(6)	63.96
		2-5-23	接合			G	37	3	II	F	1	○	(1)	48.19
		2-5-24	接合			(1) FC	7	3	II	F	1	○	(1)	5.44
	2-5-24	接合			(2) FC	7	3	II	F	1	○	(1)	1.61	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	1	上面	F	5	○	(1)	9.26	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	2	II	F	6	○	(1)	5.09	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	3	II	F	4	○	(1)	3.30	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	3	II	F	3	○	(1)	3.73	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	4	II	F	5	○	(1)	1.31	
	2-5-21~24	未接合			FC	7	4	II	F	1	○	(1)	0.43	
	2-5-21~24	未接合			FC	10	89	II	F	1	×	(1)	56.45	
	2-5-21~24	未接合			J	34	5	II	SP	1	×	(1)	12.30	
	2-5-21~24	未接合			H	41	1	II	BF	1	○	(1)	120.00	
	2-5-21~24	未接合			I	41	1	II	RF	1	○	(1)	230.00	
	2-5-21~24	未接合			K	43	3	II	RF	1	○	(1)	34.18	
	2-5-21~24	未接合			N	44	2	II	RF	1	○	(1)	10.38	
	2-5-21~24	未接合			I	30	4	II	F	1	○	(1)	2.50	
	2-5-21~24	未接合			I	34	9	II	F	1	○	(1)	23.27	
	2-5-21~24	未接合			L	35	2	II	F	1	×	(1)	180.00	
2-5-21~24	未接合			P	12	6	II	F	1	○	(1)	14.17		
図VI-27	接合資料8	2-4-25	接合	点取		FC	10	41	II	F	1	○	(1)	82.50
		2-4-25	接合			H	34	8	II	RF	1	○	(4)	52.86
		2-4-25	接合			J	31	9	II	VP	1	○	(2)	37.34
		2-4-25	接合			G	34	7	II	F	1	○	(2)	140.00
		2-4-26	接合			I	31	4	II	RF	1	○	(1)	80.03
		2-4-26	接合			F	30	8	II	F	1	○	(1)	61.79
		2-4-27	接合			F	36	2	II	F	1	○	(1)	37.73
		2-4-27	接合			H	36	7	II	F	1	○	(1)	29.79
		2-4-28	接合			(1) I	30	1	I	F	1	○	(1)	49.67
		2-4-28	接合			(2) I	30	1	I	F	1	○	(1)	13.80
	2-4-28	接合			I	34	9	II	F	1	○	(1)	7.31	
	2-4-29	接合			I	30	9	II	F	1	○	(1)	18.42	
	2-4-29	接合			I	30	6	II	F	1	○	(1)	1.74	
	2-4-30	接合			I	33	5	I	F	1	○	(1)	12.31	
	2-4-30	接合			I	30	6	II	F	1	○	(1)	1.25	
	2-4-25~30	未接合			R	41	1	II	SP	1	○	(1)	41.88	
	2-4-25~30	未接合			F	32	7	II	F	1	○	(1)	39.98	
	2-4-25~30	未接合			F	37	13	II	F	1	○	(1)	56.47	
	2-4-25~30	未接合			I	29	10	II	F	1	○	(1)	33.20	
	2-4-25~30	未接合			I	30	6	II	F	1	○	(1)	8.95	
	2-4-25~30	未接合			I	31	7	II	F	1	○	(1)	11.97	
	2-4-25~30	未接合			J	29	7	II	F	1	○	(1)	64.47	
	2-4-25~30	未接合			J	30	4	II	散乱	F	1	○	(1)	5.80
	2-4-25~30	未接合			J	30	6	II	F	1	○	(1)	1.15	
	2-4-25~30	未接合			H	34	12	II	F	1	○	(1)	3.16	
	2-4-25~30	未接合			Q	42	9	II	環状上付	F	1	○	(1)	100.00
図VI-27	接合資料9	3-8-59	接合	点取		FC	10	67	II	Tr	1	×	(1)	35.31
図VI-27	接合資料10	3-8-59	接合	点取		F	39	1	散乱	Tr	1	○	(1)	51.16
		2-13-88	接合			FC	10	120	II	RF	1	○	(1)	125.10
		2-13-88	接合			G	37	11	II	F	1	○	(1)	32.40
図VI-28	接合資料11	1-5-83	接合	点取		FC	10	58	II	F	1	○	(7)	18.06
		1-5-83	接合			FC	11	98	II	F	1	○	(4)	98.32
		1-5-83	接合			FC	11	182	II	F	1	×	(5)	2.98
		1-5-83	接合			FC	11	203	II	F	1	○	(4)	6.06
		1-5-83	接合			(1) FC	11	205	II	F	1	×	(5)	33.56
		1-5-83	接合			(2) FC	11	205	II	F	1	×	(5)	38.63
		1-5-83	接合			FC	11	226	II	F	1	○	(3)	9.46
		1-5-83	接合			F	37	13	II	F	1	○	(8)	73.23
		1-5-83	接合			F	37	13	II	Co	1	○	(1)	199.00
		1-5-83	接合			(1) G	35	10	II	F	1	×	(1)	35.94
	1-5-83	接合			(2) G	35	10	II	F	1	○	(5)	42.41	
	1-5-83	接合			(3) G	35	10	II	F	1	○	(6)	64.77	
	1-5-85	接合			O	39	3	II	F	1	×	(3)	170.00	
	1-5-85	接合			FC	11	199	II	F	1	×	(1)	0.88	
	1-5-85	接合			FC	11	205	II	F	1	×	(1)	1.99	
	1-5-85	接合			(1) G	35	10	II	F	1	×	(1)	1.91	
	1-5-85	接合			(2) G	35	10	II	F	1	×	(1)	21.84	
	1-5-85	接合			H	40	2	II	F	1	○	(1)	75.24	
	1-5-86	接合			FC	20	3	II	F	1	×	(1)	4.84	
	1-5-86	接合			F	31	4	II	F	1	×	(1)	55.99	
1-5-85~86	未接合			F	35	13	II	RF	1	?	(1)	41.32		
1-5-85~86	未接合			FC	11	82	II	F	1	×	(1)	3.74		
1-5-85~86	未接合			FC	11	133	II	F	1	×	(1)	2.45		
1-5-85~86	未接合			FC	11	182	II	F	1	×	(1)	7.60		
1-5-85~86	未接合			FC	11	203	II	F	1	×	(1)	12.34		
1-5-85~86	未接合			FC	11	217	II	F	1	×	(1)	2.78		

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 条件	点取	試料	接合遺物の内容・重量										
							グリッド 遺物名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	割開 番号	重量(g)			
図VI-28	11.17同一母岩	1 5	83~86	未接合			PC	11	231	Ⅱ	F	1	×		0.59		
		1 5	83~86	未接合			FC	11	235	Ⅱ	F	1	×		11.73		
		1 5	83~86	未接合			F	31	21	Ⅱ	F	1	×		17.45		
		1 5	83~86	未接合			F	34	12	Ⅱ	F	1	○		53.08		
		1 5	83~86	未接合			F	35	10	Ⅱ	F	6	×		65.79		
		1 5	83~86	未接合			G	35	4	Ⅱ	F	1	×		7.34		
		1 5	83~86	未接合			G	35	10	Ⅱ	F	2	×		18.85		
		1 5	83~86	未接合			H	31	6	Ⅱ	F	1	×		3.79		
		1 5	83~86	未接合			H	37	12	Ⅱ	F	1	×		17.27		
		1 5	83~86	未接合			J	30	11	Ⅱ	F	1	×		4.80		
		1 5	83~86	未接合			O	8	2	I	F	1	×		4.06		
		1 5	83~86	未接合			P	36	2	Ⅱ	F	1	○		22.30		
		1 5	83~86	未接合			Q	39	2	重機上げ	F	1	○		9.46		
		図VI-29	接合資料12	1 3	73	接合	点取		FC	11	37	Ⅱ	RP	1	×		80.70
				1 3	73	接合	点取		FC	11	41	Ⅱ	F	1	×	④	12.02
1 3	73			接合	点取		FC	11	53	Ⅱ	F	1	×		110.00		
1 3	73			接合	点取		FC	11	84	Ⅱ	F	1	×		17.94		
1 3	73			接合	点取		FC	11	177	Ⅱ	F	1	×		2.06		
1 3	73			接合	点取		FC	11	182	Ⅱ	F	1	×		3.83		
1 3	73			接合	点取		FC	11	198	Ⅱ	F	1	×	①	0.49		
1 3	73			接合	点取		FC	11	226	Ⅱ	F	1	×	②	7.03		
1 3	73			接合	点取		E	31	1	Ⅱ	SP	1	×	③	29.72		
1 3	73			接合	点取		F	35	3	Ⅱ	F	1	×	④	14.60		
1 3	73			接合	点取		O	35	10	Ⅱ	F	1	×	⑤	13.43		
1 3	72			接合	点取		FC	11	25	Ⅱ	F	1	×		16.19		
1 3	72			接合	点取		FC	11	65	Ⅱ	F	1	×		11.82		
1 3	72			接合	点取		FC	11	67	Ⅱ	F	1	×		17.90		
1 3	72			接合	点取		FC	11	70	Ⅱ	F	1	○		20.33		
1 3	72			接合	点取		FC	11	90	Ⅱ	F	1	○		9.52		
1 3	72			接合	点取		PC	11	182	Ⅱ	F	1	×		0.41		
1 3	72			接合	点取		G	35	4	Ⅱ	F	1	○		170.00		
1 3	72			接合	点取		I	35	1	Ⅱ	F	1	○		60.90		
1 3	74			接合	点取		E	34	3	Ⅱ	RP	1	×		147.90		
1 3	74			接合	点取		J	36	4	Ⅱ	F	1	×		16.85		
1 3	75			接合	点取		FC	11	205	Ⅱ	F	1	×		2.29		
1 3	75			接合	点取		G	35	4	Ⅱ	F	1	×		54.40		
1 3	75			接合	点取		G	35	10	Ⅱ	F	1	×		9.69		
1 3	76			接合	点取		FC	11	74	Ⅱ	F	1	×		22.35		
1 3	76			接合	点取		FC	11	223	Ⅱ	F	1	×		1.80		
1 3	77			接合	点取		FC	11	39	Ⅱ	RP	1	×		20.96		
1 3	77			接合	点取		FC	11	203	Ⅱ	F	1	×		4.53		
1 3	77	接合	点取		FC	11	223	Ⅱ	F	1	×		2.51				
1 3	78	接合	点取		FC	11	175	Ⅱ	F	1	○		0.83				
1 3	78	接合	点取		FC	11	226	Ⅱ	F	1	○		0.62				
1 3	71~78	未接合			FC	11	138	Ⅱ	F	1	×		2.72				
1 3	71~78	未接合			FC	11	175	Ⅱ	F	3	×		11.58				
1 3	71~78	未接合			FC	11	177	Ⅱ	F	1	×		5.64				
1 3	71~78	未接合			FC	11	179	Ⅱ	F	1	○		1.29				
1 3	71~78	未接合			FC	11	181	Ⅱ	F	1	×		2.94				
1 3	71~78	未接合			FC	11	182	Ⅱ	F	2	○		6.99				
1 3	71~78	未接合			FC	11	182	Ⅱ	F	2	×		3.03				
1 3	71~78	未接合			FC	11	196	Ⅱ	F	3	○		4.10				
1 3	71~78	未接合			FC	11	196	Ⅱ	F	2	×		4.19				
1 3	71~78	未接合			FC	11	205	Ⅱ	F	2	○		6.27				
1 3	71~78	未接合			FC	11	205	Ⅱ	F	4	×		9.72				
1 3	71~78	未接合			FC	11	220	Ⅱ	F	2	○		5.97				
1 3	71~78	未接合			FC	11	220	Ⅱ	F	1	×		0.74				
1 3	71~78	未接合			FC	11	222	Ⅱ	F	1	×		0.82				
1 3	71~78	未接合			FC	11	225	Ⅱ	F	1	○		11.09				
1 3	71~78	未接合			FC	11	226	Ⅱ	F	3	×		2.47				
1 3	71~78	未接合			FC	11	225	Ⅱ	F	1	×		2.47				
1 3	71~78	未接合			F	34	12	Ⅱ	F	1	×		22.85				
1 3	71~78	未接合			G	34	3	I	F	1	×		3.40				
1 3	71~78	未接合			G	35	10	Ⅱ	F	1	×		6.87				
1 3	71~78	未接合			H	36	7	Ⅱ	F	1	×		3.17				
図VI-29	接合資料13	1 10	85	接合	点取		FC	11	10	Ⅱ	Ty	1	×		64.61		
		1 10	85	接合	点取		FC	11	36	Ⅱ	F	1	×		6.81		
		1 10	85	接合	点取		FC	11	175	Ⅱ	F	1	×		2.16		
図VI-30	接合資料14	2 15	125	接合			FC	11	175	Ⅱ	F	1	×		1.00		
		2 15	125	接合			G	35	10	Ⅱ	F	1	×		14.57		
図VI-30	接合資料15	2 14	70	接合	点取		FC	11	162	Ⅱ	SP	1	○		40.18		
		2 14	70	接合	点取		H	35	15	Ⅱ	F	1	×		35.29		
図VI-30	接合資料16	3 7	58	接合		①	FC	11	205	Ⅱ	F	1	×	①	3.67		
		3 7	58	接合		②	FC	30	205	Ⅱ	F	1	×	②	2.13		
		3 7	58	接合			F	30	205	I	Ty	1	×		24.35		
図VI-30	接合資料17	1 5	84	接合			FC	14	5	Ⅱ	F	1	×		59.05		
		1 5	84	接合			FC	11	179	Ⅱ	F	1	×		50.55		
		1 5	84	接合			G	27	2	Ⅱ	Ty	1	×		133.55		
図VI-30	接合資料18	1 2	65	接合	点取		FC	30	18	Ⅱ	Ty	1	×		39.98		
		1 2	65	接合	点取		FC	11	19	Ⅱ	F	1	○	①	7.73		
		1 2	65	接合	点取		F	35	5	Ⅱ	F	1	○	②	7.14		

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 条件	点取	試料	接合遺物の内容・重量									
							グリッド 遺物名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	割製 番号	重量(g)		
図VI-30	18.39同一母岩	1 2	67	接合			FC	11	4	II	F	1	×		5.72	
		1 2	67	接合			G	33	3	II	F	1	○		30.62	
		1 2	65~67	未接合				FC	10	71	II	F	1	○		20.29
		1 2	65~67	未接合				FC	11	93	II	F	1	×		3.95
		1 2	65~67	未接合				FC	11	175	II	F	3	×		3.52
		1 2	65~67	未接合				FC	11	196	II	F	1	×		0.51
		1 2	65~67	未接合				FC	11	220	II	F	1	○		1.52
		1 2	65~67	未接合				FC	11	220	II	F	1	×		0.75
		1 2	65~67	未接合				FC	11	221	II	F	1	×		50.85
		1 2	65~67	未接合				F	35	5	II	F	1	×		74.25
		1 2	65~67	未接合				M	29	6	II	F	1	×		0.74
		1 2	65~67	未接合				N	40	4	II	F	1	×		4.52
図VI-31-32	接合資料19	1 3	71	接合	点取		FC	11	46	II	F	1	×	(7)	23.55	
		1 3	71	接合	点取		FC	11	73	II	F	1	○		段割6	3.79
		1 3	71	接合	点取		FC	11	85	II	F	1	○		5	2.63
		1 3	71	接合	点取		FC	11	89	II	F	1	×		6	5.98
		1 3	71	接合	点取		FC	11	151	II	F	1	×		6	2.80
		1 3	71	接合			FC	11	181	II	F	1	○		(1)	4.43
		1 3	71	接合			FC	11	182	II	F	1	○		段割6	4.23
		1 3	71	接合			FC	11	196	II	F	1	○		(6)	0.85
		1 3	71	接合			FC	11	205	II	F	1	○		(6)	58.17
		1 3	71	接合	(1)		FC	11	226	II	F	1	○		(5)	2.16
		1 3	71	接合	(2)		FC	11	226	II	F	1	×		(3)	2.60
		1 3	71	接合	(3)		FC	11	226	II	F	1	×		(3)	6.34
		1 3	71	接合			FC	11	234	II	F	1	○		(1)	11.00
		1 3	71	接合	点取		FC	30	24	II	F	1	○		(2)	140.00
		1 3	71	接合			G	36	7	II	RF	1	○		(3)	170.00
		1 3	71	接合			F	35	5	II	F	1	×		(3)	6.39
		1 3	71	接合			F	35	10	II	F	1	○		(1)	28.17
		1 3	71	接合			F	36	13	II	RF	1	×		(3)	215.00
		1 3	71	接合			F	37	13	II	F	1	○		(3)	12.24
		1 3	71	接合			G	35	2	II	RF	1	×		(6)	7.96
		1 3	71	接合	(1)		G	35	10	II	RF	1	○		(6)	28.19
		1 3	71	接合	(2)		G	35	10	II	F	1	×		(3)	22.90
		1 3	71	接合			G	36	8	II	F	1	○		(3)	18.93
		1 3	71	接合			G	39	6	II	Co	1	○		(3)	14.00
1 3	71	接合			H	33	8	II	F	1	○		(3)	14.31		
1 3	71	接合			H	35	5	I	F	1	○		(3)	8.26		
1 3	71	接合			J	39	5	II	F	1	○		(3)	28.57		
1 3	71	接合			表採		37				×		(1)	41.80		
図VI-33	接合資料20	2 2	5	接合	(1)		FC	14	10	II	F	1	×		3.20	
		2 2	5	接合	点取		FC	14	10	II	F	1	○			1.49
		2 2	5	接合			FC	16	24	II	F	1	○			19.45
		2 2	5	接合	(1)		FC	18	2	II	F	1	○			12.62
		2 2	5	接合	(2)		FC	18	2	II	F	1	×			1.95
		2 2	5	接合			FC	18	3	II	F	1	○			3.05
		2 2	5	接合			FC	30	52	II	F	1	○			39.57
		2 2	5	接合			H	33	8	II	RF	1	○			72.56
		2 2	5	接合	(1)		I	33	5	II	F	1	○			4.91
		2 2	5	接合	(2)		I	33	5	II	F	1	○			14.95
		2 2	5	接合	(3)		I	33	5	II	RF	1	○			35.36
		2 2	5	接合	(4)		I	33	5	II	F	1	○			3.18
		2 2	5	接合	(1)		I	33	7	II	F	1	○			0.43
		2 2	5	接合	(2)		I	33	7	II	F	1	○			2.00
		2 2	2	接合			FC	14	8	II	F	1	×			6.98
		2 2	2	接合	(1)		FC	18	2	II	F	1	○			3.24
		2 2	2	接合	(2)		FC	18	2	II	F	1	○			1.89
		2 2	2	接合	(3)		FC	18	2	II	F	1	×			1.52
	2 2	2	接合	(4)		FC	18	2	II	F	1	○			7.57	
	2 2	2	接合	(1)		FC	18	3	II	F	1	○			1.19	
	2 2	2	接合	(2)		FC	18	3	II	F	1	○			2.52	
	2 2	2	接合	(3)		FC	18	3	II	F	1	○			0.71	
	2 2	2	接合	(4)		FC	18	3	II	F	1	○			2.63	
	2 2	2	接合	(5)		FC	18	3	II	F	1	○			2.05	
	2 2	2	接合	(6)		FC	18	3	II	F	1	○			3.81	
	2 2	2	接合	(7)		FC	18	3	II	F	1	○			0.64	
	2 2	2	接合			FC	19	2	II	F	1	×			36.41	
	2 2	2	接合			I	32	9	II	Co	1	○			275.00	
	2 2	2	接合			I	33	5	II	F	1	○			2.89	
	2 2	2	接合			I	33	7	II	F	1	○			3.13	
	2 2	2	接合			O	33	5	I	F	1	○			18.52	
	2 2	2	接合			R	41	5	II	F	1	○			96.55	
	2 2	3	接合			FC	2	11	II	F	1	○			16.79	
	2 2	3	接合			FC	16	3	II	F	1	○			140.00	
	2 2	3	接合			FC	18	2	II	F	1	○			0.93	
	2 2	3	接合	(1)		FC	18	3	II	F	1	○			1.15	
2 2	3	接合	(2)		FC	18	3	II	F	1	○			0.53		
2 2	3	接合	(3)		FC	18	3	II	F	1	○			2.66		
2 2	3	接合			E	33	2	II	F	1	○			18.70		
2 2	3	接合			F	31	15	II	F	1	○			49.93		
2 2	3	接合			H	32	12	II	F	1	○			120.00		
2 2	3	接合	(1)		I	33	5	II	F	1	○			2.52		
2 2	3	接合	(2)		I	33	5	II	F	1	○			4.41		

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 採接合	点取	試番	接合遺物の内容・重量								
							グリッド 遺標名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	割開 番号	重量(g)	
		2-2	3	接合			J	42	5	II	F	1	○		10.64
		2-2	4	接合			FC	12	36	II	F	1	×		1.15
		2-2	4	接合			FC	14	8	II	F	1	×		28.44
		2-2	4	接合			H	33	2	II	F	1	○		28.51
		2-2	4	接合			H	34	9	II	F	1	○		66.65
		2-2	6	接合			FC	18	2	II	F	1	○		2.10
		2-2	6	接合			FC	18	3	II	F	1	○		1.02
		2-2	6	接合		(1)	I	33	7	II	F	1	○		7.58
		2-2	6	接合		(2)	I	33	7	II	F	1	○		15.14
		2-2	6	接合			O	41	3	II	F	1	○		2.68
		2-2	6	接合			O	51	1	II	F	1	○		8.42
		2-2	6	接合			?	9	5	II	F	1	○		28.45
		2-2	7	接合		(1)	FC	18	2	II	F	1	×		1.43
		2-2	7	接合		(2)	FC	18	2	II	F	1	×		1.34
		2-2	7	接合			FC	18	3	II	F	1	○		1.39
		2-2	7	接合		(1)	I	33	7	II	F	1	○		3.96
		2-2	7	接合		(2)	I	33	7	II	F	1	○		19.60
		2-2	7	接合		(3)	I	33	7	II	F	1	○		1.93
		2-2	8	接合		(1)	I	33	7	II	F	1	○		2.80
		2-2	8	接合		(2)	I	33	7	II	F	1	○		11.85
		2-2	9	接合		(1)	I	33	7	II	F	1	○		3.96
		2-2	9	接合		(2)	I	33	7	II	F	1	○		1.81
		2-2	10	接合		(1)	I	33	5	I	F	1	×		3.11
		2-2	10	接合		(2)	I	35	5	I	F	1	×		0.96
		2-2	11	接合		(1)	I	33	7	II	F	1	○		1.79
		2-2	11	接合		(2)	I	33	7	II	F	1	○		3.66
		2-2	12	接合			FC	18	3	II	F	1	○		1.41
		2-2	12	接合			I	33	5	II	F	1	×		5.62
		2-2	13	接合			F	33	3	II	F	1	×		6.42
		2-2	13	接合			I	33	5	II	F	1	×		2.58
		2-2	14	接合		(1)	FC	18	2	II	F	1	○		2.63
		2-2	14	接合		(2)	FC	18	2	II	F	1	○		2.40
		2-2	15	接合			M	43	4	II	F	1	○		2.38
		2-2	15	接合			O	42	5	II	F	1	○		2.62
		2-2	16	接合		(1)	FC	18	3	II	F	1	○		1.96
		2-2	16	接合		(2)	FC	18	3	II	F	1	○		1.13
		2-2	17	接合		(1)	FC	18	2	II	F	1	○		2.15
		2-2	17	接合		(2)	FC	18	2	II	F	1	○		0.36
		2-2	18	接合			H	33	8	II	F	1	×		1.86
		2-2	18	接合			H	33	11	II	F	1	×		3.51
		2-2	19	接合			FC	18	2	II	F	1	×		3.00
		2-2	19	接合			G	32	4	II	F	1	×		2.25
		2-2	120	接合			FC	3	2	II	F	1	×		27.70
		2-2	120	接合		(1)	FC	18	2	II	F	1	×		2.09
		2-2	120	接合		(2)	FC	18	2	II	F	1	×		6.12
		2-2	120	接合		(3)	FC	18	2	II	F	1	×		1.80
		2-2	120	接合		(4)	FC	18	2	II	F	1	○		0.89
		2-2	120	接合			FC	30	60	II	F	1	×		44.02
		2-2	120	接合			F	36	3	I	F	1	×		34.92
		2-2	120	接合			I	31	11	II	F	1	×		120.00
		2-2	120	接合			I	33	7	II	F	1	×		79.17
		2-2	120	接合			L	32	5	II	F	1	×		5.86
		2-2	2-19,120	未接合			FC	12	13	II	F	1	○		4.45
		2-2	2-19,120	未接合			FC	12	31	II	F	1	○		1.01
		2-2	2-19,120	未接合			FC	12	31	II	F	6	×		4.64
		2-2	2-19,120	未接合			FC	12	36	II	F	4	×		2.47
		2-2	2-19,120	未接合			FC	18	2	II	F	2	○		1.37
		2-2	2-19,120	未接合			FC	18	2	II	F	14	×		10.06
		2-2	2-19,120	未接合			FC	18	3	II	F	9	○		8.85
		2-2	2-19,120	未接合			FC	18	3	II	F	15	×		10.69
		2-2	2-19,120	未接合			F	32	15	II	F	1	×		0.92
		2-2	2-19,120	未接合			F	33	3	II	F	1	○		0.77
		2-2	2-19,120	未接合			O	32	13	II	F	1	×		3.02
		2-2	2-19,120	未接合			G	33	3	II	F	1	×		14.36
		2-2	2-19,120	未接合			H	32	11	II	F	1	○		2.11
		2-2	2-19,120	未接合			H	33	8	II	F	1	○		1.20
		2-2	2-19,120	未接合			H	33	8	II	F	2	×		4.82
		2-2	2-19,120	未接合			H	34	9	II	F	1	○		2.14
		2-2	2-19,120	未接合			I	32	10	II	F	1	○		1.51
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	4	II	F	1	×		3.25
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	4	II	F	1	×		2.33
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	5	II	F	5	○		12.13
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	5	II	F	6	×		10.35
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	7	II	F	10	○		23.04
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	7	II	F	32	×		72.63
		2-2	2-19,120	未接合			I	33	9	?	F	1	○		0.44
		2-2	2-19,120	未接合			I	35	3	II	F	1	×		0.46
		2-2	2-19,120	未接合			I	41	6	II	F	3	×		5.94
		2-2	2-19,120	未接合			J	26	11	II	F	1	×		4.98
		2-2	2-19,120	未接合			J	31	22	II	F	1	○		0.78
		2-2	2-19,120	未接合			J	35	10	II	F	1	×		1.67
		2-2	2-19,120	未接合			J	39	5	II	F	1	○		20.38
		2-2	2-19,120	未接合			J	40	9	I	F	1	×		1.50

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 条件	点取	採集	接合遺物の内容・重量								
							グリッド 流線名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	刻線 番号	重量(g)	
図VI-33	20回一母岩	2	2	2	19-120	未接合	J	42	5	II	F	1	○		10.20
		2	2	2	19-120	未接合	K	33	3	II	F	1	×		0.60
		2	2	2	19-120	未接合	L	31	6	II	F	1	×		39.28
		2	2	2	19-120	未接合	L	32	9	II	F	1	○		1.70
		2	2	2	19-120	未接合	L	33	4	II	F	1	○		4.20
		2	2	2	19-120	未接合	M	31	1	II	F	1	○		5.52
		2	2	2	19-120	未接合	O	37	1	II	F	1	○		8.32
		2	2	2	19-120	未接合	PC	18	1	II	Do	1	×		2.62
		2	2	2	19-120	未接合	H	33	4	II	Tv	1	×		12.96
		2	2	2	19-120	未接合	J	42	3	II	Tv	1	○		13.20
図VI-33	接合資料21	1	9	90	接合		L	46	1	I	Tv	1	○		75.40
		1	9	90	接合		FC	15	31	II	F	1	○		1.04
		1	9	90	接合		M	41	7	I	F	1	×		1.54
		1	9	91	接合		FC	15	32	II	F	1	○		2.37
		1	9	91	接合		FC	15	34	II	F	1	○		0.37
		1	9	92	接合		FC	15	31	II	F	1	×		0.72
		1	9	92	接合		FC	15	44	II	F	1	×		0.29
		1	9	90~92	未接合		FC	15	36	II	F	2	×		0.75
		1	9	90~92	未接合		FC	15	32	II	F	1	×		0.20
図VI-34	接合資料22	3	2	51	接合		FC	23	1	II	Co	1	○		237.00
		3	2	51	接合		I	33	5	II	RP	1	○	(3)	88.42
		3	2	51	接合		M	36	5	II	F	1	○	(4)	216.00
		3	2	51	接合		H	31	1	I	F	1	○	(2)	29.16
		3	2	51	接合		H	31	6	II	F	1	×	(2)	21.39
		3	2	52	接合		R	38	2	I	UP	1	○	(2)	31.35
図VI-35	接合資料23	3	2	52	接合		K	35	4	II	F	1	○	(2)	83.44
		3	2	52	接合		K	35	4	II	F	1	○	(2)	29.45
		3	2	53	接合		J	32	5	II	F	1	×		7.74
		3	2	53	接合		G	30	10	II	F	1	×		3.77
		3	2	51~53	未接合		O	38	4	II	F	1	×		42.37
		3	2	51~53	未接合		H	31	5	II	F	1	×		2.72
		3	2	51~53	未接合		I	32	10	II	F	1	×		3.76
		2	8	37	接合	点取	FC	30	69	II	Co	1	○		110.00
		2	8	37	接合	(1)	F	31	15	II	F	1	○	(4)	32.86
図VI-36	接合資料24	2	8	37	接合	(2)	F	31	15	II	F	1	○	(2)	19.75
		2	8	37	接合	(2)	G	32	9	II	F	1	○	(2)	3.00
		2	8	37	接合	(2)	G	32	10	II	F	1	○	(1)	8.54
		2	8	37	接合	(2)	G	32	14	II	F	1	○	(1)	8.41
		2	8	37	接合	(2)	H	31	5	II	F	1	○	(1)	7.22
		2	8	38	接合	(2)	K・F	31	4	I	F	1	○	(2)	3.33
		2	8	38	接合	(1)	F	32	5	II	F	1	○	(2)	2.04
		2	8	38	接合	(2)	F	32	5	II	F	1	○	(2)	0.95
		2	8	37,38	未接合	(2)	FC	20	62	II	F	1	○	(2)	3.49
		2	8	37,38	未接合	(2)	F・F	31	2	I	Tv	2	○	(2)	12.79
		2	8	37,38	未接合	(2)	F	32	2	I	F	2	○	(2)	7.76
		2	8	37,38	未接合	(2)	F	32	3	II	F	8	○	(2)	45.33
		2	8	37,38	未接合	(2)	G	32	15	II	F	1	○	(2)	1.80
		2	8	37,38	未接合	(2)	G	33	3	II	F	1	×	(2)	2.90
		2	8	37,38	未接合	(2)	H	31	6	II	F	4	○	(2)	10.20
		2	8	37,38	未接合	(2)	H	31	9	II	F	1	×	(2)	0.70
2	8	37,38	未接合	(2)	J	31	14	II	F	1	○	(2)	7.01		
図VI-36	接合資料25	3	10	64	接合		FC	32	4	II	Tv	1	○		21.03
		3	10	64	接合		M	35	5	II	F	1	○		3.71
図VI-36	接合資料26	3	9	63	接合		FC	34	4	II	F	1	×		1.53
		3	9	63	接合		L	35	4	II	Tv	1	×		28.53
		3	9	60	接合	(1)	FC	34	4	II	F	1	×		2.29
		3	9	60	接合	(2)	FC	34	4	II	F	1	×		0.97
		3	9	61	接合	(1)	FC	34	4	II	F	1	×		1.12
		3	9	61	接合	(2)	FC	34	4	II	F	1	×		1.23
		3	9	61	接合	(2)	L	35	5	II	F	1	×		4.53
		3	9	62	接合	(2)	FC	34	4	II	F	1	×		0.64
		3	9	62	接合	(2)	L	35	5	II	F	1	×		0.95
		3	9	60~63	未接合	(2)	FC	34	4	II	F	8	×		3.73
		3	9	60~63	未接合	(2)	FC	34	5	II	F	1	×		0.48
		3	9	60~63	未接合	(2)	L	35	2	II	F	1	×		1.02
		3	9	60~63	未接合	(2)	L	35	5	II	F	1	×		2.21
		3	9	60~63	未接合	(2)	M	35	1	II	F	1	○		5.94
3	9	60~63	未接合	(2)	M	35	5	II	F	1	×		2.61		
3	9	60~63	未接合	(2)	N	42	6	II	F	1	×		0.26		
3	9	60~63	未接合	(2)	N	42	8	II	F	1	×		0.69		
図VI-37	接合資料27	1	1	103	接合	(1)	FC	35	7	II	F	1	○		11.94
		1	1	103	接合	(2)	FC	35	7	II	F	1	×		5.91
		1	1	103	接合	(3)	FC	35	7	II	F	1	×		0.99
		1	1	103	接合	(3)	FC	35	8	II	F	1	×		1.53
		1	1	103	接合	(3)	FC	35	9	II	F	1	○		21.15
		1	1	103	接合	(3)	FC	35	10	II	F	1	×		5.15
		1	1	103	接合	(1)	FC	35	12	II	F	1	○		97.76
		1	1	103	接合	(2)	FC	35	12	II	F	1	○		83.21
		1	1	103	接合	(2)	L	34	1	II	RP	1	○		277.00
		1	1	103	接合	(1)	K	34	9	II	F	1	×		1.05
		1	1	103	接合	(2)	K	34	9	II	F	1	×		0.57
		1	1	103	接合	(3)	K	34	9	II	F	1	×		4.87
		1	1	103	接合	(3)	K	35	5	II	F	1	×		7.12
		1	1	103	接合	(3)	K	37	1	I	F	1	○	(1)	175.00
		1	1	103	接合	(3)	F	37	7	I	F	1	○	(1)	36.62

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 柱	接合No.	接合 条件	点取	柱番号	接合遺物の内容・重量									
							グリッド 遺物名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	割開 番号	重量(g)		
図VI-39	接合資料28	1	1	106	接合		FC	35	9	II	Ty	1	×	②	110.00	
		1	1	106	接合	①	FC	35	7	II	F	1	○		4.48	
		1	1	106	接合	②	FC	35	7	II	F	1	○		17.30	
		1	1	106	接合	③	FC	35	7	II	F	1	×		1.84	
		1	1	106	接合	④	FC	35	7	II	F	1	×		1.76	
		1	1	106	接合	⑤	FC	35	7	II	F	1	×		2.00	
		1	1	106	接合	⑥	FC	35	7	II	F	1	×		1.05	
		1	1	106	接合	⑦	FC	35	7	II	F	1	×		0.97	
		1	1	106	接合	⑧	FC	35	7	II	F	1	×		4.96	
		1	1	106	接合	⑨	FC	35	7	II	F	1	×		4.13	
		1	1	106	接合	⑩	FC	35	7	II	F	1	×		8.37	
		1	1	106	接合	⑪	FC	35	7	II	F	1	×		2.72	
		1	1	106	接合	⑫	FC	35	10	II	F	1	×		0.33	
		1	1	106	接合	⑬	FC	35	10	II	F	1	×		0.39	
		1	1	106	接合	⑭	H	32	13	II	RF	1	×	①	37.94	
		1	1	106	接合	⑮	K	34	3	II	F	1	○		44.54	
		1	1	106	接合	⑯	L	34	9	II	F	1	×		0.84	
		1	1	104	接合		FC	35	7	II	F	1	×		2.14	
		1	1	104	接合		FC	35	10	II	F	1	○		50.88	
		1	1	104	接合		FC	35	12	II	F	1	○		88.51	
		1	1	104	接合		K	34	9	II	F	1	×		12.69	
		1	1	104	接合		I	34	2	II	F	1	○		143.00	
		1	1	104	接合		表探									124.00
		1	1	105	接合	①	FC	35	7	II	F	1	○		14.27	
		1	1	105	接合	②	FC	35	7	II	F	1	×		3.36	
		1	1	105	接合		FC	35	10	II	F	1	○		175.00	
		1	1	105	接合		FC	35	12	II	F	1	○		152.00	
		1	1	105	接合		K	34	5	II	F	1	×		6.77	
	1	1	105	接合		M	41	7	II	F	1	○		21.70		
	1	1	105	接合		Q	39	4	I	F	1	×		51.70		
	1	1	105	接合		P	39	5	II	F	1	×		4.59		
	1	1	107	接合		I	31	7	II	F	1	×		42.38		
	1	1	107	接合		F	31	4	II	F	1	×		5.97		
	1	1	107	接合		K	35	5	II	F	1	×		5.02		
	1	1	107	接合		J	31	10	I	F	1	×		1.96		
	1	1	108	接合		FC	35	7	II	F	1	×		0.60		
	1	1	108	接合		L	34	1	II	RF	1	○		105.00		
	1	1	108	接合		K	34	3	II	RF	1	×		19.29		
	1	1	108	接合		K	34	9	II	F	1	×		1.95		
	1	1	108	接合		K	35	4	II	F	1	×		1.05		
	1	1	108	接合		I	31	6	II	F	1	×		7.79		
	1	1	108	接合		I	35	5	II	F	1	×		1.51		
	1	1	109	接合	①	FC	35	7	II	F	1	×		1.02		
	1	1	109	接合	②	FC	35	7	II	F	1	×		6.19		
	1	1	109	接合		表探		35				BP	1	×	8.89	
1	1	109	接合		L	32	2	II	RF	1	×		94.26			
1	1	109	接合		H	30	5	II	F	1	×		2.11			
1	1	110	接合	①	K	33	3	II	F	1	×		8.49			
1	1	110	接合	②	K	33	3	II	F	1	×		8.55			
1	1	110	接合	③	K	34	9	II	F	1	×		12.96			
1	1	110	接合	④	K	34	9	II	F	1	×		1.76			
1	1	110	接合		K	35	4	II	F	1	×		1.59			
1	1	111	接合	①	FC	35	7	II	F	1	×		2.00			
1	1	111	接合	②	FC	35	7	II	F	1	×		1.73			
1	1	111	接合	③	FC	35	7	II	F	1	×		1.25			
1	1	111	接合	④	FC	35	7	II	F	1	×		1.79			
1	1	111	接合		I	32	10	II	F	1	×		30.45			
1	1	111	接合		K	35	4	II	F	1	×		1.33			
1	1	112	接合		K	34	1	II	F	1	×		0.93			
1	1	112	接合		J	34	8	II	F	1	×		0.67			
1	1	113	接合	①	FC	35	10	II	F	1	×		75.07			
1	1	113	接合	②	FC	35	8	II	F	1	×		4.33			
1	1	114	接合		FC	35	8	II	F	1	×		0.70			
1	1	114	接合		K	33	5	II	F	1	×		7.68			
1	1	115	接合		Q	39	1	I	F	1	×		6.53			
1	1	115	接合		Q	40	2	II	F	1	×		4.12			
1	1	116	接合	①	FC	35	7	II	F	1	×		6.78			
1	1	116	接合	②	FC	35	7	II	F	1	×		5.92			
1	1	117	接合	①	FC	35	7	II	F	1	×		5.43			
1	1	117	接合	②	FC	35	7	II	F	1	○		10.86			
1	1	118	接合	①	FC	35	7	II	F	1	○		1.67			
1	1	118	接合	②	FC	35	7	II	F	1	○		9.17			
1	1	119	接合		FC	35	7	II	F	1	×		0.32			
1	1	119	接合		K	35	5	II	F	1	×		0.60			
1	1	126	接合		FC	35	7	II	F	1	×		1.55			
1	1	129	接合		K	34	9	II	F	1	×		4.74			
1	1	103~119	未接合	②	FC	35	7	II	F	5	○		24.00			
1	1	103~119	未接合		FC	35	7	II	F	115	×		132.37			
1	1	103~119	未接合		FC	35	7	II	F	1	○		6.37			
1	1	103~119	未接合		FC	35	8	II	F	1	○		0.65			
1	1	103~119	未接合		FC	35	8	II	F	24	×		7.72			
1	1	103~119	未接合		FC	35	10	II	F	1	○		6.27			
1	1	103~119	未接合		FC	35	10	II	F	6	×		5.20			

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 条件	点取	試料	接合産物の内容・重量								
							グリッド 遺体名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	刻痕 番号	重量(g)	
図VI-39	27.28同一母岩	1 1	103-119	未接合			FC	8	1	II	F	1	×		2.15
		1 1	103-119	未接合			FC	12	30	II	F	1	○		36.61
		1 1	103-119	未接合			FC	12	30	II	F	1	○		3.60
		1 1	103-119	未接合			FC	32	6	II	F	2	○		6.14
		1 1	103-119	未接合			H	32	5	II	F	1	×		5.75
		1 1	103-119	未接合			H	35	12	II	F	1	×		3.29
		1 1	103-119	未接合			J	29	7	II	F	1	×		1.60
		1 1	103-119	未接合			J	31	22	II	F	1	×		0.56
		1 1	103-119	未接合			J	33	4	II	F	1	×		8.20
		1 1	103-119	未接合			K	34	9	II	F	11	×		13.52
		1 1	103-119	未接合			K	34	1	I	F	1	×		1.88
		1 1	103-119	未接合			K	34	4	II	F	1	×		1.61
		1 1	103-119	未接合			K	34	5	I	F	1	×		0.73
		1 1	103-119	未接合			K	34	11	II	F	1	×		1.27
		1 1	103-119	未接合			K	35	4	II	F	1	×		5.37
		1 1	103-119	未接合			K	35	4	II	F	1	×		2.74
		1 1	103-119	未接合			K	35	5	II	F	2	×		1.00
		1 1	103-119	未接合			L	34	2	II	F	1	×		6.06
		1 1	103-119	未接合			L	34	8	II	F	1	×		0.40
		1 1	103-119	未接合			L	34	9	II	F	2	×		1.77
		1 1	103-119	未接合			L	35	3	II	F	2	×		4.71
		1 1	103-119	未接合			L	35	5	II	F	3	×		6.91
		1 1	103-119	未接合			M	37	4	II	F	1	×		11.81
		1 1	103-119	未接合			N	35	5	II	F	1	×		1.21
		1 1	103-119	未接合			O	31	5	II	F	1	×		2.56
		1 1	103-119	未接合			表採	10			F	1	×		31.26
		1 1	103-119	未接合			表採	16			F	1	×		34.55
		図VI-40	接合資料29	2 9	34	接合			I	26	5	II	Co	1	○
2 9	34			接合		(1)	I	27	5	II	F	1	○	(1)	24.53
2 9	34			接合		(2)	I	27	5	II	F	1	×	(2)	12.65
2 9	34			接合			I	33	7	II	F	1	○	(4)	25.00
2 9	34			接合			J	31	10	I	F	1	○	(2)	41.08
2 9	34			接合			J	31	24	II	F	1	○		18.85
2 9	34			未接合			I	26	4	II	F	1	○		9.21
2 9	34			未接合			J	29	2	II	F	1	○		10.58
2 16	44			接合			P	35	11	II	Co	1	○		533.00
2 16	44			接合			E・F	32	3	II	F	1	○		3.19
図VI-41	接合資料30	2 16	44	接合		(1)	E・F	33	3	I	F	1	○	(6)	14.29
		2 16	44	接合		(2)	E・F	33	3	I	F	1	○	(6)	120.00
		2 16	44	接合			F	30	9	II	F	1	○	(1)	76.95
		2 16	44	接合			F	32	3	II	F	1	○	(5)	2.55
		2 16	44	接合			F	32	11	II	F	1	○	(5)	6.69
		2 16	44	接合			F	32	2	I	F	1	○	(3)	13.42
		2 16	44	接合			G	32	5	II	F	1	○	(2)	26.11
		2 16	44	未接合			F	31	4	I	F	1	○		7.71
		2 16	44	未接合			F	32	2	I	F	1	○		0.92
		2 16	44	未接合			F	32	2	I	F	1	×		2.02
	2 16	44	未接合			F	32	3	II	F	9	×		9.87	
	2 16	44	未接合			F	32	7	II	F	13	×		21.52	
	2 16	44	未接合			P	32	7	II	F	1	×		4.33	
	2 16	44	未接合			F	36	16	II	F	1	×		13.50	
	2 16	44	未接合			G	23	2	II	F	1	○		10.16	
	2 16	44	未接合			G	33	3	II	F	1	○		8.81	
	2 16	44	未接合			G	38	2	II	F	1	×		95.97	
	2 16	44	未接合			O	15	4	II	F	1	○		29.77	
	2 16	44	未接合			O	11	8	II	F	1	○		28.36	
	2 16	44	未接合			E・F	35	1	I	Ty	1	○		42.96	
2 16	44	未接合			F	31	5	II	Ty	1	×		60.60		
2 16	44	未接合			M	39	16	II	BF	1	×		30.00		
図VI-42	接合資料31	1 7	87	接合		(1)	R	42	7	II	F	1	○	(2)	33.89
		1 7	87	接合		(2)	R	42	7	II	F	1	○	(7)	7.53
		1 7	87	接合		(3)	R	42	7	II	F	1	○	(8)	18.83
		1 7	87	接合		(4)	R	42	7	II	F	1	○	(5)	36.15
		1 7	87	接合		(5)	R	42	7	II	F	1	○	(4)	4.93
		1 7	87	接合			R	42	8	I	F	1	×		1.42
		1 7	87	接合		(1)	Q	42	9	II	F	1	○	(1)	12.55
		1 7	87	接合		(2)	Q	42	9	II	RF	1	○	(3)	77.53
	1 7	87	接合			M	40	3	II	F	1	○		46.73	
	1 7	88	接合			J	45	2	II	Co	1	○		123.00	
	1 7	88	接合			N	30	6	I	F	1	○		16.95	
	1 7	87~88	未接合			N	41	3	II	F	1	○		24.72	
	2 11	40	接合			O	39	7	II	Ty	1	×		35.55	
	2 11	40	接合			表採	18			Ty	1	○		900.00	
図VI-43	33同一母岩	2 11	41	接合			FC	8	26	II	F	1	×		26.28
		2 11	41	接合			Q	41	1	I	F	1	×		48.97
		2 11	42	接合			R	41	5	II	F	1	○		900.00
		2 11	42	接合			R	42	6	II	F	1	○		33.29
		2 11	42	接合			R	44	3	I	F	1	○		45.42
		2 11	42	接合			Q	41	1	I	F	1	○		59.07
		2 11	42	接合			Q	41	3	II	F	1	×		3.95
		2 11	43	接合			P	43	1	I	RF	1	○		87.96
		2 11	43	接合			O	43	2	II	F	1	○		9.47

図番号	掲載番号	母岩番号 番号 採	接合No.	接合 床接合	点取	扶脚	接合遺物の内容・重量								
							グリッド 遺物名	遺物 番号	層位	器種	点数	原石面 有無	刻線 番号	重量(g)	
図VI-43	32同一母岩	2 11	40~43	未接合			FC	8	34	II	F	1	○		33.64
		2 11	40~43	未接合			FC	8	44	II	F	1	×		48.42
		2 11	40~43	未接合			FC	15	44	II	F	1	×		2.97
		2 11	40~43	未接合			H	28	3	II	F	1	×		31.13
		2 11	40~43	未接合			J	42	5	II	F	1	×		14.76
		2 11	40~43	未接合			L	32	9	II	F	1	×		1.40
		2 11	40~43	未接合			L	40	4	II	F	2	×		1.73
		2 11	40~43	未接合			K	41	1	II	F	1	×		32.95
		2 11	40~43	未接合			M	41	13	II	F	2	×		20.40
		2 11	40~43	未接合			N	41	6	II	F	1	×		3.34
		2 11	40~43	未接合			Q	42	9	重層上付	F	2	○		110.00
		2 11	40~43	未接合			Q	43	7	II	F	1	○		18.77
		2 11	40~43	未接合			R	41	5	II	F	2	○		57.65
		2 11	40~43	未接合			O	40	1	I	F	1	×		6.43
2 11	40~43	未接合			表採	32			F	1	○		115.00		
図VI-43	接合資料33	1 8	89	接合			N	39	6	II	RP	1	○	2)	42.88
		1 8	89	接合			N	39	4	II	F	1	×	2)	9.51
		1 8	89	接合			M	39	8	II	RP	1	×	2)	41.21
		1 8	89	接合			M	39	19	II	F	1	○	①)	30.45
図VI-43	接合資料34	2 10	39	接合			G	34	6	II	Ty	1	×) 20.90
		2 10	39	接合			G	35	5	I	F	1	×		
	34同一母岩	2 10	39	未接合			FC	11	181	II	F	3	×		3.87
		2 10	39	未接合			FC	11	199	II	F	1	×		5.90
		2 10	39	未接合			FC	11	204	II	F	1	×		0.50
		2 10	39	未接合			FC	11	205	II	F	1	×		1.61
		2 10	39	未接合			FC	11	205	II	F	1	×		0.50
		2 10	39	未接合			FC	11	218	II	F	1	×		0.84
		2 10	39	未接合			FC	11	236	II	F	1	×		0.32
		2 10	39	未接合			G	34	7	II	F	1	×		21.80
2 10	39	未接合			G	34	11	II	F	1	×		3.70		
図VI-44	接合資料35	3 3	54	接合			J	30	3	重層	Ty	1	×		12.72
		3 3	54	接合			G	36	8	II	F	1	×		15.06
図VI-44	接合資料36	1 18	69	接合			M	39	15	II	Ty	1	○		18.61
		1 18	69	接合			M	42	7	II	F	1	○		2.34
図VI-44	接合資料37	2 5	22	接合			J	30	6	II	F	1	×		6.27
		2 5	22	接合			J	31	1	II	Ty	1	○		52.13
		2 5	22	接合			J	32	5	II	F	1	○		16.91
図VI-44	接合資料38	3 6	57	接合			J	31	13	II	RP	1	○	①)	30.54
		3 6	57	接合			F	36	13	II	F	1	○	2)	68.01
図VI-45	接合資料39	1 2	66	接合			N	29	1	I	RP	1	○		115.00
		1 2	66	接合			J	37	8	II	F	1	×	①)	3.32
		1 2	66	接合			O	35	7	II	F	1	○	2)	17.88

表VI-5 接合資料掲載石器等一覧

図番号	遺構/ グリッド	遺物 番号	日付	石器	層位	点数	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	接合 番号	
図VI-20 1a	FC	2	11	2012/6/12	Rフレイク	II	1	Sh	6.70	5.50	2.30	75.23	
図VI-20 1b	FC	22	2	2012/9/13	フレイク	II	1	Sh	7.35	4.90	1.00	42.57	
図VI-20 1c	FC	22	10	2012/9/13	フレイク	II	1	Sh	6.80	7.50	1.70	77.59	
図VI-20 1d	FC	22	5	2012/9/13	フレイク	II	1	Sh	5.70	8.55	1.20	87.62	
図VI-21 2a	FC	3	6	2012/6/13	石核	II	1	Sh	6.66	7.95	5.47	232.80	
図VI-21 3a	FC	3	5	2012/6/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.74	3.80	1.82	29.12	035
図VI-22 4a	P	40			石核		1	Sh	6.43	8.02	3.09	143.00	
図VI-25 6a	FC	10	98	2012/7/31	石核	II	1	Sh	9.17	10.50	6.77	634.30	
図VI-25 6b	F	36	7	2012/7/30	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.21	5.39	2.18	61.06	
図VI-26 7a	E・F	36、37	4	2012/9/27	Rフレイク	I	1	Sh	7.78	5.40	2.26	67.27	
図VI-27 8a	H	34	8	2012/8/2	Rフレイク	II	1	Sh	7.42	4.33	1.82	52.92	
図VI-27 8b	J	31	9	2012/7/20	Uフレイク	I	1	Sh	4.95	6.00	1.85	57.29	
図VI-27 9	FC	10	67	2012/6/15	トランシェ様石器	I	1	Sh	8.47	4.77	2.06	86.37	
図VI-27 9	F	39	1	2012/6/15	攪乱								
図VI-27 10	FC	10	126	2012/7/31	Rフレイク	II	1	Sh	8.35	6.85	2.58	157.30	068
図VI-29 11a	F	37	13	2012/7/27	石核	II	1	Sh	8.07	8.56	3.69	193.00	
図VI-29 11b	F	35	13	2012/8/8	Rフレイク	II	1	Sh	5.96	4.09	2.02	41.29	
図VI-29 12a	E	31	1	2012/10/10	スクレイパー	II	1	Sh	4.63	4.24	1.79	29.69	
図VI-29 12b	FC	11	37	2012/8/2	Rフレイク	II	1	Sh	5.39	6.82	2.57	80.69	
図VI-29 13a	FC	11	10	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.10	5.95	2.21	64.56	
図VI-30 14	FC	11	66	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.30	4.70	1.50	29.30	125
図VI-30 15a	FC	11	162	2012/8/3	スクレイパー	II	1	Sh	4.75	4.84	2.02	40.16	070
図VI-30 16a	F	30	1	2012/7/3	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.53	3.71	1.84	24.32	
図VI-30 17a	G	27	2	2012/9/13	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.28	3.57	1.95	26.70	
図VI-30 18a	FC	30	18	2012/10/12	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.82	3.90	2.01	39.93	
図VI-32 19a	F	36	13	2012/7/30	Rフレイク	II	1	Sh	9.30	10.90	3.90	216.30	
図VI-32 19b	G	36	7	2012/7/30	Rフレイク	II	1	Sh	7.50	6.90	3.35	167.60	
図VI-32 19c	G	39	6	2012/6/18	石核	II	1	Sh	5.30	8.30	3.70	109.50	
図VI-33 20a	H	33	8	2012/8/2	Rフレイク	II	1	Sh	9.00	6.30	1.30	108.00	
図VI-33 20a	I	33	5	2012/8/8	Rフレイク	II	1	Sh	9.00	6.30	1.30	108.00	
図VI-33 20b	H	33	4	2012/8/2	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.24	2.73	1.28	12.95	
図VI-33 20c	J	42	3	2012/7/27	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.98	2.26	1.47	13.29	
図VI-33 21a	L	46	1	2012/8/31	トランシェ様石器	I	1	Sh	6.15	4.78	2.75	75.37	
図VI-34 22a	I	33	5	2012/7/26	Rフレイク	II	1	Sh	5.00	8.22	2.36	88.38	
図VI-35 22b	FC	23	1	2012/10/5	石核	II	1	Sh	6.35	11.27	5.43	239.20	
図VI-36 24a	FC	30	59	2012/10/12	石核	II	1	Sh	4.57	7.40	4.15	116.70	
図VI-36 25	FC	32	4	2012/10/12	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.41	3.11	1.32	24.67	064
図VI-36 26a	L	35	1	2012/9/20	トランシェ様石器	II	1	Sh	4.61	4.48	1.56	28.50	
図VI-38 27a	L	34	1	2012/9/20	Rフレイク	II	1	Sh	13.35	7.55	3.64	281.30	
図VI-39 28a	FC	35	9	2012/10/16	トランシェ様石器	II	1	Sh	8.88	5.40	2.39	112.10	
図VI-39 28b	H	32	13	2012/8/31	Rフレイク	II	1	Sh	5.28	4.68	1.48	37.91	
図VI-40 29a	I	26	3	2012/9/5	石核	II	1	Sh	5.28	6.14	7.33	235.30	
図VI-42 30a	E・F	35	1	2012/9/27	トランシェ様石器	I	1	Sh	6.68	4.37	2.12	42.87	
図VI-42 30b	P	35	11	2012/9/21	石核	I	1	MS	11.60	13.24	4.80	535.50	
図VI-42 31a	Q	42	9	2012/9/18	Rフレイク	重機上	1	Sh	6.50	6.15	1.71	77.51	
図VI-43 32	O	39	7	2012/10/15	Rフレイク	II	1	Sh	10.20	5.60	2.80	134.10	
図VI-43 33	表採		18	2012/5/15	トランシェ様石器	I	1	Sh	10.20	5.60	2.80	134.10	
図VI-43 33a	N	39	6	2012/8/2	Rフレイク	II	1	Sh	3.30	6.70	2.70	42.90	
図VI-43 33b	M	39	8	2012/6/5	Rフレイク	II	1	Sh	4.00	3.40	2.10	41.21	
図VI-43 34a	G	34	6	2012/8/1	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.94	3.63	0.94	20.91	
図VI-43 34a	G	35	5	2012/7/11	トランシェ様石器	I	1	Sh	5.94	3.63	0.94	20.91	
図VI-44 35a	J	30	3	2012/9/7	トランシェ様石器	攪乱	1	Sh	4.25	3.25	1.05	12.70	
図VI-44 36a	M	39	15	2012/6/15	トランシェ様石器	II	1	Sh	5.11	3.03	1.48	18.61	069
図VI-44 37a	J	31	1	2012/7/3	トランシェ様石器	II	1	Sh	6.83	4.72	2.54	52.08	022
図VI-44 38a	J	31	13	2012/7/20	Rフレイク	II	1	Sh	5.18	4.67	1.65	30.50	
図VI-45 39a	N	29	1	2011/10/14	Rフレイク	I	1	Sh	7.41	7.24	2.49	117.00	

グリッド	道庁	選挙区	目付	石積	立地	座標	点数/区数	打込み向き	打ち向き	刃先幅 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	取付方法	積石の有無	小グリッド の24x4結合	採集番号	調査番号	地質番号
G	34	3	2013/6/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	1	58.70	4.69	3.65	0.92	14.96	○	×	積石	積石	積石
G	35	3	2013/7/11	トランシェ集積域	東	1	25A	2	10	1	58.30	3.97	3.61	0.90	20.80	○	×	積石	積石	積石
G	36	3	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	1	3	1	58.70	3.82	3.51	0.68	1.80	×	×	積石	積石	積石
G	36	4	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	A	38.40	3.70	3.50	1.81	38.71	○	×	積石	積石	積石
G	36	5	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	37.10	3.76	3.50	1.80	37.00	○	×	積石	積石	積石
G	36	10	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.00	4.20	3.90	2.61	40.00	○	×	積石	積石	積石
G	37	4	2013/7/17	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.00	4.00	3.60	1.22	30.60	○	×	積石	積石	積石
G	37	8	2013/7/17	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	46.00	3.50	3.40	1.20	11.54	○	×	積石	積石	積石
G	38	1	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	42.40	3.50	3.60	1.71	21.62	○	×	積石	積石	積石
H	12	4	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	A	43.40	4.00	3.60	1.60	13.51	○	×	積石	積石	積石
H	12	8	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	E	47.80	4.70	3.60	1.50	13.79	○	×	積石	積石	積石
H	12	4	2013/6/27	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	46.20	4.10	3.70	1.10	11.67	○	×	積石	積石	積石
H	12	3	2013/6/27	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	C	47.50	4.55	4.00	1.90	32.60	○	×	積石	積石	積石
H	14	1	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	D	49.30	3.50	3.50	1.07	11.97	○	×	積石	積石	積石
H	14	1	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	3	3	A	49.40	3.95	3.80	1.60	19.62	○	×	積石	積石	積石
H	14	7	2013/6/27	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	42.00	4.90	4.80	1.30	12.00	○	×	積石	積石	積石
H	14	11	2013/6/27	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	43.80	4.70	4.60	1.44	20.58	○	×	積石	積石	積石
H	15	3	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	3	1	40.80	4.15	4.20	1.12	11.60	○	×	積石	積石	積石
H	15	6	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	46.20	4.60	4.30	1.40	21.58	○	×	積石	積石	積石
H	15	7	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	D	36.20	4.20	4.21	1.50	14.60	○	×	積石	積石	積石
H	15	8	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	B	40.20	4.20	4.10	1.40	12.00	○	×	積石	積石	積石
H	15	8	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	44.00	4.50	4.40	1.20	14.00	○	×	積石	積石	積石
H	15	9	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	45.20	4.80	4.60	1.27	13.14	○	×	積石	積石	積石
H	15	10	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	47.50	5.40	4.60	1.66	21.46	○	×	積石	積石	積石
H	16	3	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	47.50	4.50	4.40	1.66	14.46	○	×	積石	積石	積石
H	17	4	2013/7/19	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	43.70	4.40	4.30	1.64	13.14	○	×	積石	積石	積石
H	18	1	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	1	38.40	3.20	3.40	1.22	20.14	○	×	積石	積石	積石
H	18	2	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.00	3.90	3.90	1.00	11.97	○	×	積石	積石	積石
I	30	1	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	E	42.30	4.64	4.48	1.71	24.80	○	×	積石	積石	積石
I	31	1	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25D	1	1	B	46.80	4.20	4.10	1.22	20.20	○	×	積石	積石	積石
I	31	11	2013/6/28	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.70	3.90	3.70	1.10	11.60	○	×	積石	積石	積石
I	34	2	2013/7/4	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	35.70	3.70	3.40	1.96	40.31	○	×	積石	積石	積石
I	34	8	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	37.00	3.90	4.00	0.90	11.64	○	×	積石	積石	積石
I	35	2	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	42.00	4.90	4.60	1.40	20.60	○	×	積石	積石	積石
I	35	2	2013/7/4	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	32.70	4.50	4.60	0.96	9.26	○	×	積石	積石	積石
I	35	6	2013/7/21	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	E	38.10	4.61	4.61	1.40	11.60	○	×	積石	積石	積石
I	37	1	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	46.00	4.60	4.60	2.43	46.34	○	×	積石	積石	積石
I	38	2	2013/6/27	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	43.40	4.60	4.60	0.80	8.00	○	×	積石	積石	積石
I	41	3	2013/7/20	トランシェ集積域	東	1	25A	2	3	1	35.70	3.70	3.70	2.22	26.11	○	×	積石	積石	積石
I	43	3	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	-	-	3.90	1.82	0.90	0.20	-	-	-	-	-
I	43	4	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
I	43	5	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	43.00	4.31	4.31	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	9	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	43.80	4.31	4.40	1.03	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	3	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	3	C	40.10	4.19	4.17	0.95	11.72	○	×	積石	積石	積石
J	39	8	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	43.70	4.31	4.31	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	8	2013/7/12	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.70	3.90	3.90	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	8	2013/7/12	トランシェ集積域	東	1	25A	1	1	B	40.10	3.85	3.70	1.20	17.79	○	×	積石	積石	積石
J	39	10	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	B	41.10	4.10	4.10	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	4	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	40.30	3.70	3.60	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	5	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	40.30	3.70	3.60	1.10	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	6	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	41.10	4.10	4.10	1.00	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	6	2013/7/1	トランシェ集積域	東	1	25A	2	1	C	41.10	4.10	4.10	1.00	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0.92	11.62	○	×	積石	積石	積石
J	39	7	2013/7/18	トランシェ集積域	東	1	25A	2	2	1	43.10	4.31	4.31	0						

グリッド	連番	連番	連番	目付	石種	種別	点数	石材	点取り番号	打点の向き	刃の向き	長さ	幅	厚さ	重量	実重	実容積	原石の積算	小グリッド	採合番号	採合時期	採合場所				
NS	33	3	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	2	B	1	56.33	4.05	4.30	1.08	31.80	○	×							
NS	33	4	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	3	-	1	49.90	4.11	4.35	1.09	31.54	○	×							
NS	33	7	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	B	1	75.75	3.90	3.93	1.30	30.67	○	×			採V-11	33			
NS	33	2	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	3	-	1	58.40	4.03	4.00	1.07	31.03	○	△	×			採V-12	33		
NS	33	3	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	B	1	48.30	4.00	3.90	0.96	31.72	○	×				採V-13	33		
NS	33	5	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	3	B	1	47.40	3.70	4.00	1.30	31.68	○	×				採V-14	33		
NS	33	5	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	B	1	55.00	4.00	3.90	1.00	30.67	○	×				採V-15	33		
NS	41	4	2013/10/4	トランシェ採石場	■	1	25A		1	2	B	1	37.50	3.90	3.90	0.96	31.67	○	×				採V-16	33		
NS	41	3	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	3	-	1	56.33	4.05	4.30	1.08	31.80	○	×							
NS	41	3	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	3	-	1	49.90	4.11	4.35	1.09	31.54	○	×							
NS	41	7	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	B	1	55.40	4.70	4.60	1.47	39.13	○	△	×			採V-13	33B		
CS	33	4	2013/10/4	トランシェ採石場	■	1	25A		2	2	B	1	32.10	3.70	3.70	0.90	30.60	○	×					採V-12	33	
CS	33	1	2013/10/1	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	B	1	32.70	4.00	3.90	0.73	31.64	○	×					採V-19	33	
CS	37	3	2013/10/15	トランシェ採石場	■	1	25A		1	2	B	1	45.90	3.30	3.30	1.00	30.34	○	△	×				採V-14	33B	
CS	38	1	2013/10/1	トランシェ採石場	■	1	25A		2	0	B	1	36.30	4.67	4.63	1.63	33.20	○	×	重傷						
CS	38	2	2013/10/1	トランシェ採石場	■	1	25A		2	0	-	1	56.33	4.05	4.00	1.06	31.67	○	×					採V-12	33B	
CS	38	7	2013/10/15	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	B	1	48.30	4.14	4.00	1.10	31.30	○	△	×	産出と採合	33B		採V-13	33B	
CS	41	4	2013/10/18	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	C	1	27.50	4.70	4.60	1.30	33.38	○	△	×					採V-19	42
PS	33	3	2013/10/30	トランシェ採石場	■	1	25A		3	1	-	1	31.40	4.30	4.30	1.00	27.87	○	×					採V-15	33B	
PS	33	4	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	0	B	1	48.60	4.30	4.00	1.10	31.17	○	△	×					採V-16	33B
PS	36	3b	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		1	2	C	1	41.50	4.70	4.70	1.00	30.60	○	×							
PS	40	1b	2013/10/21	トランシェ採石場	■	1	25A		1	0	-	1	75.40	4.73	4.41	1.61	39.57	○	×							
PS	41	3	2013/10/28	トランシェ採石場	■	1	25A		2	0	-	1	39.40	4.30	4.20	1.10	31.10	○	△	×						
QS	1	1	2013/10/27	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	B	1	44.80	4.30	4.40	1.40	33.47	○	×							
QS	20	1	2013/10/3	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	C	1	56.40	4.00	4.00	1.01	31.98	○	△	×					採V-17	33B
QS	37	3	2013/10/11	トランシェ採石場	■	1	25A		1	2	B	1	41.70	4.40	4.30	1.35	37.73	○	×	重傷上げ					採V-13	33B
QS	41	4	2013/10/11	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	-	1	45.40	4.40	4.30	1.30	33.51	○	×						採V-14	33B
QS	41	4	2013/10/11	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	-	1	46.50	4.70	4.60	1.40	34.76	○	×							
BS	41	1	2013/10/4	トランシェ採石場	■	1	25A		2	1	A	1	37.30	3.50	4.30	1.40	31.49	○	×						採V-15	33B
BS	41	2	2013/10/4	トランシェ採石場	■	1	25A		2	0	B	1	39.80	3.90	4.40	2.05	39.97	○	△	×					採V-15	33B
高野	高野	33	2013/10/30	トランシェ採石場	■	1	25A		1	1	-	1	31.30	4.34	4.00	1.47	33.10	○	×							

※採石については、産出の第一優先となる産出とされている。本産出の採石との関係は第一優先のため、ノズルを用いて産出を中止したためである。

VII章 自然科学的分析

1 分析・同定の目的と結果

釜谷8遺跡における自然科学的分析は、(1)炭化種実同定、(2)放射性炭素年代測定、(3)黒曜石製造物の原産地分析を行なった。それぞれの目的と結果を簡単に述べる。

(1)炭化種実 a)目的 本遺跡で出土した縄文時代早期中葉に相当する貝殻土器は、道内での出土例が少なく、伴う遺構や遺物、生活環境の詳細な情報は少ない。このため本遺跡において同時期とみられる焼土から出土した炭化種子を同定することにより、植生環境、焼土形成の原因について明らかにすることを目的とした。b)結果 16点について同定を行ったが、確実な炭化種子はF-63から出土した、アサダとウルシのみである。検出状況からは縄文時代早期に属するとみられるが、炭素年代の結果からすると後期前葉のものである可能性も考慮しなければならない。

(2)放射性炭素年代測定 a)目的 縄文時代早期中葉の時期にあっては、土器編年の前後関係や放射性炭素年代の値についてもいまだ確定していない。同時期の遺構や土器付着炭化物の年代を測定することにより、日本列島全体での比較が可能となる。b)結果 住居跡H-1、フラスコビットP-1、22、焼土F-15から出土した炭化物については、概ね縄文時代後期前葉に相当する安定した値を得ている。縄文時代早期中葉に相当する土器に対しては、付着した炭化物2点について測定を行った。こちらは補正年代で8,600年前後の、縄文時代早期中葉に相当する安定した値を得ることができた。本結果により本州島での当期の出土例との比較が可能となった。

(3)黒曜石製造物原産地分析 a)目的 1、2の理由に同じく出土例が少ない遺物であること、また遺跡は本州青森県に近い位置にあることから、黒曜石製の石器等の出土遺物の産地は本州と北海道のどちらに帰属するのか、文化の影響関係を考慮する上で参考となるものである。b)結果 5点中4点が赤井川、1点が豊浦町豊泉であり、予想に反し北海道側の産地のみという結果となった。道内において最も距離的に近い産地が選ばれているようである。遺物は縄文時代後期前葉とみられる石鏃、縄文時代早期～前期のものともみられる石鏃はいずれも赤井川産、Rフレイクが赤井川産、そのほかフレイク2点のうち1点が赤井川、1点が豊泉である。

2 炭化種実同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

(1)はじめに

本分析調査では、本古内町釜谷8遺跡の発掘調査で出土した種実遺体の同定を実施し、当時の植生や植物利用に関する資料を得る。

(2)試料

試料は、各遺構覆土の洗い出し済種実遺体16点(試料番号1～16)で、乾燥した状態で容器に入っている。各試料の詳細は、結果とともに表VII-1に示す。

(3)分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を容器に戻して返却する。なお、委託業務実施要領に示された前処理(試料の洗浄)は、種実遺体が破壊する危険があるため、実施していない。

(4) 結果

被子植物8分類群(カバノキ属?、アサダ、ウルシ属、アオハダ、アゼスゲ類、イヌタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科)9個の種実遺体が同定された(表VII-1)。5個(試料番号1、5、7、9、12)は、同定ができなかったため、不明としている。種実以外では、炭化した芽の破片が2個(試料番号8)芽と考えられる炭化植物が1個(試料番号15)確認された。

種実遺体群は、木本4分類群(落葉広葉樹のカバノキ属?、アサダ、ウルシ属、アオハダ)4個、草本4分類群(アゼスゲ類、イヌタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科)5個から成り、アサダ、ウルシ属は炭化している。

本分析で同定された種実各分類群の写真を図版VII-1に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

(木本)

・カバノキ属(*Betula*)? カバノキ科

果実は灰褐色、長さ1.3mm、幅1.0mmの扁平な倒卵形で、両縁にある膜質の翼を欠損する。頂部に2花柱が残る点から、カバノキ属の可能性を判断している。

・アサダ(*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

果実は炭化しており黒色、長さ4.8mm、幅2.3mm、厚さ1.8mmのやや扁平な皮針状狭卵形で頂部は尖る。果皮表面には10本程度の縦隆条が配列するが、出土果実には泥が付着しており不明瞭であった。

・ウルシ属(*Rhus*) ウルシ科

核(内果皮)は炭化しており黒色。完形ならば長さ2~3mm、幅3~4mm、厚さ1~2mmのやや扁平な楕円体。出土核の残存径は2.1mm、残存厚は1.1mmを測る。背腹両面の中央が凹み、繭状。腹面中央に長径0.6~0.8mmの長楕円形の溝がある。内果皮は厚く(0.1~0.2mm)、表面は粗面で、断面は繭状。

・アオハダ(*Ilex macropoda* Miq.) モチノキ科モチノキ属

核は灰褐色、長さ3.3mm、幅1.7mm、厚さ1.4mmの3稜状楕円体。背面は丸みがあり、腹面正中線上は稜をなす。横断面は扇形。腹面基部に径0.1mm程度の溝がある。表面には鋭い縦隆条からなる葉脈状網目模様がある。

(草本)

・アゼスゲ類(*Carex* Sect. *Carex*) カヤツリグサ科スゲ属

果実は灰褐色、長さ1.5mm、幅1.1mm、厚さ0.6mmのレンズ状広倒卵体。頂部の柱頭部分が伸び、基部は切形。果皮表面には微細な六角形状の網目模様がある。

・イヌタデ近似種(*Polygonum* cf. *longisetum* De Bruyn) タデ科タデ属

果実は黒褐色、長さ1.5mm、径1.0mmの丸みのある三稜状卵体。基部は切形で頂部は尖り、花柱基部が残存する。果皮表面は平滑で光沢がある。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子は灰褐色、長さ1.0mm、幅1.1mmのやや扁平な腎状円形。基部は凹み、溝がある。種皮は薄く、表面には瘤状突起が溝から同心円状に配列する。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子は黒色、長さ1.1mm、幅1.2mmのやや扁平な円形。基部は凹み、中心に向かって食い込む。種皮表面には溝を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

表VII-1 釜谷8遺跡の種実同定結果

試料情報				同定結果				
試料番号	サンプル番号	遺構/発掘区	層位	分類群	部位	個数	状態	備考
1	釜8-3	F-4	最下層	不明		完形	— 1	
2	釜8-5	F-1	焼土	イヌタデ近似種	果実	完形	— 1	
3	釜8-11	F-7	焼土	ナデシコ科	種子	完形	— 1	
4	釜8-14	F-11	焼土	アゼスゲ類	果実	完形	— 1	
5	釜8-15	F-14	焼土	不明		完形	炭化 1	
6	釜8-17	F-16	焼土	アオハダ	核	完形	— 1	
7	釜8-18	F-16	焼土	不明		完形	炭化 1	
8	釜8-40	F-36	焼土	種実ではない	芽	破片	炭化 2	
9	釜8-50	F-40	焼土	不明		完形	— 1	
10	釜8-51	F-41	焼土	イヌタデ近似種	果実	完形	— 1	
11	釜8-60	F-48	焼土	カバノキ属?	果実?	完形	— 1	翼を欠損する
12	釜8-60	F-48	焼土	不明	完形	— 1	— 1	サクランソウ科に似るが小型
13	釜8-74	F-62	焼土	アカザ科	種子	完形	— 1	
14	釜8-75	F-63	焼土	アサダ	果実	完形	炭化 1	
15	釜8-75	F-63	焼土	種実ではない	芽?	完形	炭化 1	
16	釜8-75	F-63	焼土	ウルシ属	核	破片	炭化 1	内果皮断面櫛状

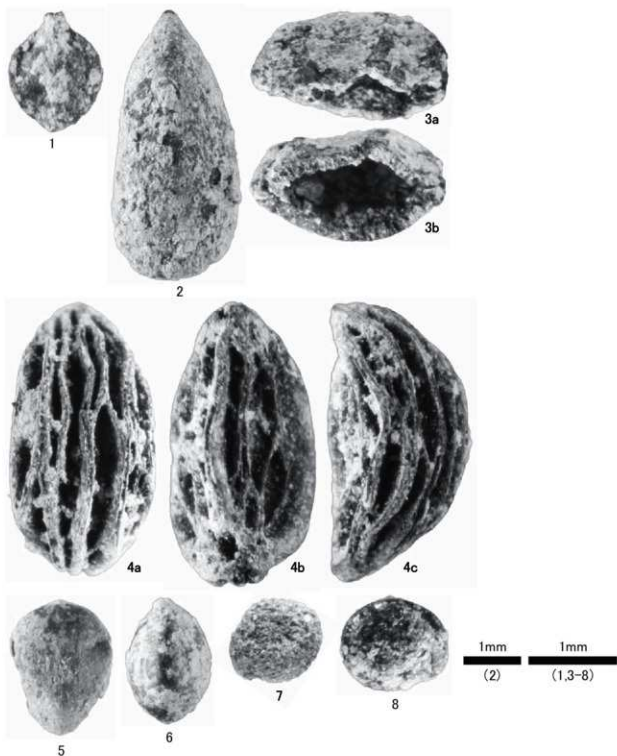
(5) 考察

各遺構から出土した種実遺体には、木本4分類群（落葉高木のカバノキ属?、アサダ、アオハダ、高木または低木のウルシ属）、草本4分類群（アゼスゲ類、イヌタデ近似種、ナデシコ科、アカザ科）が確認された。

木本は全て落葉広葉樹で、森林の林縁部などの比較的明るい林地を好み、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する陽樹である。これらは本遺跡周辺域の森林に生育していたと考えられる。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が確認され、アゼスゲ類は水湿地に生育する種を含む。これらは調査区周辺域の草地環境に生育していたと考えられる。

出土種実のうち、F-63焼土より出土したアサダとウルシ属は炭化していることから、何らかの理由により火を受けた可能性がある。ウルシ属には、古くから利用されていた可能性が指摘されているウルシ (*R. verniciflua* Stokes) が含まれ、近年の研究では、縄文時代の遺跡から漆製品や木材、内果皮、花粉化石の出土が確認されている。出土核は保存状態が不良であるため、本分析では記録保存を優先したが、今後は走査型電子顕微鏡 (SEM) による表面および壁構造の観察が望まれる。

一方、他の分類群は、炭化が認められず、保存状態が良好である。遺跡から出土する種実のうち、低湿地以外から出土した炭化していない種実、炭化種実と同様に扱うには問題があるとされ (吉崎, 1992など)、遺構の時期の植生を反映するものであるかは課題が残る。この点に関しては、試料の履歴を慎重に検討することが望まれる。



1. カバノキ属? 果実?(試料番号11;F-48 焼土)
 2. アサダ 果実(試料番号14;F-63 焼土)
 3. ウルシ属 核(試料番号16;F-63 焼土)
 4. アオハダ 核(試料番号6;F-16 焼土)
 5. アゼスゲ類 果実(試料番号4;F-11 焼土)
 6. イヌタデ近似種 果実(試料番号10;F-41 焼土)
 7. ナデシコ科 種子(試料番号3;F-7 焼土)
 8. アカザ科 種子(試料番号13;F-62 焼土)

図版VII-1 釜谷8遺跡の種実遺体

3 放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

釜谷 8 遺跡は、北海道上磯郡木古内町字釜谷33ほか (北緯41°43'40"、東経140°32'00") に所在し、海岸線より1.5km内陸の海岸段丘上 (標高85m前後) に立地する。測定対象試料は、土坑P-1 覆土13層出土木炭 (KY 8-01: IAAA-112584)、同坑底出土木炭 (KY 8-02: IAAA-112585)、土坑P-4 坑底直上出土木炭 (KY 8-03: IAAA-112586)、H-2、HF-1 焼土出土木炭 (KY 8-04: IAAA-122281)、P-22 覆土7層出土木炭 (KY 8-05: IAAA-122282)、F-15 上面出土炭化物 (KY 8-06: IAAA-122283)、F-36 焼土出土木炭 (KY 8-07: IAAA-122284)、F-56 焼土出土木炭 (KY 8-08: IAAA-122285)、縄文時代の遺物包含層であるⅡ層から出土した土器に付着した炭化物2点の合計10点である (表Ⅶ-2)。

土坑P-1はフラスコピットで、KY 8-01は坑底より0.3m上位、KY 8-02は坑底で出土した。KY 8-04、05、07、08は、調査現場において採取された土壌のフローテーションによって回収された。KY 8-06はクルミ核の破片と同定されている。KY 8-04は縄文時代後期初頭の住居跡から出土した。KY 8-05はフラスコ状土坑の底に近い堆積土から出土した。KY 8-06は縄文時代後期初頭の焼土、KY 8-07、08は縄文時代早期の焼土から出土した。炭化物KY 8-09は口縁部内面、KY 8-10は口縁部外面より採取された。炭化物が採取された2点の土器は縄文時代早期中葉に位置づけられている。

(2) 測定の意義

試料が採取された遺構、試料が採取された土器のおおよその年代を推測する。

(3) 化学処理工程

a) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。KY 8-9、10については、メスを使い、土器より炭化物を採取する。

b) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。KY 8-9、10については、遺物整理時の採拓作業に伴う汚染に留意し、アセトンで処理を行う (AC)。ただし、試料KY 8-10は試料量が少なく、アセトン処理過程における試料の損失を避けるため、この工程を省略した。

c) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。

d) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

e) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

f) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹²C濃度 (¹²C/¹³C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

a) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表VII-1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

b) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表VII-1に、補正していない値を参考値として表VII-2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

c) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表VII-1に、補正していない値を参考値として表VII-2に示した。

d) 暦年校正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年校正年代は、 ^{14}C 年代に対応する校正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年校正年代を表す。暦年校正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年校正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を使い、OxCalv4.1校正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年校正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表VII-2に示した。暦年校正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて校正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

(6) 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、土坑P-1覆土13層のKY 8-01が 3690 ± 30 yrBP、同坑底のKY 8-02が 3690 ± 30 yrBP、土坑P-4坑底直上のKY 8-03が 5640 ± 30 yrBP、H-2、HF-1焼土出土木炭KY 8-04が 3750 ± 20 yrBP、P-22覆土7層出土木炭KY 8-05が 3630 ± 20 yrBP、F-15上面出土炭化物KY 8-06が 3770 ± 20 yrBP、F-36焼土出土木炭KY 8-07が 4000 ± 20 yrBP、F-56焼土出土木炭KY 8-08が 3840 ± 30 yrBPである。

P-1出土の2点の値は誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲でよく一致し、ほぼ同年代を示す。暦年校正年代 (1σ) は、KY 8-01が $2134\sim 2033$ cal BC、KY 8-02が $2134\sim 2032$ cal BC、KY 8-03が $4514\sim 4404$ cal BCの間に各々複数の範囲で示され、KY 8-01、02は縄文時代後期前葉頃、KY 8-03は縄文時代前期前葉頃に相当する。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。暦年校正年代 (1σ) は、KY 8-04が $2202\sim 2135$ cal BCの範囲、KY 8-05が $2024\sim 1954$ cal BCの範囲、KY 8-06が $2205\sim 2140$ cal BCの範囲、KY 8-07が $2565\sim 2476$ cal BCの間に2つの範囲、KY 8-08が $2345\sim 2209$ cal BCの間に2つの範囲で示される。KY 8-04 \sim 06が縄文時代後期前葉頃、KY 8-07が縄文時代中期末葉頃、KY 8-08が縄文時代後期初頭から前葉頃に相当する (小林編2008)。KY 8-04、06

は推定される縄文時代後期初頭におおむね近い値が示されたが、縄文時代早期と考えられる遺構から出土したKY 8-07、08は、推定より大幅に新しい年代値となっている。KY 8-9、10の2点の¹⁴C年代は、誤差(±1σ)の範囲でわずかに重ならないが、かなり近い値となっている。暦年較正年代(1σ)は、いずれも縄文時代早期中葉頃に相当し(小林編2008)、土器の考古学編年上の位置づけにおおむね整合的な結果と見られる。測定結果を表VII-2に示す。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表VII-2 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C補正值)

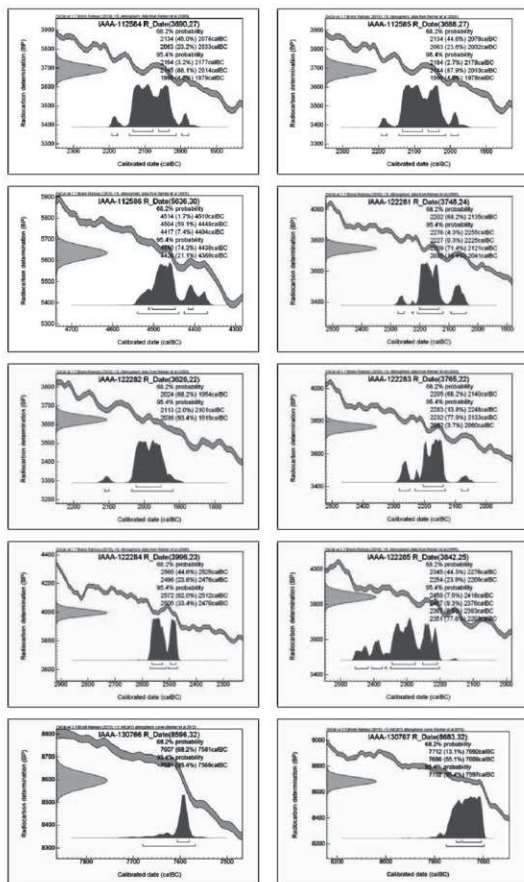
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112584	KY8-01	P-1覆土13層	木炭	AaA	-24.44 ± 0.51	3,690 ± 30	63.17 ± 0.22
IAAA-112585	KY8-02	P-1坑底	木炭	AaA	-22.90 ± 0.43	3,690 ± 30	63.18 ± 0.22
IAAA-112586	KY8-03	P-4坑底直上	木炭	AaA	-23.89 ± 0.45	5,640 ± 30	49.58 ± 0.19
IAAA-122281	KY8-04	H-2 HF-1焼土	木炭	AAA	-31.31 ± 0.42	3,750 ± 20	62.72 ± 0.19
IAAA-122282	KY8-05	P-22覆土7層	木炭	AAA	-25.69 ± 0.28	3,630 ± 20	63.68 ± 0.18
IAAA-122283	KY8-06	F-15上面	炭化物	AAA	-25.67 ± 0.27	3,770 ± 20	62.58 ± 0.17
IAAA-122284	KY8-07	F-36焼土	木炭	AAA	-27.02 ± 0.36	4,000 ± 20	60.80 ± 0.18
IAAA-122285	KY8-08	F-56焼土	木炭	AAA	-29.69 ± 0.48	3,840 ± 30	61.98 ± 0.19
IAAA-130766	KY8-09	R40区層位: II	土器付着炭化物	AC-AaA	-25.38 ± 0.65	8,600 ± 30	34.29 ± 0.14
IAAA-130767	KY8-10	G28区層位: II	土器付着炭化物	AaA	-22.95 ± 0.67	8,680 ± 30	33.93 ± 0.14

[#4888] と [#5455] を統合した

表VII-3 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年年代範囲	2σ暦年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112584	3,680 ± 30	63.24 ± 0.21	3,690 ± 27	2134calBC - 2078calBC (45.0%) 2063calBC - 2033calBC (23.2%)	2194calBC - 2177calBC (3.2%) 2145calBC - 2014calBC (88.1%) 1908calBC - 1979calBC (4.2%)
IAAA-112585	3,650 ± 30	63.45 ± 0.21	3,688 ± 27	2134calBC - 2078calBC (44.6%) 2063calBC - 2032calBC (23.6%)	2194calBC - 2178calBC (2.7%) 2144calBC - 2013calBC (87.9%) 1999calBC - 1978calBC (4.9%)
IAAA-112586	5,620 ± 30	49.69 ± 0.18	5,636 ± 30	4514calBC - 4510calBC (1.7%) 4504calBC - 4448calBC (59.1%) 4417calBC - 4404calBC (7.4%)	4540calBC - 4439calBC (74.3%) 4426calBC - 4369calBC (21.1%)

IAAA-122281	3,850 ± 20	61.91 ± 0.18	3,748 ± 24	2202calBC – 2135calBC (68.2%)	2276calBC – 2255calBC (4.3%) 2227calBC – 2225calBC (0.3%) 2209calBC – 2121calBC (71.4%) 2095calBC – 2041calBC (19.4%)
IAAA-122282	3,640 ± 20	63.59 ± 0.17	3,626 ± 22	2024calBC – 1954calBC (68.2%)	2113calBC – 2101calBC (2.0%) 2036calBC – 1919calBC (93.4%)
IAAA-122283	3,780 ± 20	62.5 ± 0.17	3,765 ± 22	2205calBC – 2140calBC (68.2%)	2283calBC – 2248calBC (13.8%) 2232calBC – 2133calBC (77.9%) 2082calBC – 2060calBC (3.7%)
IAAA-122284	4,030 ± 20	60.55 ± 0.17	3,996 ± 23	2565calBC – 2525calBC (44.6%) 2496calBC – 2476calBC (23.6%)	2572calBC – 2512calBC (62.0%) 2505calBC – 2470calBC (33.4%)
IAAA-122285	3,920 ± 20	61.39 ± 0.18	3,842 ± 25	2345calBC – 2276calBC (44.3%) 2254calBC – 2209calBC (23.9%)	2458calBC – 2418calBC (7.9%) 2407calBC – 2376calBC (9.3%) 2367calBC – 2363calBC (0.6%) 2351calBC – 2203calBC (77.6%)
IAAA-130766	8,600 ± 30	34.27 ± 0.13	8,596 ± 32	7607calBC – 7581calBC (68.2%)	7681calBC – 7569calBC (96.4%)



[参考] 暦年校正年代グラフ

4 黒曜石製遺物原産地同定分析

有限会社 遺物材料研究所

(1) はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりササカイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行なっている^{1,2,3)}。黒曜石の伝播に関する研究では、伝播距離千数百kmは(図VII-1)一般的で、文系考古学(様式学)では更に広い範囲の様式伝搬が推測されてきた。様式伝搬に石材が伴ったかは、理系考古学(自然科学)の結果を取り入れ、真の考古学研究で先史を明らかにする必要がある。6千kmを推測する学者もでてきている現在、正確に産地を判定することは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則とは、同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千kmの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言い換えられると思われる。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

(2) 産地分析の方法

原石を採取した地点は、先史・古代人が各産地の何処の地点で原石を採取したのか不明であるために、一か所の産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT2乗検定がある。ホテリングのT2乗検定法の同定とクラスター判定法(同定ではなく分類)、元素散布図法(散布図範囲に入るか否かで判定)を比較すると、クラスター判定法は判定基準が曖昧である。クラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原石製の遺物とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作るが、A原石を抜いて、D、E産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスターを作ると、A産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。A原石製遺物と分かっているれば、E原石とクラスターを作らないように作為的にクラスターを操作できる。元素散布図法は肉眼で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法で、原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみると、クラスター法より、さらに後退した方法で、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、分析する原石の数で、原石数の少ないときには、A産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり(クラスター法でも同じ危険性がある)判定結果に疑問が残る。産地分析としては、地質学の常識的な知識(高校生)さえあればよく、火山学、堆積学など専門知識は必要なく、分析では非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら、同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかである。クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングのT2乗検定法で

ある。仮に調査した329個の原石・遺物群について散布図を書くと、各群40個の元素分析結果を元素散布図にプロットすると、329群×40個=13,160点の元素散布図になり、これが8元素比では28個の2元素比の散布図となり、この図の中に遺物の分析点をプロットして産地を推測することは、想像できても実用的でなく、もし、散布図で判定するならば、あらかじめ遺物の原石産地を決めて、予想した産地のみで散布図を書き産地を決定する。これでは、一致する産地のみを探すのみで、科学的分析のあらゆる可能性を否定することが科学分析であると言うことに反し科学的産地分析と言えない。ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある遺物原材がA産地に10%の確率で必要条件がみたされたとき、この意味はA産地で10個原石を採取すると1個が遺物と同じ成分だと言うことで、現実により得ることであり、遺物はA産地原石と判定する。しかし、他の産地について、B産地では0.01%で一万個中に一個の組成の原石に相当し、遺跡人が1万個遺跡に持ち込んだとは考えにくい。従って、B産地ではないと言う十分条件を満足する。またC産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎に十分条件を満足させ、客観的な検定結果から必要条件と十分条件をみたしたA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は北海道木古内町に位置する釜谷8遺跡から出土した黒曜石製遺物について産地分析の結果が得られたので報告する。

(3) 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値を指標としてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布している。調査を終えている原産地の一部を図VII-2に示す。元素組成によってこれら原石を分類し表VII-1に示すこの原石群に原産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると329個の原石群・遺物群に

なる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿砦北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿砦東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の大量産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい滝群を作った（旧白滝第2群）。また、八号沢の黒曜石原石と白土沢、十勝石川沢の転礫は梨形の黒曜石で元素組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢からの転礫の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸地域産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石であり、その元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。また、同町中里地区の露頭の小原石（最大約3cm）は、置戸山群、常呂川の転礫で作った常呂川第5群に一致し、同町安住地区の小原石の中には常呂川第3群に一致する原石がみられた。留辺藪町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1、第2およびチマキナウシ林道から採取される黒曜石原石から新たにケショマップ第0群（旧ケショマップ第3群に似る）分類される。また、白滝地域、ケショマップ、置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の元素組成分類結果を表VII-2に示した。また、中ノ島、北見大橋間の常呂川から採取した658個の円礫の中には、独特の元素組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表VII-1と表VII-3に示した。また、湧別川のの上流地域の遠軽町社名湖地域のサナブチ川流域からも独特の元素組成の原石が見られ、表VII-1と表VII-4に示した。表VII-5に示す金華地区から採取した20個の黒曜石円礫は社名湖群、赤石山群などの他に何処の産地にも一致しない黒曜石があり金華群を作った。表VII-6の生田原川支流支線川から採取した19の黒曜石円礫では社名湖群、白滝地区産黒曜石および金華群などが見られた。また同支流の大黒沢採取の5個は社名湖群の黒曜石で表VII-7に示す。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股露頭があり、また露頭前の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十勝三股を起点に周辺の河川から転礫として採取され十三ノ沢、タウシュベツ川、音更川、芽登川、美里別川、サンケオルベ川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の元素組成は、十勝三股産の原石の元素組成と相互に近似している。これら元素組成の近似した原石の原産地は相互に区別できず、もし遺物石材の産地分析でこの遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股を起点にした周辺の河川の複数の採取地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。釧路・上阿寒地域の礫層から最大3.5cmの大きさの円礫状黒曜石原石が産出し、成分組成は十勝三股産と一致した。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2つの美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄地域では、朝日川、金沢川、上名寄地区、忠烈布地区、智恵文川、智南地区から円礫状の黒曜石が採取できる。これら名寄地域産出の黒曜石を元素組成で分類すると、名寄第1群と名寄第2群に分類できそれぞれ87%と13%の率になる。旭川市の近文台、台場、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群にそれぞれ分類され、それから台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒、灰色系円礫も見られ、台場第1、2群を作った。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、元素組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第2、3群に元素組成が一致する。滝川群に一致する元素組成の原石は、北竜

市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫の状態は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第1群は滝川第1群に元素組成が一致し、第2群も滝川第2群に一致しさらに近文台第2群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここから採取される原石の中で少球果の列が何層にも重なり石器の原材料として良質とはいえないもので赤井川第1群を作り、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質なものなどで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、元素組成によって豊泉第1、2群の両群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。また、青森県教育庁の斉藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。最近の北見市教育委員会太田敏量氏による原石産地調査で、上足寄地域から上足寄群、津別・相生から相生群、銅路市埋蔵文化財センターの石川朗氏による銅路空港、上阿寒地域からピッチストーン様の黒曜石が調査され、相互に似た組成を示し、それぞれ相生群、銅路空港群を作った。また雄武地域・音稲府川から名寄第2群に組成の似た音稲府群、鶴居・久著呂川から久著呂川群群を作り原石群に新たに登録した。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た元素組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱒ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸と同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群を作り、また、八森山産出の原石で八森山群を作った。これら深浦町の両群と相互に似た群は、青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群、成田群、浪岡町県民の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の元素組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏝が作れる大きさのものがみられるが、鷹森山群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石中では5cm大のもののみみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本、近隣国を含めた産地の合計329個の原石群・遺物群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

(4) 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。縄文時代の黒曜石製遺物は表面から約3ミクロン程度の厚さで風化層ができていて、分析はこの風化層を通して遺物の内部の新鮮面をいかに多く測定するかが重要であり蛍光X線分析法の中の電子線励起方式のE P M A分析は表面の分析面積1～数百 μ 分析されているが、深さ約1 μ の風化層しか分析を行っていないために、得られた結果は原石で求めた新鮮面のマトリックスと全く異なった可能性の風化層のみの分析結果になるために、黒曜石遺物は破壊して新鮮面を出して分析する必要がある。従って、非破壊分析された黒曜石製遺物のE P M A測定された産地分析結果は全く信用できないX線励起(50 KeV)でマトリックスをシリカとしてモデル計算を行うと、表面から、カリウム元素など軽元素で数 μ から10 μ 、鉄元素で約300 μ 、ジルコニウムで約800 μ の深さまで分析され、鉄元素より重い元素では風化層の影響は相当無視できると思われる。風化層以外に表面に固着した汚染物が超音波洗浄でも除去できないときはその影響を受ける。また、被熱黒曜石の風化層は厚く、表面ひび割れ層に汚染物が入り込んでいるときも分析値に大きく影響する。風化層が厚い場合、軽い元素の分析ほど表面分

析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられ、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なう。軽元素比を除いた場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。一方、安山岩製石器、石片は、黒曜石製遺物に比べて風化の進行が早く、非破壊で原石産地が特定される確率は黒曜石製遺物に比べて相当低くなる。サヌカイト製は風化の進行が早く完全非破壊分析での産地分析ができる確率は黒曜石に比べて相当低くなる。サヌカイト製遺物の表面が白っぽく変色した部分は新鮮な部分と異なった元素組成になっていると考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なっている。今回分析した釜谷8遺跡出土の黒曜石製遺物の分析はセイコーインスツルメンツ社のSEA 2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計で行い分析結果を表VII-8に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えて、表VII-8の試料番号119295番の遺物ではRb/Zrの値は0.951であり、赤井川第1群に比較すると、赤井川第1群の[平均値]±[標準偏差]は、0.969±0.060である。遺物と原石群の差を赤井川第1群の標準偏差(σ)を基準にして考えると遺物は原石群の平均値から0.3σ離れている。ところで赤井川第1群原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.3σのずれより大きいものが76個ある。すなわち、この遺物が赤井川第1群の原石から作られていたと仮定しても、0.3σ以上離れる確率は76%であると言える。だから、赤井川第1群の平均値から0.3σしか離れていないときには、この遺物が赤井川第1群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。次にこの遺物を赤石山群に比較すると、赤石山群の[平均値]±[標準偏差]は、1.340±0.059であるので上記と同様に赤石山群の標準偏差(σ)を基準にして考えると、この遺物の赤石山群の平均値からの隔たりは6.6σである。これを確率の言葉で表現すると、赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から6.6σ以上離れている確率は、百万分の一であると言える。このように、百万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は赤井川第1群に76%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから赤井川産原石が使用されていると同定され、さらに赤石山群に一万分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから赤石山群の原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地(赤井川産地)と一致したからと言って、例えば赤井川第1群と赤石山群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物であり、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから他の産地に一致しないとは言えない。また同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(赤井川産地)に一致し必要条件を満足したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表VII-1の329個すべての原石群・遺物群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして可能性を消していくことにより、はじめて赤井川産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一つの変量だけでなく、前述した8つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関がありCaの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属して

いえないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する¹⁴⁾。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製のものについては329個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち赤井川産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみを結果を表VII-9に記入した。ここで大切なことは、遺物材料研究所で行った結果で、赤井川第1群と判定された遺物を使って、先史時代の交流を考察するときには、表VII-9に記入された赤井川第1群以外の表VII-1の328個の原石産地と交流がなかったと言うことを証明している点である。北海道の先史人は北海道と東北範囲のみでしか交流がなかったと仮定して、遺物と比較する産地を北海道、東北の主な産地だけで十分であると考えて遺物の原材産地を求め、赤井川産原石が使用されているとの結果は、先史時代の交易を一部の範囲に限定することになる(広い地域の範囲の黒曜石と比較していないから、広い範囲との交流は言えない、即ち日本の限定的地域にのみ有効で、東アジア、極東ロシア地域では通用しない結果である)。考古学者の主観的な石器の様式分類が北海道、東北地域に限定されていたとしても、分析された石器がもつ自然科学的結果が何処までの範囲に通用するかが、考古学の交易を考える上に非常に重要で、自分の主観的考察が満足されれば良いとの狭い見では真の考古学的研究とは言えない。他の広い交易範囲を考えている考古学者にも通用する産地分析結果が必要である。論外は、個人知識による肉眼観察を含め、赤井川産原石が使用されているとの判定を、比較をしていないロシア産黒曜石、ロシア遺跡で使用されている遺物の、肉眼観察とか組成(遺物群)ではないと評価することで、ないと評価するには実際に比較し確認するしかない。また、産地分析の結果を評価するときに、比較する原石群は新鮮面であり、また遺物群は風化面を測定し作った群が表VII-1に示している。風化の程度の差はあるものの風化していない遺物はなく、遺物を分析して原産地が同定されない場合は、

- 1: 風化の影響で分析値が変動し、新鮮面と分析値が大きくことになったとき。
- 2: 遺物の厚さが薄く、厚さの影響が分析値に現れたとき。
- 3: 未発見の原産地の原石が使用されているときなど。

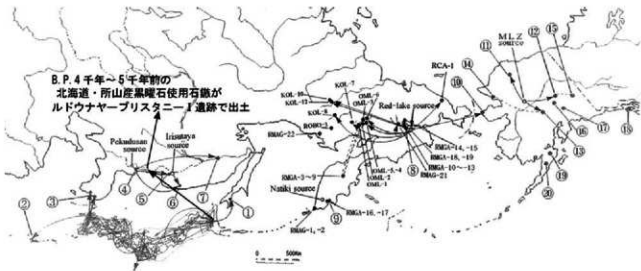
風化の影響を受けている遺物は黒曜石は光沢なく表面が曇っていて、分析するとカリウムの分析値が大きく分析される。風化の影響が少ないときは軽元素比を抜くことにより同定が行える。風化が激しく、軽元素以外の他の元素まで風化の影響がおよぶと、遺物の産地は同定できなくなったり、また、新鮮面分析と異なった原産地に同定されることがあり注意が必要である。原石群を作った原石試料は直径3cm以上で5mm以上の厚さであるが、細石刃などの小さな遺物試料の分析では、遺物の厚さが1.5mm以下の薄い部分を含んで分析すると、厚さの影響を受けて、重い元素は小さく測定され、分析値には大きな誤差範囲が含まれるために、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて同定を行わなければならない。分析平均厚さが0.3mm以下になると補正が困難になり同定できない。細石刃は厚さが薄く、縄文時代の遺物より風化の進んだ遺物もあり、厚さ補正と軽元素を抜いて同定を行っている。

蛍光X線分析では、分析試料の風化による化学的变化(カリウムが大きく観測される)、表面が削られる物理的変化、不定形の小試料では薄い部分を完全に避けて分析できないとき、分析面が遺物の極端な曲面しか分析できない場合など、分析値に影響が残り、また、装置による分析誤差も加わり、

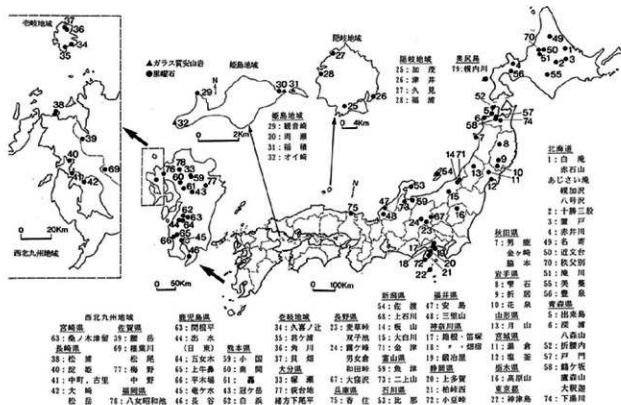
分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原石産地が原石・遺物群の複数の原石産地に同定されるとき、および、信頼限界の0.1%の判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3～12回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。風化、厚さ、不定形など比較原石群分析とは異なる誤差が遺物の分析値に含まれるために、産地分析では、一致する産地（必要条件）の結果だけでは信頼性が小さく、他の産地には一致しない（十分条件）ことを満足しなければならない。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率（5%以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して遺物の原石産地の判定を行うとき、石材の成分組成以外の鉱物組成などの特徴を肉眼観察で求めた場合、キラキラ光る鉱物が多い、少ない、また輝石か、雲母かなど個人的な知識、経験などの主観が加わり判定される。白滝地域産黒曜石の中で、赤石山産原石の割れ面はガラス光沢を持っているが、元素組成が相互に似たあじさい滝、八号沢、白土沢、幌加沢、十勝石川沢などの群の原石は、あじさい滝、幌加沢産はガラス光沢を示し、八号沢、白土沢、十勝石川産は梨肌を示すため、原石産地の判定に梨肌か、梨肌でないかを指標に加えた。また、赤井川および十勝産、上阿寒礫層産原石を使用した遺物の判定は複雑になる場合がある。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第1、鷹森山、大釈迦の各群の元素組成が赤井川第1、2群、十勝三股群、上阿寒礫層群に比較的似ているために、遺物独特の風化の影響、不定形による影響を受けた分析値は、分析値への受け方の程度により戸門原産地と赤井川または十勝・上阿寒礫層産地、これら複数の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。十勝三股群、上阿寒礫層群、赤井川諸群、大釈迦群、戸門第1群、鷹森山群に同定された遺物を定量的に弁別する目的で、元素比の組み合わせを探し、新たに、K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行う。また、従来の元素比の組み合わせで同定されなかった原石・遺物群は十分条件となる。従って、判定の必要条件と十分条件は新元素比と従来元素比の両ホテリングのT2乗検定結果の組み合わせで判定する。また、戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群（50%）と第2群（50%）の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。多数分析した遺物のなかに全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないときは、戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈迦産原石は非常に小さい原石が多く使用された可能性は低いと思われる。新たな元素比の組み合わせでも、十勝三股群と上阿寒礫層群は区別ができず、上阿寒礫層群の原石は最大3.5cm以下のローリング痕のない円礫で、遺物の大きさが3.5cm以上の場合十勝産と特定できる。また石器作成にロスする原石長さを考えると、かなり小さな石器でも上阿寒礫層群の原石は使用できない可能性があるなど、元素分析以外の情報も取り入れて原石産地を絞り込んでいる。分析した札幌6遺跡出土十勝原石使用石鏃は大きさが2.1cmでロスを考慮すると加工前は3.5cm以上あったと推測され、またつまみ付きナイフは6.5cmで上阿寒礫層産地から採取されていないと推測した。今回の分析で赤井川産原石と同定された遺物は高確率で赤井川産地に同定され、青森市三内丸山遺跡で使用されている、戸門第1群、鷹森山、大釈迦産黒曜石など青森市産黒曜石原石には低い確率で同定されたため、新元素比による同定は行わず、従来元素比による定量的判定で区別された。今回の使用した産地分析方法から言えることは、交流は赤井川産地、豊泉産地との交流が推測され、産地地域との生活、文化情報の交換があったと推測され、日本についてはほぼ全土、外国については、

表VII-1で調査された原石産地と外国遺跡で使用されている黒曜石原材の範囲内に限定されるが、石器様式が日本に伝搬したと推測されている東アジア、極東ロシアからの伝搬が石器原材をとまっていなかったことも証明されたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。



図VII-1 日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における表1使用の石器原材伝播図



図VII-2 黒曜石原産地

表VII-5 湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
赤石山群	90個	36%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	120個	49%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、幌加沢	31個	13%	割れ面が梨肌でないもの
ケショマップ第2群	5個	2%	
KS3遺物群	1個	0.04%	

注：8号沢、白土沢、あじさい滝、幌加沢の一部は組成が酷似し、分類は割れ面の梨肌か否かで区別した。

表VII-6 常呂川（中ノ島～北見大橋）から採取した661個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
所山群	321個	49%	常呂川第4群に似る
置戸山群	75個	11%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
ケショマップ第1群	65個	10%	FR1、FR2遺物群に似る
ケショマップ第2群	96個	9%	同時にケショマップ第0群に0.5～0.001%に同定、FR1、FR2遺物群に似る
八号沢群	1個	0.2%	割れ面梨肌
常呂川第2群	14個	2%	置戸山群、高原山群、HS2遺物群に似る
常呂川第2群	14個	2%	置戸山群、高原山群、HS2遺物群に似る
常呂川第4群	70個	11%	KS1遺物群、所山群に似る
常呂川第5群	10個	2%	置戸山群、HS2遺物群に似る
常呂川第6群	1個	0.2%	FH1遺物群に似る
常呂川第7群	2個	0.3%	FR2遺物群に似る
常呂川第8群	1個	0.2%	名寄第2群に似る
十勝	1個	0.2%	戸門第1群、鷹森山群、大釈迦群に似る
台場第2群	1個	0.2%	美瑛第1群に似る

注：常呂川第2群は分析場所を変えて複数回測定して作る。

表VII-7 サナブチ川から採取した80個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名湖群	69個	86%	
赤石山群	5個	6.3%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	3個	3.8%	割れ面が梨肌の黒曜石
常呂川第5群	1個	1.3%	
ケショマップ第2群	1個	1.3%	
社名湖第2群	1個	1.3%	

表VII-8 金華地区から採取した20個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名湖群	13個	65%	サナブチ川の社名湖群に一致
金華群	3個	15%	十勝三股に似るが一致せず
赤石山群	2個	10%	白滝産地赤石山群に一致
置戸山群	1個	5%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
常呂川第5群	1個	5%	

表VII-9 生田原川支流支線川から採取した19個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名湖群	8個	42%	サナブチ川の社名湖群に一致
赤石山群	6個	32%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	2個	10.5%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、幌加沢	2個	10.5%	割れ面が梨肌でないもの
金華群	1個	5.3%	十勝三股に似るが一致せず

表VII-10 生田原川支流大黒沢川から採取した5個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名湧群	5個	100%	サナブチ川の社名湧群に一致

表VII-11 木古内町釜谷8遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比										
	Ca/ K	Ti/ K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/ K	Si/ K	
119295	0.253	0.072	0.081	2.164	0.951	0.438	0.251	0.013	0.023	0.350	
119296	0.254	0.070	0.088	2.291	0.946	0.413	0.272	0.071	0.025	0.343	
119297	0.255	0.075	0.089	2.381	1.052	0.433	0.233	0.041	0.026	0.354	
119298	0.256	0.069	0.082	2.109	0.966	0.384	0.230	0.054	0.026	0.361	
119299	0.464	0.149	0.058	1.772	0.425	0.599	0.147	0.019	0.030	0.446	
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317	

JG-1：標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal* Vol.8 175-192 (1974)

表VII-12 釜谷8遺跡出土黒曜石製遺物の産地分析結果

番号	器種	遺蹟/ 発掘区	土層	遺物番号	分析 番号	ホテリングのT ¹ 検定結果	判定
カマ8-1	石皿	F34	II	10	119295	赤井川第2群 (96%), 赤井川第1群 (94%)	赤井川
カマ8-1	石皿	I41	II	4	119296	赤井川第1群 (59%), 赤井川第2群 (15%)	赤井川
カマ8-1	R フレイク	G21	II	1	119297	赤井川第1群 (53%), 赤井川第2群 (52%)	赤井川
カマ8-1	フレイク	P39	II	8	119298	赤井川第1群 (87%), 赤井川第2群 (39%)	赤井川
カマ8-1	フレイク	Q39	II 重機上げ	3	119299	豊泉第1群 (97%)	豊泉

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器種別の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

VI章-2節 引用文献

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328 p.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642 p.
 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-1 はじめに

VI章-3節 引用文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150

VI章-4節 引用文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975), 蛍光X線分析法によるサマサイト石器の原産地推定 (II), 考古学と自然科学, 8: 61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサマサイト石器の原産地推定 (III), (IV), 考古学と自然科学, 10, 11: 53-81: 33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983), 石器原材の産地分析, 考古学と自然科学, 16: 59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法, 考古学と自然科学, 9: 77-90
- 5) 東村武信 (1990), 考古学と物理化学, 学生社

VIII章 総括

発掘調査の結果から、遺構に関して1項目「円形の陥し穴とみられる土坑について」、遺物に関して3項目「I群a類土器について」、「トランシェ様石器について」、「石器石材について」総括する。

それぞれ、土坑については、道内、東北部の類例から、土坑の時期と分布状況について検討した。I群a類土器については、貝殻腹縁文について精査した。トランシェ様石器については、使用されているものの分析からどのような形態を目的として製作されたのか、統計的に推定する。さらに接合資料からの検討と出土遺跡の分析に加え、使用痕分析を行った。石器石材については、大釜谷産頁岩の特徴について述べる。本調査により、上記のように資料が増加し、遺構、遺物の詳細が明らかとなった。

1 円形の陥し穴とみられる土坑について

調査において、平面形が坑口で円形または楕円形、坑底では隅丸方形～楕円形を呈し、断面は漏斗状、ピーカー状を呈する土坑を6基（P-4、7、13、17、18、19）検出した。検出面からの深さは0.8～1.68mで、覆土は自然堆積と崩落堆積を繰り返す様相を見せる。うち3基（P-4、13、19）には坑底中央に柱穴状のビットがある。いずれも出土遺物がほとんどない。これらは断面形態、堆積、遺物出土状況において特に類似している。さらにP-4と7、13と17、18と19は柱穴状の小土坑のあるなしで対となり、間隔が18～20mで北西～南東方向に配列されているかのようである。

同様な遺構は道内では、函館市亀田中野2遺跡において7基検出されている。平面形は円形～楕円形、坑底は隅丸方形～不整形な円形であり、すべてが坑底の中央に柱穴状の小ビットを伴うものである。坪井睦美はこれらの土坑が7.0～11.5mの間隔において列状に配置されていること、丘陵の縁辺に立地していることに加え、岩手県五滝I遺跡例などの形態上の類似から、陥し穴である可能性を指摘している（坪井2013）。時期については、覆土中から出土した炭化材の年代から、縄文時代のものであるとされている。

同様な土坑は東北部で多く、イノシシを対象とした陥し穴（福田1982）に似ている。岩手県では田村荘一により、陥し穴の集成から地域性、時期に関する検討が行われている。それによると、C型と分類された円形の陥し穴は、岩手県北部で多く検出されること、ほとんどが弧状か直線状に等間隔に並列している場合が多いこと、縄文時代前期初頭から中葉に相当する降下テフラ、中搬浮石の検出される県北部の例は、このテフラ降下以前の構築であることが指摘されている（田村1987）。

青森県柳引遺跡では、坂本真弓、杉野森淳子が行った青森県周辺の陥し穴集成（坂本・杉野森1997）を元に、小山浩平がこの円形の土坑について岩手、秋田、青森の三県で集成を行っている（小山2000）。小山は、覆土中に前述の中搬浮石が堆積し、さらにその下位に縄文時代早期の包含層が堆積する例があることから、これらの円形の陥し穴の構築時期が縄文時代早期中葉であることを指摘している。表VIII-1は坂本、杉野森が作成した一覧表から円形の陥し穴（C型）を抜き出し、構築時期と思われる中搬浮石降下以前の貝殻文土器、及び縄文時代早期末～前期にかけての尖底土器の出土の有無について書き加え、秋田県における例を追加したものである。さらに、田村の指摘による形態の地域性である、

岩手県南部に多い＝平面形方形気味・底面に直径20～30cmの柱穴＝C I

岩手県北部に多い＝平面形円形・底面に直径10cm未満の杭穴、かつ複数多い＝C II
の有無を確認した。なお集成にあるものの報告書を確認できなかったものは一覧からはずしてあるも

表Ⅴ-1 円形の陥し穴一覧

	遺跡名	市町村	検出 数	C I	C II	時期	配列関係	標高(m)	草場もくもく 目録文 自治体 調査 発行年	文献	
北海道	豊原2	釧路市	3			縄文時代(前期年代)	平行・連続配列	80	○	1994	市教育委員会
	亀田中野	釧路市	7	○		縄文時代(前期年代)	直交・直線配列	85~87	○	2013	遺跡事務所報告10編
	新道4	木古内町	1			時期不明	なし	17	—	1984	北陸報43
	茶谷8	木古内町	6	○		早期中葉か	直交・直線配列	85	○ △	2013	北陸報4005
	寺山3	十和田市	7	○		前期以前(層土に中畿浮石)	直交・直線配列	74~90	—	1998	青埋報235集
	平塚(2)	十和田市	2	○		前期以前(層土に中畿浮石)	57~58	○	○	1996	青埋報235集
	小畑内(1)	三沢市	5	○		前期以前(層土に中畿浮石)	直交・横8字配列	25~26	○	1998	青埋報157集
	鴨平(1)	八戸市	2	○		前期以前		200	○ △	1983	青埋報27集
	長者平	八戸市	1	○		前期以前		65	○	1983	青埋報27集
	鶴岡	八戸市	15	○		早期末葉~前期前葉(中畿浮石以下)	平行・弧状配列	45~64	◎	1983	県文化財報告76
白山平(2)	八戸市	1	○		記載なし		94	—	1984	青埋報65集	
牧次郎窪	八戸市	4	○		記載なし	平行・弧状配列	39	○	1990	青埋報128集	
柳引	八戸市	28	○		不明	尾根上弧状配列	86	◎	1999	青埋報262集	
長七谷地? 1	八戸市	3	○		前期以前(層土に中畿浮石)	平行?	14~20	△ ◎	1983	八戸埋報	
水石	鹿角町	4	○		前期以前(中畿浮石以下)		199	—	1998	青埋報265集	
大畑2	軽米町	15	○		前期中葉~前期前葉(中畿浮石以下)	平行・弧状配列	245~255	—	1987	県文化財事務所報告119集	
駒坂	軽米町	8	○		縄文時代前期前葉以前(中畿浮石以下)	300	○	1986	県文化財事務所報告98集		
丸木瀬	九戸村	1	○		縄文時代	なし	230	○	1993	県文化財事務所報告189集	
青久保	二戸市	1	○		不明	なし	363	—	1987	岩文報128集	
龍久保目	二戸市	1	○		不明	なし	167	—	1987	岩文報125集	
龍文原	二戸市	2	○		不明	直交・弧状配列	184~204	○	1987	岩文報125集	
大久保	二戸市	24	○		縄文時代早期中葉	山すそに沿って並ぶ	304~322	◎	1996	県文化財事務所報告101集	
飛鳥谷地? 1	浄法寺町	11	○		AS1以前前葉以前	200~220	○	1987	県文化財事務所報告101集		
柳ノ木平	浄法寺町	3	○		不明	276	—	1985	県文化財事務所報告98集		
桂平	浄法寺町	19	○		縄文時代	横へ平行か	235~240	△	1986	県文化財事務所報告110集	
五葉1	浄法寺町	35	○		縄文時代	直交・平行あり	249~250	○	1985	県文化財事務所報告110集	
田舎内1	浄法寺町	3	○		縄文前期?	平行	255	○	1986	県文化財事務所報告115集	
長堤	権成町	5	○		縄文時代	?	144~146	◎	1986	村文化財報告書第三集	
前九年1	浄法寺町	1	○		不明	?	130	?	1979	県文化財事務所報告書35集	
栗田	栗波町	6	○		早期以降	配列あるか不明	133~135	—	1982	県文化財報告書第69集	
田原	栗波町	2	○		不明	?	102	—	1979	県文化財報告書第35集	
西田	栗波町	5	○		不明、早期中葉か	南庫地区に集中するもの配列不明	102~104	○	1980	県文化財報告書第51集	
中野敷	北上市	1	○		時期不明	なし	136	○	1993	県文化財事務所報告書182集	
青田	北上市	9	○		時期不明	平行~斜行	72~76	—	1991	市文化財報告書第64集	
法蔵野1	北上市	5	○		時期不明	弧状配列、 等高線不明	127	—	1993	県文化財事務所報告書182集	
八幡野目	北上市	1	○		時期不明	等高線	127	—	1993	県文化財事務所報告書183集	
石管田	北上市	20	○		縄文時代前期以前(中畿浮石以下)	尾根上弧状配列	184~127	—	1992	県文化財事務所報告書165集	
柳ノ木野	北上市	4	○		縄文時代以前(笠倉遺跡は丸木瀬~柳のみ)	不明	111~112	—	1981	県文化財報告書第34集	
林崎田	北上市	18	○		縄文時代中期後葉	大・平行、小直交	127~130	—	1992	県文化財事務所報告書165集	
本郷	北上市	35	○		縄文時代・石縄、断崖凸り石有	配列有	129~130	—	1992	県文化財事務所報告書164集	
高瀬1	遠野市	4	○		縄文時代	269~273	△	—	1992	県文化財事務所報告書253集	
蓮田	遠野市	3	○		時期不明	小型・配列不明	265	—	1991	市埋蔵文化財調査報告書253集	
田中野	久慈市	1	○		縄文時代	なし	46	—	1987	県文化財事務所報告書117集	
田口1	岩手町	9	○		縄文時代	平行・弧状配列	223	○	1984	県文化センター報告書53集	
鶴山	釜ヶ崎町	41	○		時期不明・平安朝の可能性もあり?	配列不明	80~90	—	1983	埋蔵文化センター報告書55集	
新田	花巻市	26	○		不明	直線・等間隔	99~101	△	1988	県文化財事務所報告書134集	
南天中	水沢市	1	○		不明	なし	66	—	1981	県文化財報告書66集	
岩崎谷地遺跡	北上市	90	○		縄文時代	集中するか配列不明	100~107	△	1985	岩文報214集	
巨鳥子久保窪	軽米町	11	○		不明	集中するか配列不明	250~253	—	1988	県文化財事務所報告書139集	
水石	軽米町	21	○		縄文時代	102~105	△	1986	県文化財事務所報告書219集		
水田谷地	軽米町	5	○		縄文時代	直交配列か	156~156	○	1989	報告書265集	
宇志	富岡町	5	○		時期不明	配列不明	29~31	○	1989	報告書261集	
石巻台	河辺町	3	○		時期不明	45~49	—	1988	県教委2150集		
壺川1	鹿代町	4	○		早期末葉~前期前葉	配列不明	15~17	◎	1988	県教委2180集	

のもある。

この一覧表からは、円形の陥し穴が検出された54遺跡中半数以上の34遺跡において、構築時期とみられる縄文時代早期もしくは前期初頭の土器がわずかでも出土していることがわかる。また、中畿浮石以前と確認できるものは増加していることに加え、北海道においては岩手県北部、青森県に多いC IIタイプはこれまでのところ検出されていないことは先行研究の指摘どおりである。

本遺跡例も類型から縄文時代早期中葉から縄文時代前期初頭にかけて機能していた陥し穴であろう。函館市亀田中野2遺跡例も1点ではあるが、縄文時代早期~前期前半に伴う断面三角形のすり石が出土しており、近くに同期の遺跡があった可能性は高い。大森司統はすでにこの円形の陥し穴が北海道

にも存在する可能性のあることを指摘しており（大森司2007）、類例は今後も増加すると推定される。

しかし、覆土から出土した炭化物の放射性炭素年代は顕著に異なっている。本遺跡P-4坑底直上から出土した炭化物の年代は5,640±30yrBPであり、亀田中野2遺跡跡の覆土中炭化物の年代は3,967±24~5,154±27yrBPとなっている。ともに誤差を最大限に換算しても数千年も埋まらなかったことになる。やや無理があるうえ、混入としてしまうとしても確認例が多い。この点については引き続き検証が必要である。

2 遺物について

(1) I群a類土器について

本遺跡から出土したI群a類土器は、貝殻条痕文、腹縁文、爪形の刺突文を持ち、尖底の器形を呈するものがあることから道内ではノグッピⅠ式、国療（国立療養所）裏I群に相当するものとみられる。出土総点数は約1,800点とわずかであるうえ器形全体がわかる復元個体はないが、道内ではまだ出土資料が少ないものであるため、本遺跡出土資料からわかることについて示しておく。

東北部においては、これらの土器は白浜式もしくは寺の沢式を中心とし、吹切沢式、蛭沢Ⅱ式、島木沢式に相当する可能性のあるものを若干混じるものである。中心となる白浜、寺の沢式の編年関係は、後述する物見台式〜吹切沢式の位置づけを巡るいわゆる「同系・異系統論」、また先行する日計〜蛇王洞式にかけての文様系統がどのように変遷するかに関して、また白浜式と寺の沢式についても文様系統の変遷に関し見解が分かれ、研究者間で意見の一致がない状態となっている（研究史については、領塚2008が詳しい）。

本遺跡の出土例は、ノグッピⅠ式にみられた粘土のまくれを伴う多段の爪形刺突文が少なく、さらに爪形文が縄文とともに施文させる例がないことから、ノグッピⅠ式でも新しい段階としたい。また横位の貝殻腹縁文で口縁部が裝飾されるもの（図VI-11-16a、b）や、厚手で角張る口縁（図VI-11-12）は同一視することは難しいけれども、道内では区分できる資料が見当たらないため、これらを含めた本遺跡での型式名に関する検討は保留しておきたい。ここでは、出土例中に認められる貝殻腹縁文について確認し、見通しを述べる。

a) 寺の沢式の貝殻腹縁文

本遺跡の中心である寺の沢式と後の型式である吹切沢式は、いずれも貝殻腹縁文が盛行する時期にあたる。名久井文明は寺の沢相当の土器について、同型式には体部にはほとんどの場合貝殻腹縁文のみが施文されたとしている。それには「少なからぬ種類がある」と述べ、次のように説明している。貝殻を器表面にほとんど直立させるものからかなり倒して押圧するものと、まていろいろ変化がある。一度の圧痕の際に角度を変えている例があり、長く連続しているように見えるものや、押圧時に振りながら引き上げるものがある。この中で、規則性があるものとして、口縁に平行する貝殻腹縁文の場合、縁辺の貝表面側を用い、必ず貝頂を下にして押圧している。縦方向ないしそれに近い貝殻腹縁文の場合、縁辺の貝表面側を用い、必ず貝頂を右にしているとされている。さらに、吹切沢式と同様な手法を用いているとみられるものが1片あり、「偶然に生まれ、その後一つの手法として確立されることとなった」と想定している。寺の沢から吹切沢にいたる文様の流れを想定した。

三宅徹也はこの点を引き継ぎ、寺の沢例における胴部施文は、主に斜方向の貝殻腹縁文を全面に施文するものが多く、これに極少数の貝殻腹縁連続波状文が存在する。吹切沢式では貝殻腹縁連続波状文を全面に施文するものが多く、少数の押し文が存在する。これに後続して胴部が無文化する蛭沢ⅡAが位置することを想定し、寺の沢式における貝殻腹縁文から、その施文操作を簡略化した貝殻腹縁

連続波状文が生じ、さらにこの手法の中から押引文が生じたと解釈した(三宅1979)。

これに反論して西川博孝は名久井の指摘を、「吹切式のそれは実測図のそれとは程遠く、相当に雑に施されたものである」(西川1989)とし、直接的な関係ではなくへだたりがあるものと解釈している。見解の不整合の一つは、貝殻腹縁文の種類とその系統の解釈にある。

b) 貝殻腹縁文研究史

貝殻腹縁文とは、サルボウ・アカガイなどの放射肋のある二枚貝を利用して文様がつけられたとされているものである。貝殻文の文様がアカガイの可能性があることは、大正13(1924)年に八幡一郎が茨城県から出土した土器の拓本を示して既に明らかにしている(八幡1924)。山内清男は北海道に旅行した伊東信雄から、函館の住吉町遺跡から出土した貝殻文土器を見せられて興味を持ち、伊東とともに調査をしたが(山内1929)、成果は公表されることはなかった。函館大火の影響で削平されたと思われていた同遺跡が残存していることに気づいた函館市立博物館は、昭和25(1950)年に調査を行い、さらに同年同じく早期の遺跡である梁川町遺跡の調査を行い、両遺跡の報告を行っている(児玉・大場1954)、(市立函館博物館1955)。両遺跡とも施文具に関する言及を行っているが、住吉町では「サルボウ」貝を多く用いたのではないかとしたのに対し、梁川町遺跡ではこれに加えて「アカガイ」をあけている。腹縁を用いた施文法にも触れ、貝の破片もしくは加工したものを軽く押し当てることにより、櫛歯状の文様となると推測している。

竹田輝雄はこれらの報告を踏まえ、サルボウを用いて条痕文、背圧痕文、腹縁圧痕文の三種にわけ、腹縁圧痕文については貝殻と器面の角度を設定して文様要素の抽出を行った(竹田1959)。

小笠原忠久は、函館市石崎町から出土した寺の沢式に相当する土器について、口唇端部に施文された従来「絡条体圧痕文」とされていたものが、アカガイの鉄面の歯列を利用して刻まれたものと推測している(小笠原1974)。その後貝殻文は庄内昭男により、日本国内の貝殻文の様相と貝塚出土遺物を踏まえた検討を行っている(庄内1983)。最近では松田光太郎が集成を行っている(松田2004)。

c) 本遺跡の例

本遺跡で確認できる文様は、貝殻腹縁文の中でも、刺突文、圧痕文、押し引き文、条痕文の4種である。これらの貝殻腹縁文を再現するため、アカガイ(注1)を用意し、彫刻用粘土を円筒形の発泡スチロールに貼り付けたものを使用して実験を行った。結果は写真Ⅷ-1である。写真左が本遺跡出土例の文様、中央が粘土表面、左が施文時の土器、貝殻、持ち手の関係である。

1-1~3は、斜位の貝殻縁圧痕文である。完形の貝殻を用い、縁辺の角度を維持しながら回転させることにより器体に対し斜行するようつけられている。

2-1~3は、横位の貝殻腹縁刺突文である。完形の貝殻を用い、伏せた状態で上から下に移動させて施文している。

3-1~3は、貝殻腹縁押し引き文である。完形の貝殻を用い、殻内面を持ち縁辺部を器面に押し付け移動させることにより施文される。

4-1~3は、貝殻条痕文である。貝殻の用い方は3に同じであり、3が縁辺を押付けるのに対し、4は背面となっている。押付ける際に少し回転させることにより、器面調整の役割をしているとみられる。

施文法と施文効果からみると、1は文様であろうが、3以降はほぼ調整、2はその中間に位置するとするべきものである。特に3、4は押付けることにより器面を整える効果が著しい。これらは器面調整であることを重視し、本遺跡において3=腹縁押し調整痕、4=背押し調整痕と仮称した。

本遺跡出土例は、貝殻腹縁文が文様から調整痕へと変化する過程を示していると考えられ、背面を引

写真Ⅶ-1 貝殻腹縁文の再現



1-1 図Ⅳ-36-20



1-2



1-3



2-1 図Ⅴ-1-23



2-2



2-3



3-1 図Ⅴ-1-22



3-2 腹縁押圧調整痕



3-3



4-1 図Ⅳ-35-11



4-2 背押圧調整痕



4-3

きずる擦痕である、典型的ないわゆる「条痕文」（北海道開拓記念館1989、中川1999）は、器表面に施文するものは存在していない。これまでの条痕文の呼称はこの押圧調整と区別する視点を欠いており、今後の編年に当たっては注視すべき要素であろうと想定される。

注1) アカガイ、エゾシカゲガイ、サルボウ、リュウキュウザルガイを用意したが、アカガイが最も近い。アカガイは江別市内のスーパーでロシア産とされていたものである。なおアカガイの同定は、第1調査部第3調査課課長土肥研品による。

(2) 「トランシェ様石器」について

a) トランシェ様石器について

出土したトランシェ様石器は、破片も含め230点で、一遺跡の出土点数としては多い。この石器は芹沢長介の指摘を引き継いだ富樫泰時により1976年に命名されたものである（富樫1976）。以来四半世紀以上経つが、その後この石器を題材とした論文はなく、遺跡報告書での検討が行われるのみである。その後どのような視点が提供され、どのような点が課題とされているのか振り返る。

富樫の定義は、機能と本家トランシェとの類似点に加え、石器の刃部が最も古い面であること、石器の形態が台形か二等辺三角形であること。また、縄文時代早期の貝殻文土器に伴うこと、分布地域は東北北部から北海道南部までの地域。という内容である。富樫の定義以降に出土例から考察を行った遺跡を調査年順に記す。

岩手県桜松遺跡では、トランシェ様石器を製作したとみられる接合資料が得られた。長軸径が72cm、深さ15cmの土坑に、フリイク887点が出土し、剥片石器10点が図示されている。土坑中からはトランシェ様石器らしきものは出土していないが、接合した29件の資料の中に、最終的には失敗しているが、トランシェの姿となっているものが含まれているとしている（岩手県埋文センター1982）。

青森県赤場遺跡では、トランシェ様石器を含むヘラ状石器を「直刃斧」として分類している。第1、2次調査では、剥片を除いた石器1,871点のうち50点がこの直刃斧となっている。直刃斧は1類～3類に分類され、使用痕観察を含めた分析を行っている。1類がトランシェ様石器に相当するもので、2類はその刃部を再生したもので、3類は背面全面が加工され、腹面は両側面に浅い調整が施されるものである。高坂一夫は1類の使用痕を観察し、「刃部側を前面にし、主要剥離面を下に向けて持ち、前に強く押し出すようにして使われた」と想像している。さらに2から3類にいたると刃部に平行に近い使用痕が増えるという変遷を確認した。これを出土した土器と結び付け、1類は縄文時代早期貝殻線文系土器に伴い、3類は前期初頭から出現し始める。型式名でいうと物見台、ムシリⅠ、早稲田5類、赤御堂式、長七谷地Ⅲ群の間で形態を変えながら断続的に使用されたものであるとしている（青森県教育委員会1985）。

秋田県寒川Ⅰ遺跡では、早期末様から前期初頭にかけての表裏縄文土器に伴うものが39点出土している。報告者は、トランシェ様石器が前期初頭にも継続して残ること、また富樫が指摘している横置き剥片が多く、これが刃部の製法であったこと。遺跡の特徴として7.5cm以下の比較的小きなものが出土することを挙げている。さらに、神奈川県尾崎遺跡の中期の出土例から、この石器が「一時期に限定されず、その分布域も一地域に限定されないことを物語る」としている（秋田県教委1988）。

青森県柳引遺跡では、トランシェ様石器を含むとみられる「石筥及び打製石斧」について使用痕観察を行い、土掘り具としての可能性を指摘している（小山1999）。

富樫の命名以来、使用されていた期間が縄文時代早期中葉から縄文時代前期初頭までとやや広がりを見せ、接合資料や使用痕分析などから、ヘラ状石器の変遷や使用法についての考察が進展といえるが、出土例は増えているものの、それほど作りこまれた石器ではないこともあってか分類の基準はあいまいとなり積極的にトランシェ様石器の名称を与えることも少なくなってきたようである。

本遺跡出土例は、トランシェ様石器の製作遺跡とみられることから、出土資料の分析を通じて本石器の完成品とは何かを検討するとともに、トランシェ様石器の分布の様相についても述べておく。

b) 本遺跡出土例の傾向と分析

本遺跡から出土したトランシェ様石器230点のうち、刃部や基部の一部が欠けるものを除くと163点である。これを「有効トランシェ」とし、計測値をグラフ化したものがグラフVII-1、2である。なおこの元となったデータは、VI章表VI-6トランシェ様石器一覧表である。

グラフVII-1は石器の長さや幅を軸にし、刃部に明瞭な使用痕とみなされる光沢があるもの(表VI-6、項目「刃部光沢」に○で表記した。顕微鏡観察により、使用痕が認められた6点を含む)12点とそれ以外の分布を示したものである。

有効トランシェの数値は、長さ1.82~10.24、幅は1.50~5.68 (cm) の範囲である。光沢ありの分布は長さ4.60~7.30、幅2.30~3.80 (cm) までに限られ、特に幅に関しては狭い範囲のものである。

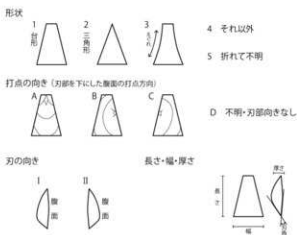
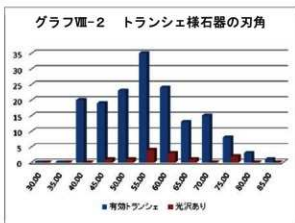
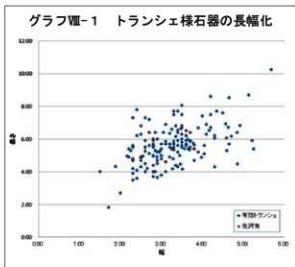
グラフVII-2は刃角の比較である。有効トランシェは40°から80°まで分布しているが、使用痕のあるものは55°~60°に顕著な分布を示し、75°付近にも一つの集中が認められる。

12点の光沢の有るトランシェ様石器は、刃部の向きは全てIの片刃。素材剥片は不明の1点を除きすべて横置きBあるいはCの剥片を使用している。刃部の正面観は逆アーチ状を呈するものが9点(75%)。直線状が3点(25%)である。

刃部に残る光沢を顕著な使用の結果とみなし、それと同様な規格を持つ石器を完成品と推測する。

この「完成品」は、横置きの素材剥片を使用し、規格は平均値(中央値)で、長さ5.80(5.75)cm、幅3.00(2.95)cm。刃部は背面側に急角度の片刃を呈し、その角度は44.80~73.30°平均値は57.63(55.90)°の範囲にあるものと推定する。

グラフでも示されているとおり、全体の分布の中で、刃部に光沢のあるものは狭い範囲に限られている。素材剥片については、高標は縦長の剥片を使ったものもあると述べているが、本遺跡での傾向から基本的には横置き(図VII-1-B、C)の剥片から製作されていたとみられる。素材剥片につ



図VII-1 トランシェ様石器一覧(表VI-6)の凡例

いての同様な指摘は前述の秋田県寒川 I 遺跡に加え、函館市西股遺跡でも触れられており（北海道第四紀研究会1974）、トランシェ様石器全体の傾向といえる。

c) 接合資料からの検討

掲載した接合資料のうち、原石から剥片を採取し石核に至るもので、得られた剥片からトランシェ様石器を製作しているものは接合資料6の一件のみである。このほかの接合資料についても、得られたフレイクチップ集中域において I 群 a 類土器やトランシェ様石器を伴っていることから、接合資料のほとんどは縄文時代早期中葉に相当するものとみられる。

原石は節理が多い頁岩で、打点が明瞭ではない剥離面で接合する資料が多い。出土状況においても際立った集中域がなく、石器の大きさや形に規格性が少ない。当初は素材選択も含め極めてランダムな剥離作業を行っていたか、後世の攪乱を受けていたのではないかという印象を持っていた。

しかしトランシェ様石器を含む接合資料が存在し、中には使用痕の残る資料があること、また遺跡内で住居跡が検出されず、生活痕跡に乏しいことから、本遺跡は縄文時代早期中葉において主にトランシェ様石器を製作し、使用する場であったとみられる。

ここでは、接合資料の中で共通してみられる項目をいくつかあげ、トランシェ様石器との関連について述べておく。

i) 礫皮の除去について 接合資料の原石は角礫またはいびつな亜円礫が多く、その凹凸を利用する形で礫皮の除去を行い、それを打面として剥離の契機とするものを8件の接合資料で確認している（接合資料1、5、6、11、19、22、24、29）。

ii) 剥片剥離について 剥片剥離は数枚単位で、打点を左右に動かしながら剥離する交互剥離を行い、90°を単位とした打面転移を行うものが多い（接合資料4、6、8）。石核は礫皮の除去から90°単位で行うため、石核は大きな失敗がなければ平行四辺形となり、残核は接合資料6b、接合資料22bのような礫皮の残る形状となるようである。

iii) トランシェ様石器製作について a) 節理割れした破片から製作を試みているもの（接合資料3、12、17、20、28、33）。b) 原石面が2面以上に残る剥片を素材とするもの（接合資料32）。c) 製作中の失敗とみられるもの（接合資料9、14、32、37）や、d) 加工されるが使用されないもの（接合資料3、16、18、35、36）が認められる。

i、iiの手法のうち、トランシェ様石器と結びつきそうなものは、iiの90°単位の打面転移であるが、前述した岩手県桜松遺跡の指摘「打点を後方にジグザクに移動して剥片剥離を行うが、これら一連の打撃によって形成された背面の整形のためと思われる打撃がA面（写真からは90°側面とみられる）より時折入っている」に近いものといえるかもしれない。ただし、桜松遺跡の資料は原石面を打面としているようであり、本遺跡と結びつけるにはさらに検討が必要である。

iiiのa、b点からは、使用痕のあるトランシェ様石器の素材に規格性があったとした前節の結論に反している。刃部に適した角度の縁辺があれば素材にかかわらず製作を試みるようである。また、出土資料は小形品が多いが、接合資料の中には大形となるものもある（接合資料9、32）ことも注意しておきたい。

懸案として残るものは、明瞭な使用痕が残るトランシェ様石器の接合資料が確認されていないことである。石材からは区別が困難であるうえ、可能性の低いことは思うが、持ち込んだ石器と製作された石器が違う可能性も残されている。製作されたのは確かであるが、製作されたものをその場で使ったことは状況証拠による推論である。このことについては十分な検証を行うことができなかった。今後の課題としたい。

（立田 理）

d) トランシェ様石器の使用痕分析

トランシェ様石器の機能を検討するため、使用痕分析を行った。対象としたのはルーペで光沢が観察できるものを含めた12点である(表Ⅷ-2)。

i) 観察方法

資料を、アルコールを浸した脱脂綿等で軽く拭き取り、手や指の脂分などを取り除いた後、落射照射金属顕微鏡(Nikon ECLIPSE ME600)を利用して、100-500倍で観察を行った。光沢面のタイプ分類は東北大学使用痕チームによる頁岩製石器の分類にしたがった(梶原・阿子島1981、阿子島1989)。

ii) 分析結果(表Ⅷ-2、図Ⅷ-2~4)

12点中、6点に使用痕が検出された(表Ⅷ-2)。以下に観察結果について記載する。

図Ⅷ-10-51は腹面に刃部から5mmの範囲にE2タイプ(①)、さらに8mm奥の広い範囲にやや弱い光沢面(②)が分布し、刃部縁辺には強い摩耗と刃部に直交する線状痕が認められる(①)。側縁の一部には線状痕を伴わない弱い光沢面(③)が分布し、着柄痕等の可能性がある。

図Ⅷ-11-80は腹面に刃部から2mmの範囲にE2タイプ(①)、さらに4mm奥の範囲に弱い光沢面(②)が分布し、刃部縁辺には強い摩耗と直交する線状痕が認められる(①)。腹面の稜には刃部と直交方向の線状痕を伴うE2タイプの光沢面があり(③)、腹面のバルブの高まりであり、線状痕の方向・光沢の種類が刃部と同一であることから一連の作業で形成されたと考えられる。背面の稜の高部には平滑な光沢面があり(④)、木や骨角製の柄と接触した可能性がある。

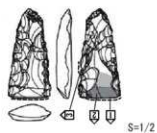
図Ⅷ-11-85は腹面に刃部から6mmの範囲にE2タイプ(①)、さらに12mm奥の広い範囲にやや弱い光沢面(②)が分布し、刃部縁辺には強い摩耗と刃部に直交する線状痕が認められる(①)。また、側縁の中央付近には線状痕を伴わない弱い光沢面(③)が分布し、着柄痕等の可能性がある。

図Ⅷ-12-98は腹面の刃部左に刃部から2mmの範囲にE2タイプ(①)、さらに1mm奥の範囲にやや弱い光沢面があり、刃部縁辺には刃部に直交する線状痕が認められる(①)。腹面の稜には刃部と直交方向の線状痕を伴うE2タイプの光沢面があり(②)、腹面のバルブの高まりであり、線状痕の方向・光沢の種類が刃部と同一であることから一連の作業で形成されたと考えられる。側縁中央付近には側縁に直交方向の線状痕を伴う光沢面(③)、線状痕を伴わない弱い光沢面(④)が分布し、着柄痕等の可能性がある。

表Ⅷ-2 分析試料一覧

図番号	遺構/調査区	石材	線状痕	光沢	腹面刃部光沢侵入度	判定その他
図Ⅷ-10-51	L30	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2、側縁：F2?	高	乾燥皮のホイットリング。着柄の可能性あり。
図Ⅷ-10-61	I35	頁岩	なし	なし		未使用の可能性
図Ⅷ-11-80	F38	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2、背面稜：EorD1、側縁：F2	低	乾燥皮のホイットリング。
図Ⅷ-11-81	J30	頁岩	なし	なし		未使用の可能性
図Ⅷ-11-85	H36	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2、側縁：F2?	高	乾燥皮のホイットリング。着柄の可能性あり。
図Ⅷ-12-94	F34	頁岩	なし	なし		未使用の可能性
図Ⅷ-12-98	Q29	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2、側縁：F2?	低	乾燥皮の直交方向の動き。着柄の可能性あり。
図Ⅷ-13-110	E・F30	頁岩	なし	なし		未使用・摩損あり
図Ⅷ-14-120	K43	頁岩	なし	摩損の可能性あるものあり		未使用?
図Ⅷ-15-42	FC-12	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2、側縁：F2?	高	乾燥皮のホイットリング。着柄の可能性あり。
図Ⅷ-15-44	FC-12	頁岩	なし	なし		未使用の可能性
図Ⅷ-16-59	FC-20	頁岩	刃部腹面：直交	刃部腹面：E2	低	乾燥皮の直交方向の動き。

図V-10-51



①光沢 (E2) (200×)

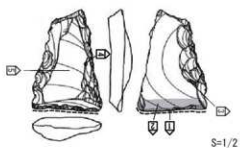


②光沢 (E2) (200×)



③微弱な光沢 (200×)

図V-11-80



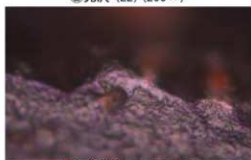
①光沢 (E2) (200×)



②光沢 (E2) (200×)



③光沢 (E2) (200×)



④光沢 (B?D1?) (200×)



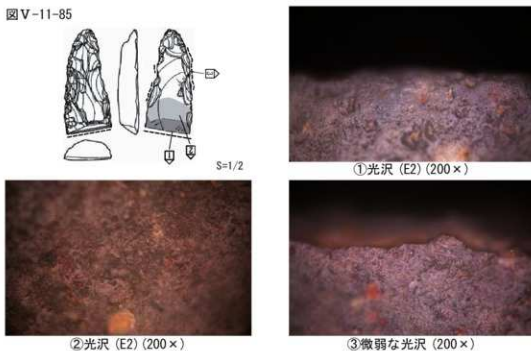
⑤光沢のない表面 (200×)

0 200x 250μm

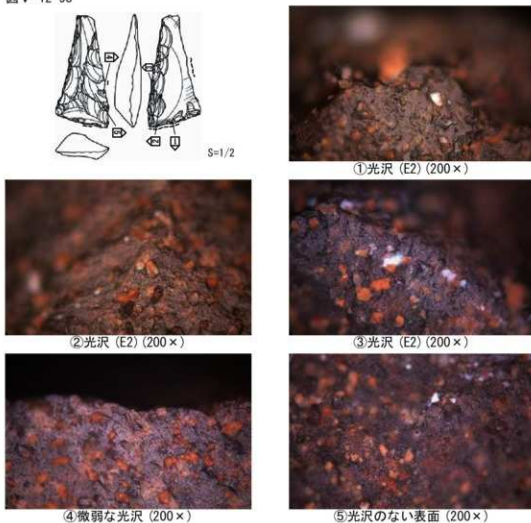
--- 使用痕光沢面が認められる箇所 ■ 強い光沢面の範囲 □ 弱い光沢面の範囲

図Ⅷ-2 トランシェ様石器の使用痕(1)

図V-11-85



図V-12-98

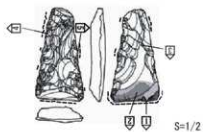


0 200× 250μm

--- 使用痕光沢面が認められる箇所 ■ 強い光沢面の範囲 □ 弱い光沢面の範囲

図Ⅴ-3 トランシェ様石器の使用痕(2)

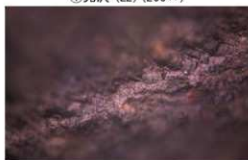
図VI-15-42



①光沢 (E2) (200×)



②光沢 (E2) (200×)



③稜の潰れ (200×)

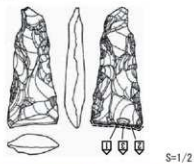


④光沢 (E2?) (200×)

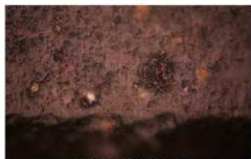


⑤微弱な光沢 (200×)

図VI-16-59



①光沢 (E2) (200×)



②光沢 (E2) (200×)



③剥離面内部の光沢 (E2) (200×)

0 200× 250μm

--- 使用痕光沢面が認められる箇所 ■ 強い光沢面の範囲 □ 弱い光沢面の範囲

図Ⅷ-4 トランシェ様石器の使用痕(3)

図VI-15-42は腹面に刃部から8mmの範囲にE2タイプ(①②)、さらに1mm奥の範囲にやや弱い光沢面があり、刃部縁辺には強い摩擦と刃部に直交する線状痕が認められる(①)。腹面の稜の高部には潰れ(③)がみられ、側縁にはE2タイプとみられる光沢面(④)や線状痕を伴わない弱い光沢面(⑤)が分布し、着柄痕の可能性がある。

図VI-16-59は腹面に刃部から2mmの範囲にE2タイプ(①)が分布し、側縁からの剥離面の稜(②)や刃部側からの剥離面の内部(③)にも同タイプの光沢面が分布する。刃部縁辺には直交する線状痕が認められる。

使用痕が観察された6点は全て石器裏面(腹面側)の刃部にE2タイプの光沢面が検出された。強い光沢面と周辺に弱い光沢面があり、図V-10-51のように刃部は強く摩擦し、断面形は丸みがある。光沢の範囲は、強い光沢面の奥行きが5mmを超え、弱いものと合わせて10mmを超えるような侵入度の高いもの(図V-10-51、図V-11-85、図VI-15-42)と強い光沢面が2mm程度、弱いものと合わせておおむね5mm以下の侵入度が低いもの(図V-11-80、図V-12-98、図VI-16-59)がある。この光沢には刃部に直交方向の線状痕が伴う。光沢の種類と線状痕の方向より被加工物は乾燥皮で、運動方向は刃部と直交方向(石器の長軸方向)である。微小剥離痕はほとんど見られず、腹面側主体にわずかにうろこ形、台形が認められる。腹面の光沢面の侵入度の高低は被加工物との角度によるものと考えられ、高いものは寝かせて、低いものは立てて使用したと考えられるが、高いものは相当石器を寝かさないと加工物と接することはできず、作業としては困難である。皮を枠などに張った状態でのホイットリングに侵入度の高い民族資料例があり(Beyries and Rots 2008のScenario 8)、侵入度の高いものはそのような状況で利用された可能性がある。また、少ないながらも微小剥離痕の分布もホイットリングの可能性を支持する。そのほか、側縁に微弱な光沢があるものが多く、着柄痕の可能性がある。

光沢や線状痕の検出されなかったものは検出されたものに比べ、やや加工の粗く形状が不整なもの(図VI-15-44)もあるが、整ったもの(図V-10-61)もある。一方、検出されたものには図V-11-80のように両面加工の度合いが少ないものも確認された。使用石器の選択性などについては石器製作跡である遺跡の性格などを含め検討する必要がある。

iii) まとめ

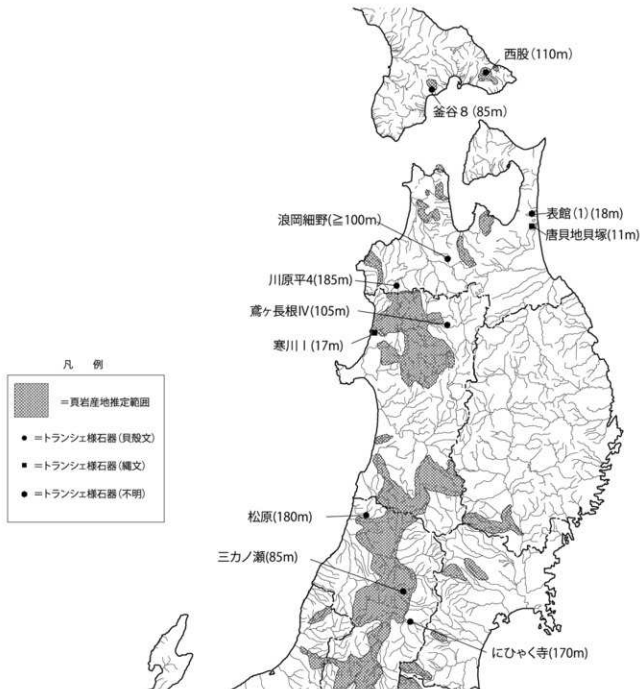
トランシェ様石器には技術形態学的な斉一性が認められる。使用痕分析の結果、対象資料のうち、使用痕の認められるものは全て乾燥皮の加工に利用されたと推定され、技術同様、機能面でも斉一性が認められた。釜谷8遺跡ではトランシェ様石器の集中的な石器製作が行われており、それに伴う集約的な皮革加工が行われた可能性がある。その妥当性を検証するためにも、今後も引き続き使用痕分析例を増やしていく必要がある。

(鈴木宏行)

e) トランシェ様石器を伴う遺跡について

この石器は東北北部から北海道西南部において、縄文時代早期貝殻文期から縄文時代前期初頭にもみられる石器である。しかし、同時期の遺跡であっても、本遺跡のように出土石器数の多数を占める遺跡もあれば、住居が複数検出される集落にも関わらず1点も出土していない遺跡もある。

報告書の記載内容から、突出して、あるいは目を引く形で出土する例を県別にみている。トランシェ様石器は通例筒状石器の一部として分類されるが、特に細分しないものや「直刃斧」などといった分類がなされることもあるため、分類については概ね報告書の記載のままとし、伴うであろう土器も、大きく貝殻文か、早期～前期の縄文土器かに分けて判断した。



図Ⅷ-5 頁岩産地とトランシェ様石器出土地

1・秋田県

秋田県大館市の鷹ヶ長根IV遺跡では、トランシェ様石器が54点出土している。フリイクを含めた出土石器点数1,000点のうち、剥片石器と見られるものは300点、うち筒状石器とされたものが156点である。物見台式、鳥木沢式、吹切沢式の貝殻文土器が出土しており、これに伴うものとされている(秋田県教育委員会1981)。また前出の秋田県寒川I遺跡では、縄文時代早期～前期の縄文土器分布に重なり39点が出土している。

2・山形県

山形県村山市の三カノ瀬遺跡では、全体の数量が不明であるが、筒状石器が多いことは注目すべき

ことであるといひ、12点が出土し、中にはトランシェ様石器が含まれている。出土土器の代表的なもの、貝殻腹縁文が内外面に施される丸底の土器であるとされる(加藤1963)。

山形県ではこのほか、トランシェ様石器を含めた篋状石器がまとまって出土するものがいくつか確認されている。山形県山形市にひやく寺遺跡SK36では、8点が集まって出土し、そのうち1点が典型的なトランシェ様石器である。貝殻文土器に伴うとみられる(山形県教育委員会1985)。山形県飽海郡八幡町の松原遺跡では、包含層中から12点の石器が集まって出土し、うちトランシェ様石器は4点含まれている。松原遺跡は遺物出土総点数152点のうち、トランシェ様石器は13点を占める。出土土器は破片資料であるが、貝殻腹縁による文様が描かれている(山形県教育委員会1992)。

3・青森県

青森県表館(1)遺跡では、剥片を除いた1,416点のうち、トランシェ様石器を含めた篋状石器が130点を占めている。出土土器は縄文草創期の隆起線文土器から前期前葉の春日町式までの長期間である(青森県教育委員会1989)。

青森県六ヶ所村唐貝地貝塚では、出土した石器の1割強が篋状の石器で占められていると報告されている。伴う土器は不明瞭ではあるが、縄文早期末～前期初頭とみられる(佐藤1983)。

青森県浪岡町細野遺跡では、採集された16点の石器のうち9点がトランシェ様石器であったという。同時に採集された土器は、貝殻腹縁文が施文される、白浜、寺の沢、根井沼式といったものとみられ、これらに伴うとみられる(杉山・福田1984)。

青森県中津軽郡西目屋村の川原平(4)遺跡E地区は、現在整理作業中であるが、貝殻文系土器やトランシェ様石器が、まとまった範囲から出土しているという(青森県埋蔵文化財センター2013)。

上記のように、秋田、山形での出土が顕著であり、伴う時期は先行研究により縄文時代早期中葉の貝殻腹縁文もしくは縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられる。

図Ⅶ-2は、秦昭繁の東北北部の研究成果(秦2007)と、加藤孝幸の成果(加藤2004)を合わせて作図した、珪質頁岩、珪質ノジュールの分布推定範囲である。遺跡の位置を重ねると、縄文時代早期貝殻文土器に伴うトランシェ様石器、また山形県に分布するトランシェ様石器埋設遺構の分布に接しており、またいずれも標高80m以上の山地に分布していることがわかる。本遺跡も大釜谷産頁岩の産地に立地しており、標高は85mでこの条件を満たしている。トランシェ様石器が頁岩を素材とすることから当然のようにも思えるが、貝殻文土器に伴う多数出土の例は頁岩産地に近く、海から離れた場所にも多いことは、この石器の特徴の一つといえるであろう。

縄文時代早期末から前期初頭とみられる資料はこれに限らず、標高の低い寒川Iや、産地を遠く離れた表館(1)遺跡等でも多数出土する例があると指摘できる。

伴う土器と遺跡の様相について、北海道内での状況をやや詳しくみってみる。

北海道でトランシェ様石器の出土が報告される遺跡は、函館市西股、梁川町、西桔梗、豊原2、中野A、中野B、七飯町桜町、国立療養所裏、長万部町富野3の各遺跡が主なものである。

なかでも函館市の中野A、B両遺跡に石倉貝塚を加えると、中野A式から根崎式までの土器の変遷とともに伴う石器の内容もわかる。以下に出土したトランシェ様石器を遺跡ごとに見てみる。

中野A遺跡：市立函館博物館が昭和50、51年度に行った調査では、遺構外から出土した石器1,727点のうち、トランシェ(様石器)は4点あり、うち2点が図化されている(函館市教委1977)。当センターの調査による平成3年度の報告では、住居跡から出土する例はないが、包含層中から出土した剥片石器群15,515点のうち9点の篋状石器が出土し、うち2点がトランシェ様石器とされている。平成4年度の報告でも、住居跡から出土する例がなく、包含層から出土した12,550点の石器の中で、2

点が篋状石器 1c とされるトランシェ 様石器 2点である（北理調報79、84）。

中野B遺跡：市立函館博物館が昭和50、51年度に行った調査では、8号住居跡から1点、11号住居から2点が出土している。当センターの調査による調査は、スクレイパーもしくは篋状石器とされるものではあるが、平成4、5年度調査のH-9、39、153、184、222、473の住居跡から出土している（北理調報97）、平成7年度報告の包含層中から19点出土し、うち2点がトランシェ 様石器である。平成11年度の報告では、1点それらしいものが出土している（北理調報108、120）。

中野A遺跡例をみると、計6点のトランシェ 様石器のうち、横置き剥片、台形もしくは三角形という狭義の条件を満たすものは2点と少ない。このことは中野B遺跡でも同様で、計9点のうち、2点と典型的な例は少ないが、本遺跡で見られた節理面で割れた剥片を素材として製作するものが上記以外に2点確認できる。両者の間の時期とされる石倉貝塚では出土していない。

このことから、中野A～石倉貝塚の段階、いわゆる物見台～鳴川式の時期にあつては、トランシェ 様石器の存在は明瞭ではなく、少なくとも器種構成の一つとはなっていない印象を受ける。これが中野B遺跡の時期となると、次第に出土例が増加する傾向にあると想定される。

中野A遺跡とはほぼ同時期である住吉町遺跡の調査（児玉・大場1953）、七飯町鳴川遺跡の調査（高橋1967）では報告されておらず、中野B遺跡に相当する梁川町遺跡（市立函館博物館1955）においては多数伴うと報告されていることは、この傾向を補強するものといえよう。

北海道内では、この縄文時代早期中葉以外にも、縄文時代早期後葉の「西桔梗式」（皆川1999）に伴うとみられる資料もある。函館市豊原2遺跡（函館市教委1994）、長万部町富野3遺跡（北理調報131）の2例である。豊原2遺跡では、住居跡HP-9から土器を伴い多く出土しているし、富野3遺跡は、西桔梗式の分布と同じく出土していることから、当期のものとしてよいものとみられる。また、明確ではないが、西桔梗遺跡の出土例（函館園開発事業団1974）も、おそらくこの土器に伴うものと解釈できる。

本遺跡と函館市西股遺跡の出土資料は、中野A式以前のノダップI式相当の時期にトランシェ 様石器が伴うことを示しており、東北北部の同時期に相当する青森県白浜、館平遺跡等の出土資料においてもこのことを支持できるとみられるものは多い。

これらのことから、さらなる詳細な検討が必要ではあるが、トランシェ 様石器は白浜式期に現れ、貝殻文尖底土器から縄文時代前期初頭の縄文尖底土器まで使用されるが、中野A式の時期にはあり方を変えているか、もしくは器種としての断絶があることが想定される。

白浜式期に現れたトランシェ 様石器は、その後前期の篋状石器へと変化することで縄文石器の器種の一つとして定着する。このことは古くは高坂がすでに論じており、斉藤慶史も同様の指摘を行っている（斉藤2011）。こうした石器組成の分析は、本遺跡の検討のみでは不十分であり、今後住居跡を伴うような拠点的な遺跡で継続して行われることを期待したい。

このトランシェ 様石器の空白期である中野A式は、物見台式に相当するものである。物見台式はそれまでの貝殻腹緑文土器の伝統とは異なるキャリパー型の器形や、貝殻腹緑文を駆使した幾何学文を特徴とするものである。その異質性に立脚し、それまでの貝殻腹緑文の延長とされる吹切沢系統とは異なる系統にあるものとして「異系統論」が成立している。本遺跡の傾向と検討のみではその当否に言及できる内容とはならないが、トランシェ 様石器の系統が中野A、鳴川式の時点で断絶している可能性は、「異系統」の妥当性を補強するものとなりうるであろう。

本遺跡の土器付着炭化物の放射性炭素年代が示す8,600、8680±30yrBPは、青森県中野平遺跡の白浜式の112号竪穴住居から出土した炭化クルミの年代8,800±180yrBP（青森県教育委員会1991）、後

続する吹切沢式の年代とみられる木古内町釜谷遺跡の住居跡76Hの年代 $8,010 \pm 70$ yrBP（木古内町教育委員会1999）とも整合的な値である。

この年代は南部浮石の噴出を招いた十和田カルデラ中湖の噴火時期 $8,600 \pm 250$ yrBPとほぼ同一である（大池・高橋1970）。また、安斎正人は、較正年代で8200年前とされる急激な寒冷化を「八・二イベント」と呼称した。中野B遺跡をイベント前の温暖期とし、寒冷化のピークをその終末の根崎式期と推測している（安斎2011）。今後この気候変動の詳細が明らかにされることが期待される。

これまで述べてきたトランシェ様石器の変遷と断絶は、これらの気候変動への適応の結果と推測できる。

（3）石器石材について

II章において述べたように、本遺跡は縄文時代の石器石材供給地点である、「上磯隆起地塊」端部の中央に位置している。周囲の大当別川、六條間川、大釜谷川、亀川、大平川はいずれも石器石材となる頁岩が採取可能である。この頁岩は、『木古内地域の地質』（通産省工業技術院地質調査所1954）では次のように記述されている。

硬質頁岩層は、暗灰色—暗褐色を呈するきわめて硬質で、貝殻状断口を示す珪質岩を主とし、3～10cmの間隔で薄い暗灰色—灰色を呈する軟質シルト岩（厚さ1～3cm）を挟み、見事な薄板状層理を成している。風化面は帯赤褐色を呈する。なお、本層中には球形～楕円体状をなす泥灰質および珪質の団塊を含んでいる（P24）。

また、大平川断層以東の地域では、「全般的に硬質頁岩層の発達をよく、粘土質な泥岩層をほとんど挟まない。層厚に対する硬質頁岩の比率は70%以上のところが多く、大平川上流域では層厚は薄いが比率は90%近くになっている。また、珪質な団塊を多く含むのも特徴である。この珪質団塊は赤褐色～チョコレート色を呈し、破面はチャートを思わせる。50cm～1m程のものが多く、ときには2mに達するものもある。（P26）

この記述中の硬質頁岩と、珪質団塊とされるものが、本遺跡周辺で採取される頁岩であると想像される。この珪質団塊は地層中のものは見つけることができなかったが、遺跡周辺の段丘上でよく見かけるものである。写真Ⅷ-2左は釜谷4遺跡と同一段丘面で、遺跡から北側の傾斜変換点付近で撮影したもの、右は大釜谷川の河口から1km付近で撮影したものである。これらの団塊は、50cmを超える大きなもので、特に左は2m近い卵型を呈する。双方とも節理が多く、ハンマーでたたいてもなかなか割れないが、破断面はチャート様の暗褐色ないしはチョコレート色の面が現れる。地質図幅中の珪質団塊の記述に酷似するものである。



写真Ⅷ-1 大釜谷周辺の「珪質団塊」とみられるもの

本遺跡で出土した頁岩は、II章に述べたように4種類の大まかな区分を行った（巻頭図版参照）。これらは全て現在の大釜谷川で採取が可能なのである。遺跡からはこのほか少数であるが黒曜石製の剥片も出土しており、出土した石器すべてが大釜谷川で採取されたわけではない。正確には肉眼鑑定以上の岩石学的検討を経ねばならないが、本遺跡の4種の区分が、地質図のどの石である

のか見通しを述べておく。

本遺跡で石材1とした、白色釉装飾の線が入る黒褐色～灰色の石材は、新鮮な剥離面は黒色を呈し、石材3としたものと区別がつかない。1と3は風化の違いでありほぼ同じものであるとみられる。2とした石材のうち、接合資料20に代表される石材は、礫皮が風化し白色を呈するが、新鮮な剥離面はチョコレート色～灰色の色調を呈するものである。それぞれ地質図副の記載に合わせると、石材1と石材3は「硬質頁岩」2は前述した「珪質団塊」である可能性が高いとみられる。

大釜谷川の頁岩については、香河正人により様相が報告されている。木古内町との境界にちかい北斗市フコマ野遺跡から出土した石器石材を検討し、大釜谷川で採取できる、「硬質頁岩」と風化部分の質が酷似すること、黒色を呈し、黄鉄鉱の微結晶を含むことを指摘するものである（香河1998）。本遺跡の出土例でもこの黄鉄鉱を確認できるものが出土している。

秋田県地方の女川層は、本遺跡周辺の戸田川層、木古内層と同じく新第三紀の海成層であり、硬質頁岩を産する。ともに石器石材産出地であるが、女川層は主に石油産出層としての研究が木古内層より進んでいる。その成果から硬質頁岩は詳細な分類と観察がなされている。関連のあるもの二つについて紹介する。

女川層の硬質頁岩は肉眼的には酷似するが、碎屑性のもの、珪藻質のもの、凝灰質のもの三種があり、それぞれ電子顕微鏡レベルでの区分がされている。さらにフランボイダル黄鉄鉱とされる黄鉄鉱が普遍的に認められている（本多1978）。このほか同層には団塊状となる珪質堆積物であるオパールチャートが存在も報告されている（多田1979）。

これが大釜谷周辺の黄鉄鉱、珪質団塊と同じものかどうかは判断できないが、かなり似た特徴をもつものと推測できる。今後はこうした岩石学的なレベルでの検討を踏まえて、珪質頁岩の産地の区別を行うことが期待される。なお本遺跡の頁岩1～3の原石について薄片を作成し偏光顕微鏡観察を行ったが、詳細な検討をするまでに至らなかった。機会を改めて成果を公開したいと考える。

こうした珪質頁岩の生成する原因は、火山活動や珪藻などの微生物によるものとされている。先の秦の研究や、加藤孝幸も指摘している（加藤2004）ように、石器石材となるまで珪化が進むものは局所的である。現時点では手軽に採取可能であるが、それほど広範囲に分布していないことから限られた資源であることは確かである。Ⅱ章でも検証したように、大釜谷周辺の石材は縄文時代を通じて利用されていた石材である。石器原産地の一つとして、周知と保全が必要と考える。

（立田 理）

引用・参考文献

～論文等～

相原周防守旧話 『上磯亀田郡沿革史』

秋葉実 1988 『武四郎蝦夷地紀行』渡鳥日誌 巻の巻 pp.17-62 北海道出版企画センター

阿子島香 1989 『石器の使用痕』考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社

安斎正人 2011 『縄文時代早期論（上）』『東北芸術工科大学東北文化研究センター 研究紀要』第10号 pp.3-36

大森司統 2007 『北日本の陥し穴罫』『縄文時代の考古学5 なりわい-食糧生産の技術-』 pp.171-182

大池昭二・高橋一 1970 『南部浮石の14C年代』『地球科学』24(6) pp.232-233

香河正人 1998 『Vフコマ野遺跡出土石器の岩質とその供給源について』『フコマ野遺跡』上磯町教育委員会 pp.37-38

梶原洋・阿子島香 1981 『頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み-（東北大学使用痕チームによる研究報告 その2）』『考古学雑誌』67-1 pp.1-36

加藤孝幸 2004 『Ⅵ章 3. 石器石質の分析と石器石材の分布』『采浜2・3遺跡』八雲町教育委員会 pp.369-391

加藤稔 1963 『山形県村山市三カノ湖遺跡』『日本考古学年報』10 日本考古学会

- 児玉作左衛門・大場利夫 1953『函館市住吉町遺跡の発掘について』『北方文化研究報告』8
- 小笠原忠久 1974『函館市石崎町出土の早期縄文土器 - 新形式の尖底貝殻土器 - 』『松山考古学研究会会誌』3
松山考古学研究会
- 佐藤達夫 1983「三(一)六ヶ所村唐貝地貝塚調査略報告」『東アジアの先史文化と日本』六興出版
- 杉山武・福田友之「青森県浪岡町細野遺跡出土の早期貝殻土器・石器」『奥南』第3号
- 高倉新一郎 1978『竹四朗瀬浦日記』上 巻の老 pp.177-179
- 竹花和晴 2000「石器」V章 考古学分野の分析『桜町遺跡発掘調査報告書』七坂町教育委員会 pp.267-273
- 竹花和晴 2004「評論・北海道南西部で発見された所謂「前期旧石器」の考察」『北海道考古学』第40輯 pp.139-155
- 山田秀三 1982『アイヌ語地名の研究1』山田秀三著作集 草風館 pp.195
- 木古内町史編纂委員会 1982『木古内町史』木古内町
- 小山浩平 2000「円形の落とし穴について」『飾引遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第272集 pp.48-54
- 小山正忠・竹原秀雄 2004『標準土色帖』26版 日本色研事業株式会社
- 佐藤慶二編・谷元旦 1973『蝦夷紀行』朝日出版
- 齊藤慶史 2011『青森県域における縄文早期の様相』『公開シンポジウム「縄文時代早期を考える」予稿集』東北芸術工科大学考古学研究室 pp.27-36
- 坂本真弓・杉野森淳子 1997『青森近県における陥し穴集成』『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター pp.70-80
- 庄内昭男 1983「貝殻」『縄文文化の研究』5 pp.203-218
- 通産省工業技術院地質調査所 1978『知内地域の地質』地域地質研究報告5万分の1図副
- 通産省工業技術院地質調査所 1979『木古内地域の地質』地域地質研究報告5万分の1図副
- 高橋正勝「北海道七坂町鳴川遺跡の貝殻文尖底土器について」『石器時代』第8号
- 竹田輝雄 1959「貝殻文土器文様の要素抽出」『先史時代』第八輯 pp.1-9 先史学同好会
- 多田隆治 1979「新第三紀珪質頁岩層中のopaline chertの成因」『日本地質学会学術大会講演要旨』86、194
- 坪井睦美 2013「III章3 まとめ 列状に並ぶ土坑群について」『東山A遺跡 亀田中野2遺跡』函館市教育委員会 pp.77-79
- 富樫泰時 1976「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会 pp.111-124
- 中川理美 1999「I群a 2類土器の施文原形と施文手法について」『オハルベツ2遺跡』北海道文化財保護協会 pp.389-391
- 永田方正 1989『北海道蝦夷語地名解』（復刻版）草風館 pp.176
- 名久井文明 1974「北日本縄文式早期編年に関する一試考」『考古学雑誌』第60巻3号
- 西川博孝 1989「物見台」と「吹切沢」『先史考古学研究』第2号 pp.53-90
- 皆川洋一 1999「第VI章 まとめ(2) 土器」『長万部町 富野3遺跡』北埋報131 (財)北海道埋蔵文化財センター
- 本多朗郎 1978「女川層のいわゆる硬質頁岩の組成」『地質学論集』第15号 pp.103-118
- 宮内崇裕・八木浩司 1984「松前半島東岸の海成段丘と第四紀地殻変動」『地学雑誌』Vol93 No5 pp.1-16
- 横山美介 2005「礫器と礫一縁辺・稜上剝離角度の分析を通じて」『北海道旧石器文化研究』第10号 pp.79-92
- 三宅徹也 1979「第4章第2節 蛭沢AⅡ式の成立と編年の位置」『蛭沢遺跡』青森市蛭沢遺跡発掘調査団 pp.58-60
- 福田友之 1982「V章考察3. おとし穴」『鶴窪遺跡』青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第76集 pp.130-139
- 松田光太郎 2004「貝殻文の施文具」『考古学ジャーナル』No.523 pp.14-17
- 筒塚正浩 2008「貝殻・沈線土器」『歴史のものさし』縄文時代の考古学2 同成社 pp.227-256
- 八幡一郎 1924「貝殻を挿した土器片」『人類学雑誌』第39巻 第7、8、9号
- 山内清男 1929「關東北に於ける織維土器」追加第二

Beyries, S. and Rots, V. 2008 The contribution of ethno-archaeological macro-and microscopic wear traces to the understanding of archaeological hide-working processes. In Laura Longo and Natalia Skakun ed. 'Prehistoric Technology' 40 years later: Functional Studies and the Russian Legacy. BAR no.1783. pp.21-28

～遺跡調査報告書～

- 秋田県教育委員会 1981 『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第84集
- 秋田県教育委員会 1988 『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第167集
- 青森県教育委員会 1982 『鶴峰遺跡』
- 青森県教育委員会 1985 『売場遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第93集
- 青森県教育委員会 1989 『表館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第120集
- 青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第134集
- 青森県教育委員会 2000 『柳引遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第272集
- 青森県埋蔵文化財センター 2012 『平成24年度 青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料
- 岩手県教育委員会 1982 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第29集
- 上磯町教育委員会 1990b 『三ツ石遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992a 『石倉野3遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992b 『三ツ石2遺跡』
- 上磯町教育委員会 1998 『フコマ野遺跡』
- 上ノ国町教育委員会 1987 『大岱沢A遺跡』
- 木古内町教育委員会 1974 『札蒔遺跡』
- 木古内町教育委員会 1991 『釜谷4遺跡』
- 木古内町教育委員会 1998a 『亀川2遺跡』
- 木古内町教育委員会 1998b 『亀川3遺跡』
- 木古内町教育委員会 1999 『木古内町 釜谷遺跡』
- 木古内町教育委員会 2003a 『泉沢2遺跡 A地点』
- 木古内町教育委員会 2003b 『泉沢2遺跡 B地点』
- 木古内町教育委員会 2003c 『泉沢2遺跡 C地点』
- 木古内町教育委員会 2003d 『大釜谷3遺跡』
- 木古内町教育委員会 2004 『蛇内遺跡』
- 市立函館博物館 1950 『函館市梁川町遺跡』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』北埋調報43
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『函館市 中野A遺跡』北埋調報79
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1993 『函館市 中野A遺跡(Ⅱ)』北埋調報84
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『函館市 中野B遺跡』北埋調報97
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『函館市 中野B遺跡(Ⅱ)』北埋調報108
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『函館市 石倉貝塚』北埋調報109
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998a 『函館市 中野B遺跡(Ⅲ)』北埋調報120
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998b 『長万部町 富野3遺跡』北埋調報131
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 『函館市 中野B遺跡(Ⅳ)』北埋調報130



調査風景(A・B区)(西から)



調査風景(D区)(南東から)

図版 2



周辺遺物出土状況(A区)(北東から)



調査終了状況(D区)(東から)



H-1 完掘(西から)



H-1 東西土層断面(南から)

図版 4



H-1、HP-1 土層断面(北から)



H-1、HP-2 土層断面(西から)



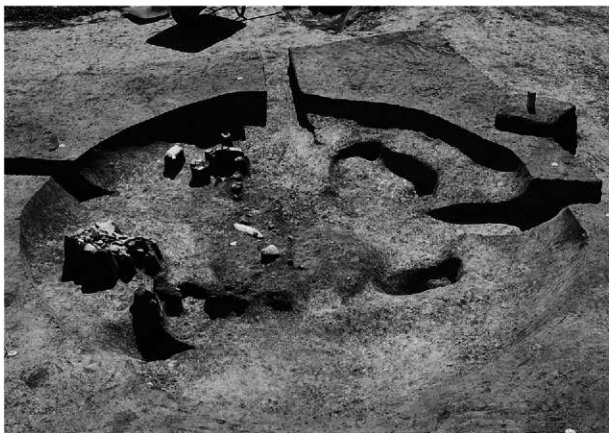
H-1、HP-3 土層断面(西から)



H-1、HP-4 土層断面(南西から)



H-1、HF-1 土層断面(西から)



H-2 遺物出土状況(西から)



H-2、HF-1 土層断面(北東から)

図版 6



P-1 全景(東から)



P-2 土層断面(南から)



P-4 土層断面(南から)



P-6 土層断面(南西から)



P-7 全景(南西から)



P-5 土層断面(南西から)



P-8 完掘(南西から)



P-9 土層断面(北西から)



P-10 土層断面(西から)



P-13 全景(南西から)



P-14 土層断面(南西から)



P-15 全景(南西から)

図版 8



P-16 土層断面(南西から)



P-17 土層断面(西から)



P-18 土層断面(東から)



P-19 全景(東から)



P-20 土層断面(南西から)



P-21 全景(南から)



P-22 遺物出土状況(東から)



P-23 全景(南西から)



P-25 全景(南から)



TP-1 全景(北西から)



TP-2 完掘(西から)



TP-3 完掘(南から)

図版10



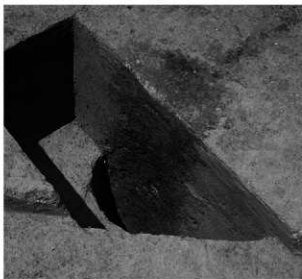
SP-1 完掘(南東から)



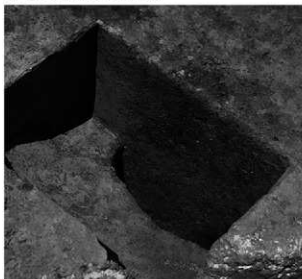
SP-2 土層断面(北から)



SP-3 土層断面(西から)



SP-4 土層断面(東から)



SP-5 土層断面(東から)



SP-6 土層断面(南から)



SP-7 土層断面(南から)



SP-8 土層断面(南から)



SP-9 土層断面(北から)



SP-10 土層断面(西から)



SP-11、12 土層断面(西から)



SP-13 完掘(西から)



SP-14 土層断面(西から)



F-1、SP-1 土層断面(東から)



F-2 土層断面(東から)



F-3 土層断面(北から)



F-4 土層断面(南東から)



F-5 土層断面(北西から)



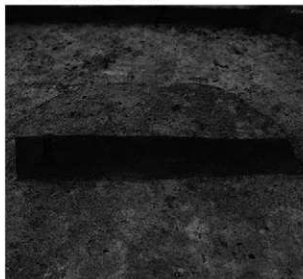
F-6 土層断面(北西から)



F-7 土層断面(南から)



F-8 検出兼土層断面(北から)



F-9 土層断面(南から)



F-10 土層断面(南西から)



F-11 土層断面(南から)



F-12 土層断面(北から)



F-13、14 土層断面(南東から)



F-15 土層断面(西から)



F-16 土層断面(北から)



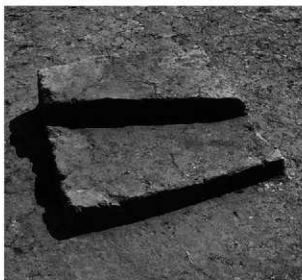
F-17 土層断面(北西から)



F-18 土層断面(北から)



F-19 土層断面(南から)



F-20 土層断面(南から)



F-21 土層断面(南から)



F-22 土層断面(北西から)



F-23 土層断面(南西から)



F-24 土層断面(北東から)



F-25 土層断面(南西から)



F-26 土層断面(南東から)



F-27 土層断面(南から)



F-28 検出(西から)



F-29 土層断面(東から)



F-30、31 土層断面(南から)



F-32 土層断面(南から)



F-33 土層断面(南から)



F-34 土層断面(北東から)



F-35 土層断面(西から)



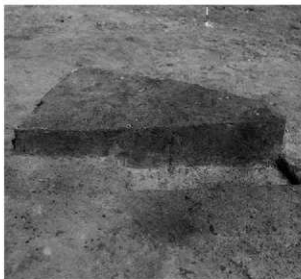
F-36 土層断面(南西から)



F-37 土層断面(南西から)



F-38 土層断面(西から)



F-39 土層断面(南から)



F-40 土層断面(南西から)



F-41 土層断面(南から)



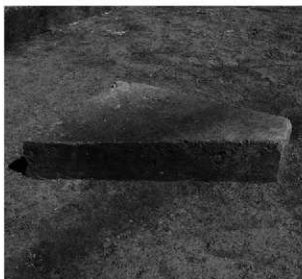
F-42 土層断面(南から)



F-43 土層断面(南から)



F-44 土層断面(南から)



F-45 土層断面(南から)



F-46 土層断面(南西から)



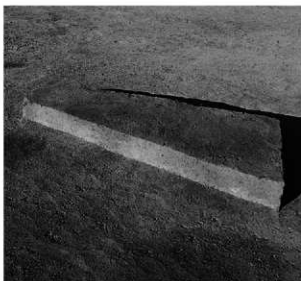
F-48 土層断面(南西から)



F-49 土層断面(南西から)



F-50 土層断面(南東から)



F-51 土層断面(南東から)



F-52 土層断面(南東から)



F-53 土層断面(南西から)



F-54 土層断面(南西から)



F-55 土層断面(南から)



F-56 土層断面(南西から)



F-57 土層断面(南から)



F-58 土層断面(南西から)



F-59 土層断面(南から)



F-60 土層断面(南から)



F-61 土層断面(南から)



F-62 土層断面(南東から)



F-63 土層断面(南西から)



F-64 検出(東から)



FC-1 検出(南から)



FC-2 検出(北西から)



FC-3 検出(東から)



FC-4 検出(北西から)



FC-5 検出(北東から)



FC-6 検出(南から)



FC-7 検出(東から)



FC-8 検出(東から)



FC-9 検出(北から)



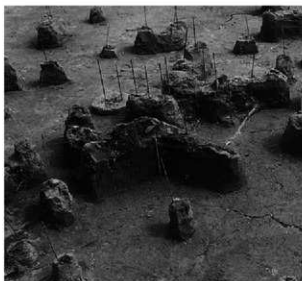
FC-11 検出(北から)



FC-11 検出(北から)



FC-12 検出(東から)



FC-13 検出(西から)



FC-14 検出(北から)



FC-15 検出(南から)



FC-16 検出(南西から)



FC-17 検出(北から)



FC-18 検出(西から)



FC-19 検出(西から)



FC-20 検出(西から)



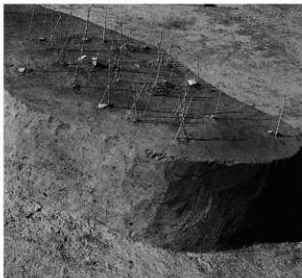
FC-21 検出(南東から)



FC-22 検出(西から)



FC-23 検出拡大(人入り)(西から)



FC-24 検出(南東から)



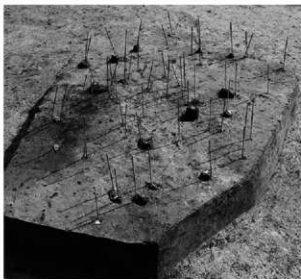
FC-25 検出(人入り)(南東から)



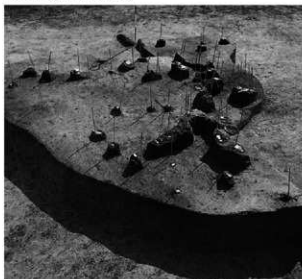
FC-26 検出(人入り)(北から)



FC-27 検出(西から)



FC-28 検出(西から)



FC-29、F-55 検出(北東から)



FC-30 検出(東から)



FC-31 検出(東から)



FC-32、F-60 検出(南から)



FC-33、F-64 検出(南東から)



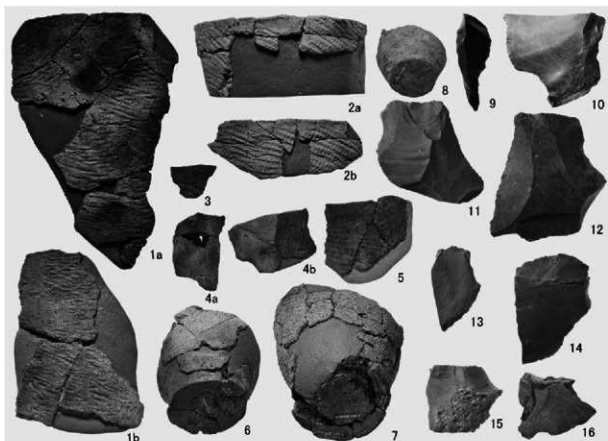
FC-34 検出(北東から)



FC-35 検出(北から)



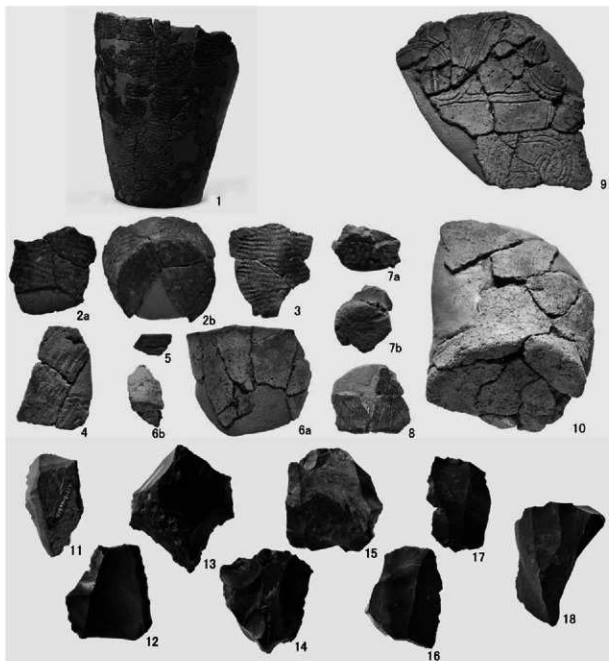
FC-36 検出(北から)



H-1 出土の土器・剥片石器



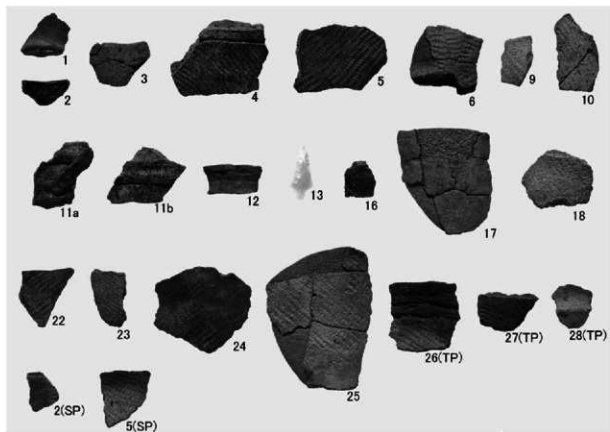
H-1 出土の石斧・礫石器



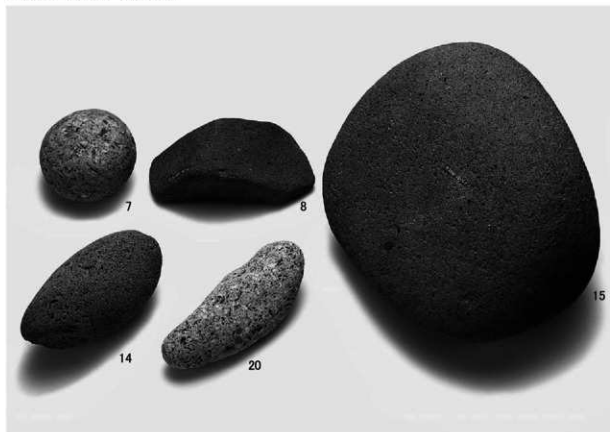
H-2 出土の土器・剥片石器



H-2 出土の礫石器



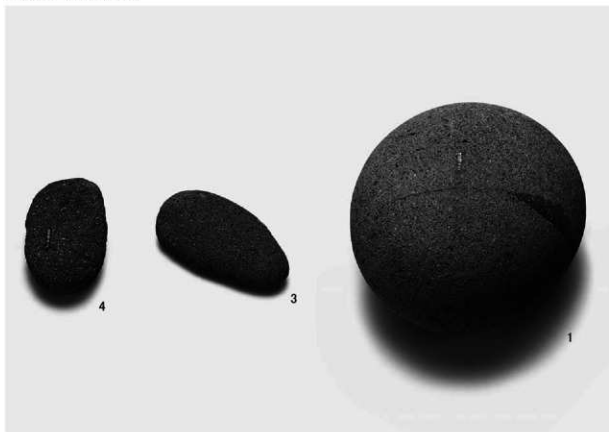
土坑出土の土器・剥片石器



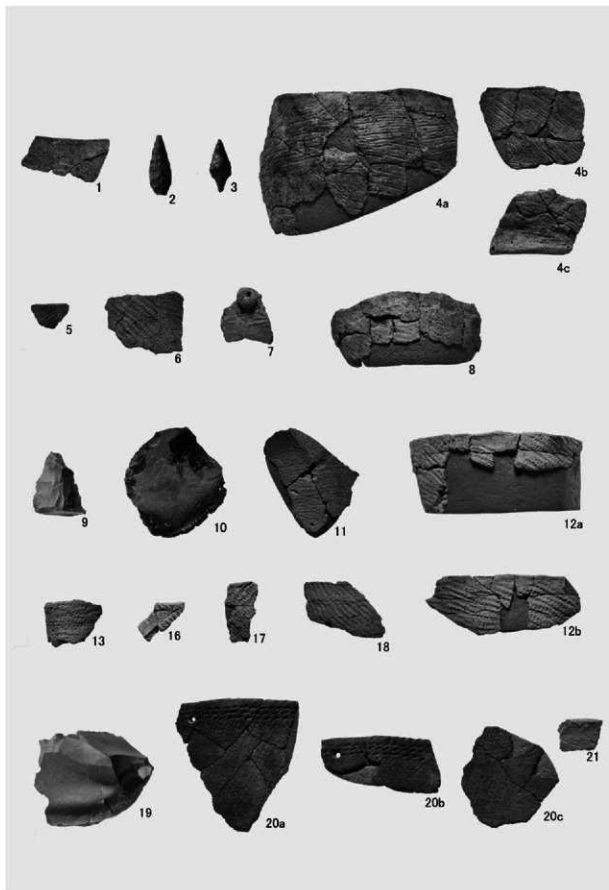
土坑出土の礫石器(1)



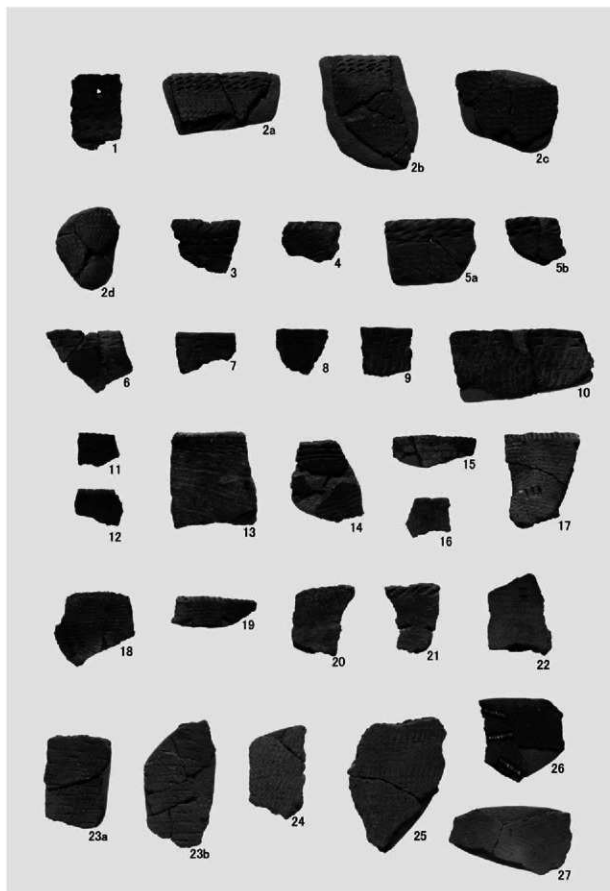
土坑出土の礫石器(2)



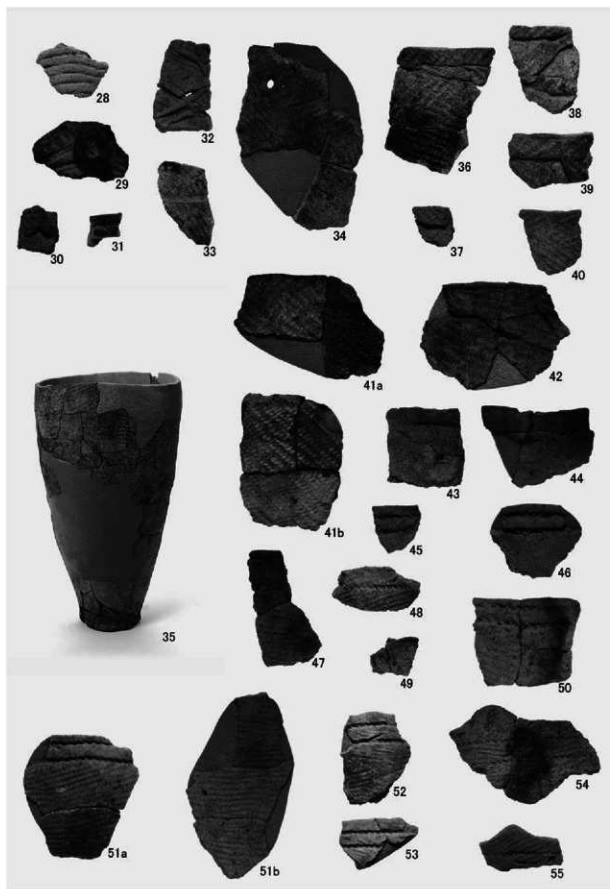
柱穴状小土坑の礫石器



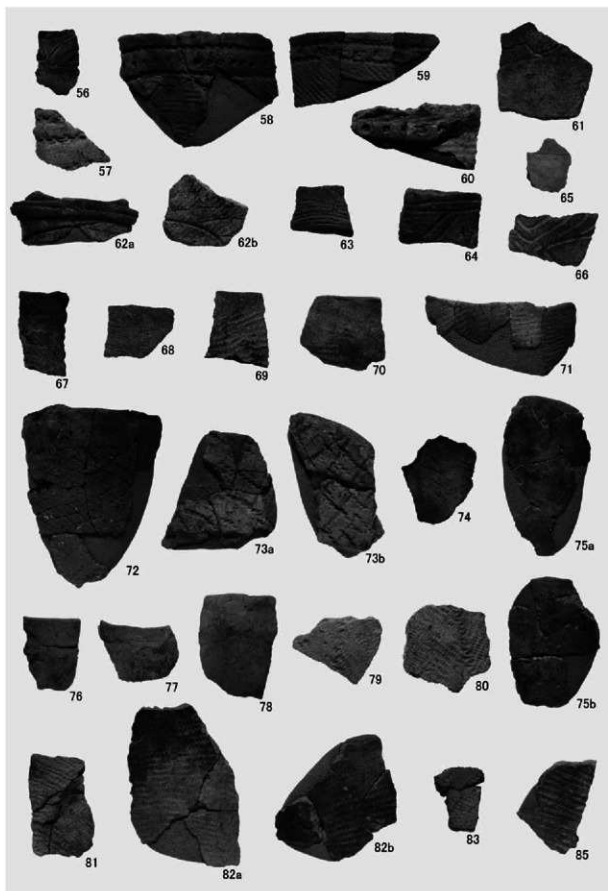
焼土出土の土器・剥片石器



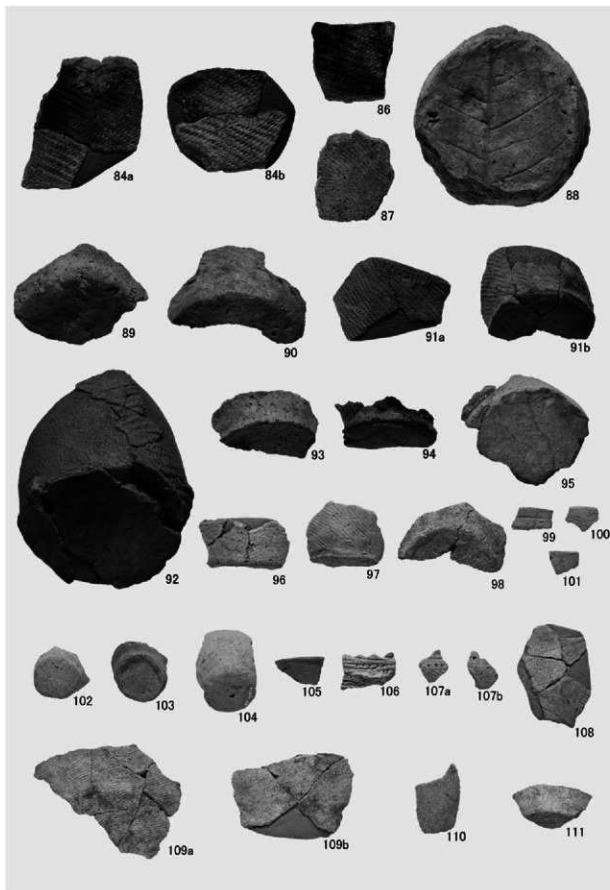
包含層出土の土器(1)



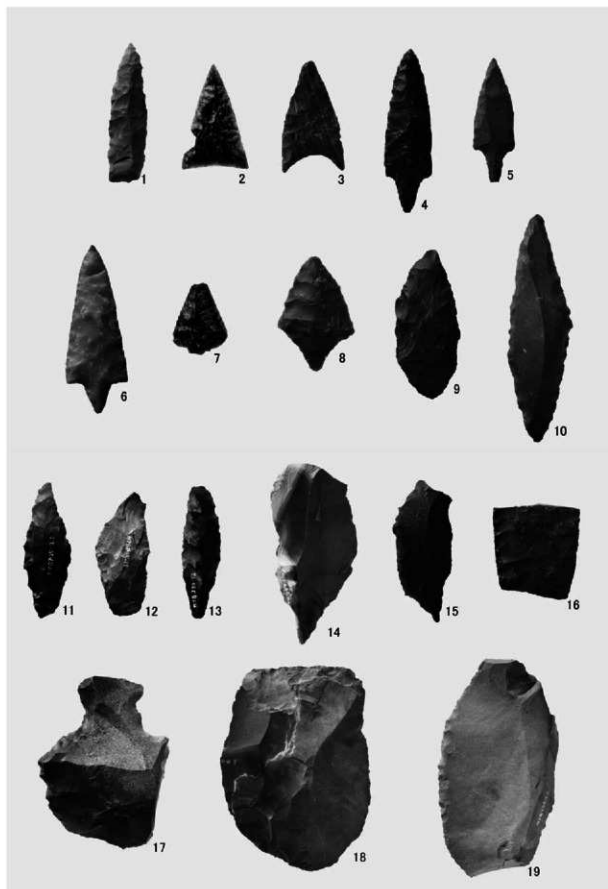
包含層出土の土器(2)



包含層出土の土器(3)



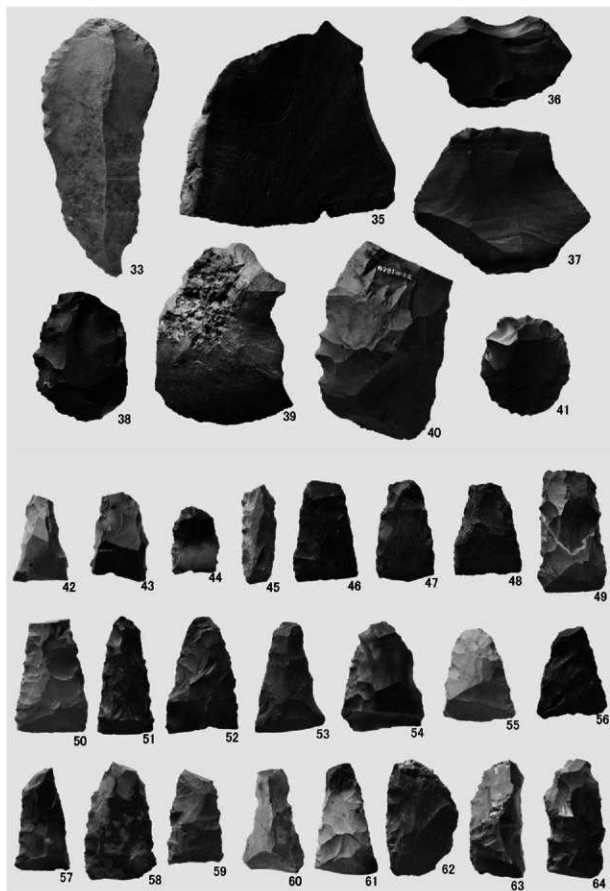
包含層出土の土器(4)



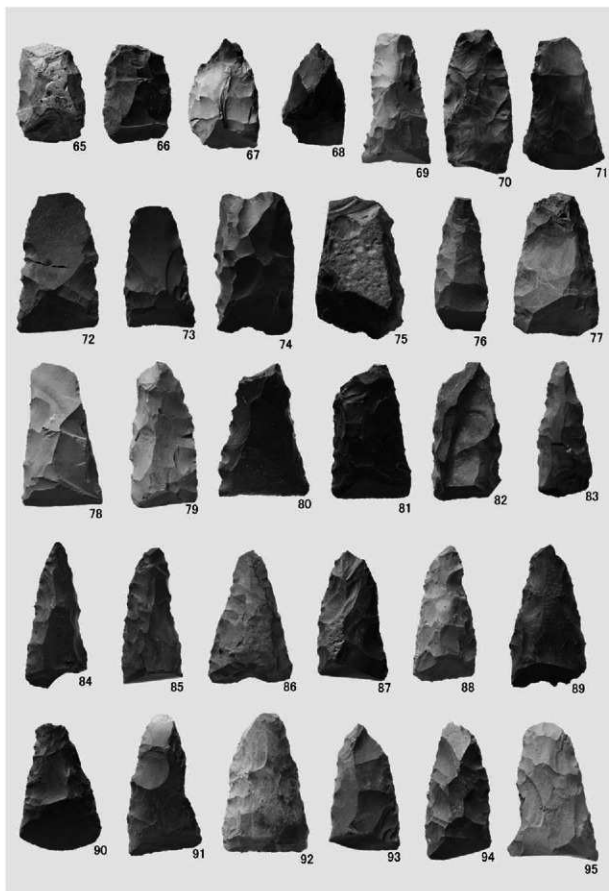
包含層出土の剥片石器(1)



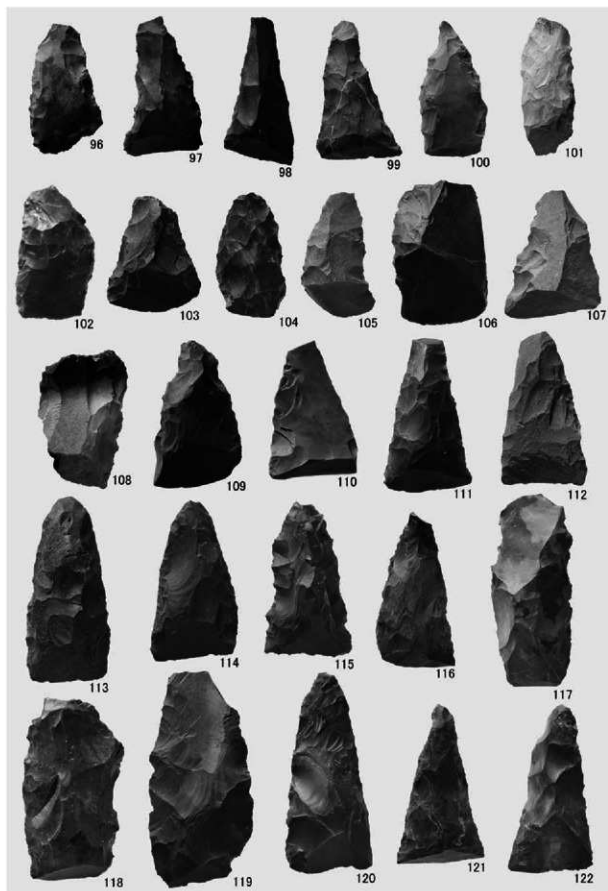
包含層出土の剥片石器(2)



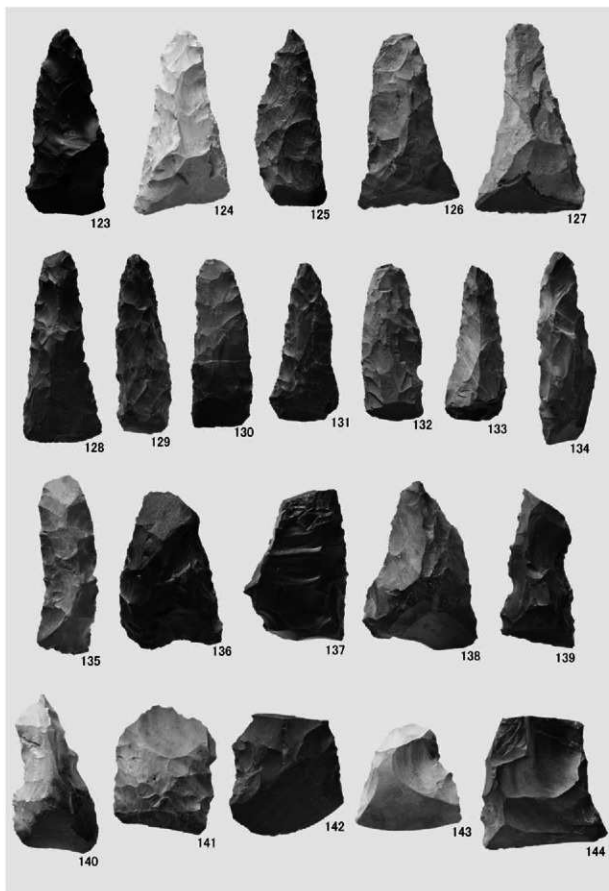
包含層出土の剥片石器(3)



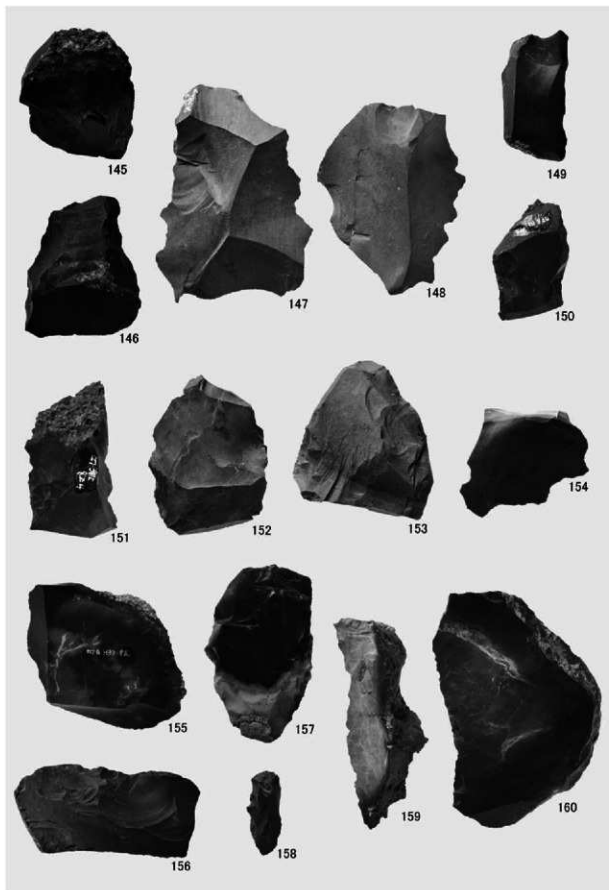
包含層出土の剥片石器(4)



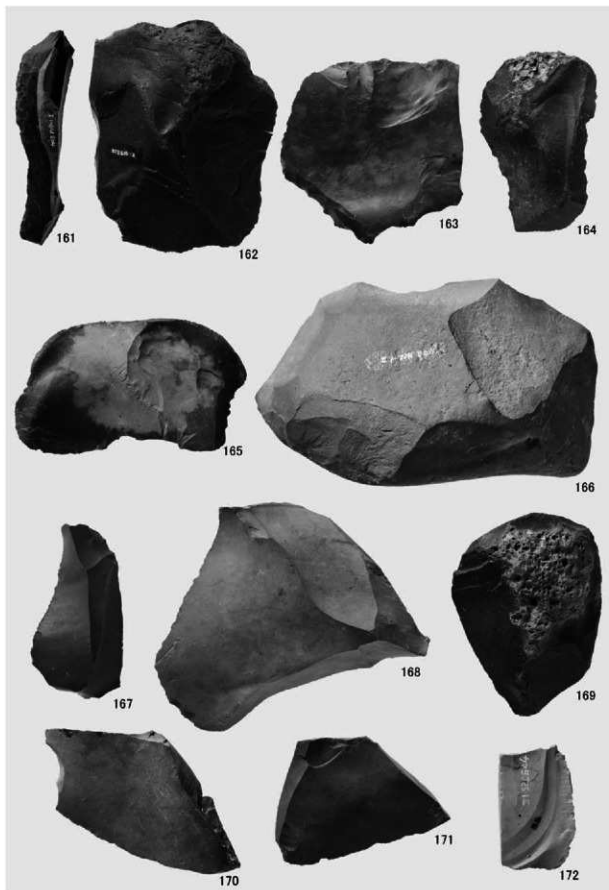
包含層出土の剥片石器(5)



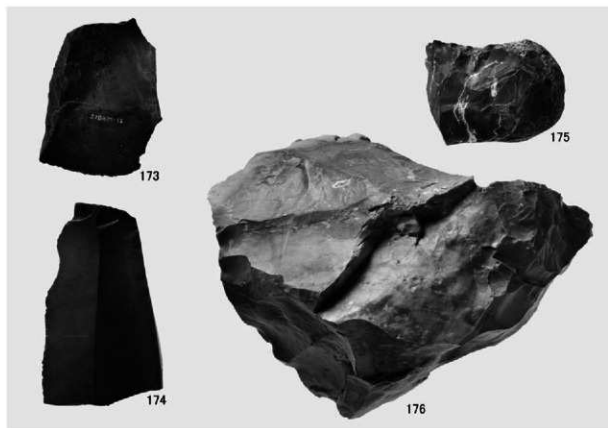
包含層出土の剥片石器(6)



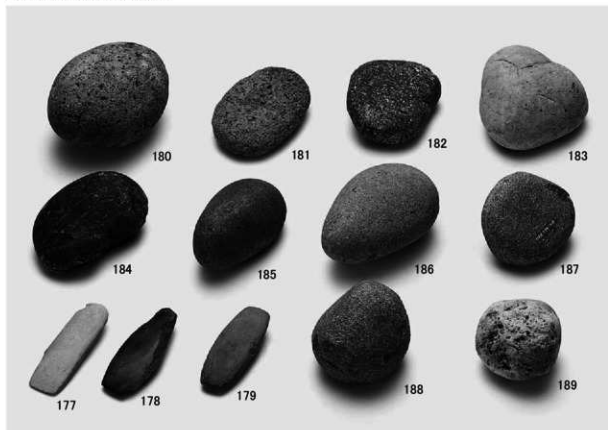
包含層出土の剥片石器(7)



包含層出土の剥片石器(8)



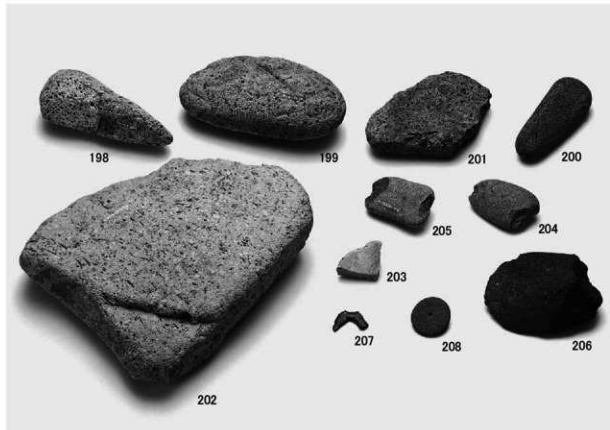
包含層出土の剥片石器(9)



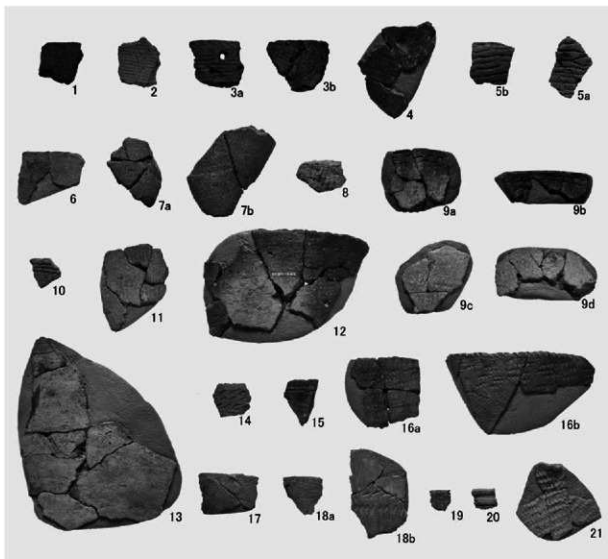
包含層出土の礫石器(1)



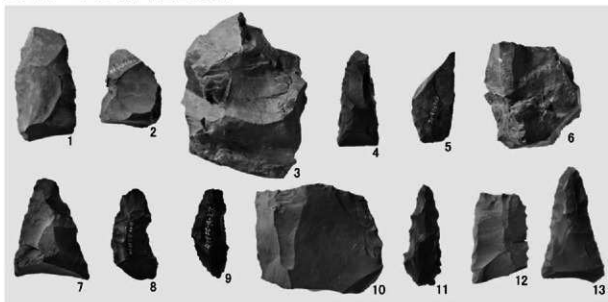
包含層出土の礫石器(2)



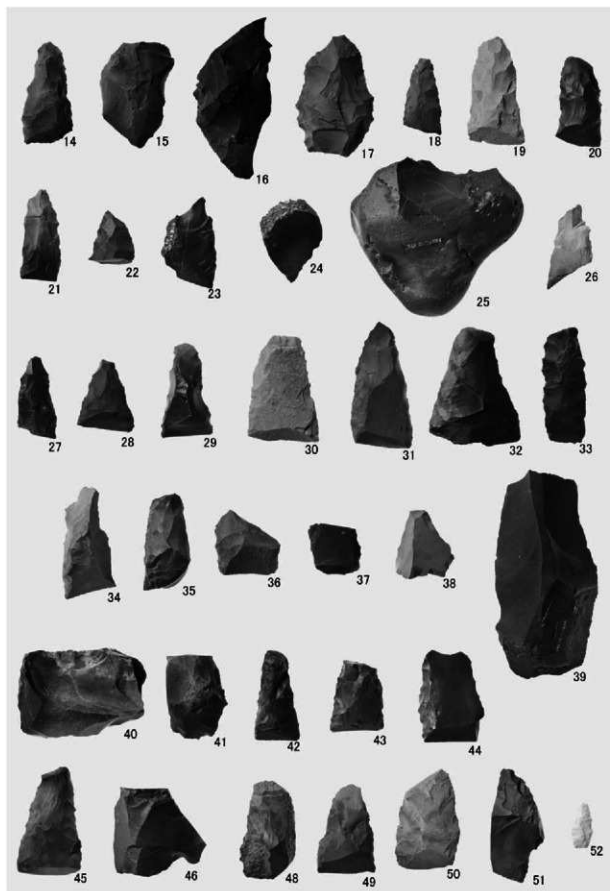
包含層出土の礫石器(3)・石製品



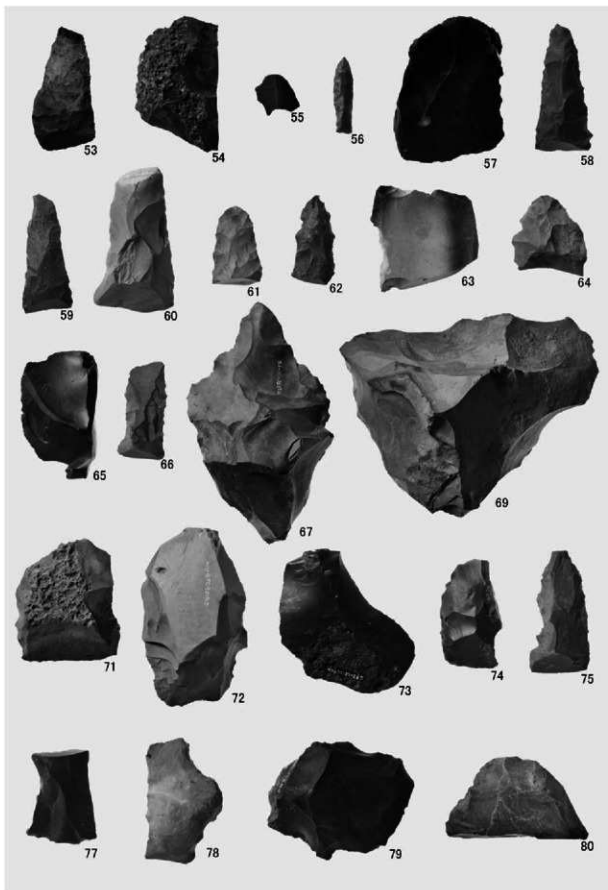
フレイク・チップ集中域出土の土器



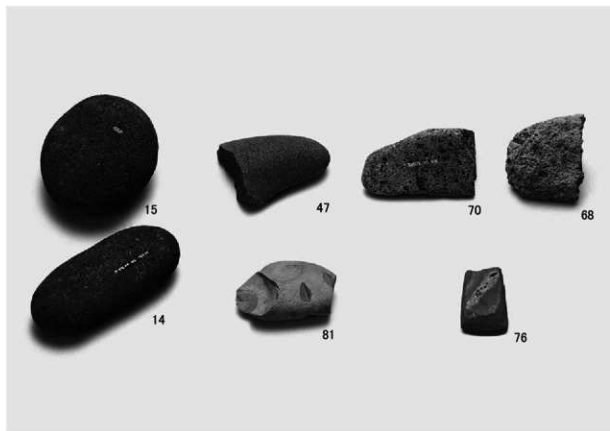
フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(1)



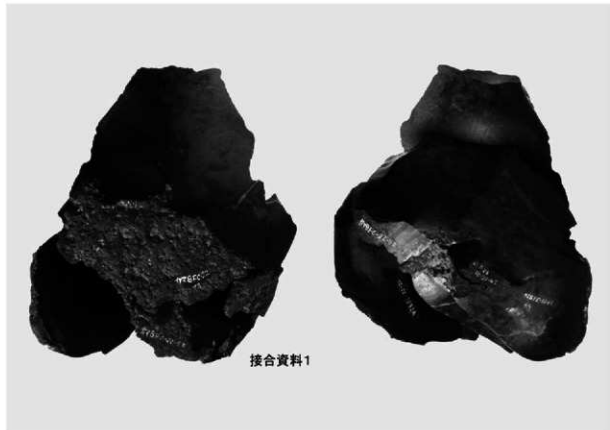
フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(2)



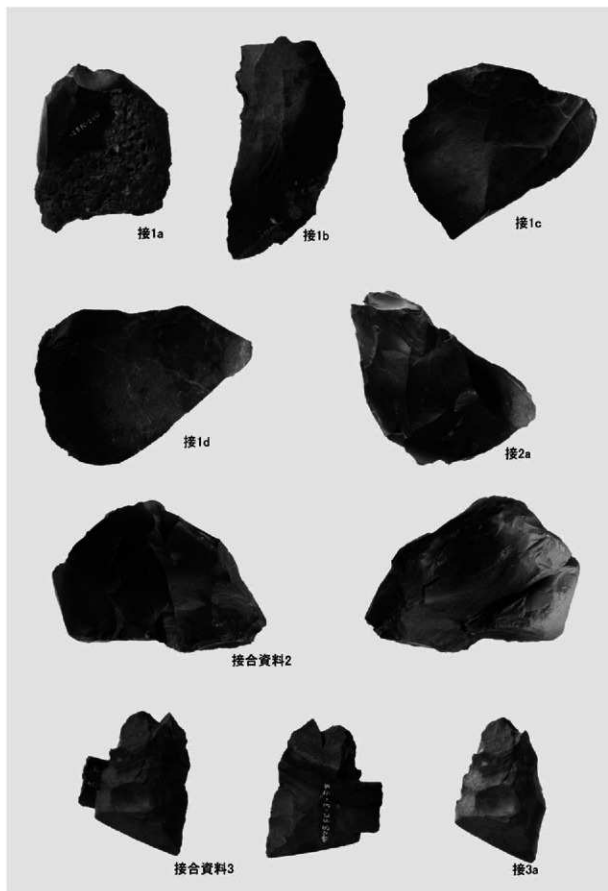
フレイク・チップ集中域出土の剥片石器(3)



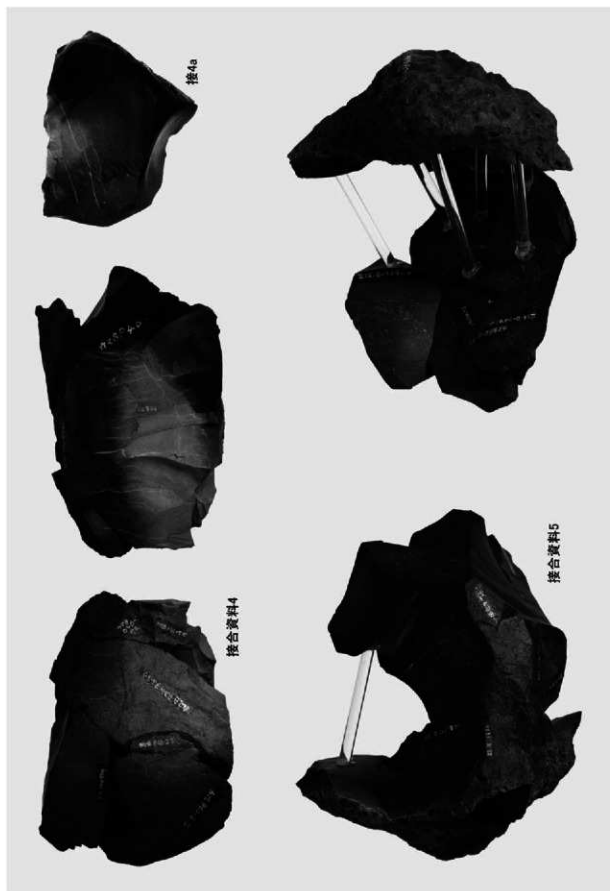
焼土・フレイク・チップ集中域出土の礫石器



接合資料(1)



接合資料(2)



接合資料(3)



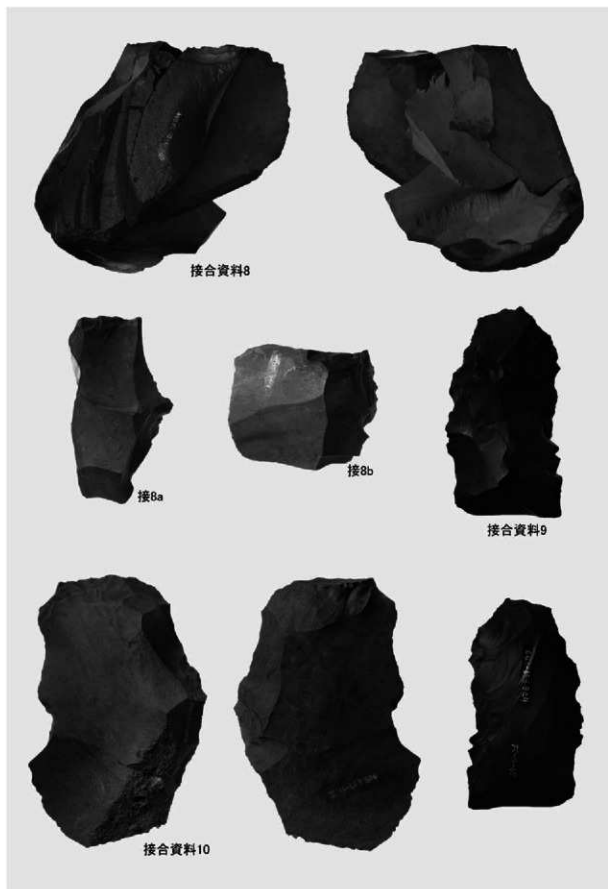
接合資料(4)



接7a

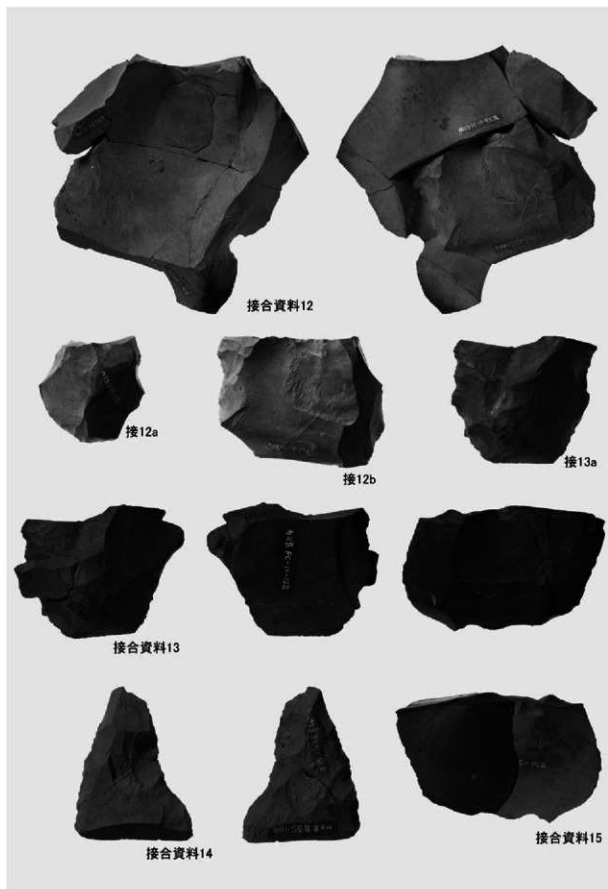
接合資料7

接合資料(5)

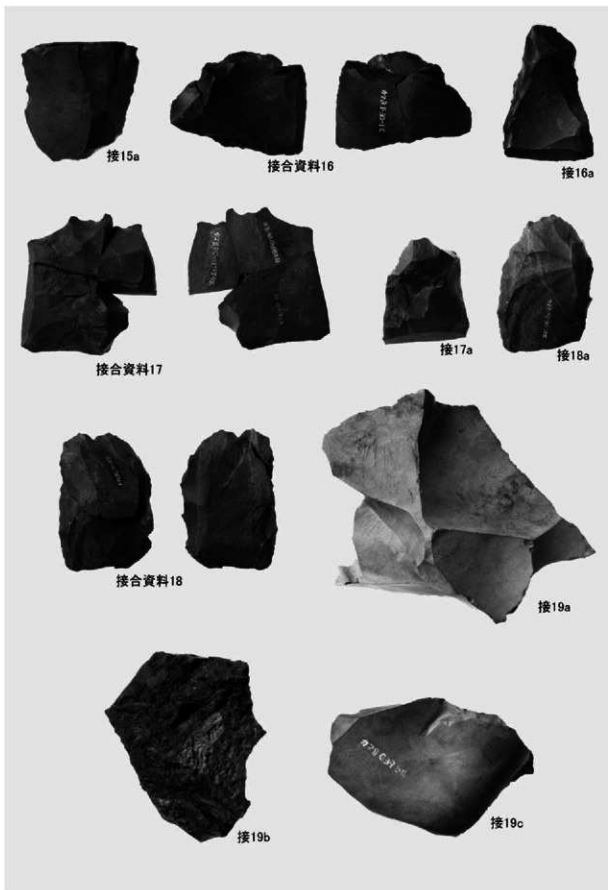




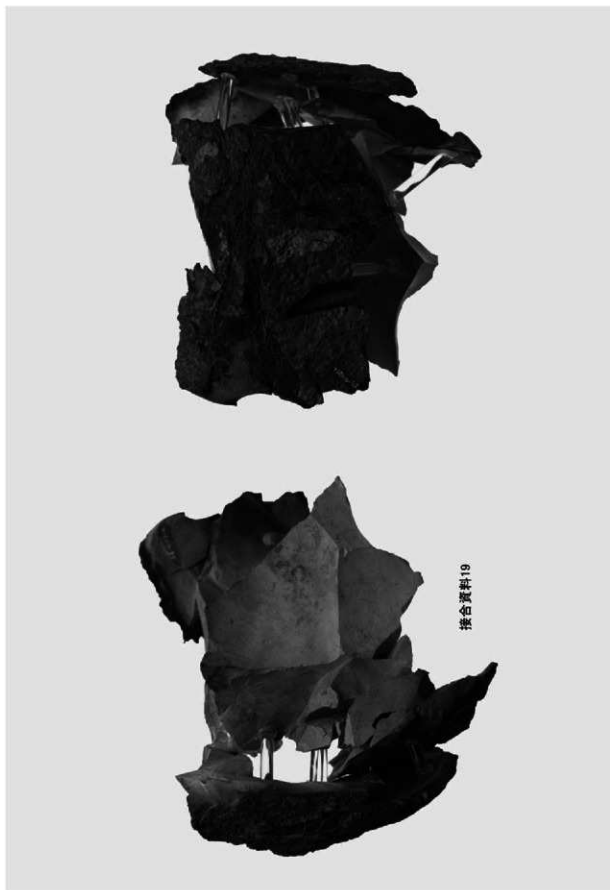
接合資料(7)



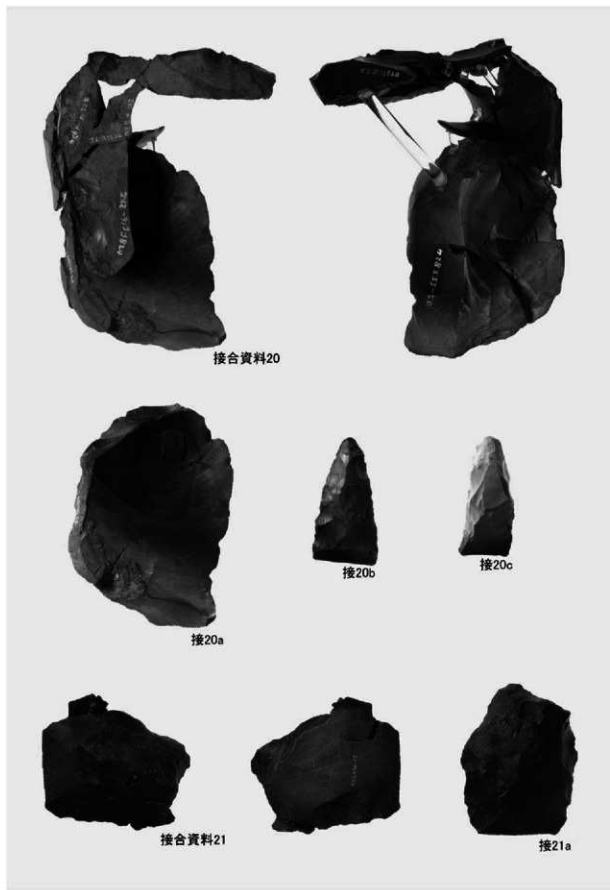
接合資料(8)



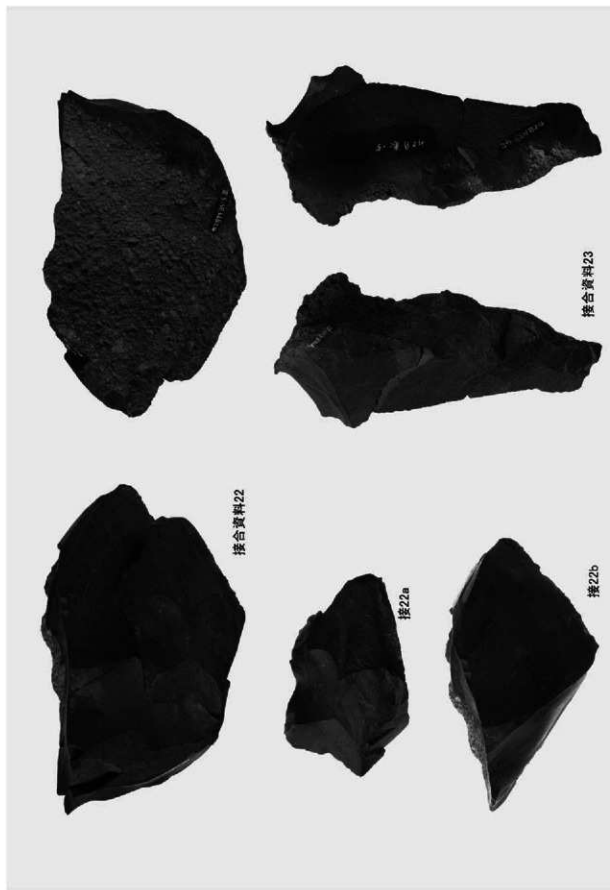
接合資料(9)



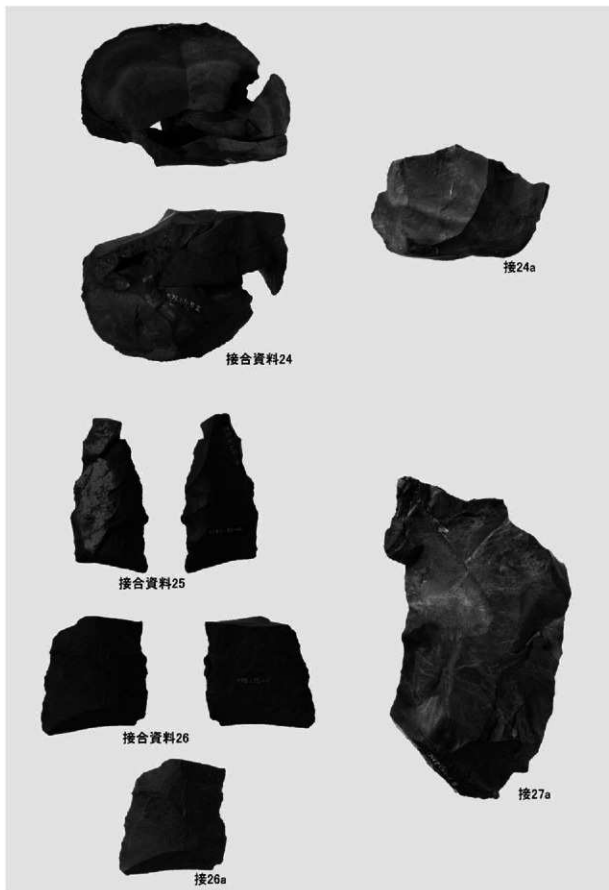
接合資料(10)



接合資料(11)



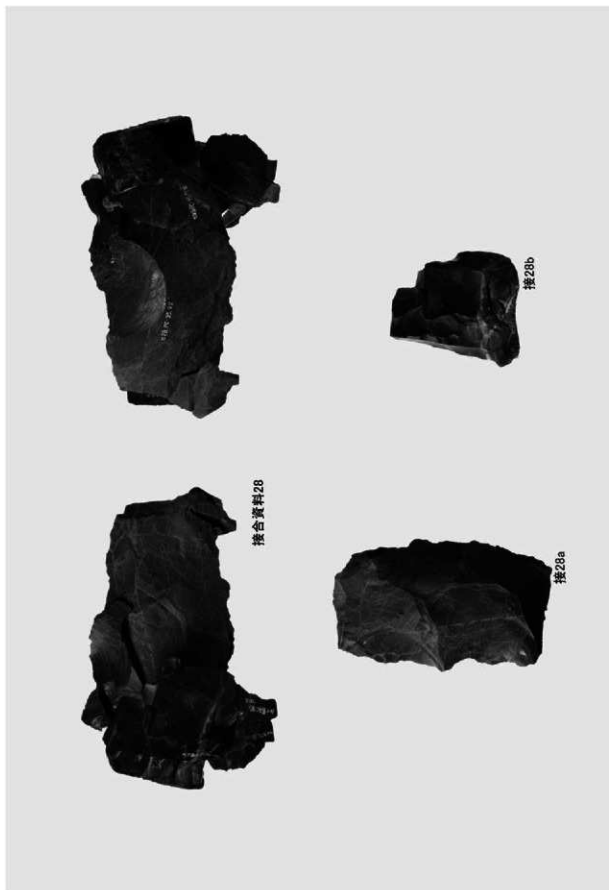
接合資料(12)

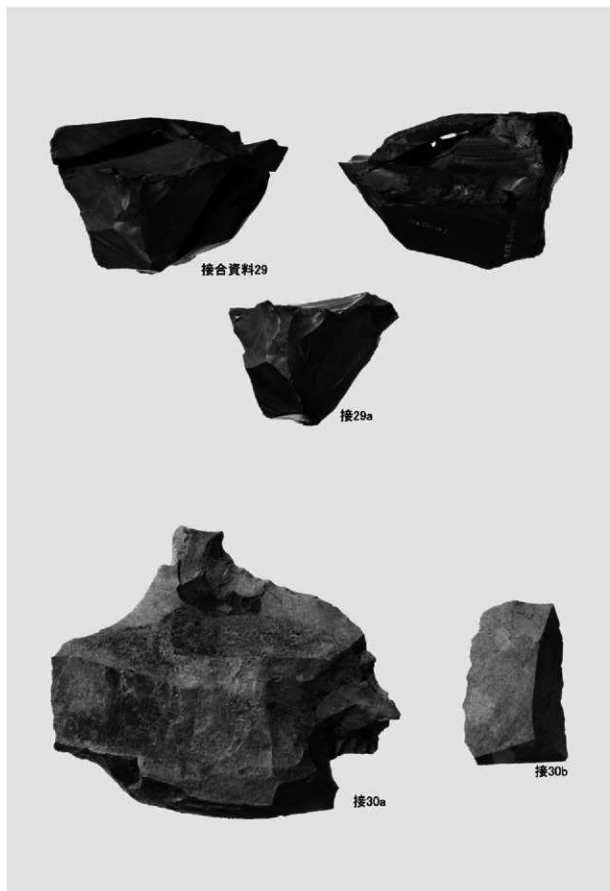


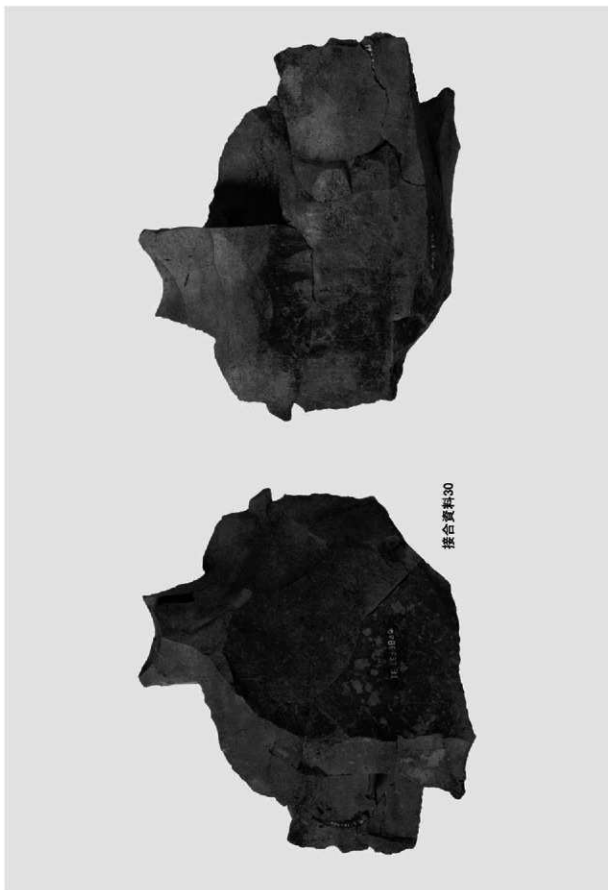
接合資料(13)



接合資料(14)



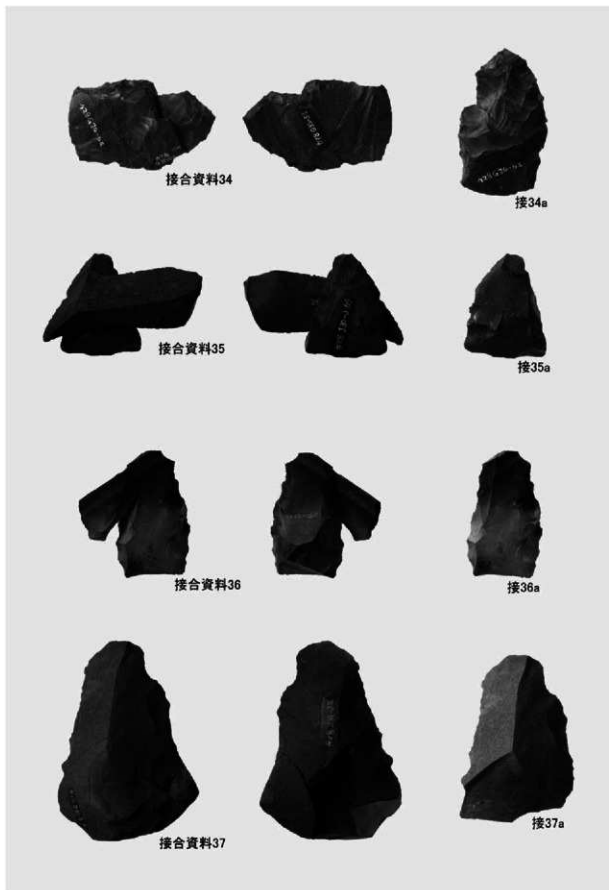


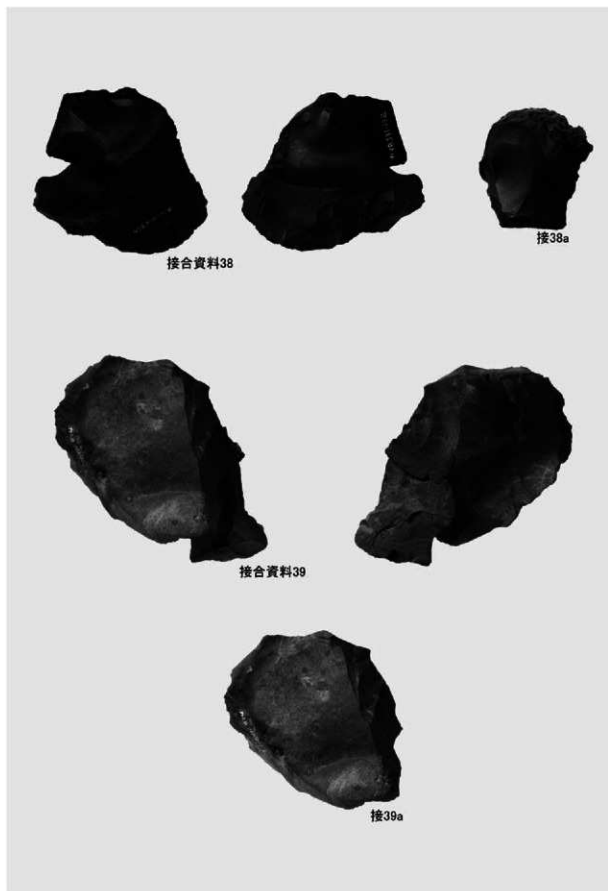


接合資料30

接合資料(17)







報告書抄録

ふりがな	きこないちょう かまや8いせき							
書名	木古内町 釜谷8遺跡							
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第305集							
編著者名	立田 理・袖岡淳子・鈴木宏之							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター(http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 Tel. (011)386-3231							
発行年月日	平成26(西暦2014)年3月31日							
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
釜谷8遺跡 <small>カマヤハチイセキ</small>	北海道上磯郡 木古内町字釜谷 260-4～260-34	01334	B-05-51	41° 30′ 40″	140° 32′ 00″	20110905 ～ 20131031	8,414㎡	高規格幹線道路 函館江差自動車道 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な遺構			主な遺物		特記事項	
釜谷8遺跡	遺物 包含地	縄文時代早期中葉 縄文時代後期前葉 住居跡×2 土坑×21 竈土×64 柱穴状小土坑×15 Tピット×3 フレイク・チップ集中域×36			早期：ノダップⅠ 後期：天祐寺		トランシェ様石器 230点出土	
要約	<p>遺跡は津軽海峡を望む高位の海成段丘上に立地する。遺構、遺物は南北で様相を異にし、北側は縄文時代早期中葉、貝殻文期のフレイク・チップ集中域、竈土が集中している。一方、南部は縄文時代後期前葉の天祐寺式期、住居跡2軒からなる小規模な集落となっている。</p> <p>出土土器は口唇に爪形文を配し、体部に貝殻複線文が施文される尖底の土器で、道内ではノダップⅠ、国立療養所裏Ⅰ群土器に近いものである。</p> <p>230点出土したトランシェ様石器は、北部のフレイク・チップ集中域から出土するものが多い。中には加工途中で破損したものや、細部調整剥片との接合例や原石の状態にまで接合する例もあり、遺跡内で制作が行われていたとみられる。</p>							

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第305集

木古内町 釜谷8遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 平成26年(2014)年3月28日

編集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238

<http://www.domaibun.or.jp>

印刷 柏楊印刷株式会社

〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号

TEL (011)789-2377 FAX (011)789-2376

E-mail : info@hakuyo-print.jp

<http://hakuyo-print.jp/>